

北谷町文化財調査報告書第13集

玉代勢原遺跡

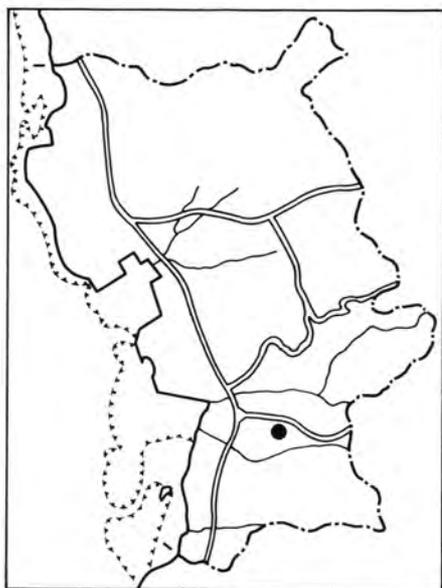
—キャンプ瑞慶覧建設工事に係る埋蔵文化財調査業務報告書—

1993年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

たまよせばる
玉代勢原遺跡

—キャンプ瑞慶覧建設工事に係る埋蔵文化財調査業務報告書—



1993年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

本報告書は北谷町内のキャンプ瑞慶覧に所在する、玉代勢原遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

米軍基地内はこれまで、手付かずの地域でしたが、防衛施設局との協議の結果、近年、埋蔵文化財の調査もスムーズにおこなわれるようになり、把握できるようになりました。

米軍基地内においても、埋蔵文化財は私達の祖先が培ってきたもので、発掘調査をおこない把握することによって、これまで失われてきた先人の生い立ちを知る上での、ひとつの重要な方法だと考え、その理念のもとにおこなってきました。

埋蔵文化財を把握する必要のあることが文化財保護法は謡っています。

玉代勢原遺跡は調査の結果、12世紀を初めとして、14～16世紀、近世～現代にかけて、3枚の文化層が確認され、大まかにグスク時代から現代にかけての複合遺跡であることが判明しました。

本書が広く活用され、文化財保護の一助ともなれば幸いです。なお、調査に際し御指導・御協力や現場視察までおこなっていただきました県教育庁文化課をはじめ諸先生方、鑑定を快く引き受けて下さった大城逸朗、大橋康二、手塚直樹、江上幹幸先生、玉稿を賜りました川島由次、黒住耐二先生に末尾ながら厚くお礼を申し上げます。

北谷町教育委員会

教育長 當 山 憲 一

例 言

1、本報告書は平成3・4年度事業として、「キャンプ瑞慶覧(3)・(4)建設工事に係る埋蔵文
査報告書として那覇防衛施設局と受託契約をおこない『玉代勢原遺跡』の緊急調査報告書として、
まとめたものである。

2、遺物の同定は下記の先生方による、記して感謝申し上げます。

陶磁器 大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長)

手塚直樹(鎌倉考古学研究所所長)

江上幹幸(青山学院大学講師)

獣骨 川島由次(琉球大学農学部助教授)

石質 大城逸朗(沖縄県立教育センター主任学芸員)

石器 長野真一(鹿児島県立埋蔵文化センター)

貝殻 黒住耐二(千葉県立中央博物館学芸員)

3、本書の執筆・編集は中村がおこない、分担は下記のようにおこなった。

遺物実測 當山 格 池原京子 宮城武子 前川恵子 仲村まゆみ 高宮城直子 浦崎解子

遺物一覧 前川恵子 仲村まゆみ 長嶺初子

貝殻集計 仲村渠恵 与那覇恵子

トレース 長嶺初子

4、発掘調査で得られた資料はすべて北谷町教育委員会に保管されている。

目 次

はじめに

例 言

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯	2
a. 調査に至る経緯	2
b. 調査の体制	2
第3章 調査の概要	9
第1節 調査の経過	9
第2節 層 序	9
第3節 遺 構	11
第4節 出土遺物	12
a. 人口遺物	12
イ. 土 器	23
ロ. 須恵器	27
ハ. 磁 器	29
1. 青 磁	29
2. 白 磁	29
3. 染 付	36
4. 有 田 焼	39
5. 現代磁器	39
6. 砥 部 焼	39
ニ. 陶 器	49
1. 南 蛮	49
2. タ イ 焼	51
3. 陶 器	52
4. 播 鉢	63
5. 湧 田 焼	63
6. 褐 釉	64
7. 壺 屋 焼	79
8. 陶質土器	80
9. 瓦	80
10. 瓦質土器	90

11. 遊 具	90
ホ. 石 器	90
1. 打製石器	90
2. 磨製石器	91
ヘ. 貝製品	99
ト. 古 錢	99
b. 自然遺物	99
イ. 貝 類	99
ロ. 脊椎動物遺体	99
第4章 まとめ	197
付 記	

表 目 次

第1表 出土遺物集計表	(別表)	第14表 湧田焼観察一覧	171
第2表 土器観察一覧	101	第15表 褐釉陶器観察一覧	175
第3表 須恵器観察一覧	112	第16表 壺屋焼観察一覧	181
第4表 青磁観察一覧	114	第17表 陶質土器観察一覧	188
第5表 白磁観察一覧	125	第18表 瓦質土器観察一覧	189
第6表 染付観察一覧	130	第19表 石器観察一覧	190
第7表 有田焼観察一覧	145	第20表 古錢観察一覧	196
第8表 現代磁器観察一覧	150	第21表 貝殻分類表	(別表)
第9表 砥部焼観察一覧	153	第22表 貝殻分類表	(別表)
第10表 南蛮焼観察一覧	154	第23表 貝殻分類表	(別表)
第11表 タイ焼観察一覧	156	第24表 貝殻分類表	(別表)
第12表 陶器観察一覧	158	第25表 出土遺物別年代表	197
第13表 播鉢観察一覧	165		

挿 図 目 次

第1図	玉代勢原遺跡と周辺遺跡の位置図	3
第2図	米軍地図(1954年)による地形と玉代勢原遺跡位置図	5
第3図	米軍地図による立体シュミレーション	8
第4図	発掘区とグリット設定図	10
第5図	C・D・Eトレンチ土層断面実測図	13
第6図	3・3・4・5トレンチ土層断面実測図	15
第7図	6・7・8・9トレンチ土層断面実測図	17
第8図a	D・E-3・4・5・6グリット遺構検出平面・断面実測図(現代の屋敷跡)	19
第8図b	石列の構成状況(家屋)	21
第9図	D・E-7・8グリット遺物出土状況実測図	22
第10図	土器Ⅰ類()・Ⅱ類	24
第11図	土器Ⅰ・Ⅱ類底部	25
第12図	土器Ⅲ類	26
第13図	須恵器	28
第14図	青磁	30
第15図	青磁	31
第16図	青磁	32
第17図	青磁	33
第18図	青磁	34
第19図	白磁	35
第20図	白磁	36
第21図	染付	37
第22図	染付	38
第23図	染付	40
第24図	染付	41
第25図	染付	42
第26図	染付	43
第27図	染付	44
第28図	有田	45
第29図	有田	46
第30図	現代磁器	47
第31図	砥部焼	48
第32図	南蛮	49
第33図	南蛮	50
第34図	タイ焼	51
第35図	陶器	53
第36図	陶器	54
第37図	陶器	55
第38図	陶器	56
第39図	陶器	57
第40図	陶器	58
第41図	陶器	59
第42図	陶器	60
第43図	陶器	61
第44図	陶器	62
第45図	陶器	65
第46図	播鉢	66
第47図	播鉢	67
第48図	播鉢	68
第49図	播鉢	69
第50図	播鉢	70
第51図	播鉢	71
第52図	播鉢	72
第53図	播鉢	73

第54図	湧田焼	74	第67図	瓦質土器	88
第55図	湧田焼	75	第68図	瓦	89
第56図	褐釉陶器	76	第69図	遊具	89
第57図	褐釉陶器	77	第70図	石器	91
第58図	褐釉陶器	78	第71図	石器	93
第59図	褐釉陶器	79	第72図	石器	94
第60図	壺屋焼	81	第73図	石器	95
第61図	壺屋焼	82	第74図	石器	96
第62図	壺屋焼	83	第75図	石器	97
第63図	陶質土器	84	第76図	石器	98
第64図	陶質土器	85	第77図	貝製品	99
第65図	陶質土器	86	第78図	古銭	100
第66図	陶質土器	87	第79図	各層の生物出土状況概念図	200

図版目次

- | | | | | |
|------|---|----------------|---|----------------|
| 図版1 | 上 | 遺跡遠景（南東側より） | 下 | 遺跡近景（南東側より） |
| 図版2 | 上 | 遺跡遠景（南西側より） | 下 | 遺跡近景（西側より） |
| 図版3 | 上 | 発掘状況 | 下 | 台風による冠水状況 |
| 図版4 | 上 | 3～7区の完掘状況 | 下 | 5～9区の完掘状況 |
| 図版5 | 上 | C・D-4・5区の完掘状況 | 下 | C・D-4・5区の完掘状況 |
| 図版6 | 上 | E区南側土層の状況 | 下 | 3区西側土層の状況 |
| 図版7 | 上 | 3～6区の土層の状況 | 下 | 6～7区の土層の状況 |
| 図版8 | 上 | 4～6・C～E区の土層の状況 | 下 | D-6～9区の土層の状況 |
| 図版9 | 上 | E-4区の石列状況 | 下 | E-5区の石列状況 |
| 図版10 | 上 | D-7区第Ⅳ層の不定形遺構 | 下 | C-7区第Ⅳ層の土器出土状況 |
| 図版11 | 上 | C-6区第Ⅳ層の土器出土状況 | 下 | C-6区第Ⅳ層の土器出土状況 |
| 図版12 | 上 | 土器Ⅰ・Ⅱ類表面 | 下 | 土器Ⅰ・Ⅱ類裏面 |
| 図版13 | 上 | 土器Ⅰ類底部表面 | 下 | 土器Ⅰ類底部裏面 |
| 図版14 | 上 | 土器Ⅲ類口縁・底部表面 | 下 | 土器Ⅲ類口縁・底部裏面 |
| 図版15 | 上 | 須恵器・珠洲焼表面 | 下 | 須恵器・珠洲焼裏面 |
| 図版16 | 上 | 青磁類表面 | 下 | 青磁類裏面 |
| 図版17 | 上 | 青磁類表面 | 下 | 青磁類裏面 |
| 図版18 | 上 | 青磁類表面 | 下 | 青磁類裏面 |
| 図版19 | 上 | 青磁類表面 | 下 | 青磁類裏面 |
| 図版20 | 上 | 青磁類表面 | 下 | 青磁類裏面 |
| 図版21 | 上 | 白磁表面 | 下 | 白磁裏面 |
| 図版22 | 上 | 白磁表面 | 下 | 白磁裏面 |
| 図版23 | 上 | 染付表面 | 下 | 染付裏面 |
| 図版24 | 上 | 染付表面 | 下 | 染付裏面 |
| 図版25 | 上 | 染付表面 | 下 | 染付裏面 |
| 図版26 | 上 | 染付表面 | 下 | 染付裏面 |
| 図版27 | 上 | 染付表面 | 下 | 染付裏面 |
| 図版28 | 上 | 染付表面 | 下 | 染付裏面 |
| 図版29 | 上 | 有田・伊万里・肥前焼表面 | 下 | 有田・伊万里・肥前焼裏面 |
| 図版30 | 上 | 有田・伊万里・肥前焼表面 | 下 | 有田・伊万里・肥前焼裏面 |
| 図版31 | 上 | 現代磁器表面 | 下 | 現代磁器裏面 |
| 図版32 | 上 | 現代磁器表面 | 下 | 現代磁器裏面 |

図版33	上	砥部焼表面	下	砥部焼裏面
図版34	上	南蛮表面	下	南蛮裏面
図版35	上	南蛮表面	下	南蛮裏面
図版36	上	タイ焼表面	下	タイ焼裏面
図版37	上	陶器 大型壺表面	下	陶器 大型壺裏面
図版38	上	陶器 大型・中型壺表面	下	陶器 大型・中型壺裏面
図版39	上	陶器 中型壺表面	下	陶器 中型壺裏面
図版40	上	陶器 中型壺表面	下	陶器 中型壺裏面
図版41	上	陶器 小型壺表面	下	小型壺裏面
図版42	上	陶器 小型壺表面	下	小型壺裏面
図版43	上	陶器 小型瓶表面	下	小型瓶裏面
図版44	上	陶器 小型浅鉢表面	下	小型浅鉢裏面
図版45	上	陶器 小型手焙り表面	下	小型手焙り裏面
図版46	上	陶器 小型手焙り・碗表面	下	小型手焙り・碗裏面
図版47	上	陶器 搦鉢	下	陶器 搦鉢
図版48	上	陶器 搦鉢	下	陶器 搦鉢
図版49	上	陶器 搦鉢	下	陶器 搦鉢
図版50	上	陶器 搦鉢	下	陶器 搦鉢
図版51	上	陶器 搦鉢	下	陶器 搦鉢
図版52	上	陶器 搦鉢	下	陶器 搦鉢
図版53	上	陶器 搦鉢	下	陶器 搦鉢
図版54	上	陶器 搦鉢	下	陶器 搦鉢
図版55	上	陶器 湧田焼碗表面	下	陶器 湧田焼碗裏面
図版56	上	陶器 湧田焼碗表面	下	湧田焼碗裏面
図版57	上	陶器 褐釉大型碗・急須表面	下	陶器 褐釉大型碗・急須裏面
図版58	上	陶器 褐釉碗・茶碗表面	下	陶器 褐釉碗・茶碗裏面
図版59	上	陶器 褐釉瓶・壺・蓋表面	下	陶器 褐釉瓶・壺・蓋裏面
図版60	上	陶器 褐釉瓶・壺・碗表面	下	陶器 褐釉瓶・壺・蓋裏面
図版61	上	陶器 中型脚付き鉢表面	下	陶器 中型脚付き鉢裏面
図版62	上	陶器 白化粧釉碗表面	下	陶器 白化粧釉碗裏面
図版63	上	陶器 白化粧釉碗表面	下	陶器 白化粧釉碗裏面
図版64	上	陶器 白化粧釉碗・茶碗・急須表面	下	陶器 白化粧釉碗・茶碗・急須裏面
図版65	上	陶質土器 土鍋表面	下	陶質土器 土鍋裏面

図版66 上 陶質土器 土鍋表面

図版67 上 陶質土器 手焙り表面

図版68 上 陶質土器 大型碗・急須・蓋表面

図版69 上 瓦質土器 表面

図版70 上 遊具 表面

図版71 上 瓦 表裏面

図版72 上 石器 石皿表面

図版73 上 石器 石皿表面

図版74 上 石器 石斧・叩石・磨石表面

図版75 上 石器 叩石・凹石表面

図版76 上 石器 凹石・石球・砥石表面

図版77 上 石器 叩石・石錘・研石表面

図版78 上 古銭 表裏面

下 陶質土器 土鍋裏面

下 陶質土器 手焙り裏面

下 陶質土器 大型碗・急須・蓋裏面

下 瓦質土器 裏面

下 裏面

下 石器 打製石器

下 石器 石皿裏面

下 石器 石皿裏面

下 石器 石斧・叩石・磨石裏面

下 石器 叩石・凹石裏面

下 石器 凹石・石球・砥石裏面

下 石器 叩石・石錘・研石裏面

下 発掘調査員一同スナップ

第1章 遺跡の位置と環境

玉代勢原遺跡は北谷町字大村玉代勢原 44 番地ほか 3 筆に位置し、略東西にのびる標高約 16m の丘陵の南斜面にあたる。

現況では県道 130 号線沿いの南となりにあたり、米軍隊舎 No 222 の中央部に位置する（第 1 図）。

当地域は戦前までは、玉代勢原部落の中に位置していたと伝えられているが、現況はキャンプ瑞慶覧内に所在することから、旧来の地勢は変貌して隊舎が立ち並ぶ様相を呈している。しかし、1945 年の米軍地図や地籍図から戦前の地勢をよみとることができる（第 2 図）。

玉代勢原遺跡の北側約 300m には標高約 40m レベルの丘陵が、東側より横走して、北西側約 600m まで伸び、洋上に突出した形状をしており、その北西隅の丘陵部に北谷城が位置している。玉代勢原遺跡の位置する丘陵も、ほぼ同様な形状で横走するが、洋上までは至らず、北谷城の手前で途切れる様相をしている（第 3 図）。

北谷城の丘陵との間には小谷を挟んだ約 3 万 m^2 の小丘陵があり、その一帯の南斜面に伝導村がある。玉代勢の丘陵部の西隅には、伝導村と南に接する形で、北谷村の元地といわれる前城（メーグスク）が位置している。前城と接するあたりから丘陵に沿って細長く伸びた南斜面に玉代勢村が位置していたことがわかる。前城と玉代勢村との境に、北谷長老で著名な「南陽紹弘禅師」の住持寺であったと言われる樹昌院が位置していたと伝えられている。

目を南側に向けると、小谷を挟んで突出した丘陵がある、ここは代々の樹昌院の住持の墓地域として利用されてきた場所で、北谷長老の墓所もここに合葬されている。この為、この一帯は「長老山」と愛称され、町民の心のよりどころとされている。当地はまた須恵器やグスク土器も採集でき、グスク時代の遺跡でもある。

玉代勢村と「長老山」との小谷にはヒジャーという凹みがあり、水の淀みが存在し、この周辺で若者の力だめしの競技や、それに用いる力石がおかれていたという。

「長老山」の背後の丘陵にはニースモーと称する松林があり、ここから洋上の船の出入りを監視していたとの伝承があり、その道すがらには土帝君の拝所があったという。

「長老山」の南側前方には沖積平野が広がり、沖縄屈指の「北谷ターブックワ」の水田が位置していた地域にあたる。その中央部に、国道 58 号線に沿って前城から分村したと伝承される北谷村が広がっていた。

「長老山」と沖積平野の間には、東側に位置する玉代勢村の生活用水の源であったチブガーから派生する小川が迂回してきて流れてきており、また、この地域にフナダマイと称する所があり、老木に船を縛ったという伝承が残されている。

このように、北谷城から伝導村、北谷村、玉代勢村の一帯にかけてはグスク時代から近世の集落址にかけての遺跡や拝所などの、伝承が多く残るところである。

第2章 調査に至る経緯

a. 調査に至る経緯

玉代勢原遺跡は、那覇防衛施設局がキャンプ瑞慶覧内に新設隊舎を建築する予定地において、事前の試掘調査で発見された遺跡である。

試掘調査は1990年11月14日から同年12月3日の間、80箇所で行い、旧寺樹昌院址の位置と、玉代勢原遺跡を発見した。

旧寺樹昌院址は建設予定の隊舎から、はずれていることが明らかになったので、現地で保存することで協議がおちつき、樹昌院址として遺跡発見の届けを行った。地番は北谷町字大村玉代勢原1番地で、現隊舎No 221の真西の駐車場に位置する。

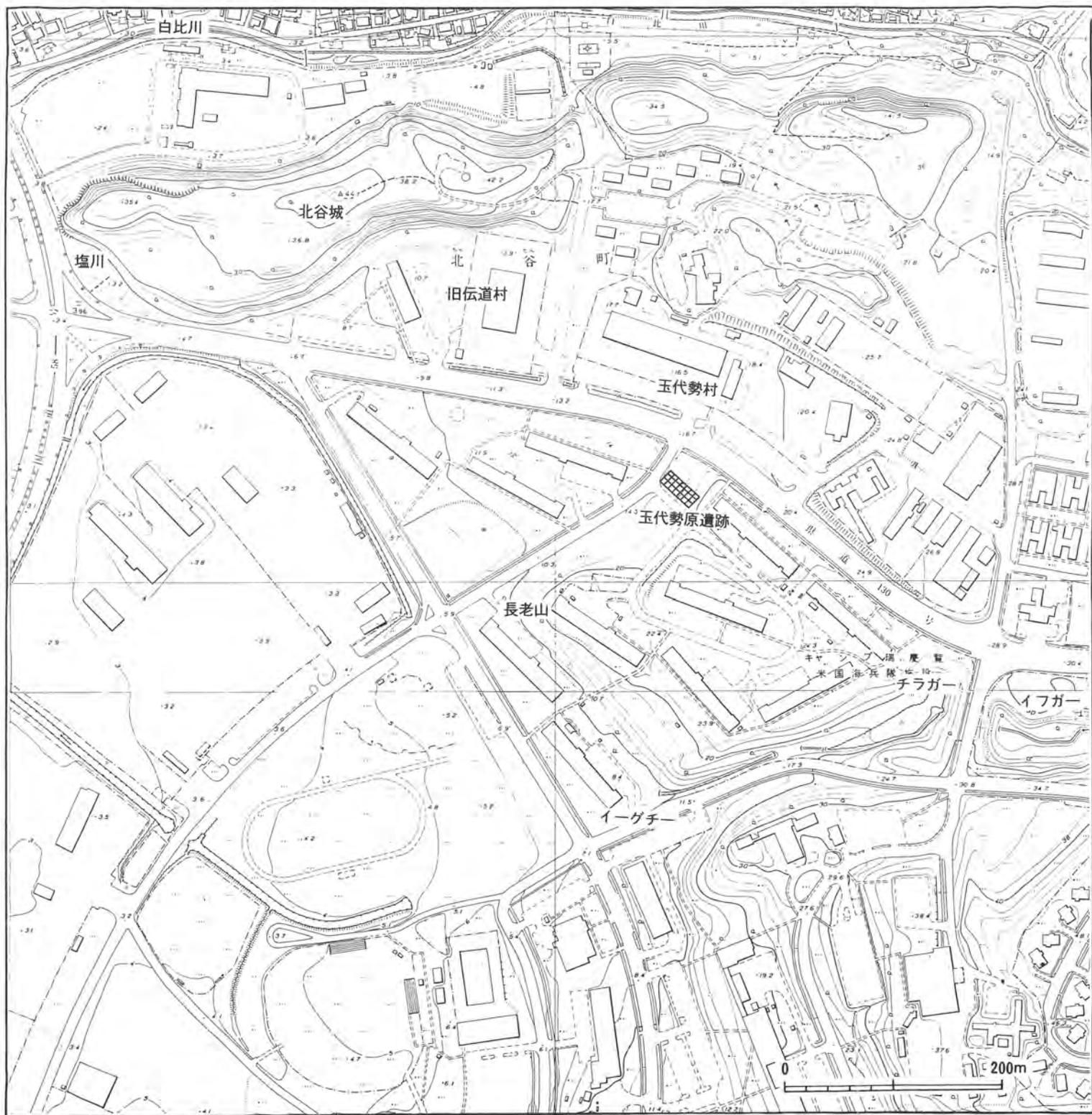
玉代勢原遺跡は新築隊舎No 222の西側の3箇所の試掘で発見された。周辺の試掘箇所の結果とかみ合わせると、隊舎の西側1/3の地域にあたり、南側に傾斜して存在することが判明した。東・北・西側の三方は既に削平され、島尻層（クチャ）の露出がみられた。遺物の包含層は南側に広がりが見られた。これは、1989年沖縄県文化財調査報告書第89集「北谷長老山遺物散布地」と紹介されたものと同じをなす遺跡かと考えられた。

b. 調査体制

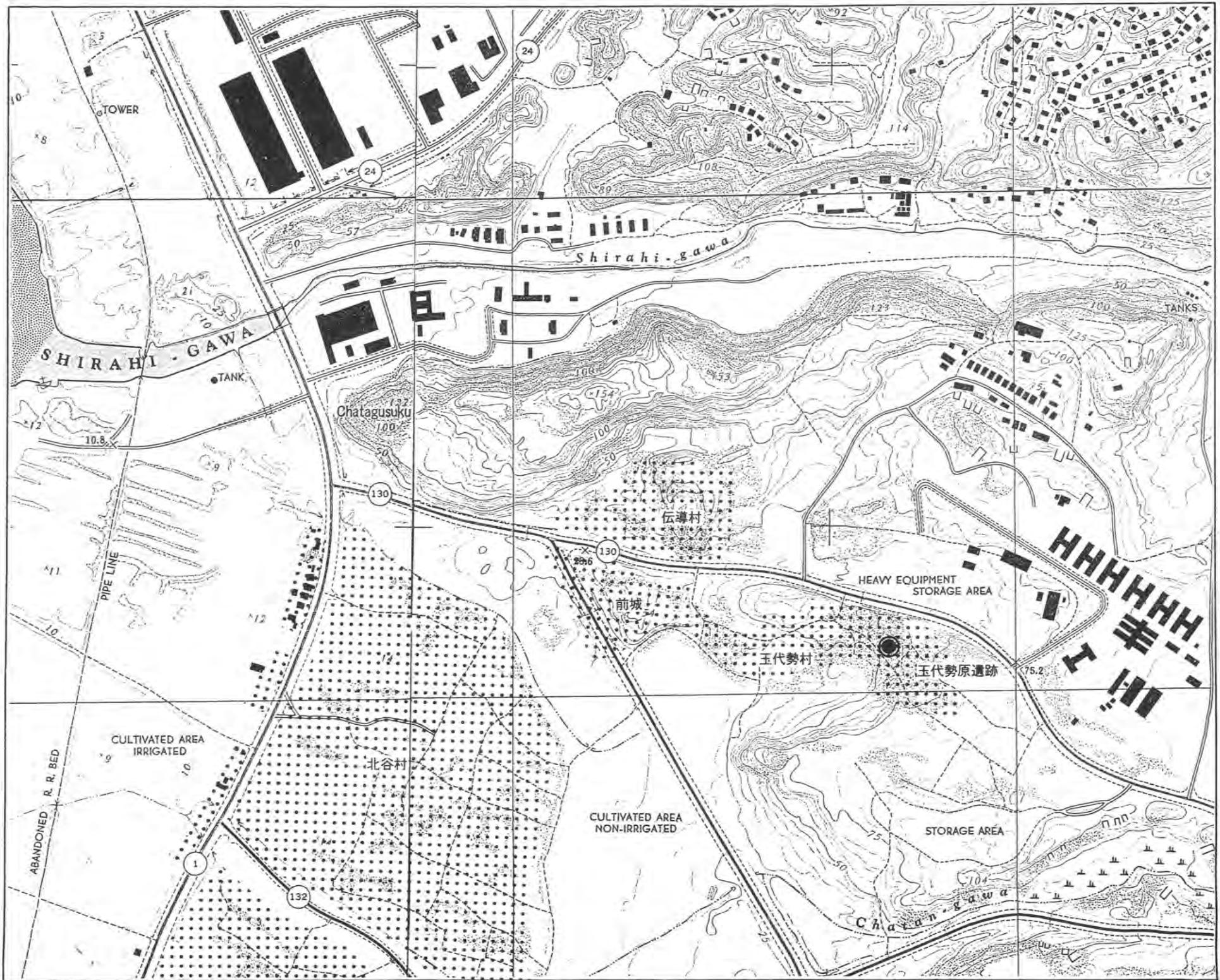
今回の調査体制は下記のように実施された。

1991年度（平成3年度）

調査主体	北谷町教育委員会			
調査責任者	教 育 長	當山 憲一		
事務局	社会教育課長	照屋 勝雄		
	社会教育係長	知念 良範		
調査担当者	社会教育主査	中村 愿		
	社会教育嘱託	當山 格	田場 勝也	
	社会教育臨時職員	仲宗根秋美	瑞慶覧公子	松島 良道
		長嶺真継	座間味修	稲嶺悦子
		喜友名弘子	崎浜雅子	仲村 健
		吉田佳代	照屋幸江	宮平真由美
		池原京子	徳吉美奈子	宮城武子
		高江洲敦子	浦崎解子	前川恵子
		照屋 要	新垣茂子	町田トミ子
		稲嶺トミ	米須笑子	豊里 宣
		知念徳松	川平トミ子	与座 良



第1図 玉代勢原遺跡と周辺遺跡の位置図



第2図 米軍地図（1954年）による地形と玉代勢原遺跡位置図

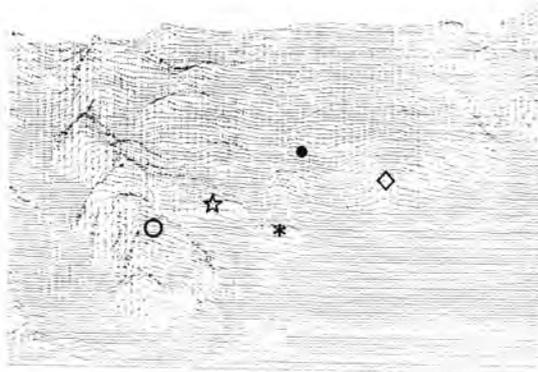
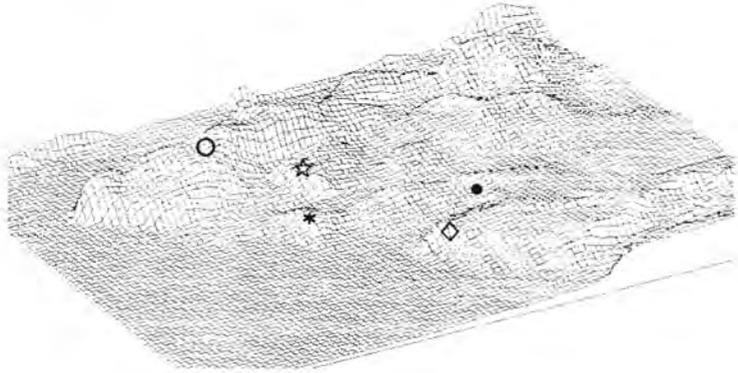
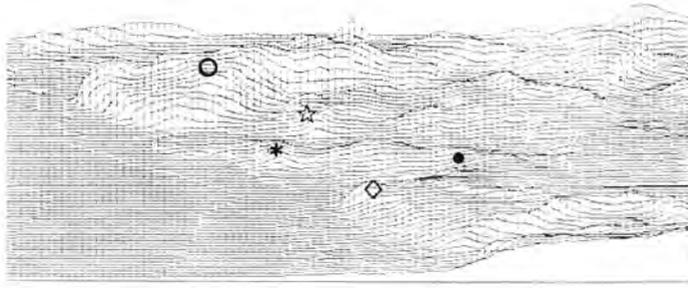
..... は旧村落跡

与座テルヤ	屋宜光枝	諸見里信子
宮城隆明	上原亀造	久場良義
比屋根有弘	屋宜盛義	稲福具栄
渡久地政英	神村盛栄	前當安栄
花城次郎	徳嶺貞三	知念清
照屋静子	島袋富一	知念盛吉
名嘉実	名城政松	真喜志三郎
外間栄助		

調査協力者 津嘉山静子 照屋光球 仲村文清

1992年度（平成4年度）

調査主体	北谷町教育委員会		
調査責任者	教 育 長	當山憲一	
事務局	社会教育課長	照屋勝雄	
	社会教育係長	知念良範	
調査担当者	社会教育主査	中村 愿	
	社会教育囑託	當山 格	長峰初子
	社会教育臨時職員	池原京子	前川恵子 宮城武子
		浦崎解子	仲村渠恵 高宮城直子
		仲村まゆみ	与那覇恵子 玉城和美
	徳吉美奈子		



- は玉代勢原遺跡 ○ は北谷城 ◇ は長老山
- ☆ は伝導村 * は前城村

第3図 米軍地図による立体シュミレーション

第3章 調査の概要

第1節 調査の経過

1989年3月に那覇防衛施設局から、キャンプ瑞慶覧内において新設隊舎の2棟の建設予定の旨があり、その予定地が埋蔵文化財の包蔵地の可能性があることから、事前に試掘調査を行うこととなった。

試掘調査は1990年11月14日から同年12月3日の間、80箇所のポイントでおこなった。試掘調査の範囲では大半のポイントが、戦後の米軍の基地建設の一環でおこなわれた造成や隊舎の建設で、削平され、わずかに谷間に近い窪みに辛うじて残存することが判明した。よって、埋蔵文化財が発見されたのは、今回の調査の経緯になった玉代勢原遺跡の地域において、3箇所のポイントで文化層が確認された。周辺のポイントの結果と合わせると、建設予定地域内に広がる埋蔵文化財は略東西約35m、南北約15mで525m²の範囲に広がるということが判明した。

調査地域はその525m²の範囲を対象とした。

発掘調査は平成3年度事業として、1991年7月1日から同年10月12日の約3カ月半おこなった。同年10月13日から1992年3月31日の後半期は、発掘調査で出土した遺物の洗浄と、第IV層の土壌サンプルの50袋を種子検出のための洗浄をおこなった。

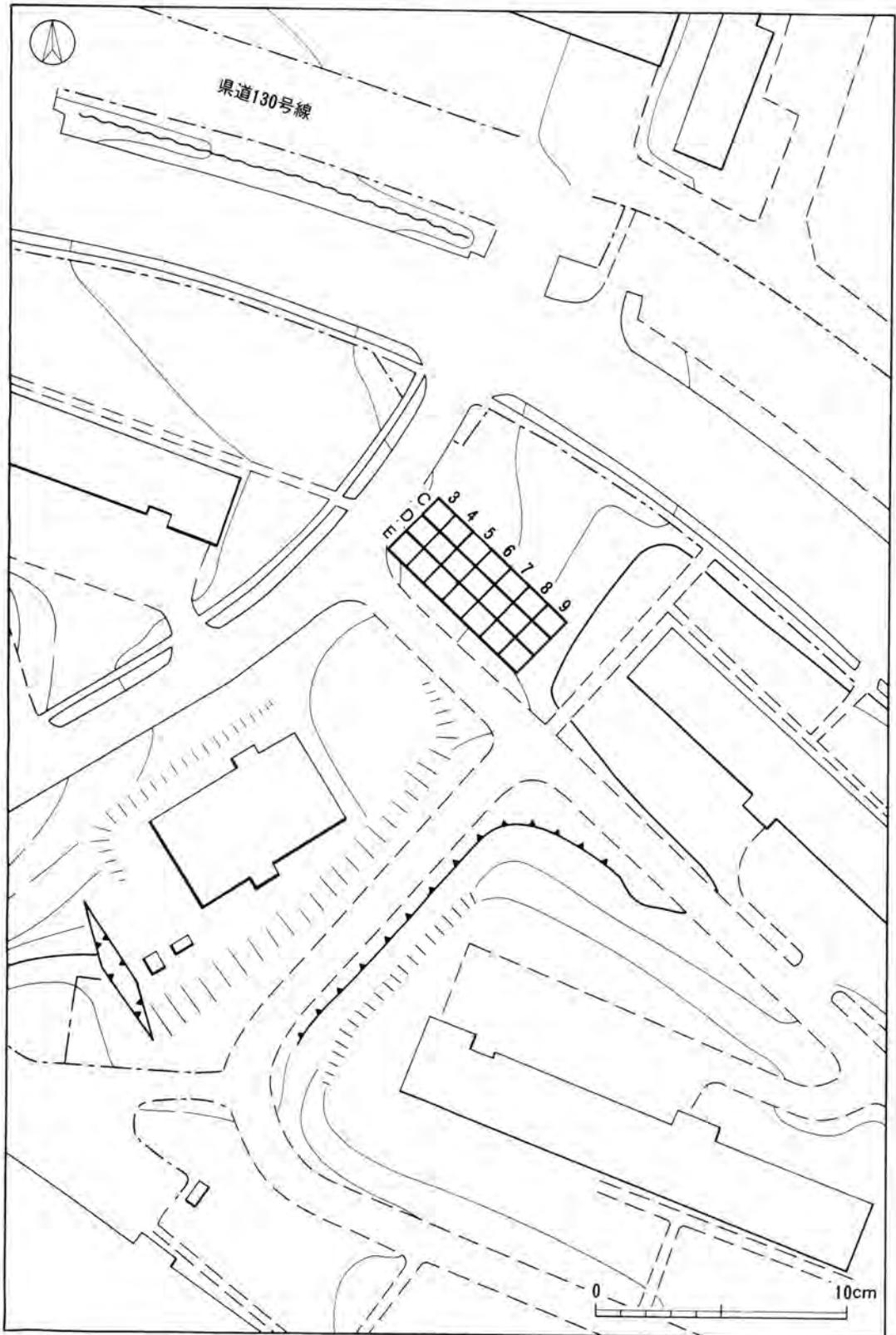
平成4年度は遺物整理と報告書作成のための、遺物分類、遺物実測、トレース等の室内作業を、1992年度4月1日から1993年3月31日の約1年をかけておこなった。

発掘区は隊舎建設予定地区にかぎり調査をおこなうこととした。調査区は略東西35m、南北15mの範囲を、5m×5mのメッシュで区分し、グリット設定をおこなった。グリットの名称は、南北の方向には北からC、D、Eと付し、東西の方向には西から3、4、5、6、7、8、9と名を付した(第4図)。

第2節 層序

玉代勢原遺跡は試掘調査の結果や米軍地図の旧地形から、北側に横走する県道130号線には、丘陵が遺跡の南東方向から北側にかけて存在したが、すでに削平されていることが考えられた。また、南側の小谷は数メートル落ち込んでいることが考えられることから、遺跡の現状は南斜面の中腹に位置することが予想された。

試掘の結果から、北側のCトレンチ側では厚さ約70cm、南側のEトレンチ側では1.5mほどの客土が確認されたので、この部分については機械力を用いて除去した。除去後、Cトレンチ側では基盤層である島尻層(クチャ)が露出していて、すでに包含層は削



第4図 発掘区とグリット設定図

平されていた。層は全体的に南側に傾斜していることが判明したが、D・Eトレンチでも、戦後の米軍による造成工事が幾度となく繰り返されたらしく、特に上下水道工事の際の溝が縦横に走り、深いものは基盤層まで達しているのもあり、プライマリーな層の確認にはてまどった。

層序は細分すると、13枚確認されるが、基本的には5層に分けられた(第5～7図)。

I層 戦後の客土である。コーラル(イングゥ)で淡黄褐色をなすものや、削平の際の廃土等からなる。南西側の深いところは2.5～3mの厚さがある。後述のII層上面には戦前の屋敷址の石列が確認されることから、戦後、当地域において大規模な埋め立てがおこなわれたことがわかる。含む礫の多少により、a・b・cの3枚に分けることができるが、ここでは割愛する。E-5・6グリットの境目には、基盤層の島尻層まで送水管施設のための掘削された溝がみられた。

II層 暗褐色土層で1～1.5mの厚さをもつ。土層の濃淡と硬度により上下に分けることができる。

上層(IIa層)は炭化物などの有機質を多量に含み黒味が強く、土壌はやや柔らかい。下層(IIb層)は青磁や大形破片の獣骨などがまばらにはいる灰褐色土層である。

IIa層とIIb層の境は明確でなく、じょじょに移行している。

IIa層の上面には戦前の屋敷址の石列が確認されることから、近世の造成の際に成形された層と考えられる。特にEトレンチの東側壁面には数回にわたり、階段場に成形された痕跡がみられた。

III層 褐色土層で厚さ約50cmを測る。削平されたCトレンチ以外の全トレンチでみられるが、Eトレンチの東側では堆積がやや厚く80cmほどであった。青磁や南蛮焼が層の中央部で出土するがまばらであった。

IV層 暗褐色土層で厚さ約30cmほどの薄く、赤みの強い層である。全体的に広がるが、C-6・7・8グリット、D-7グリットを中心とする地域は木炭を多量に含み、くびれ平底土器が単独に出土する場所である。

V層 基盤層である地山の島尻層(クチャ)である。

第3節 遺構

石列の遺構がD-4・5・6、E-3・4・5・6グリットがII層上面で検出された(第8図a・b)。石列は人頭第の石灰岩礫や硬砂岩礫を直線状に敷き並べたもので、3箇所を確認された。この石列の上面や礫の間からコバルト釉の壺屋焼やゴムスタンプを用いた白磁が出土することなどから、戦前の屋敷址であることが判明した。

石列 1、

E-3・4グリットに沿って、両グリットをまたぐ形で中央部に直線的にみられ、E-4グリット東側で直角に折れ曲がる状況で検出された(第8図a・b)。この石列は北側と東側に面をそろえている。その内側は拳大の石灰岩礫で敷き詰められていた。この石列の延長の一部と考えられる、E-3南壁には幅15cm、長さ70cmほどの切石が立ち、それを境とする西側にはコンクリートが敷かれていた。このことから水を用いる場所に近い所であろうと考えられる。

石列 2、

E-5グリットの北西角からE-6グリットの南東角にかけて、人頭大の石灰岩礫を用いて、直線的な石列が2列確認された。両者は約40cmの幅をもって、お互いの面を合わせた状態でみられた。両石列の外側は同大の礫でまばらに敷き詰められていた。屋敷内の排水路と考えられたが、明確な判断は下せなかった。

石列 3、

D-5グリットの南東側とD-6グリット南西側にかけて、一抱えほどの板状の硬砂岩礫が、石列2とほぼ平行する形で敷かれた状態で検出された。しかし、この石列の中央部に直径約2mほどの排水管施設の為の攪乱部があり、その関係や性格については判断が下せなかった。また、D-6グリットの中央部に獣骨の下顎骨や大形片が集中する地域(第9図)が石列3と接するかたちで検出されたが、その性格も把握できなかった。

第Ⅳ層遺構

C-6グリットで第Ⅴ層に第Ⅳ層から掘り込まれた直径15cm、深さ10cmの小穴が1基、D-7グリットでも南西角に直径約50cmの不正円形で、深さ10cmほどの落ち込みが1基確認されたが、その性格は把握できなかった。

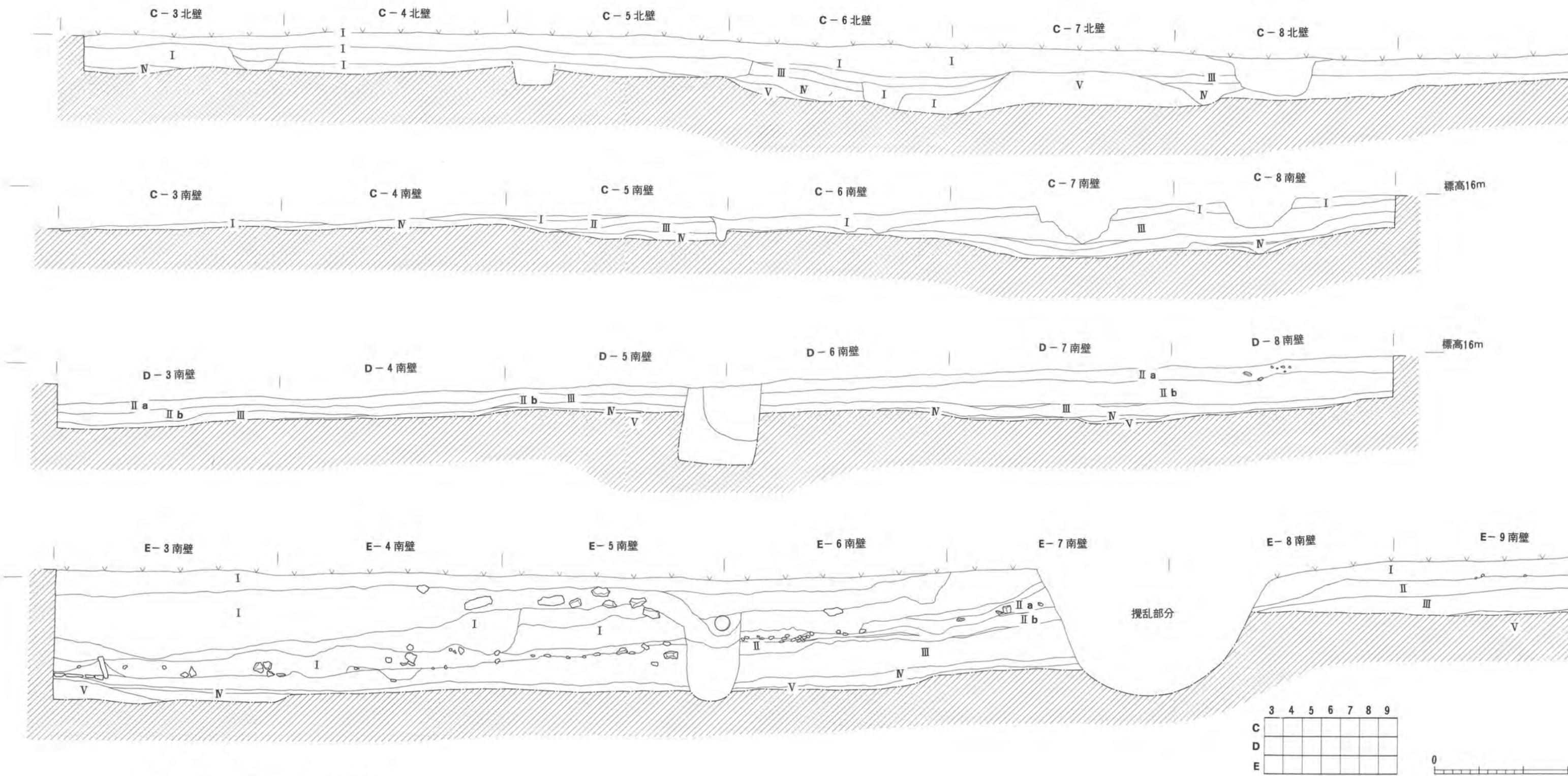
第4節 出土遺物

今回の調査で得られた資料はくびれ平底土器の砂丘系土器からグスク時代、近世から現代までの範囲にかぎられていた。それらの中でも戦前の集落レベルから出土した現代瓦は資料整理のものから除外した。戦後、米軍が持ち込んだものと、明らかに判断できるものも、その対象からはずした。

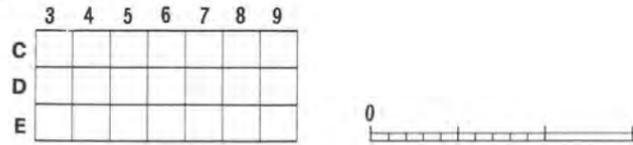
出土遺物の種類をみると、人工遺物では土器、須恵器、磁器、陶器、石器、古銭、貝製品などがみられ、自然遺物では貝、獣骨などの出土がみられた。

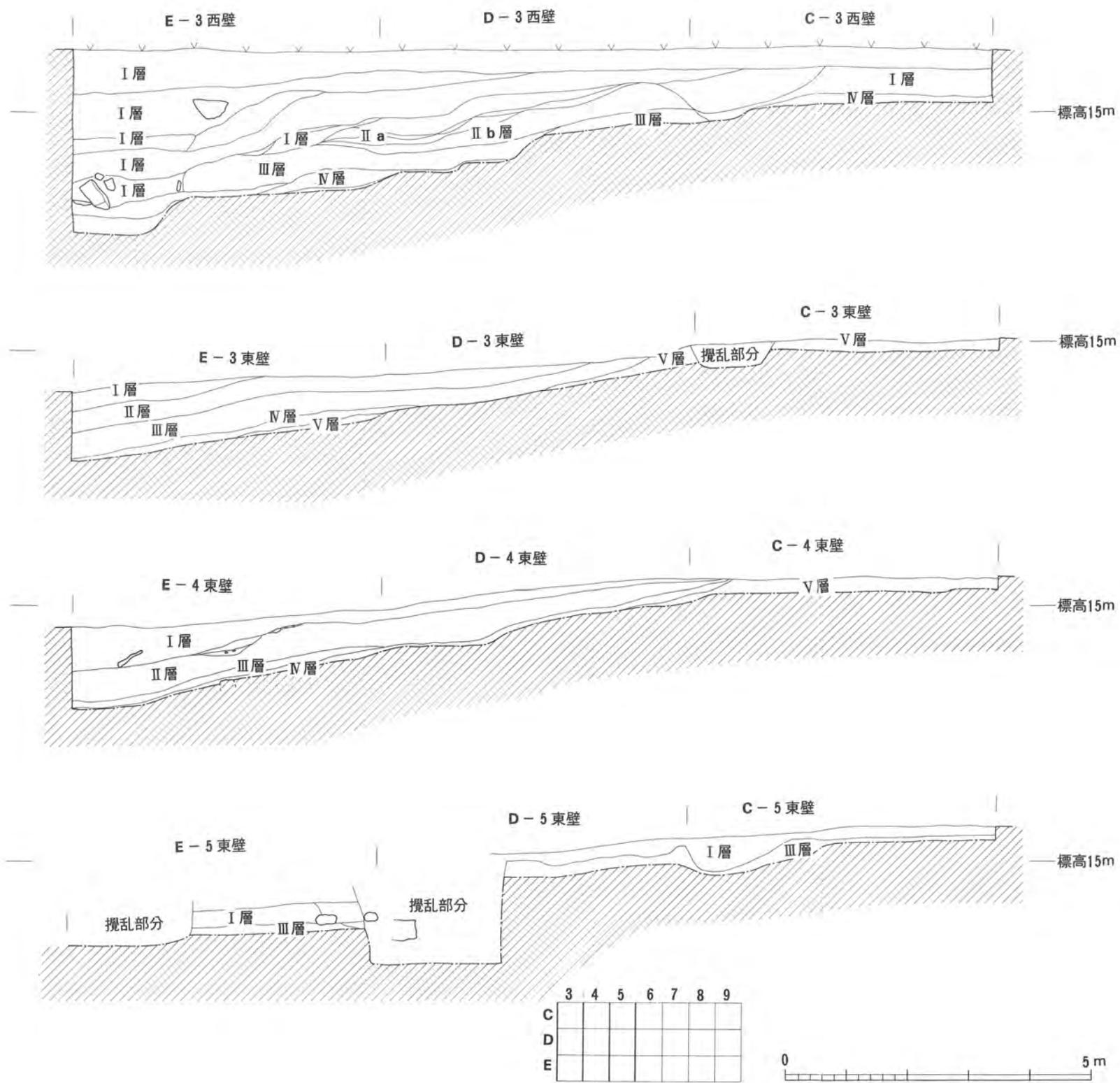
a. 人工遺物

人工遺物は土器、須恵器、磁器、陶器、石器、古銭、貝製品などが得られた。出土量の多い順序でみると土器3690点、陶器1913点、磁器1298点、石器74点、須恵器56点、

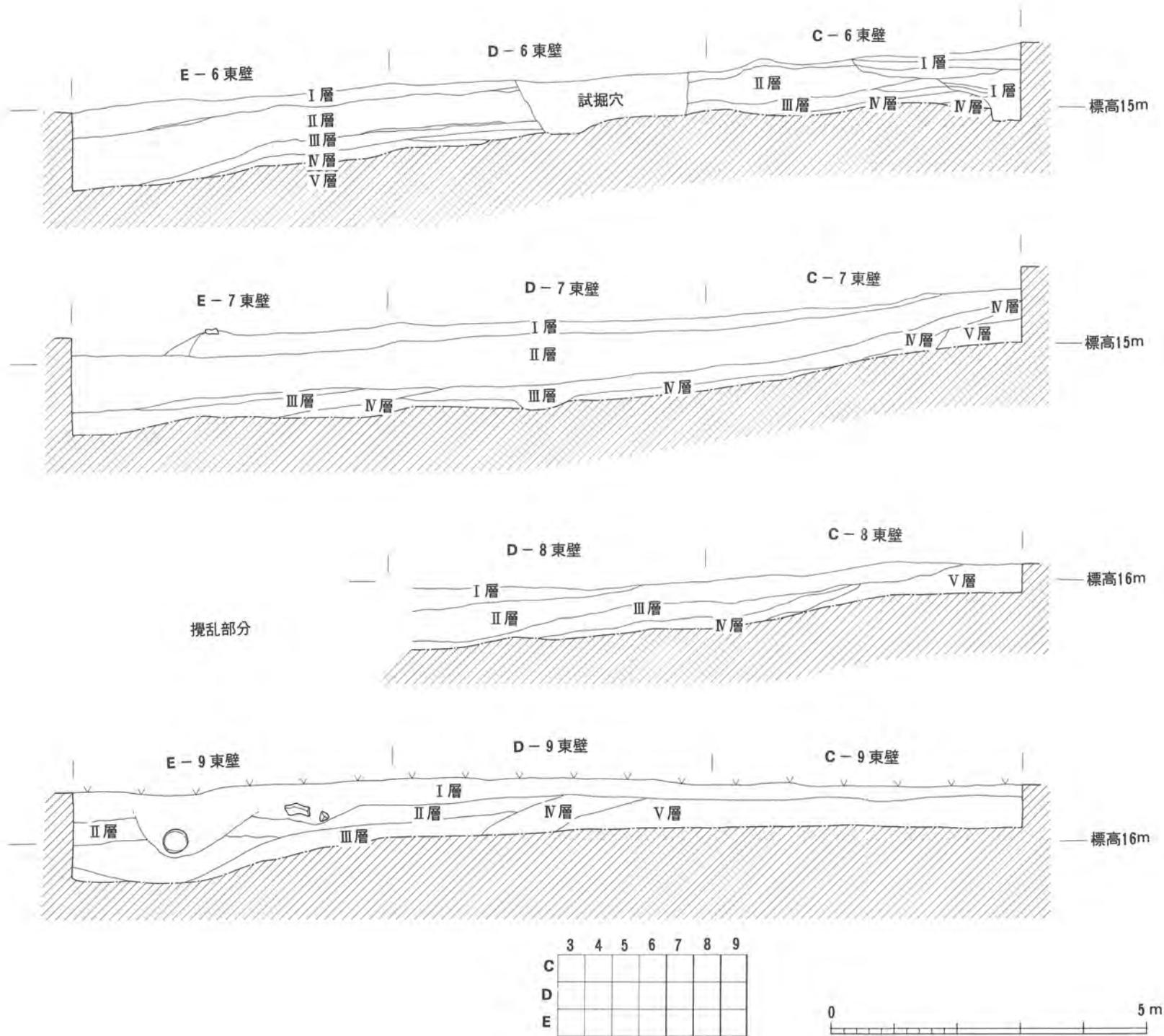


第5図 C・D・Eトレンチ土層断面実測図

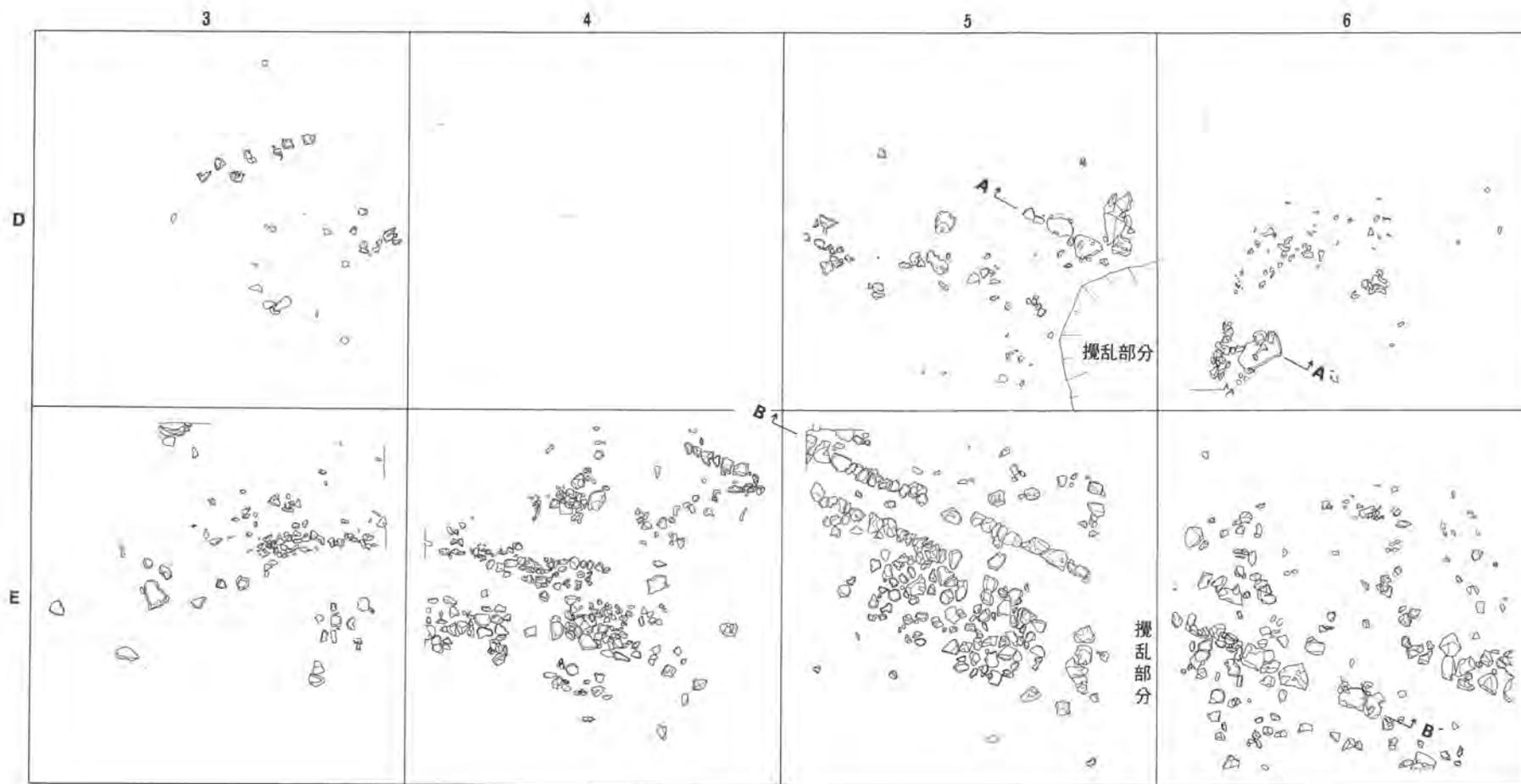




第6図 3・3・4・5トレンチ土層断面実測図



第7図 6・7・8・9トレンチ土層断面実測図



標高14.3m A —

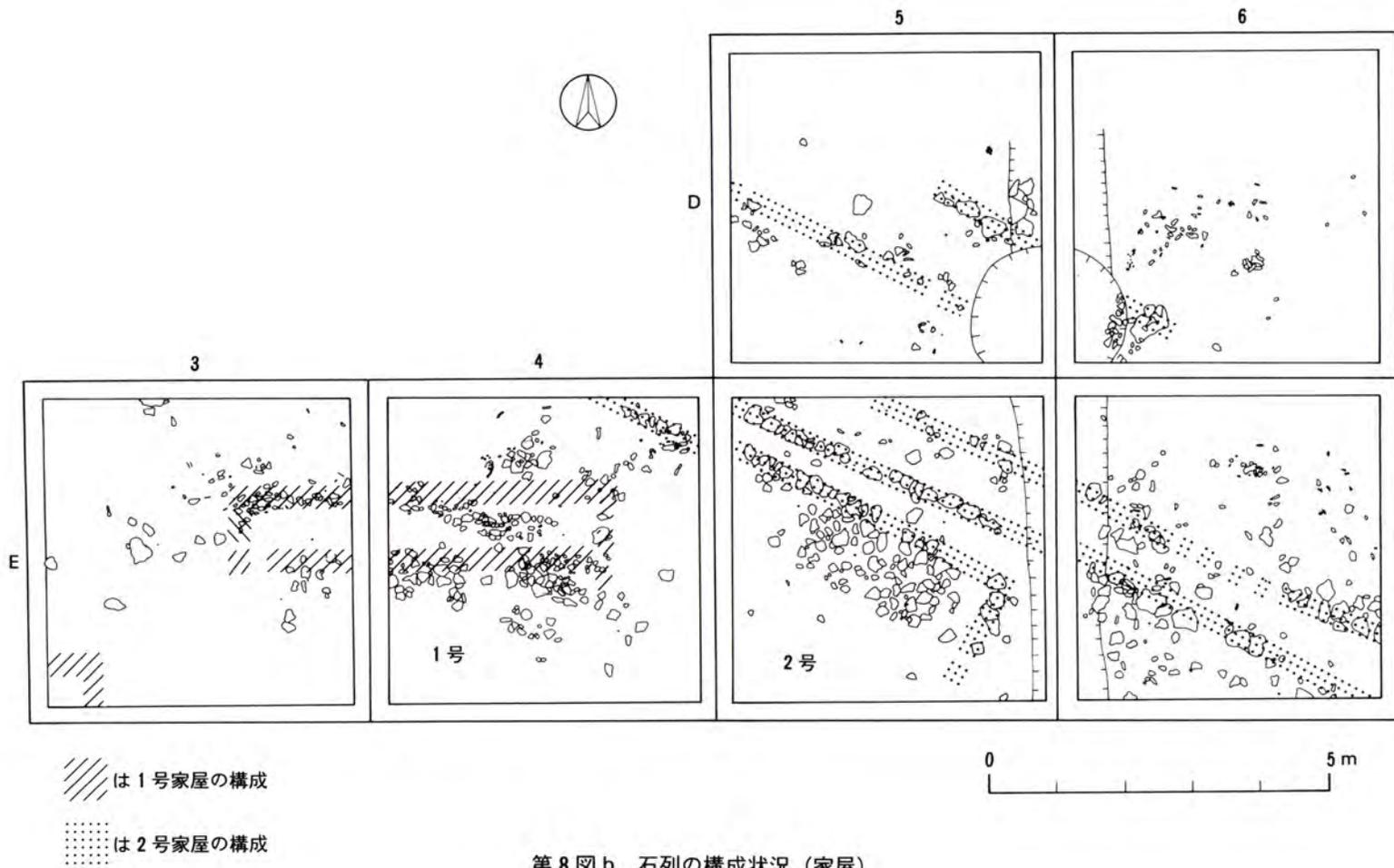
— A — 標高14.3m B —

— B — 標高14.3m

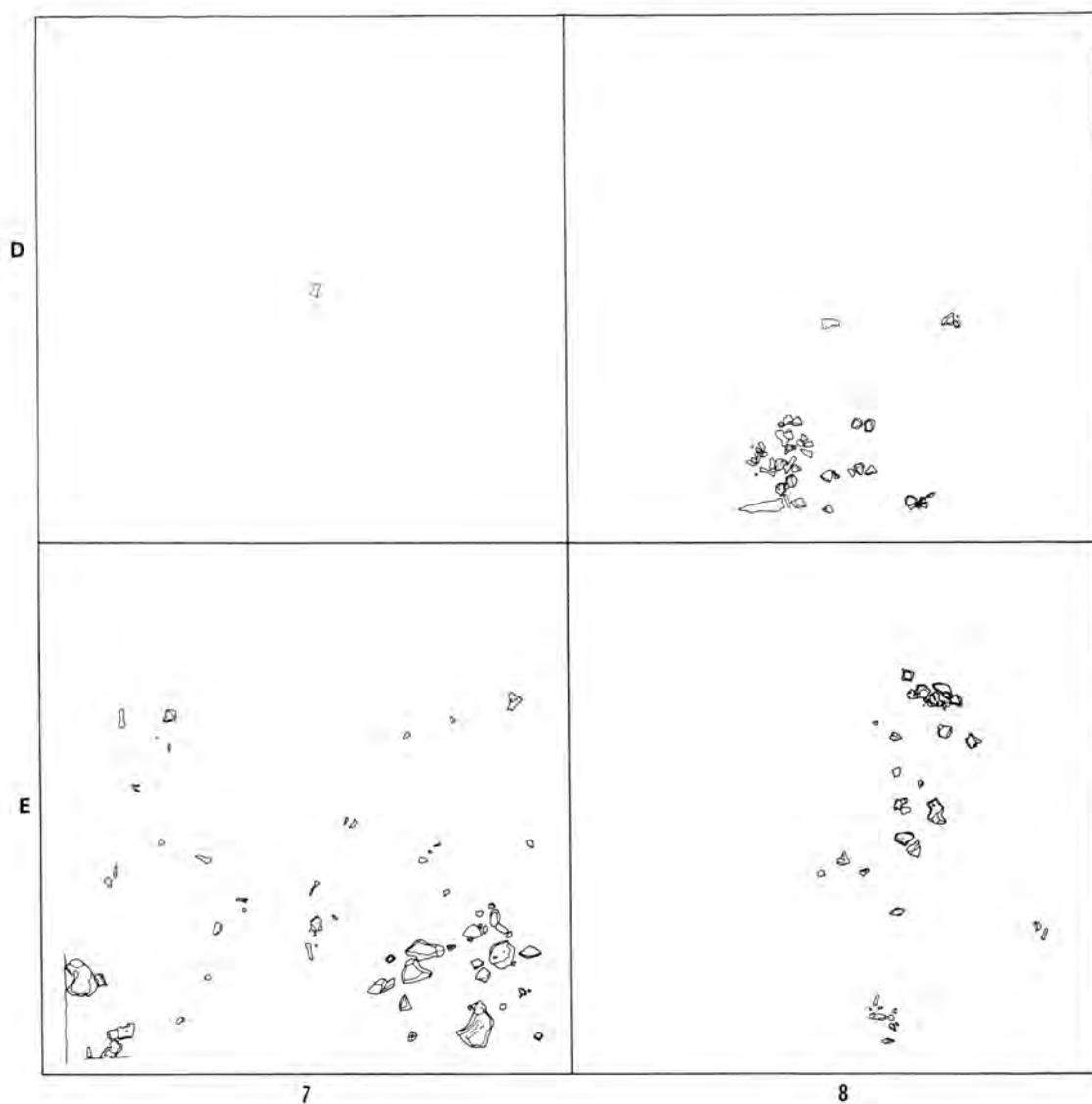
	3	4	5	6	7	8	9
C							
D							
E							



第8図a D・E-3・4・5・6グリッド遺構検出平面・断面実測図 (現代の屋敷跡)



第8図b 石列の構成状況(家屋)



	3	4	5	6	7	8	9
C							
D							
E							



第9図 D・E-7・8グリット遺物出土状況実測図

古銭9点、貝製品1点との状況であった。

イ. 土器

土器はその形状から、いわゆるくびれ平底土器とグスク土器に分けることができる。

くびれ平底土器は口縁部がやや外反し、張りの弱い胴部から直線的に平底の底部にゆく甕形土器で、底部の外周が整形の際、指頭の押圧によりくびれ、結果として底面が開く形状から、略称されている。

くびれ平底土器の総数は3601点で、図上復元できるものはなく、すべて細片であった。

くびれ平底土器は胎土の相違から、つぎの4種に分けることができる。

I a 胎土の粘性が弱くザラザラしていて、粗めの砂粒の石英を含み、まれに赤色粒を含むもの。

I b 胎土の粘性が弱くザラザラしていて、微砂粒の石英を含み、まれに赤色粒を含むもの。

II a 胎土の粘性が強くツルツルしていて、粗めの砂粒の石英を含み、多量に赤色粒を含むもの。

II b 胎土の粘性が強くツルツルしていて、微砂粒の石英を含み、多量に赤色粒を含むもの。

I a 類に含まれるのは第10図1～13、I b 類に含まれるものは同図14～23、II a 類に含まれるものは同図24～28、II b 類に含まれるものは同図29～36である。器種は甕形と壺形の2種類がみられ、同図35・36の壺形土器以外はすべて甕形土器であった。甕形土器の口縁部は同図1のように直線的なものもあるが、ほかは全て外反するものであった。外反する土器の中には、頸部の内側が肥厚するもの(2)、口唇部に突起をもつもの(3)、口縁部に肥厚部をもつもの(23)、頸部に刻目凸帯をもつもの(25・26)や縦位に刻目凸帯をもつもの(33・34)などの特徴をもつものがある。

くびれ平底の底部を胎土別に分けると、

I a 類は第11図1～5・15～21・35～38・45～50、

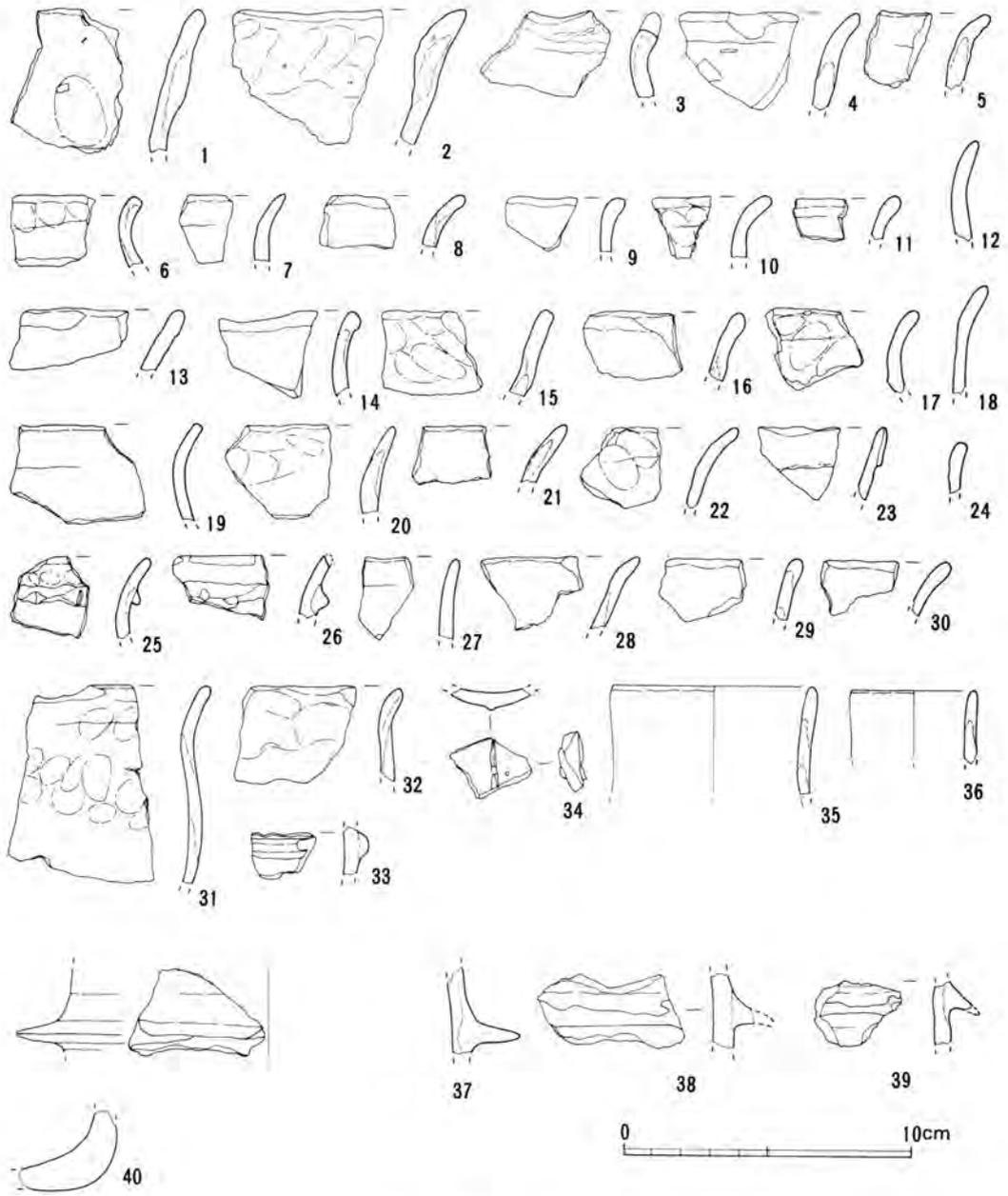
I b 類は同図6・7・9・10・14・22～24・26・28・30～32・39～44・51～58、

II a 類は同図11・12・29・33・34、

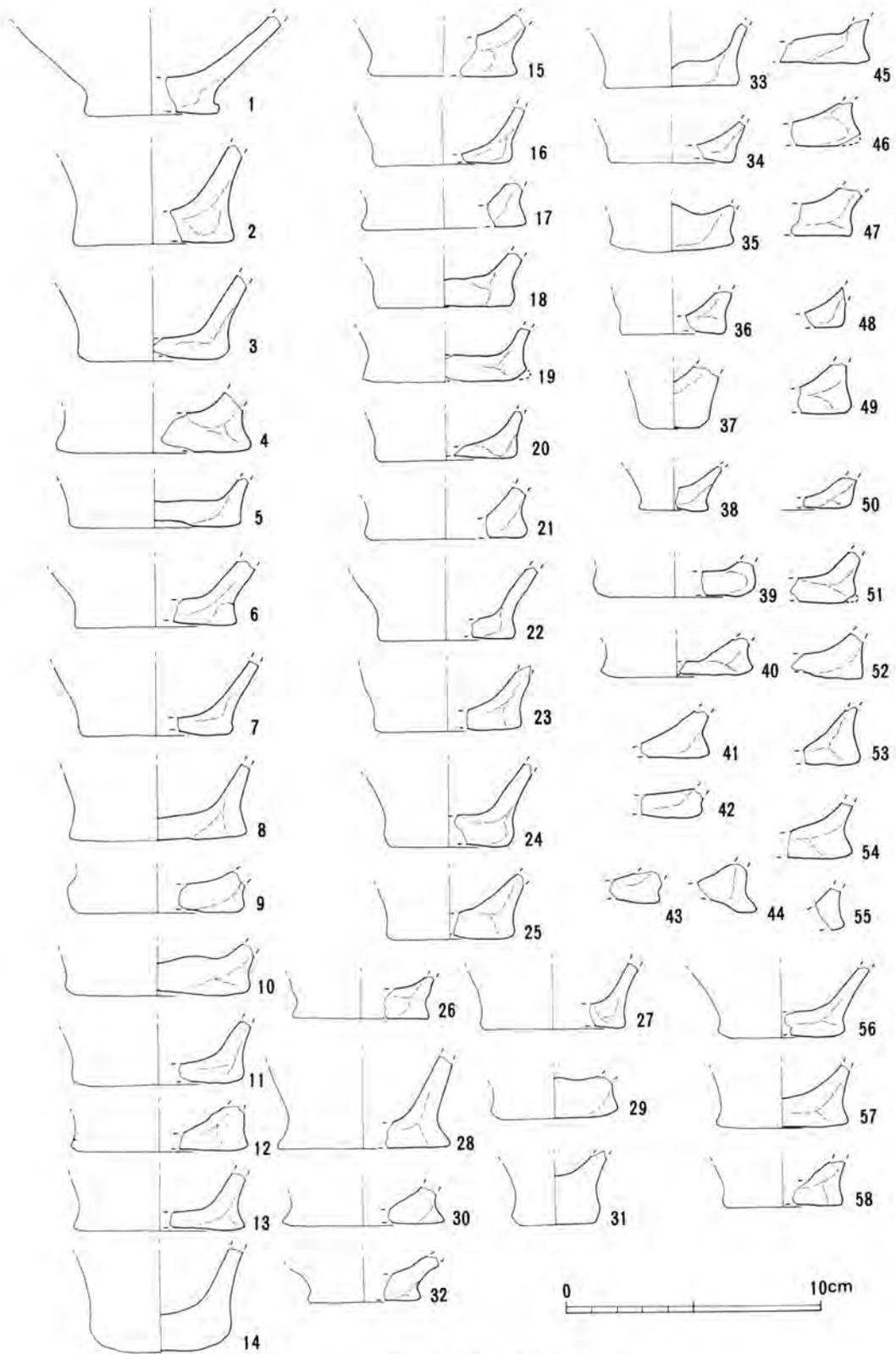
II b 類は同図8・13・25・27

となる。底径の大きさは5～6cm内外のものが多いが、同図4・5のように7cmを越えるものや、同図37・38のように2cm以下の径の小さいものもある。それらの底径の差は機種の相違によるものなのかは細片の為、判断できない。

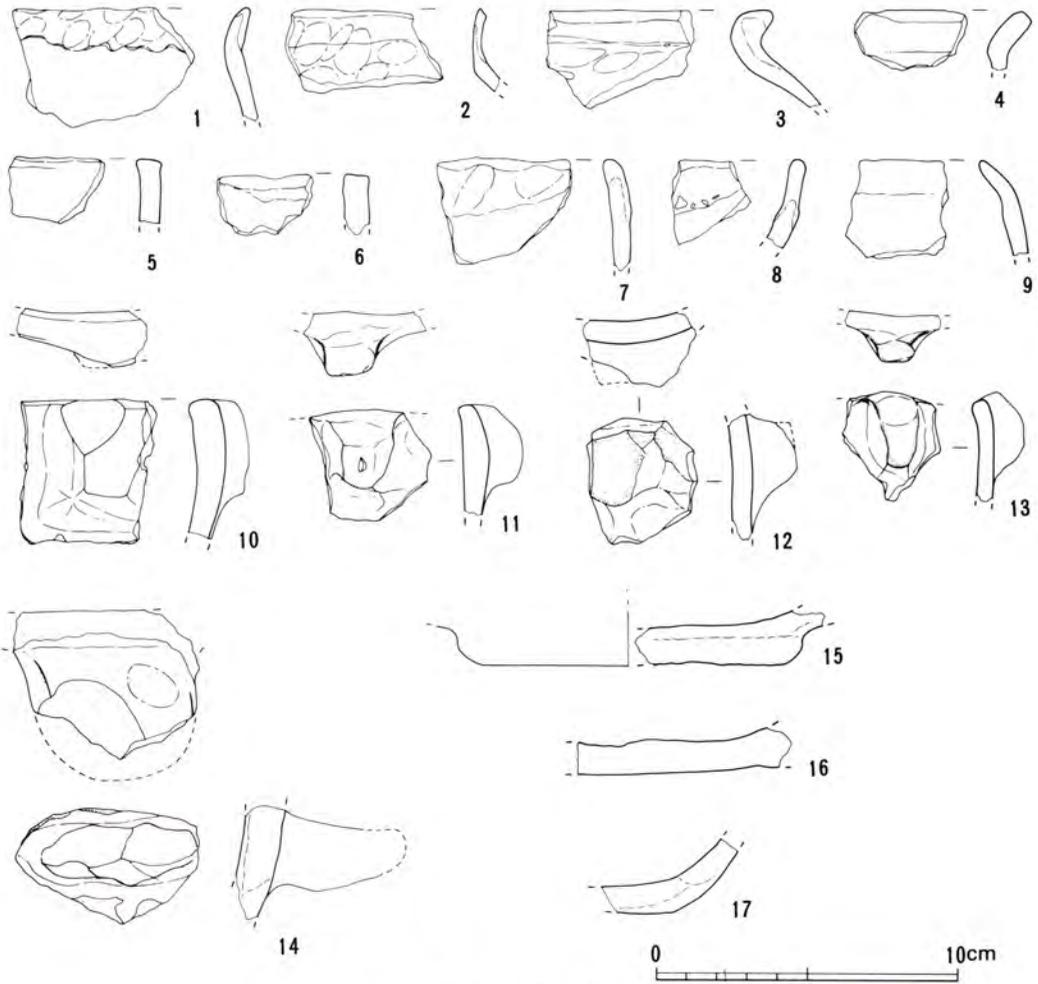
くびれ平底土器は表採や攪乱層以外の大半の土器はC-6・7・8、D-7グリットの



第10図 土器Ⅰ類()・Ⅱ類



第11圖 土器 I・II類底部



第12図 土器Ⅲ類

第Ⅳ層で単独に出土したものである。

グスク土器は総数 89 点であり、図上復元できる資料はなかった。グスク土器は鍋状の平底土器で、口縁部下に方形や楕円形の把手をもつ土器で、これまでフェンサ上層式土器とされたものである。

グスク土器を胎土別に分けると、下記の 5 種類に分けることができる。

- Ic 胎土の粘性が弱くザラザラしていて、粗めのコーラル砂粒を含み、まれに赤色粒を含むもの。
- II d 胎土の粘性が強くツルツルしていて、粗めのコーラル砂粒を多量に含み、まれに赤色粒を含むもの。
- II e 胎土の粘性が強くツルツルしていて、細かなコーラル砂粒を少量に含み、多量の赤色粒を含むもの。

Ⅱf 胎土の粘性が強くツルツルして赤みが強く、粗めの砂粒の石英を含み、多量に赤色粒を含むもの。

Ⅱg 胎土の粘性が強くツルツルして赤みが強く、粗めの砂粒の滑石を多量に含むもの。

グスク土器を土器別にみていくと、Ⅰc類は第12図1・2・5・7・9・16・17、Ⅱd類は同図3・4・12・14、Ⅱe類は同図6、Ⅱf類は同図9～11・13、Ⅱg類は第10図38に分けることができる。

第12図3は口縁部が強く外反するもので、特に外器面は光沢を帯びるほど黒色を呈している。同図9～12は直線的な口縁部に方形状の把手をもつもので、同図5・6はこの口縁部破片と考えられる。同図13は横位の把手で、平面の形状はU字状をなすもので、近年、2～3の遺跡で出土例が報告されているものである。

第10図37～39は胴部に横位の凸帯をもつもので、その形状が“ハ”の字状に下がりぎみに開くことから鏢状の凸帯と考えられるものである。同図38は滑石を含むもので、胴部片は16点ほど出土している。

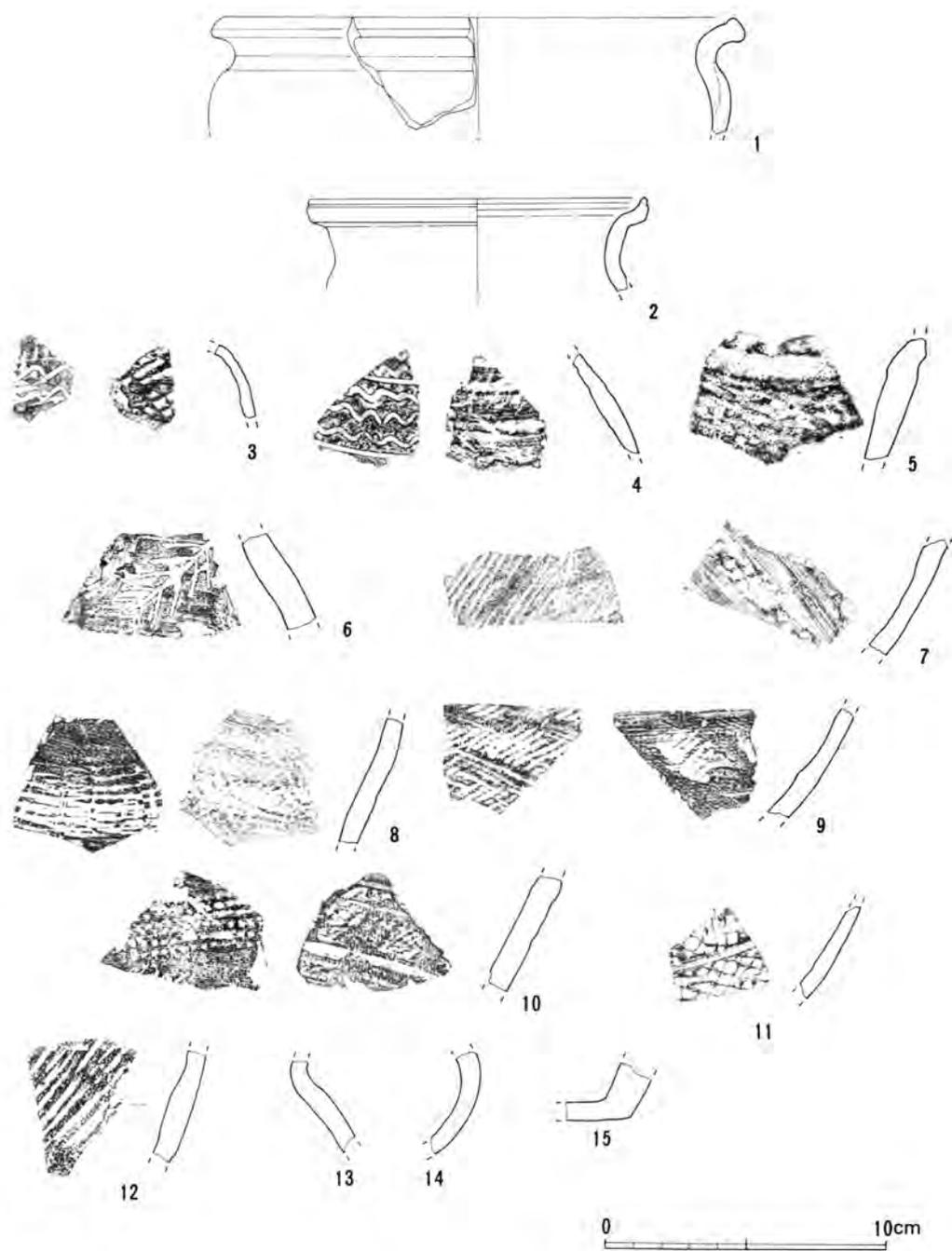
ロ. 須恵器

須恵器の総数は56点であり、図上復元できる資料はなかった。表採資料以外は主に第Ⅲ層での出土であった。

資料の大半はいわゆるカムヤキタイプと呼ばれるものであるが、灰白色の胎土で横位のタタキをもつもの（第13図5～7）もある。また、胴部片で外器面に沈線による有軸羽状の文様をもち、これまで例のないものもある（同図6）。類を分けて取り扱うべきであるが、今回は、この項であつかうこととする。

口径の計れる資料は2点で18.1cmの中型（第13図1）や11.9cmの小型（同図2）の2種類のあることが知れる。肩部の資料は無文のものもあるが、同図3・4のようにロクロによる波状の沈線をもつものもある。

有軸羽状の文様のある同図6は、胎土もカムヤキタイプと比較して砂っぽいが精錬されていて、カムヤキタイプにみられる白色鑛物などは見られない。文様や胎土の特徴から石川県珠洲市の珠洲窯の須恵器の可能性が高いと手塚直樹・大橋康二の両氏から所見をいただいた。



第13図 須恵器

八. 磁器

1. 青磁

青磁は総数 564 点であるが、図上復元可能な資料は 1 点である。器種は碗、盤、皿、瓶の 4 種からなる。

碗は文様の種類から下記の 種に分類される。

- a. 篋彫有鎬蓮弁文
- b. 篋彫無鎬蓮弁文
- c. 線彫無鎬蓮弁文
- d. 雷文帯
- e. 印花文
- f. 無文

文様別にみると、a 類に含まれるのは第 14 図 1、b 類に含むものは同図 2、c 類に含むのは第 16 図 14・7・8・10~31・33~36・39~41・43~56、d 類に含むのは第 15 図 22・第 16 図 2・3・5・6・33・38~40、e 類に含まれるのは第 17 図 1・3・4・5・6・8・9、f 類に含まれるのは第 15 図 1~18・20・21・23~33 である。最も古いものは第 14 図 1 の篋彫有鎬蓮弁文で、1 点の出土である。印花文の中には第 17 図 4 のように双魚文をもつものもある。全体の中でも線彫無鎬蓮弁文や印花文がわりと目につき、時代的にも 14 世紀後半~15 世紀中葉のもの、15~16 世紀中葉のものが多かった。

皿は第 14 図 4~11・13 の稜花皿の口縁内面には叉状の圈線がめぐらされたものと、第 14 図 15・16・18・第 18 図 6 の鏝縁皿の胴部には蓮弁文が施されているもの、第 14 図 14・第 18 図 5 の直行口縁皿の外器面には唐草文を施したものとに分けることができる。

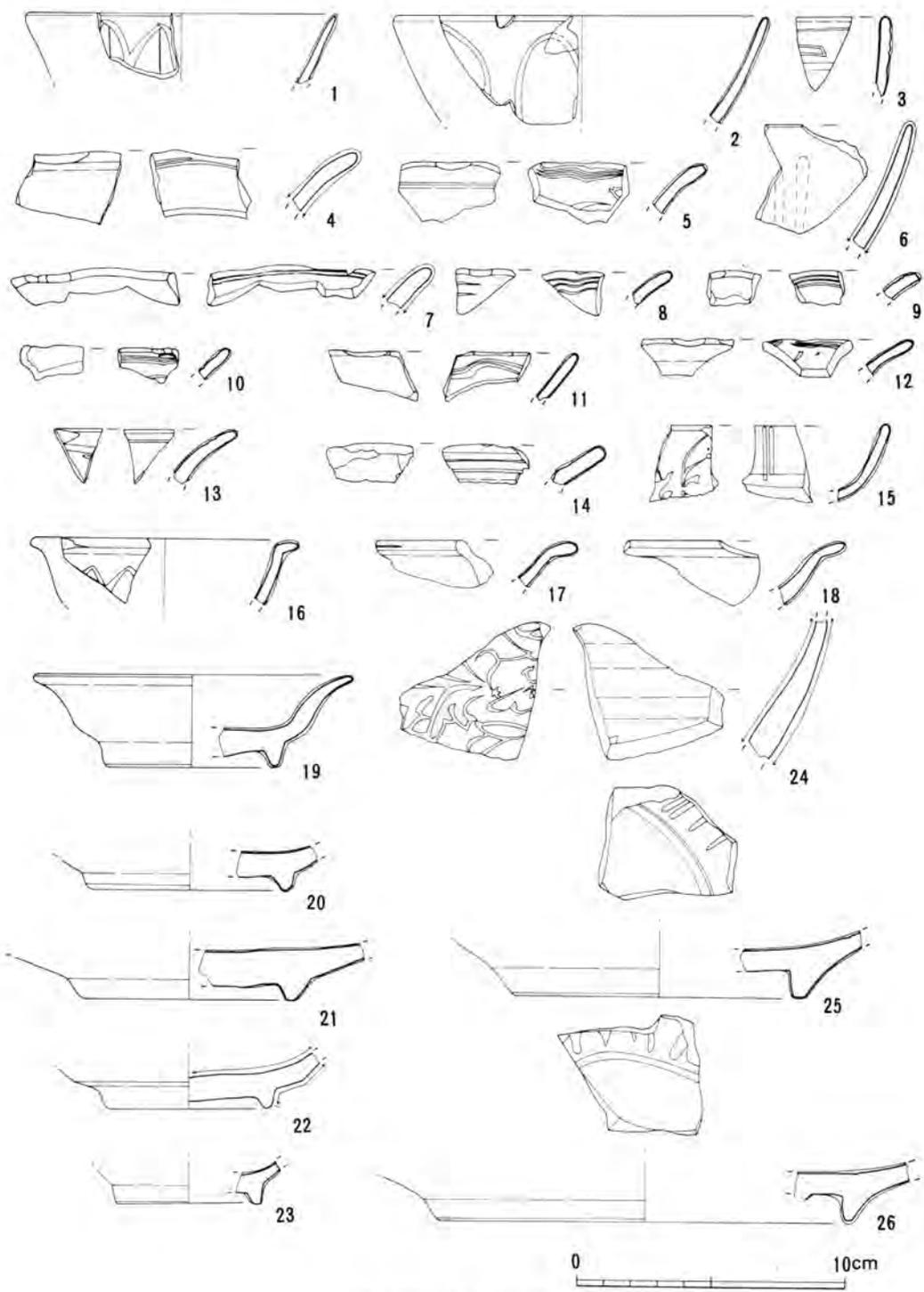
盤は第 14 図 24・25・第 18 図 2・4・10・11 で口唇の先端が逆 L 字状に立つ有鏝縁のもので、第 14 図 24 の底部からみると線彫りの蓮弁文が施されているものもある。

瓶は第 14 図 20 の外器面に線彫りによる牡丹文を施す大型のもの、第 15 図 19・第 18 図 9 の小ぶりのものがある。

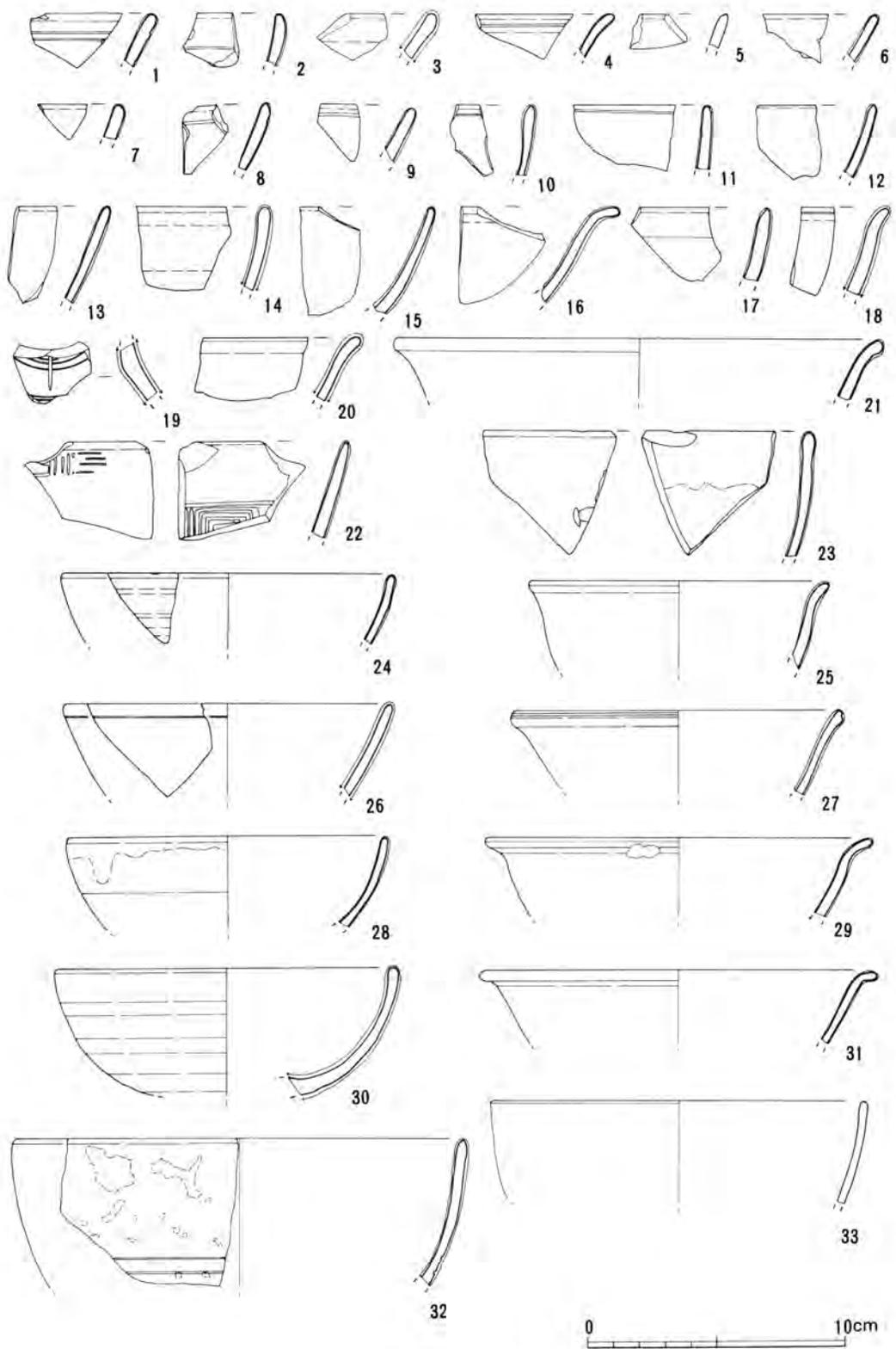
2. 白磁

白磁は総数 63 点の出土であるが、図上復元可能なものは 2 点である。器種をみると碗、皿、壺がある。

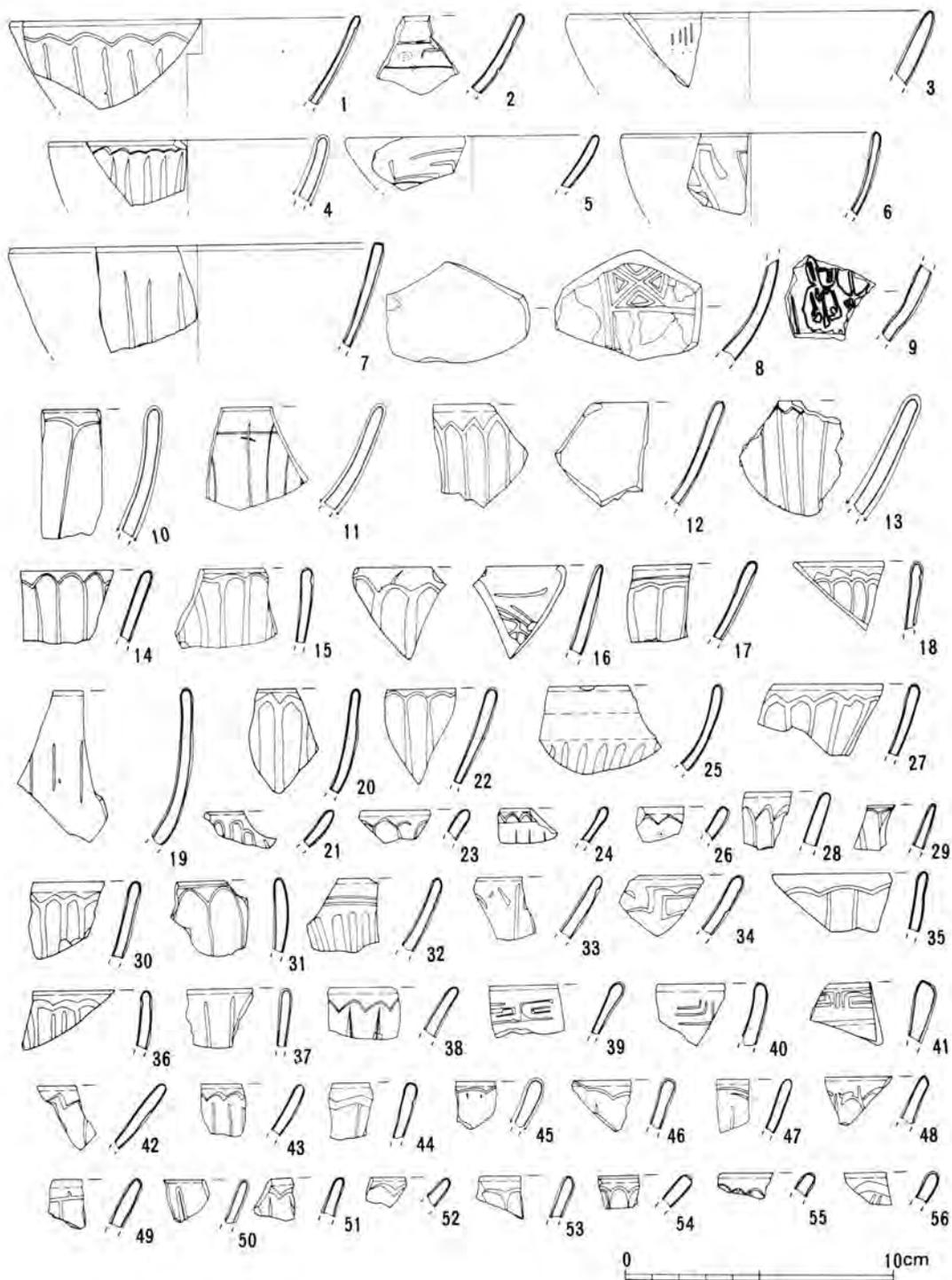
碗は第 19 図 1・3・4・6・10~11・13・15・20~22・25・27・29~37・第 20 図 10・12・14・16~24 があたる。第 19 図 1・3~5・11 のように口縁部が弱く外側に反るものや、同図 8 のように胴部に圈線をもち口縁部が弱く外側に反るもの、同図 12 のように器壁がやや厚く、口縁部が舌状に尖るもの、第 20 図 4 のように口剥げなどがある。



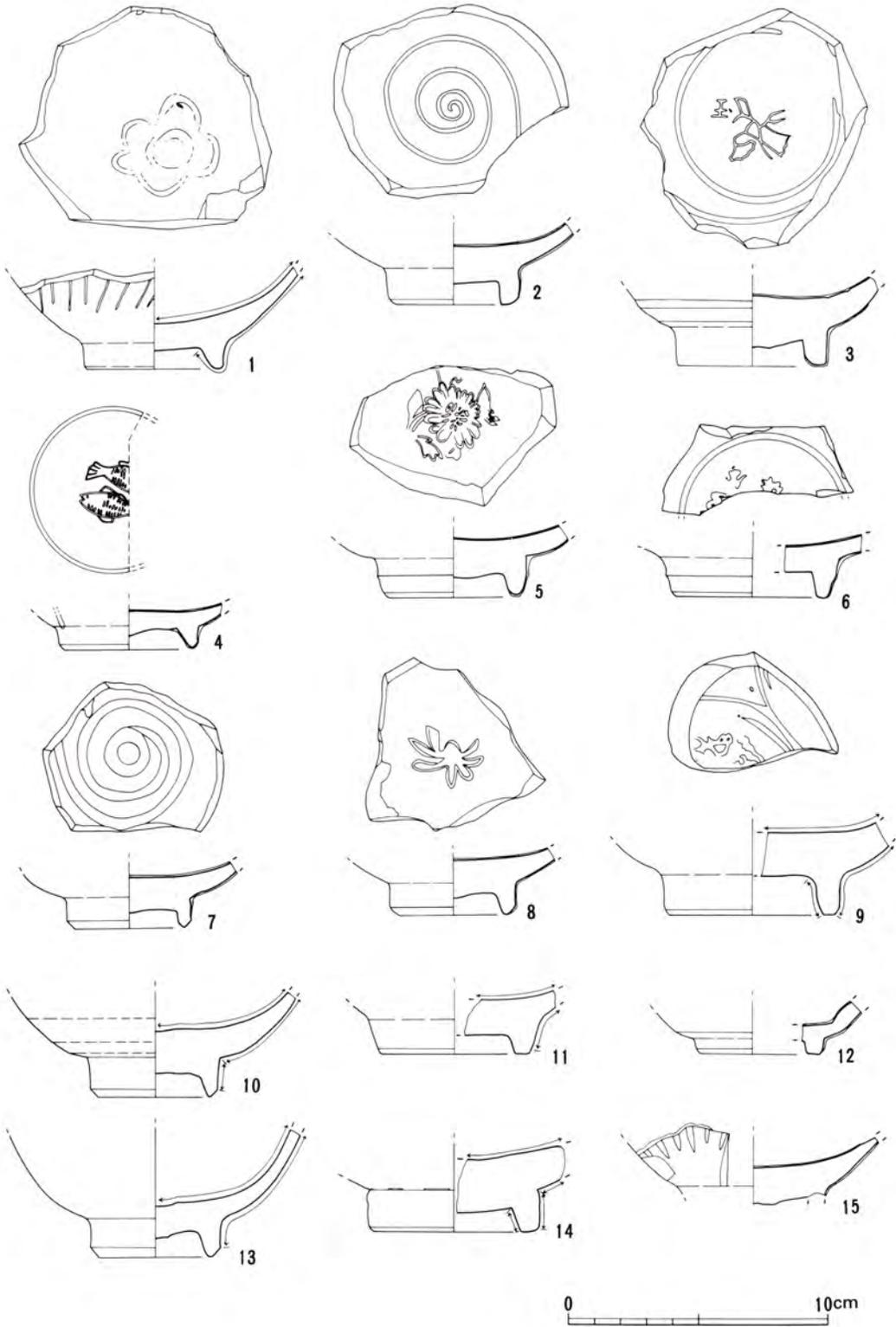
第14图 青磁实测图



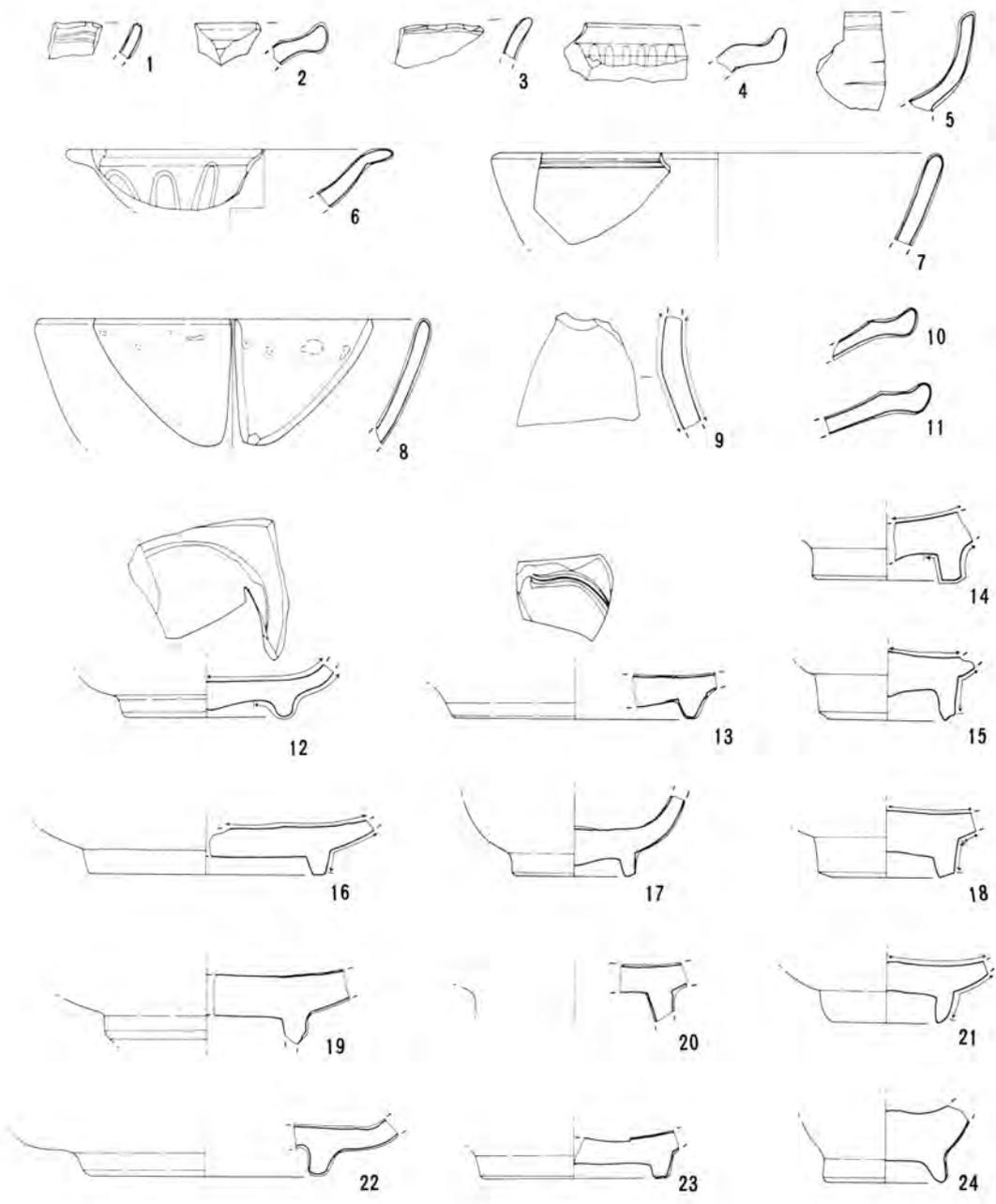
第15图 青磁实测图



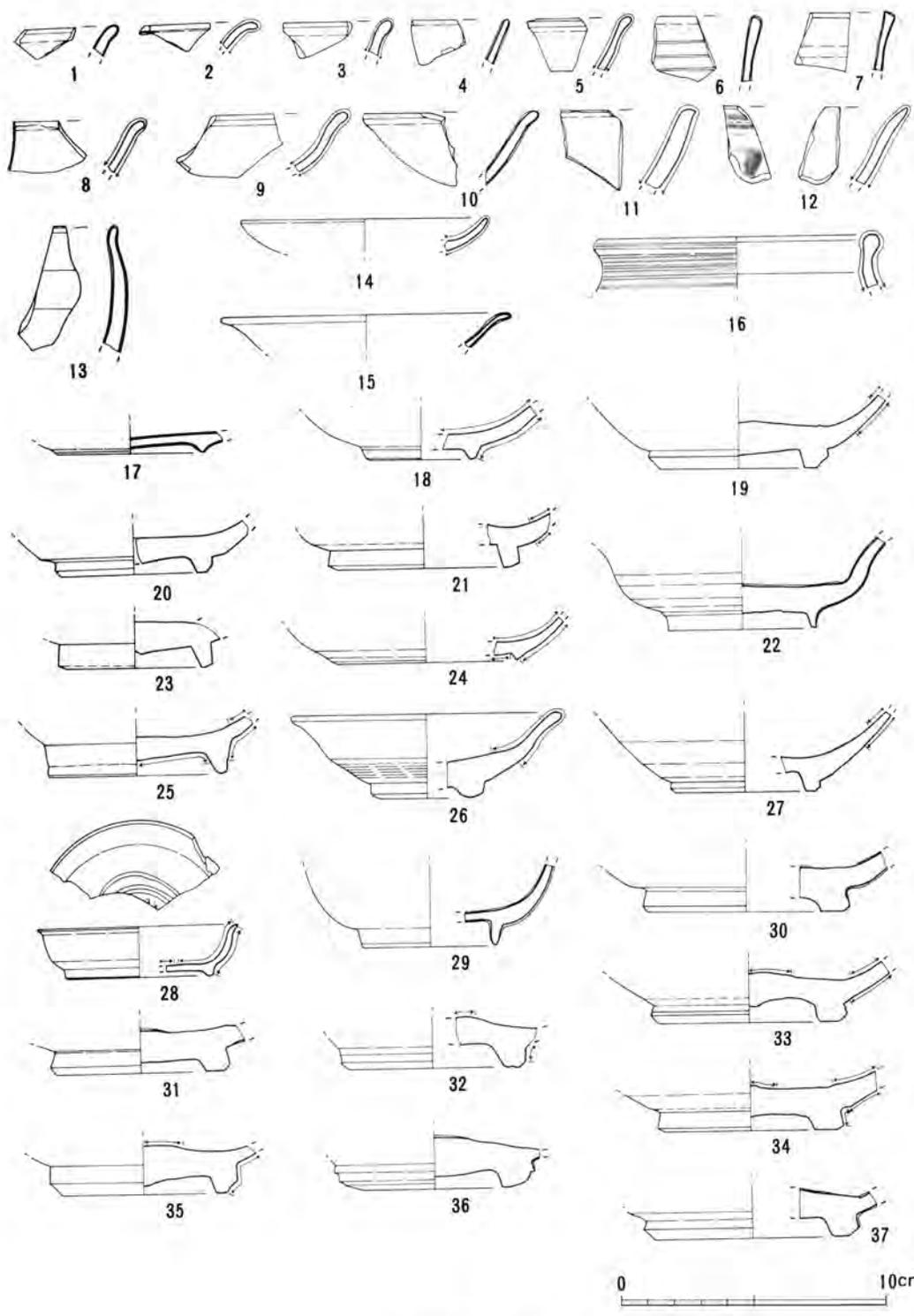
第16图 青磁实测图



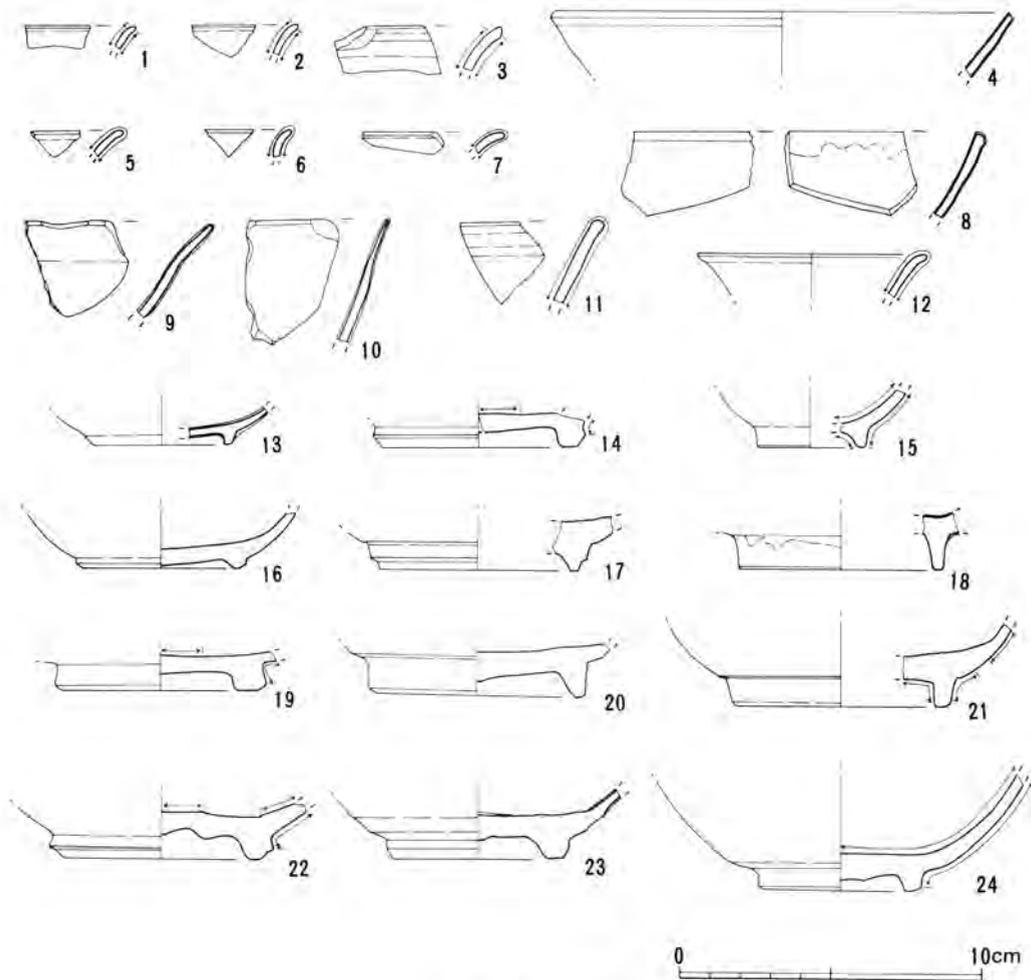
第17图 青磁实测图



第18图 青磁



第19图 白磁



第20図 白磁

皿は第19図9・10・15～17・20・26・28・29・第20図9・15があたる。第19図15などのように高台が低いものや、第20図9のように口縁部が稜花状になるものがある。

壺は第19図14の1例だけで、口縁部が丸く肥厚するものである。

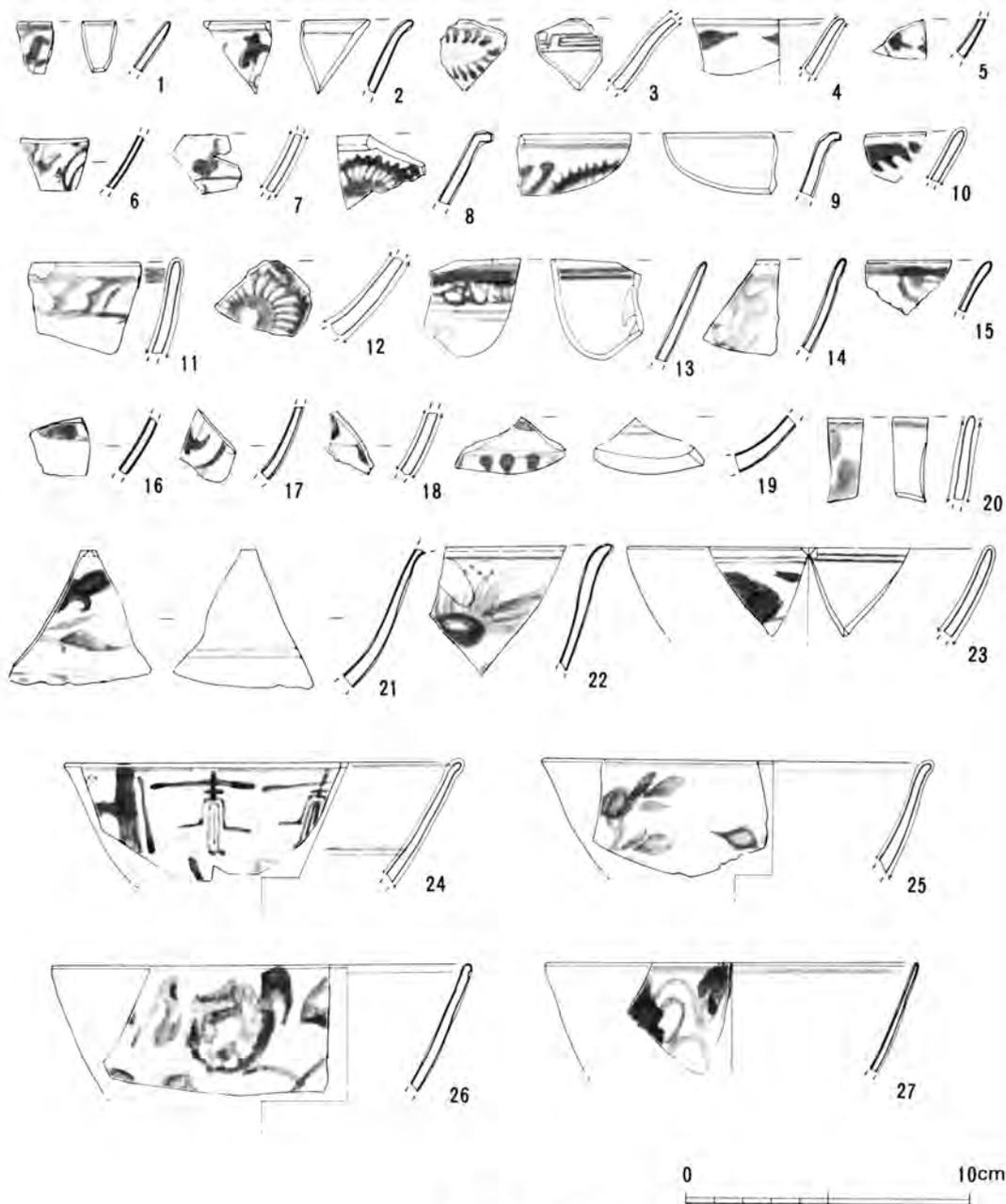
3. 染付

染付の出土総数は458点で、図上復元の可能な資料は2点あった。器種別にみると碗、皿、蓋、瓶、合子がある。

碗は第21図1～7・9～12・14・16～24・29・31・第22図・第23図2・5～7・9・12・17・27・29・30・32～34・第24図3・5～12・15・18・20～26・30・31・33・第25図3・6～9・22・第26図・第27図である。第21図1～7・9～12・14・16～24のように15世紀後半～16世紀中葉のものには蓮花唐草文や雷文帯の下に唐草文が施されているも



第21図 染付



第22図 染付

のなどがある。

皿は第21図8・15・28・32・33・第23図4・8・19・20・第24図14・第25図2・10・14・21である。第21図8のように15世紀後半～16世紀中葉のものには蓮花唐草文が施されている。

蓋は第 21 図 26 の 1 例のみである。口径 5 cm を計る小物の蓋で、やや厚い作りである。上面の周辺には 2 条の圏線をめぐらし、その中には渦巻文が施されている。

瓶は第 21 図 13・25 の 2 例のみである。いずれも胴部片あり、外器面には唐草文を施している。

合子は第 25 図 13 の 1 例のみである。口縁部は露胎で、上面に 2 条、側面に 1 条の圏線をもつ。

4. 有田焼

有田焼は染付の一グループであるが、産地が特定できるということで項を設けた。総数 72 点であるが、図上復元可能な資料は 1 点である。器種別にみると碗、茶碗、皿、瓶がある。

碗は第 28 図 1～17・21～24・第 29 図 2・3・10、茶碗は第 28 図 13、皿は第 28 図 36・37・第 29 図 4、瓶は第 28 図 13～17・第 29 図 1・5・6 である。

第 28 図 31・32・第 29 図 8～30 は佐賀県嬉野内の山焼きの陶器である。陶器の部類に配置すべきだが、今回は肥前の焼き物と言う事で、ここで取り扱うこととした。

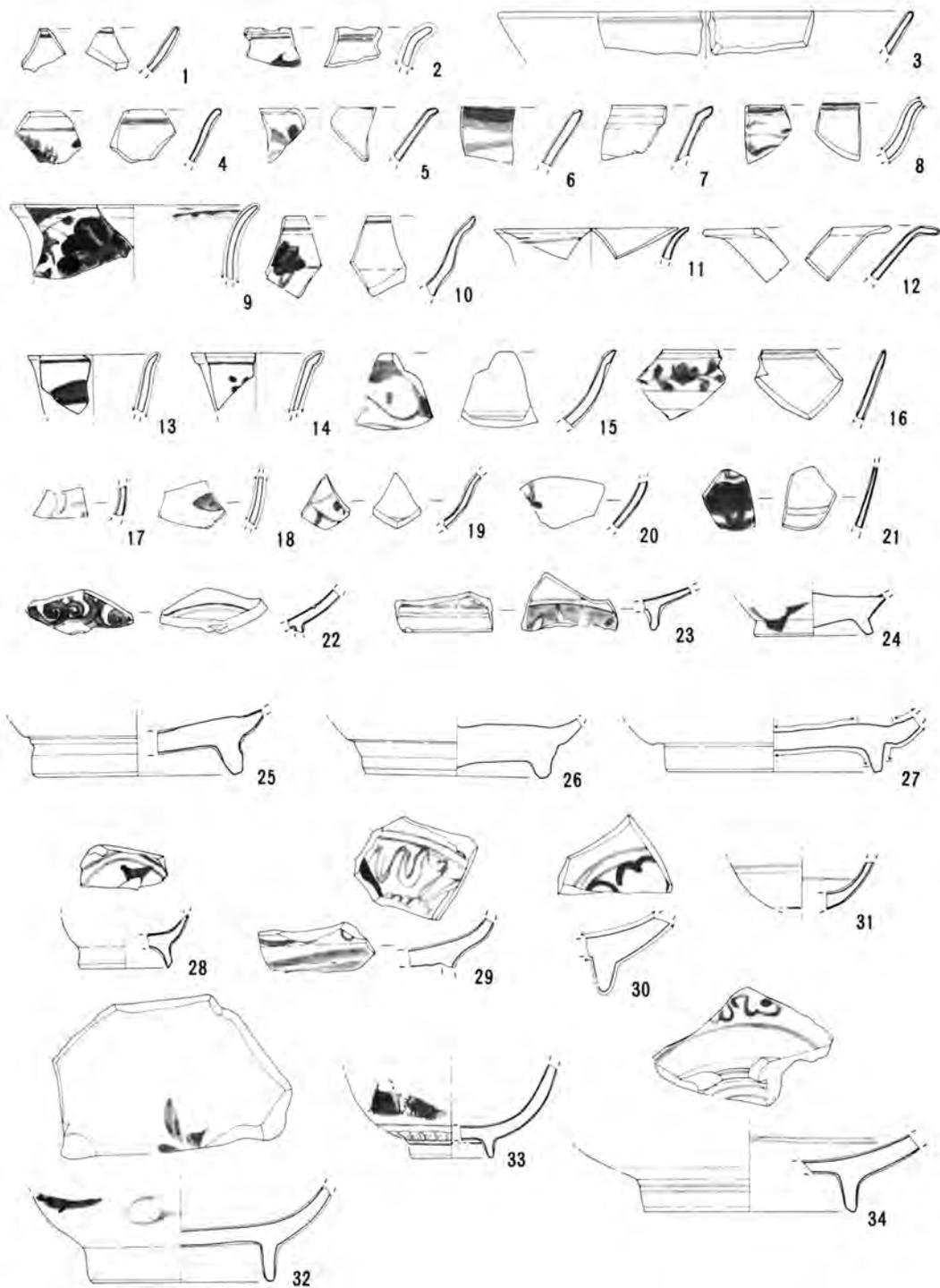
5. 現代磁器

明治時代から大正、昭和にかけての磁器をここに集めた。器種は碗、茶碗、杯、瓶、小皿がある。碗は第 30 図 2・5・6・7・10・15、茶碗は同図 1・2・4・12・14～20・26・27、杯は 4・11・21～25、瓶は同図 30、小皿は同図 31 である。これらの文様はいずれも銅版転写、ゴムスタンプ、スクリーンによる転写文様であるが、中には同図 32 のように赤絵で梅を描き、高台内に“薩摩”と銘記した白薩摩もある。

6. 砥部焼

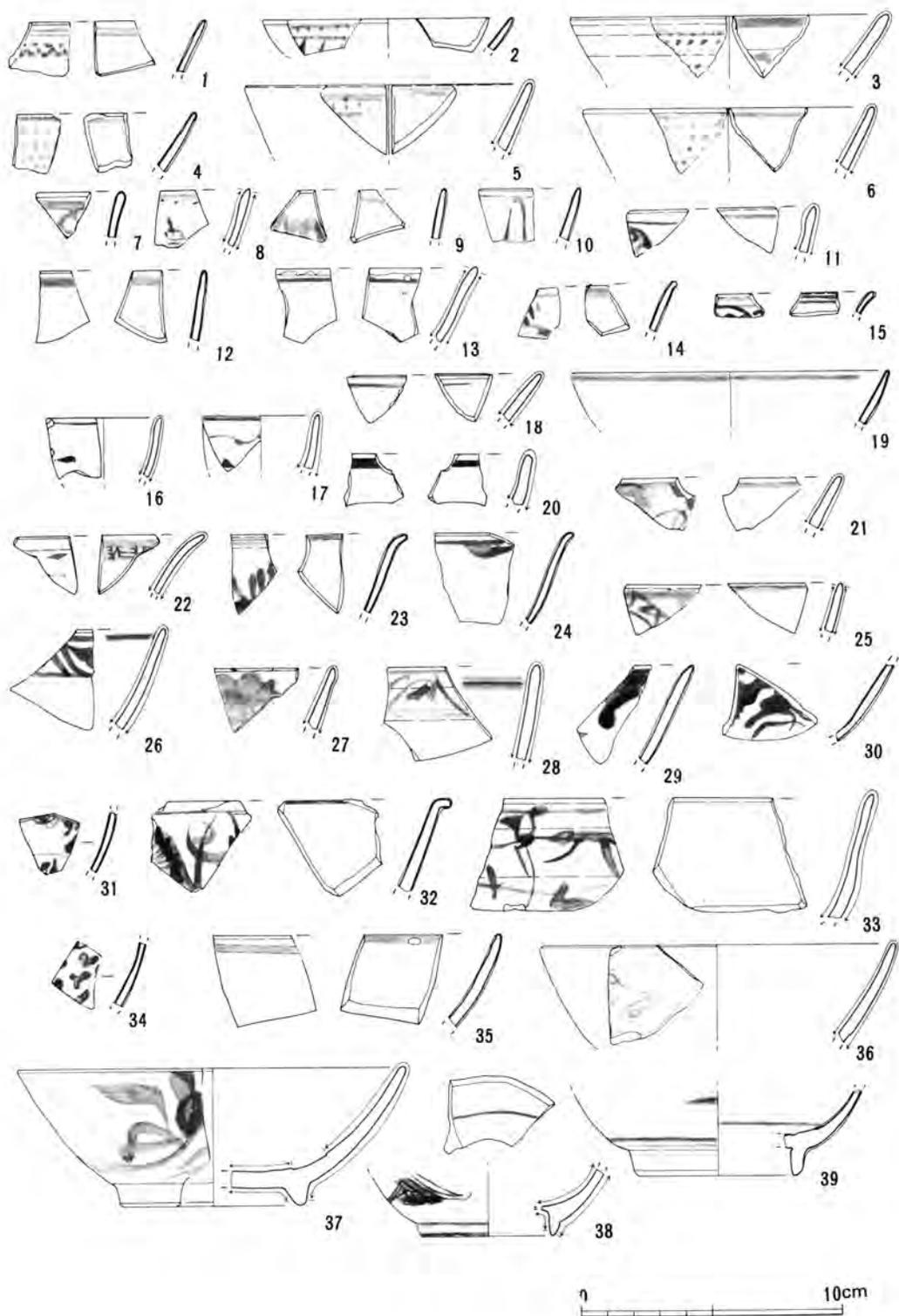
これまでスncanマカイと総称されてきた現代の磁器で、コバルト釉を用いスタンプ技法で施釉するものである。近年、愛媛県伊予郡の砥部焼、梅山窯との所在が特定できたものである。

容器の種類は第 24 図 1～4 の碗と同図 6・7 の皿の器種がみられる。碗の文様は水玉による菱形の構成をおこない、その間の空白部分に花卉状の花文を施すものと、松竹梅の図柄をあしらったものがある。皿は松竹梅の図柄を用いている。いずれも内底に重ね焼きの素台の脚跡を 5 箇所残す。

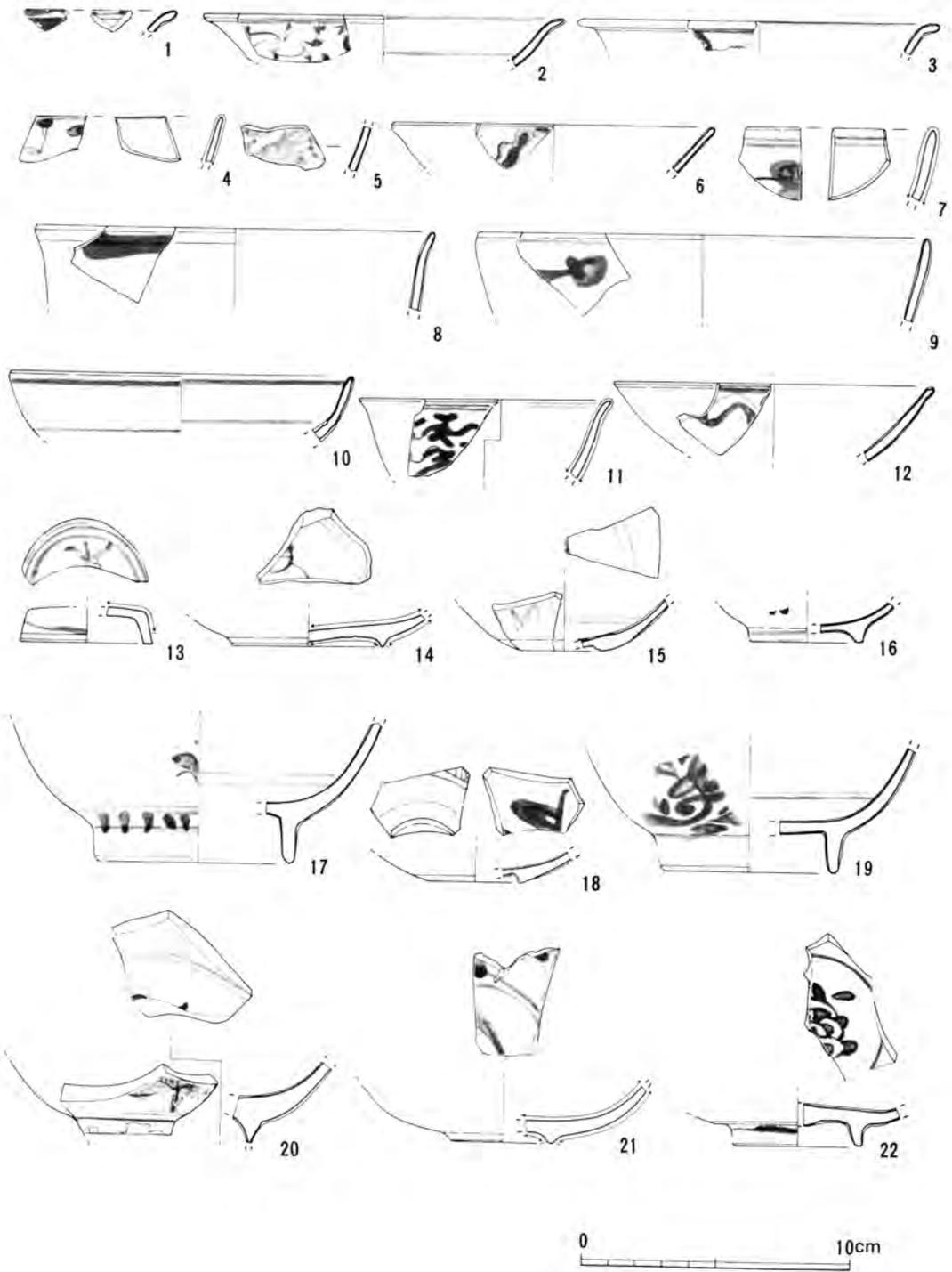


0 10cm

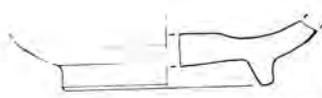
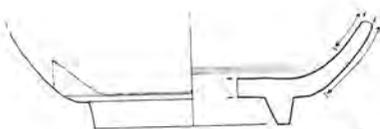
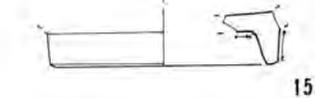
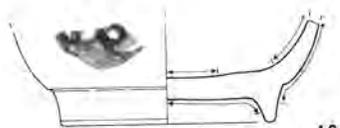
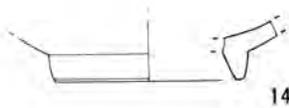
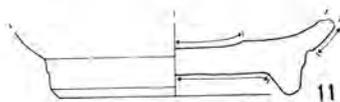
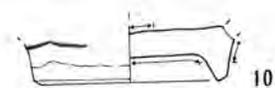
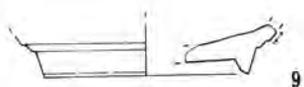
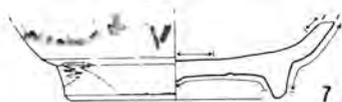
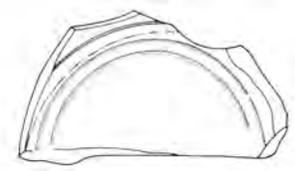
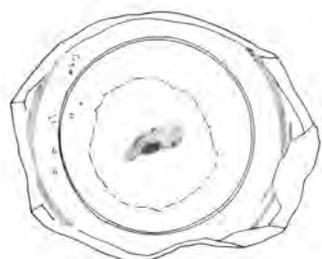
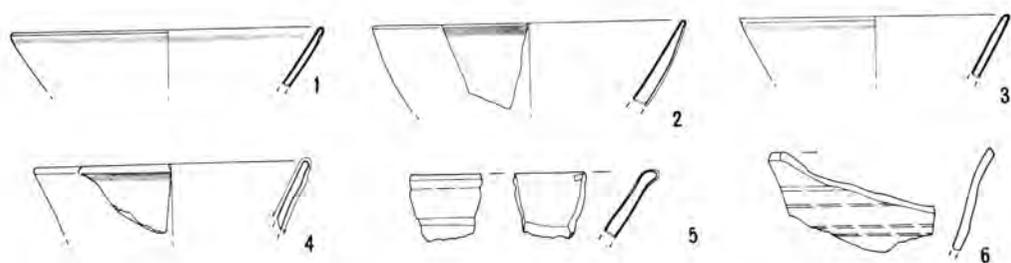
第23图 染付



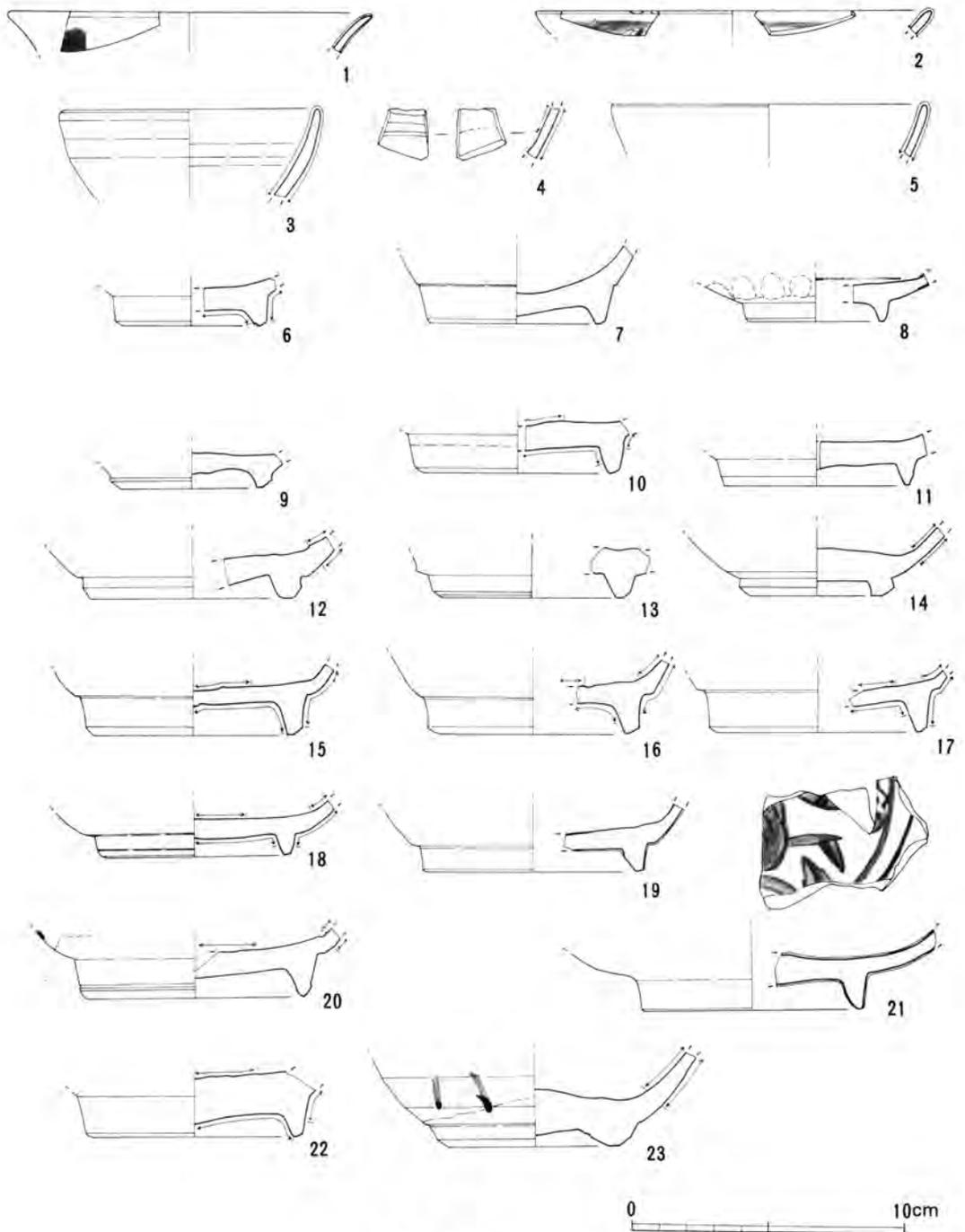
第24图 染付(中国)



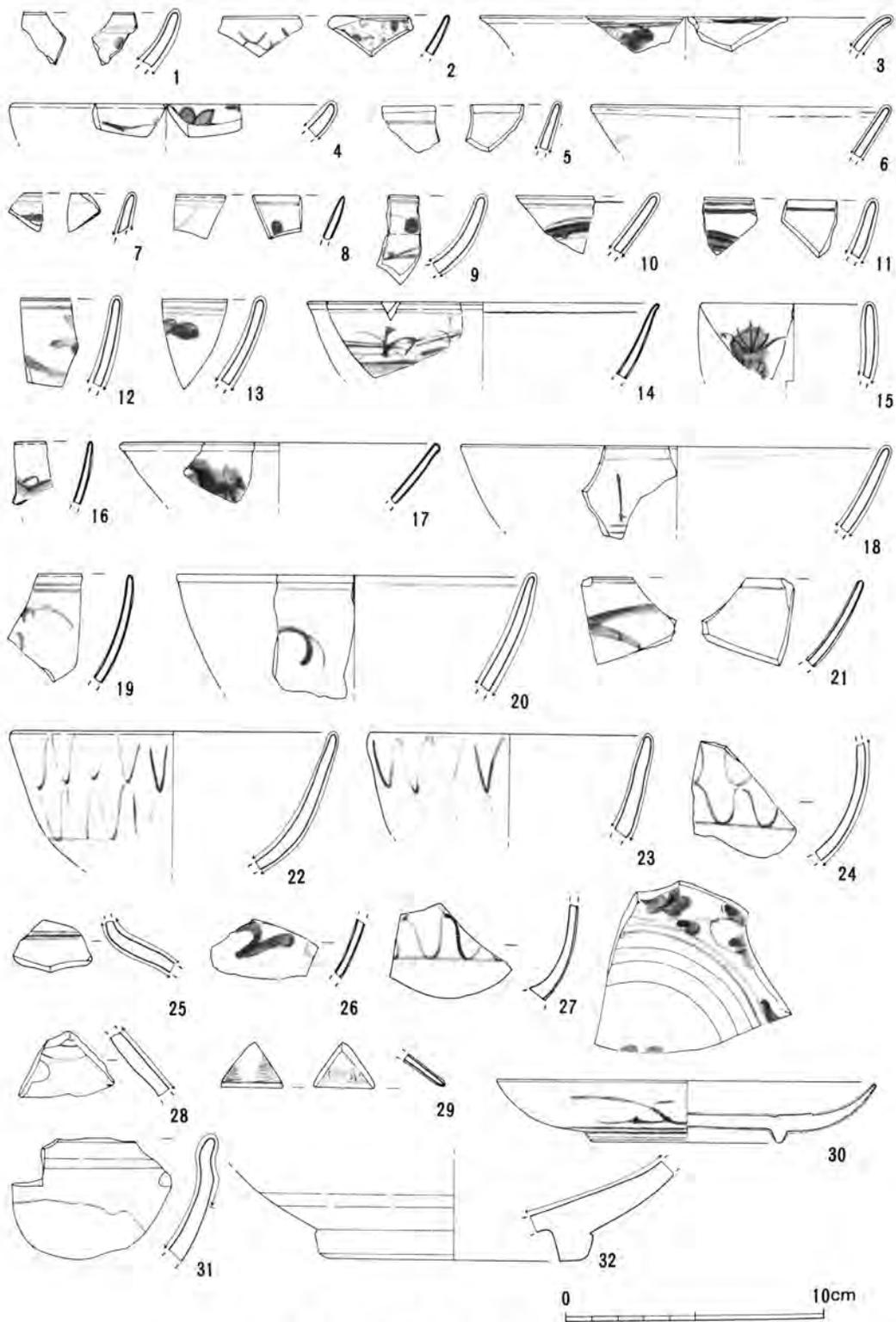
第25图 染付 (中国)



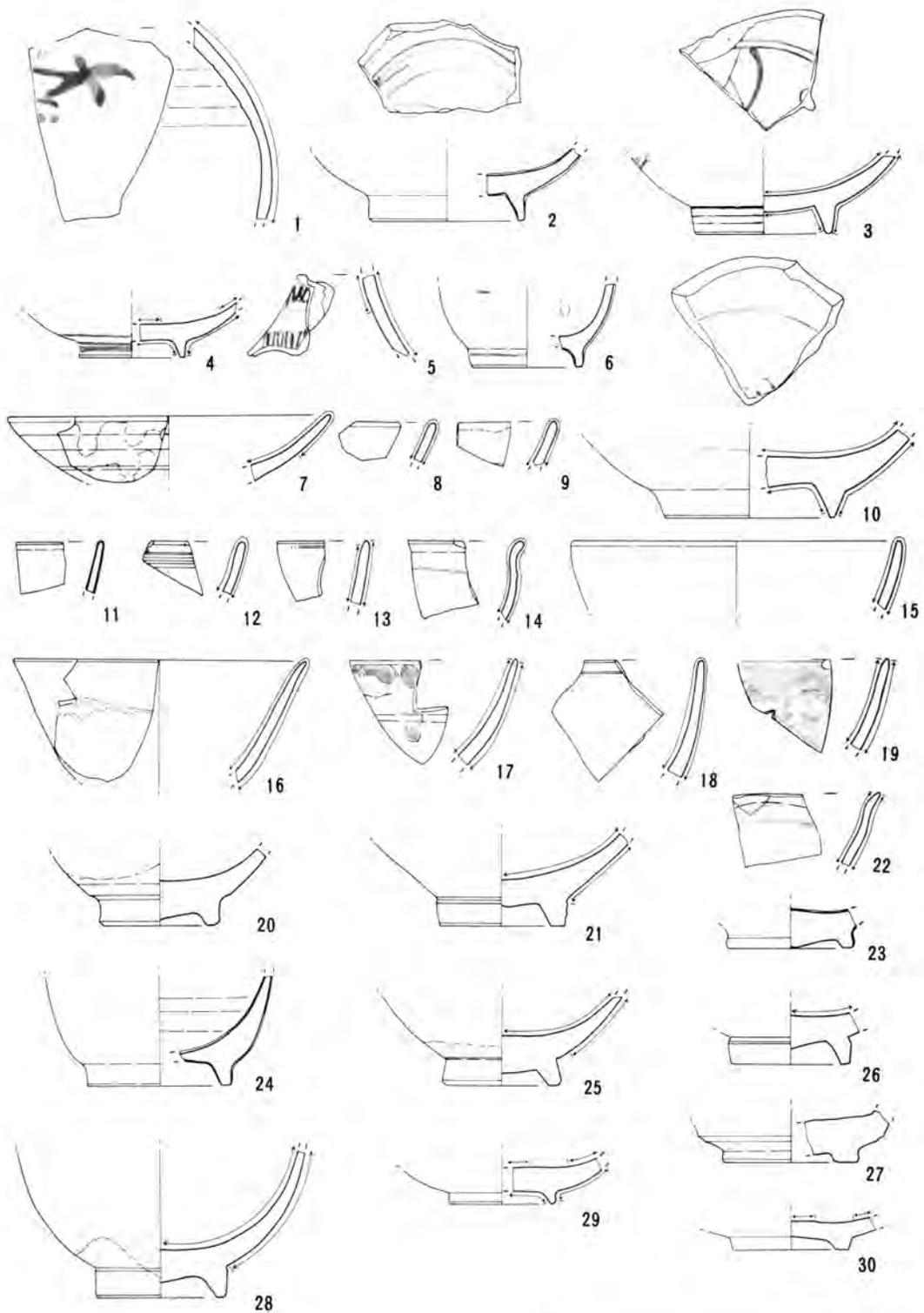
第26图 染付 (中国)



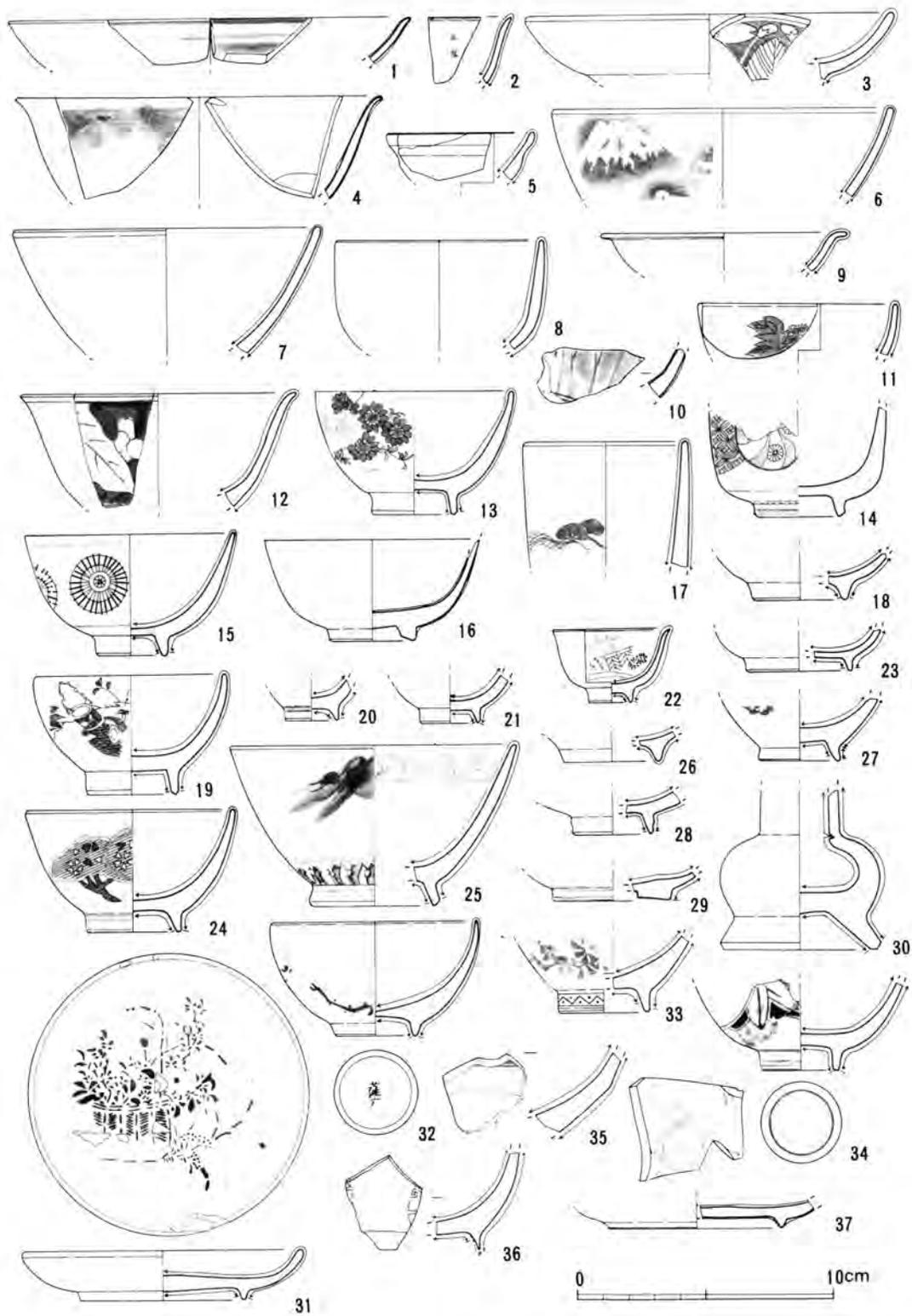
第27图 染付 (中国)



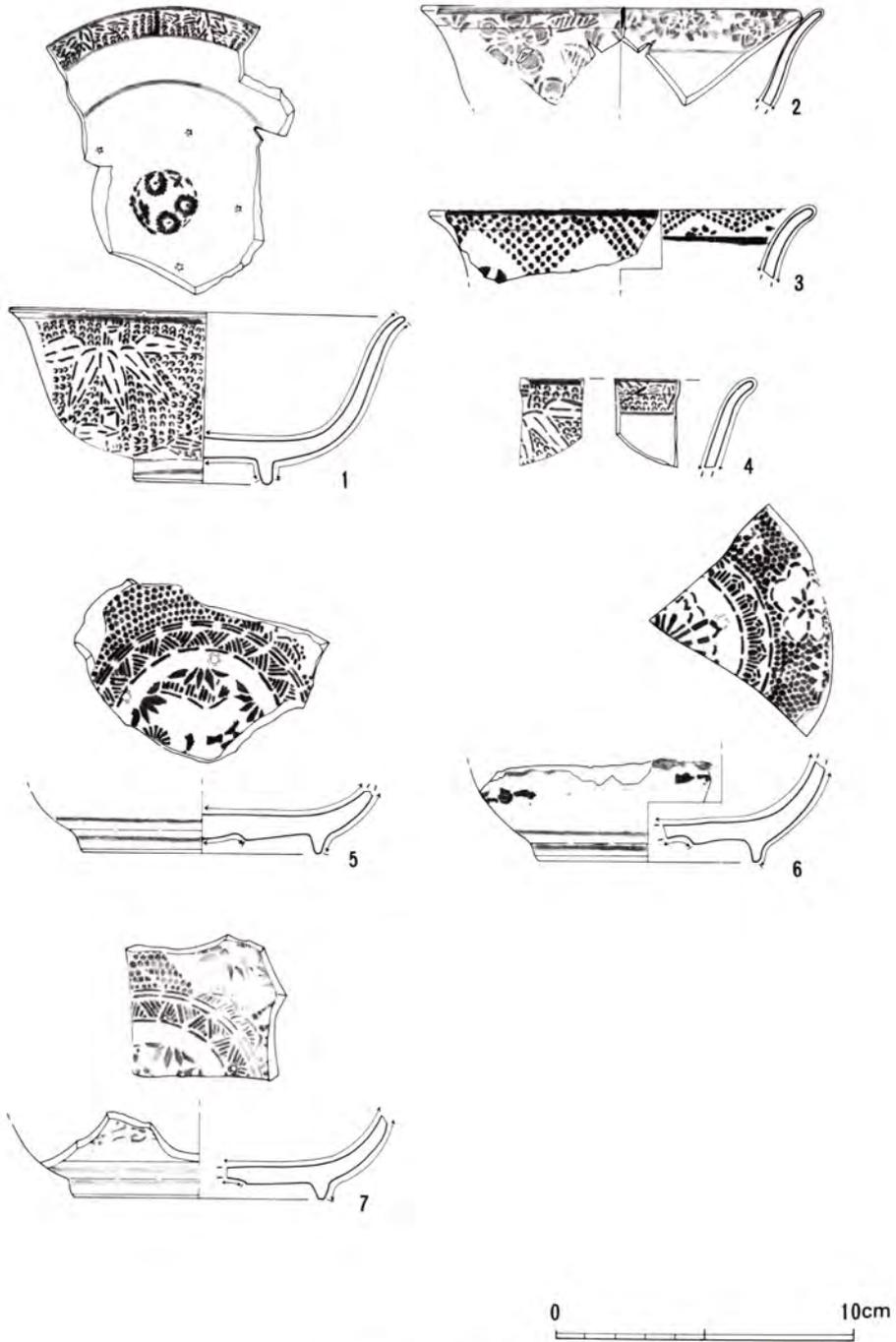
第28図 有田・伊万里・肥前焼



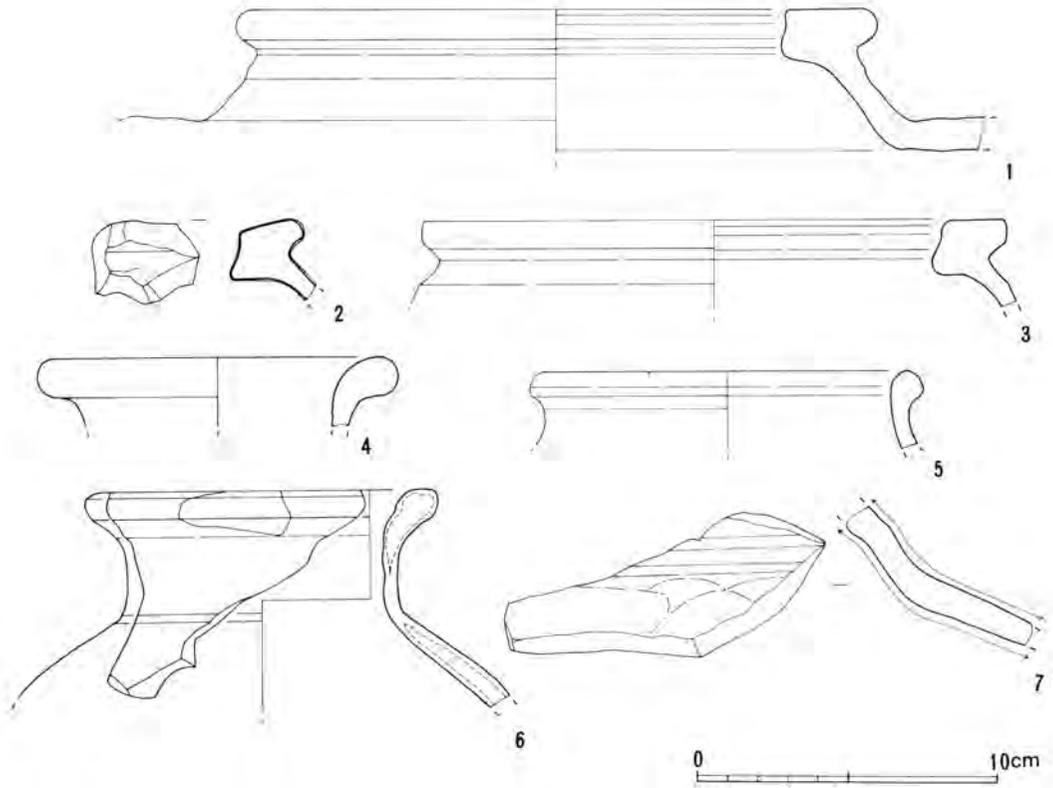
第29図 有田・伊万里・肥前焼



第30図 現代磁器



第31图 砥部烧



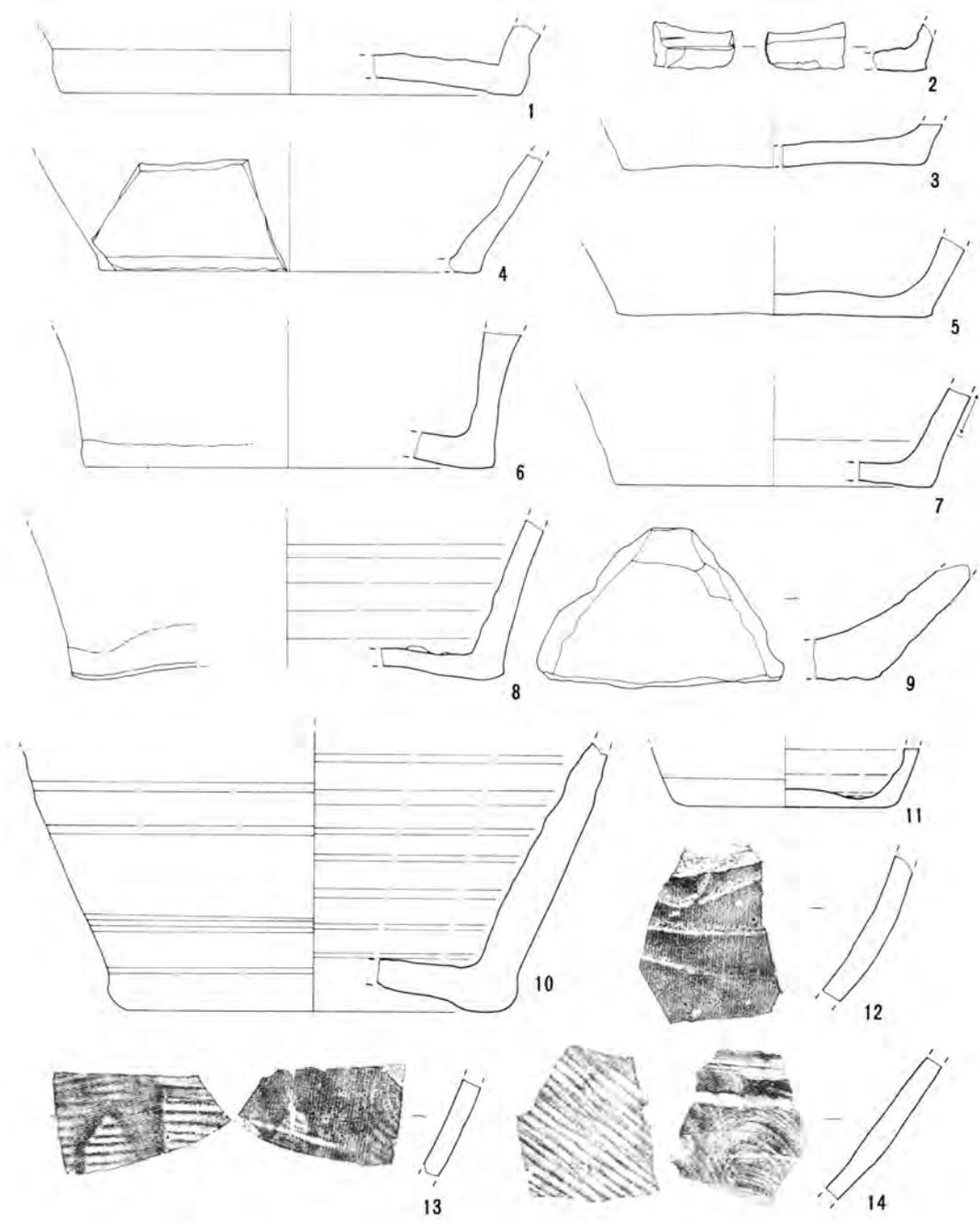
第32図 南蛮

二. 陶器

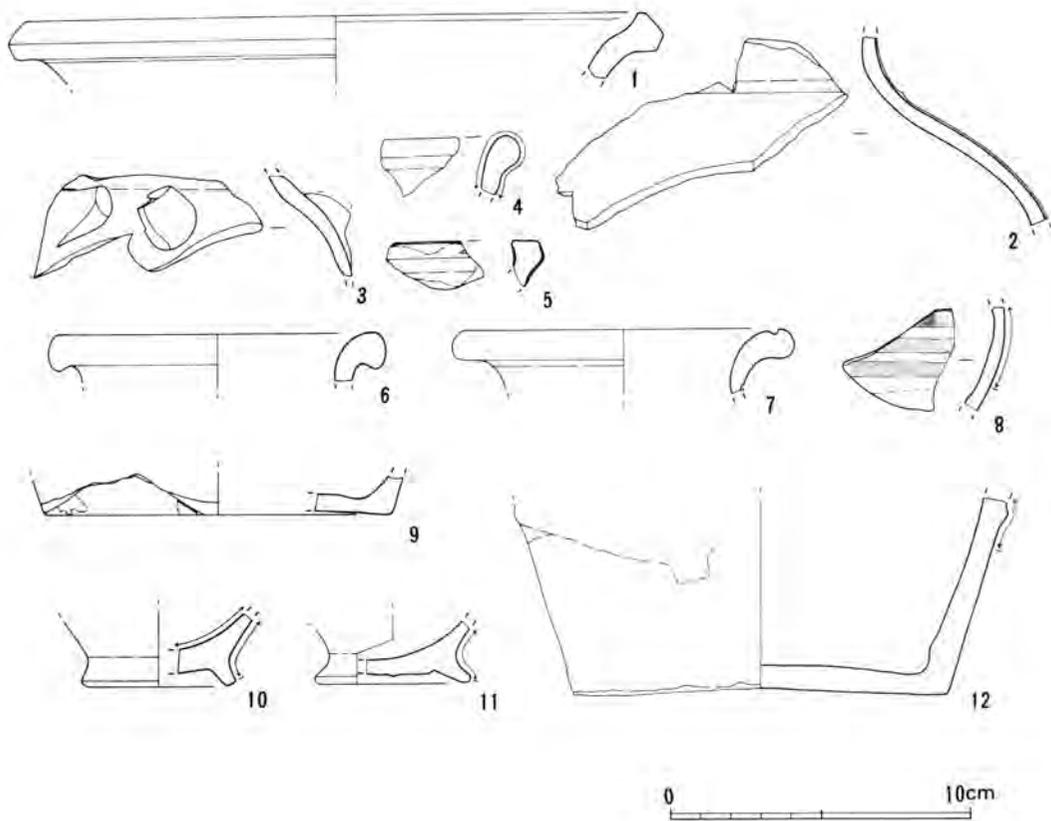
1. 南蛮

褐釉の陶器であるが産地が特定できるので、他の褐釉陶器と区別する意味で分けた。

南蛮焼の総数は469点で、図上復元可能なものはなかった。口縁部が20cm前後を計る大型の壺（第32図1～3）と、11cm前後の中型の壺（同図4～6）に分けることができる。大型の口縁部は分厚く方形状に形成するのに対し、小型のものは円形状に膨らみシンプルである。底部も第33図1・10の大型と、同図3～6・11の中型に分けることができる。胎土は淡褐色や小豆色を呈し、淡黒色や白色鑛物を含むが重量感はない。特に第32図6と第33図3・5のように白色鑛物が溶解し、水飴状に幾重にもスジをなす特徴がみられる。中型の壺にわりとみられる南蛮焼の特徴でもある。第33図12は褐釉を内外面ともに、やや厚めに施した肩部の資料で、施釉の後ヘラによるゆるい曲線が描かれている。内面には成形時のタタキ面をのこす。スニコロクの可能性のあるものである。



第33图 南蛮



第34図 タイ焼

2. タイ焼

褐釉の陶器で窯が明らかになっているので、いわゆる南蛮焼と区別して、項を分けた。タイ焼の総数は12点で、図上復元可能なものはなかった。中型で小豆色をした胎土の壺（第34図1～7・9・11）と淡褐色や白色の胎土をもつ袋物（第34図8・10・11）に分けることができる。

中型の壺は口径から同図1の20.5cm、同図6・7の10.5cmと10.2cmの二種に分けることができる。これらはいずれも薄く褐釉が施されるが、同図2のように厚く釉が施され黒褐色を呈するものもある。同図3は肩部に横位の把手をもつものである。

袋物は高台が“ハ”の字状に開く形状をもつ。胎土は灰白色で褐色や黒色鑛物を含むもの（同図10）と、淡褐色で黒色鑛物を含むもの（同図11）がある。同図10は外器面の胴部と高台に界線状の褐釉が施され、その上から灰釉が内外面に施されている。同図11は高台の一部分に褐釉の流れがみられるが、くすんでいる。

3. 陶器

いわゆる沖縄在地の陶器で、施釉陶器（上焼）と無釉陶器（荒焼）に大別されるが、ここで扱ったのは褐色の胎土を用いたものを主に用い、灰釉を施釉したものもそれに含めた。また、それらの中には施釉の有無が確認できない自然釉のものも含めた。

褐色陶器の器種は大型壺、中型壺、小型壺、瓶、手洗鉢、火置鉢、急須、碗などがある。大型壺は第35図・第36図1～4・第38図1、中型壺は第36図5・6・第37図・第38図2～4、小型壺は第40図・第41図・、瓶は第42図、手洗鉢は第43図、火置鉢は第44図・第45図1～3、急須は第45図5、碗は第45図6・8・10・11・13がある。

これらの資料は胎土・焼成をみると、大きく2つに別けることができる。1つ目は焼成の焼き締めがよく暗褐色を呈し、重量感がある。胎土には石英の粒をわりと含み、中には白色鉱物が溶解をなし、水飴状のスジをもつものがある。これは喜名焼と考えられる。2つ目には外器面は暗褐色をなすが、胎土内部は明褐色を呈し、重量感のないものである。これはいわゆる壺屋焼と考えられるものである。

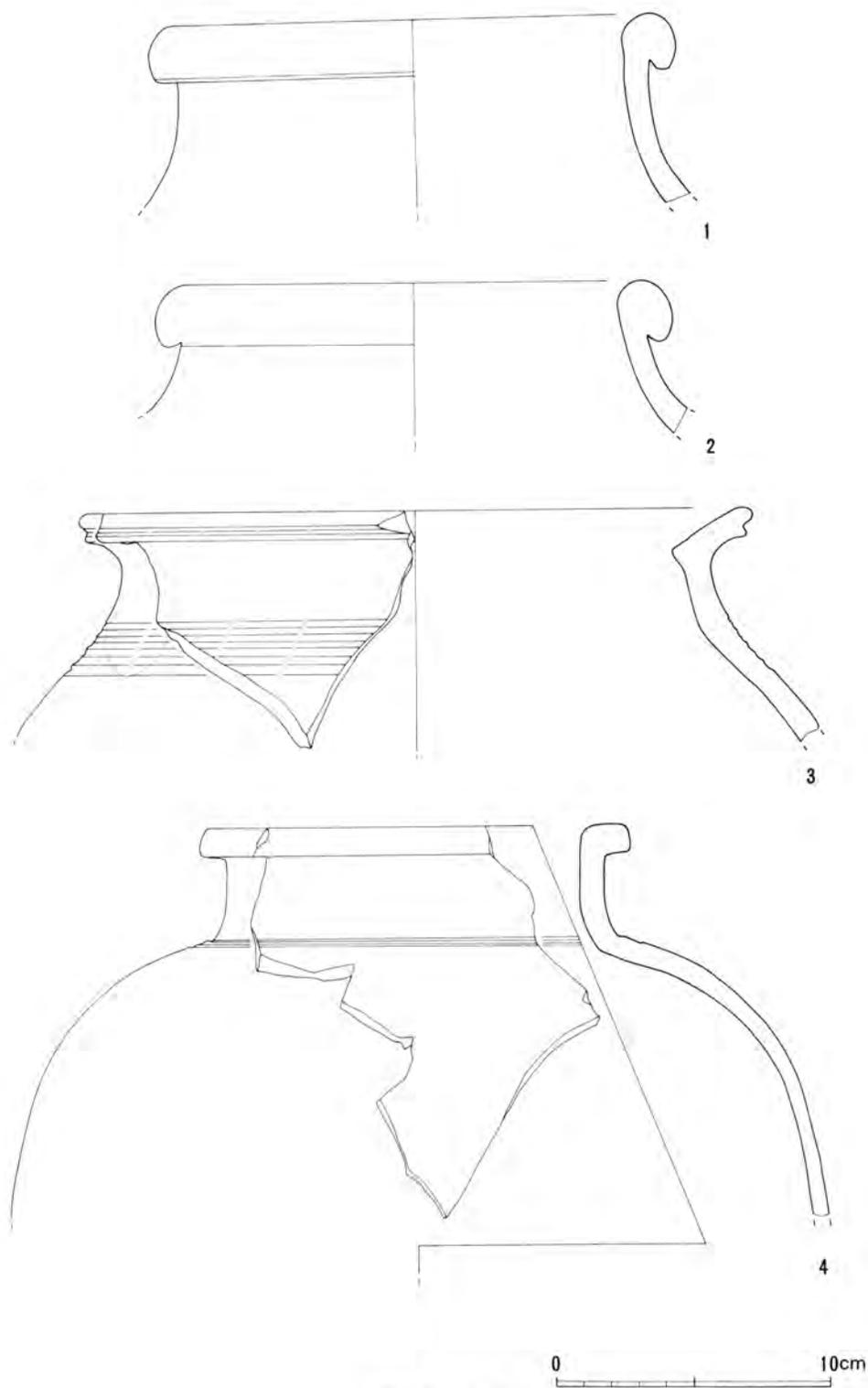
大型壺の喜名焼は第35図1・2・4、第36図1～4、第38図があたる。それらの中でも第36図4は肩部の破片で、外器面に横位の把手をもつもので、内器面に青海波文のタタキをもつものである。胎土には白色鉱物が溶解をなし水飴状のスジをもつものである。類例の資料を待ちたい。第38図3は胴部下半部のもので、立ち上がり丸みをもつものである。その下半部から底部にかけて、横位に幅3.5cmのへらによる削りの痕跡を残す。一見、タタキを想起するものである。胎土には白色鉱物の溶解がみられるものである。

中型壺の喜名焼は第40図1・3・6・10・12、第41図1・4・6・7・10があたる。口縁部の形態は方形をなすもの（第40図1・3）と、丸みをもって肥厚するもの（同図6・10）がある。後者はいずれも内外面ともに焼成後の光沢がみられる。

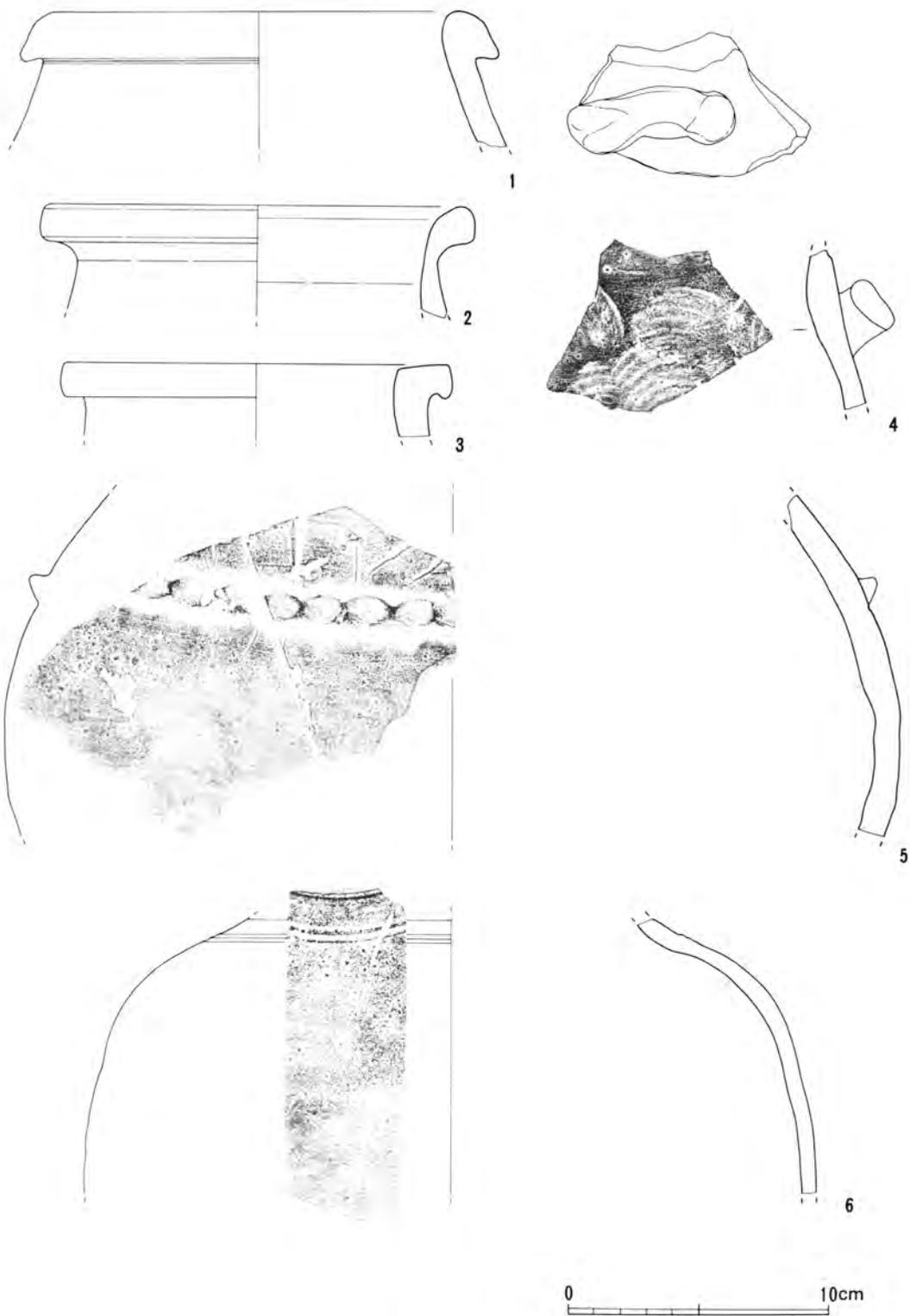
瓶の喜名焼は第42図1・3・6・17・19である。同図6・19の胎土には白色鉱物の溶解がみられるものである。同図17の瓶は底面に高台をもつものである。

手洗鉢の喜名焼は第43図2・4があたる。同図1は胴部から直線的に開き口縁部に最大径をもち、さらに口縁部が逆“L”字状に開くものである。それ以外のものは球形に頸部で細まり、平たく丸みのある口唇部をもつもので、口唇部と肩部に数条を単位とする波状の文様を施すもの（同図3・6・7）と無文のもの（同図2・4・5）がある。

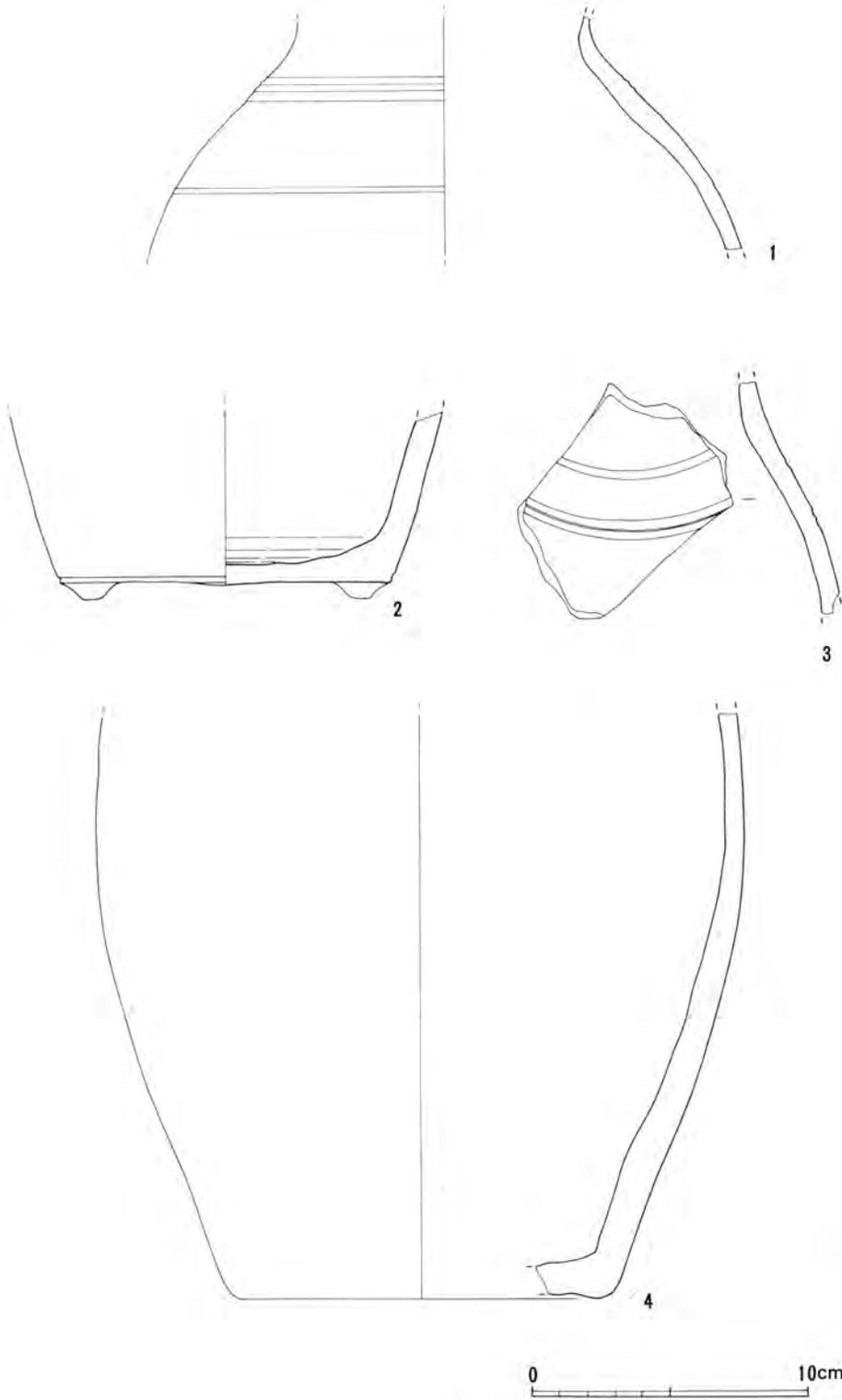
火置鉢は口径10cm前後、高さ約10cmの円筒状の容器でタバコの残り火を落とすために用いたものいわれるものである。喜名焼は第44図2・4・5～12があたる。肩部は逆“L”字状に折れ、口縁部は山形状をなす形状でカットされている。底面には3つの脚が張り付けられている。第45図1・2も同種の容器であるが、いずれも口縁部近くに方形



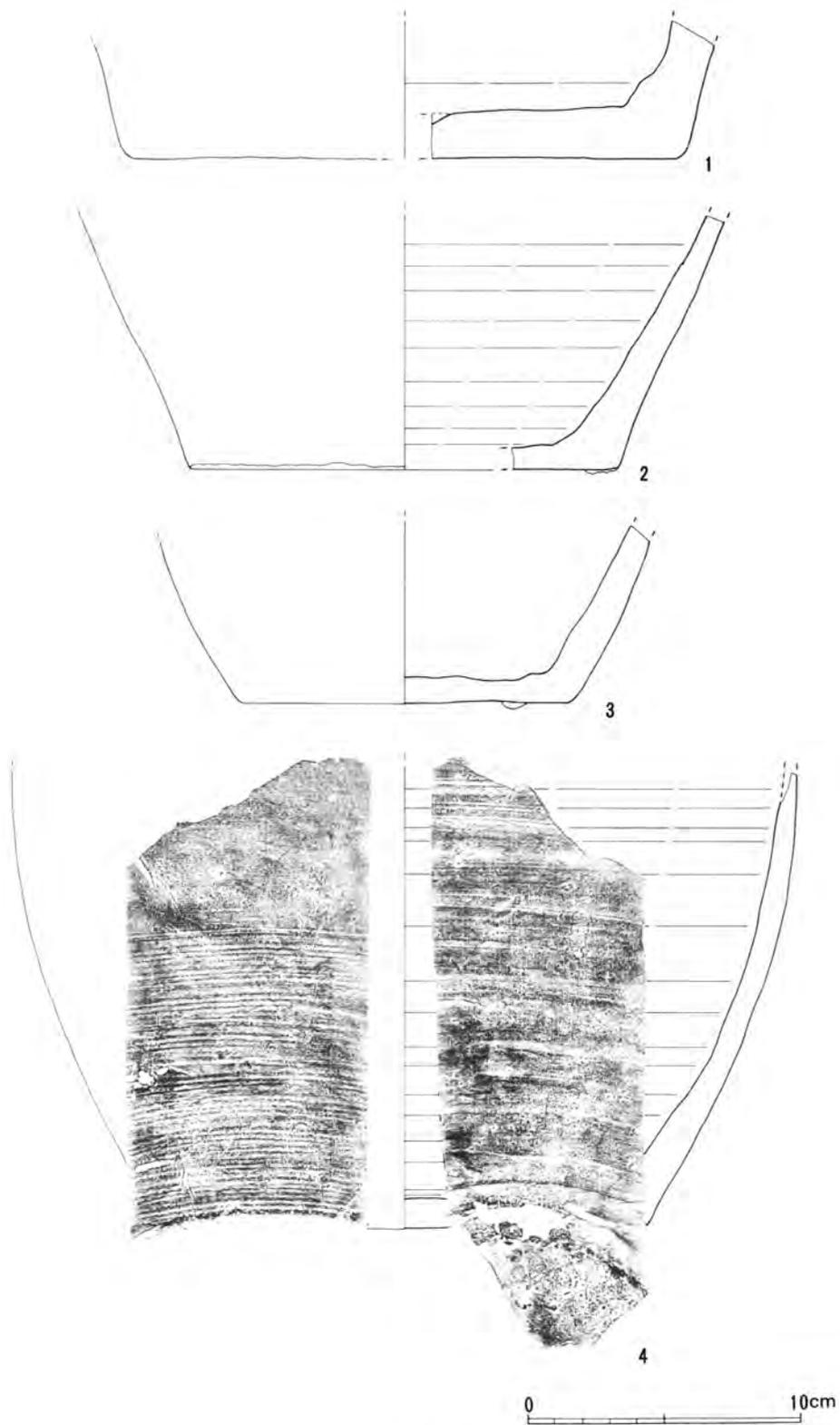
第35图 陶器



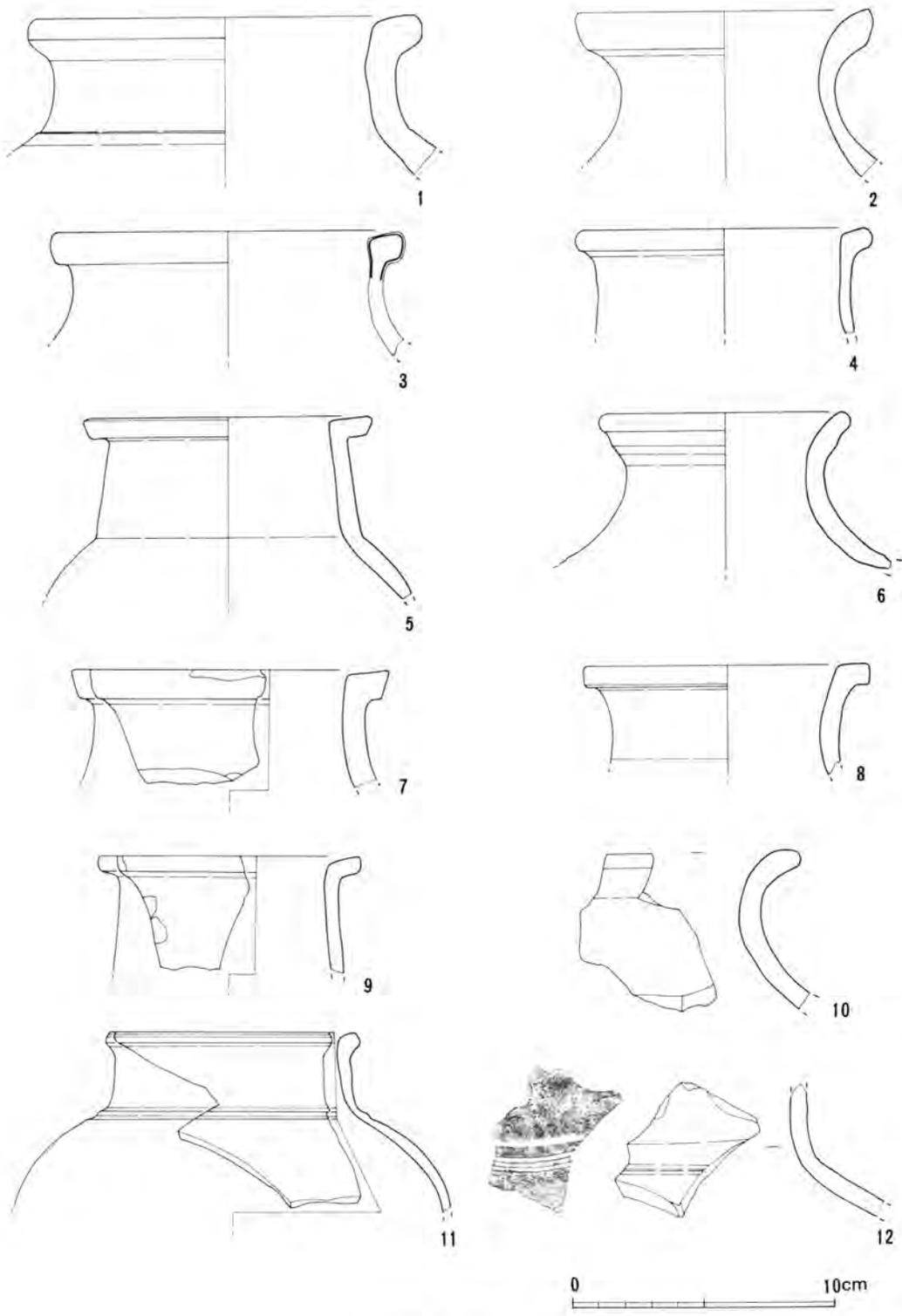
第36图 陶器



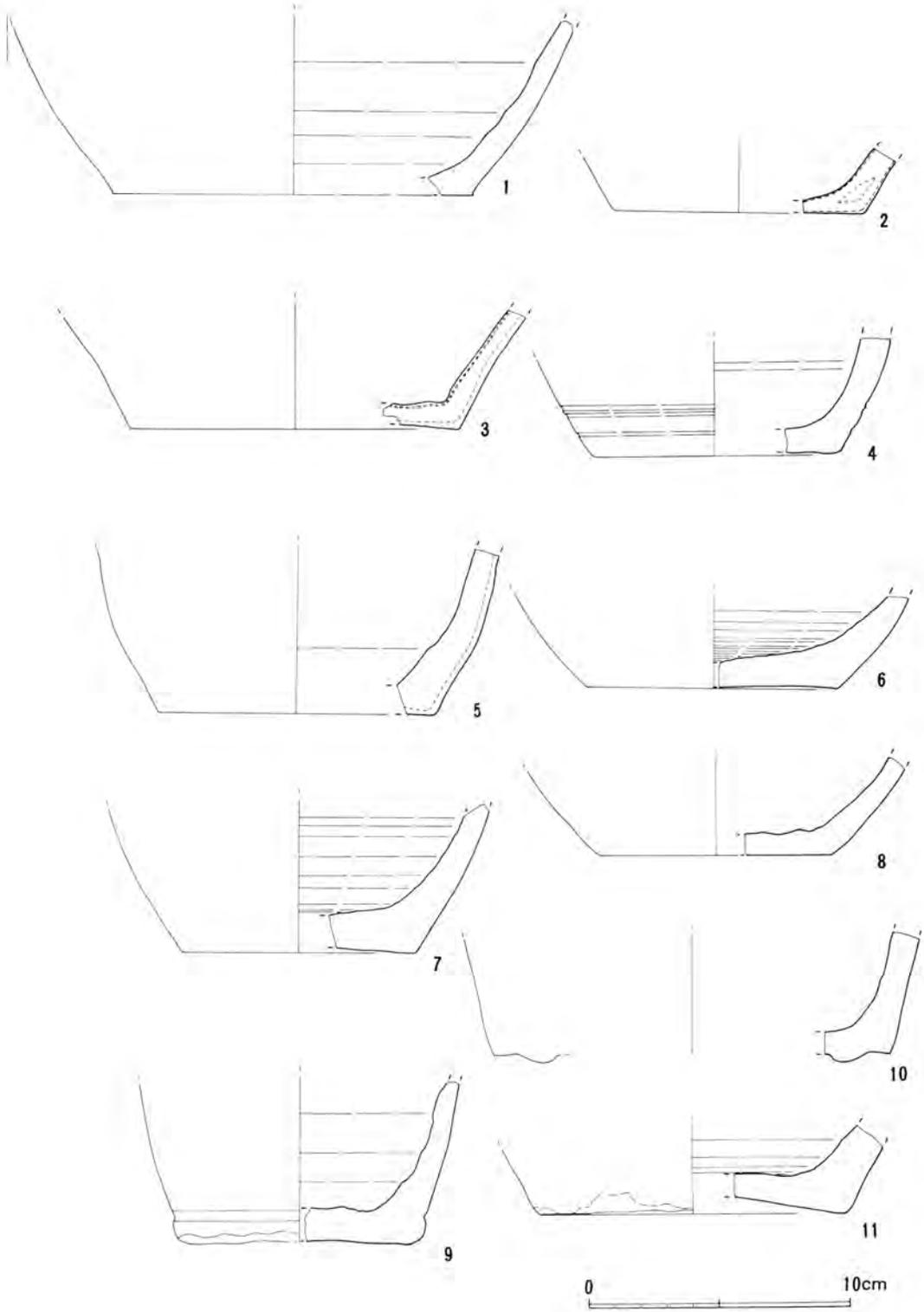
第37图 陶器



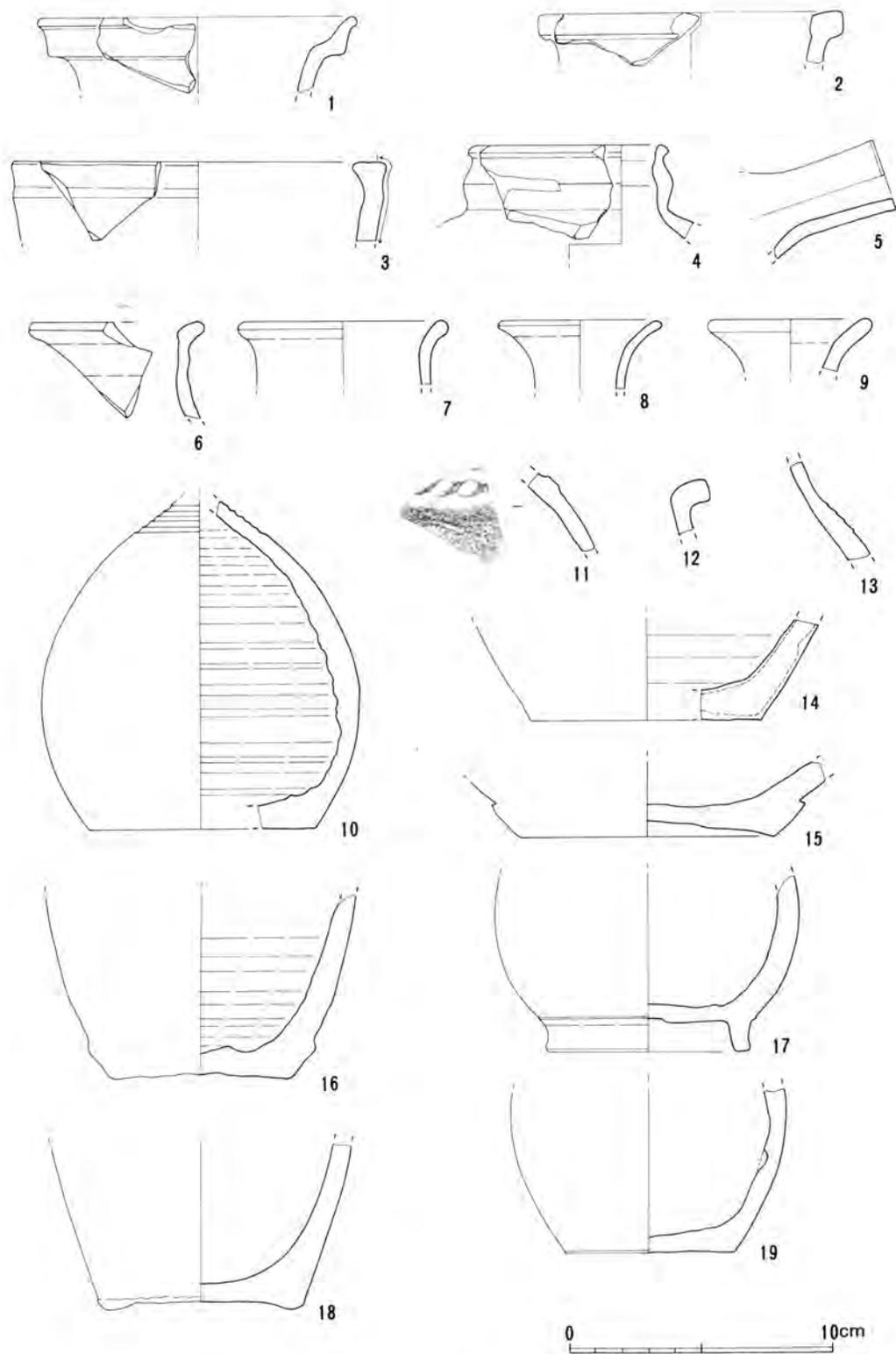
第38図 陶器



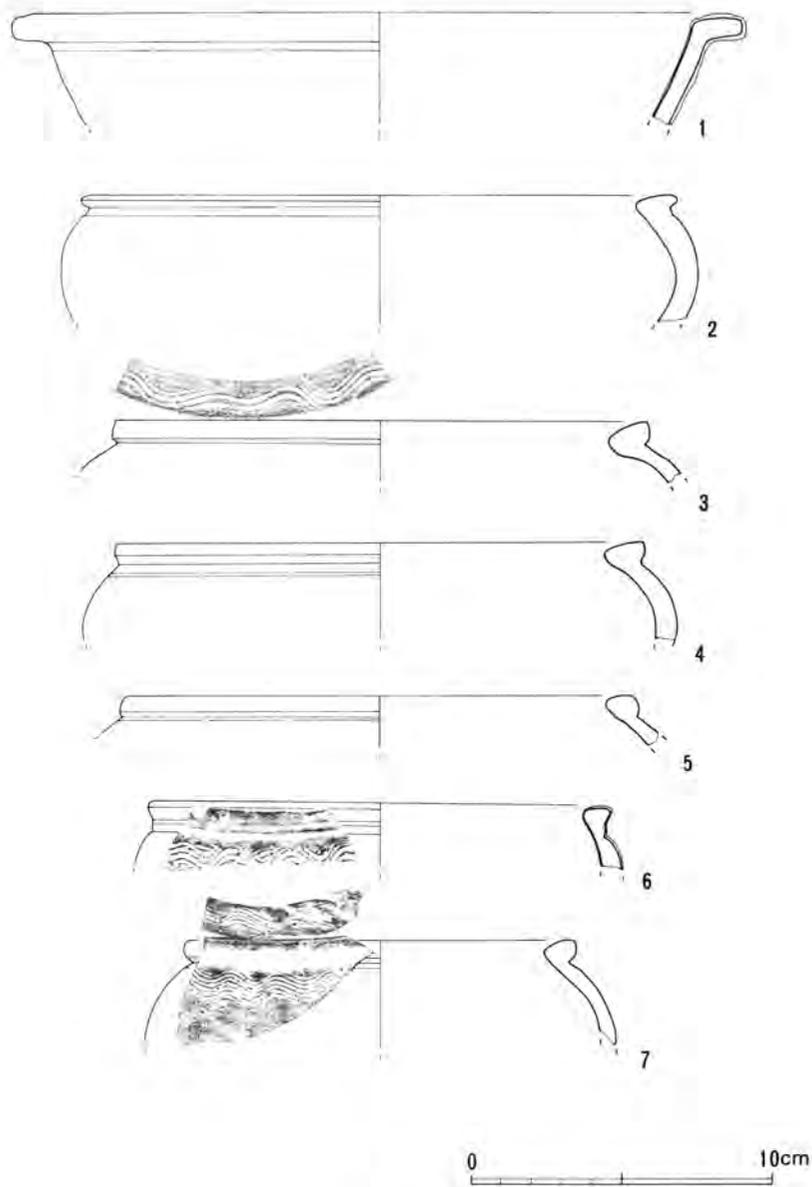
第39图 陶器



第40图 陶器



第41图 陶器

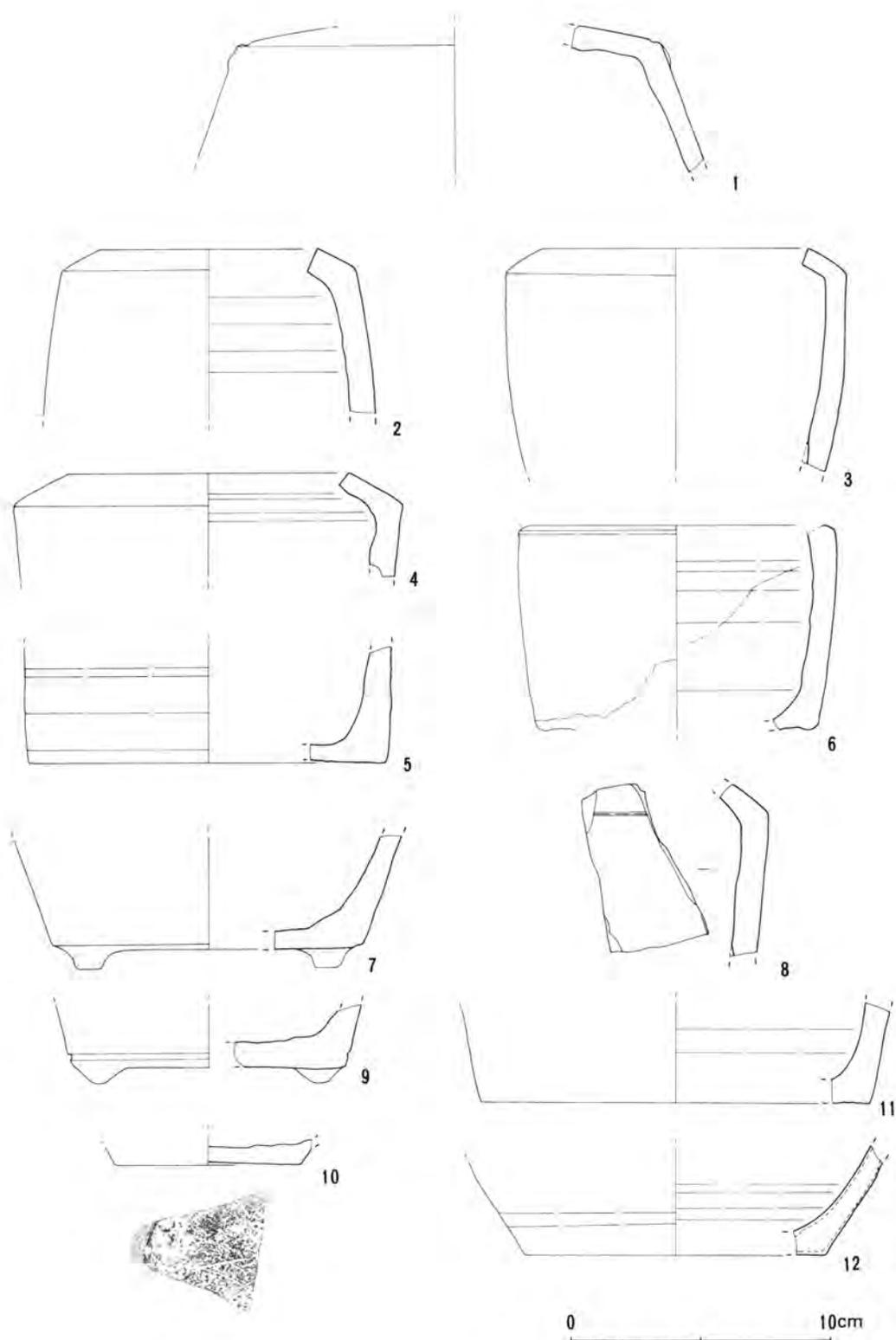


第42図 陶器

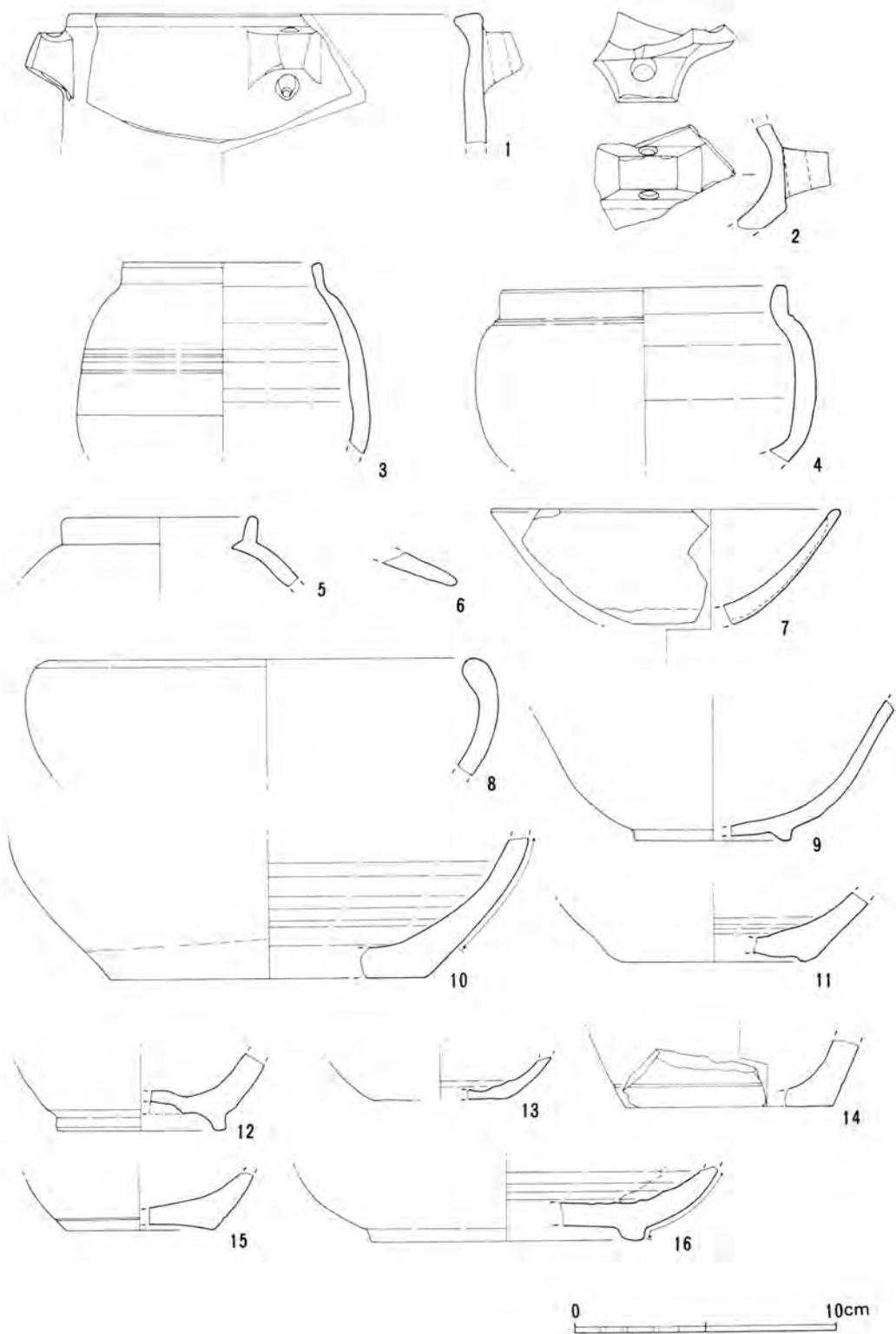
状の把手が取り付けられ、その把手には縦位の穴が穿たれている。喜名焼である。

急須の破片は第45図5の口縁部片と第42図5の把手の2点である。

碗は第45図11・13で、いずれも喜名焼である。同図11は腰部は丸みをもち胴・口縁部にかけて直線的に開くもので、外器面は緑褐色のにぶい光沢をもつ。同図13は低い高台をもつもので、内外面に粗めの白色鑛物の露出がみられる。



第43图 陶器



第44図 陶器

4. 播鉢

播鉢は総数 154 点検出され、その中で図上復元可能な資料が 2 点あった。口縁部の形態の特徴を分類すると、下記の 7 種に分けることができる。

- a 口縁部が丸みをもって外側に反り、口縁部下に丸みのある凸帯をもつもの。
- b 口縁部が丸みをもって外側に反り、口縁部下にシャープな突帯をもつもの。
- c 口縁部が逆 L 字状に張り出し、口唇部の幅が 1.3cm 以内のもので、口縁部下に丸みのある凸帯をもつもの。
- d 口縁部が逆 L 字状に張り出し、口唇部の幅が 1.3cm 以内のもので、口縁部下にシャープな突帯をもつもの。
- e 口縁部が逆 L 字状に張り出し、口唇部の幅が 2 cm 以上のもので、口唇部の上面に 1 条の凹線をもち、先端部が丸みをもつもの。
- f 口縁部が逆 L 字状に張り出し、口唇部の幅が 2 cm 以上のもので、口唇部の上面に 1 条の凹線をもち、先端部が直角に切れるもの。
- g 口縁部が逆 L 字状に張り出し、口唇部の幅が 2 cm 以上のもので、口唇部の上面に 1 条の凹線をもち、先端部が誇張されて張り出すもの。

播目をみると 6 本を単位とする幅 1.5cm の粗目のものと、10 本を単位とする細かいものがある。口縁部近くの播目の施す状況は、間があるものと全面を埋め尽くすものがある。粗目のものは間がある（イ種）と、細かいものは全面を埋め尽くす（ロ種）という相関関係がある。

口縁部の形態と播目の関係をみると a～d 種＋イ種、e～g 種＋ロ種の関わりがみられる。

焼成や胎土から第 46 図、第 47 図、第 48 図 1～6、第 49 図 2～6 は焼成温度が高く、そのため胎土の白色礫物が溶解し、乳白色の水飴状の形状が断面に観察される。それらの特徴は喜名焼と考えられる。第 49 図 1、第 50 図、第 51 図、第 52 図、第 53 図はいずれも焼成温度が低く、褐色を呈していて、細かな水引技法を明瞭に残すことから壺屋焼のものと考えられる。

第 48 図 7 は淡褐色で黒色の礫物を多量に含む陶器で内面に播目をもつものである。胎土から南中国のものと考えられ、項を別にすべきものと思われるが、一応、ここで扱っておきたい。

5. 湧田焼

湧田焼は碗の形状が直線的に広がるもので、安南系の影響で焼かれるようになったと考えられているもので、灰釉を用い施したものである。出土総数は 79 点で、図上復元可能なものは 7 点あった。

内底や畳付には重ね焼きをおこなった際の釉着防止の砂粒が残っているものが、確認できるものは全てにみられた。胎土は灰褐色や暗褐色をし、やや重量感のあるものが大半であるが、淡褐色で軽いもの（第54図11～15、第55図1～15・25・26・29・32・34）がある。技法的には類似しているが、胎土は壺屋焼の白土陶器の雑記と区別ができないほどである。淡褐色のものは壺屋焼の可能性も考えられるが、一応、この項で取り扱うこととする。

高台の作り出しの際に、高台脇との境に段をもつものが全てであるが、段が明瞭なものはケズリのみで終わるが、弱いものやかすかに残るものは、その後、水引により整えられている。その結果、腰部に丸みをもつもの（第54図12～15、第55図25・26・29・33・34）がある。これらはいずれも淡褐色の胎土をもつものである。

釉は重ね焼きするため、内底や外面腰や高台脇などまでは至らず、上部で終わっている。施釉は浸し掛けするらしく、2～3度に分けておこなっていることが、釉際が弧を描いていることでわかる。色は淡い緑色を呈するが、淡褐色の胎土を用いたものは青灰色をしている。施釉のやや厚いものは貫入があるもの（第54図4）がある。

6. 褐釉

沖縄産の陶器で、施釉するいわゆる上焼に含まれるものである。ここでは白土陶土に外器面や内面、あるいは内外面に褐釉（鉄釉）を施すもので、壺屋焼のものをいう。

褐釉の器種は大型碗、碗、茶碗、急須、中型壺、小型壺、瓶、蓋、手焙鉢がある。

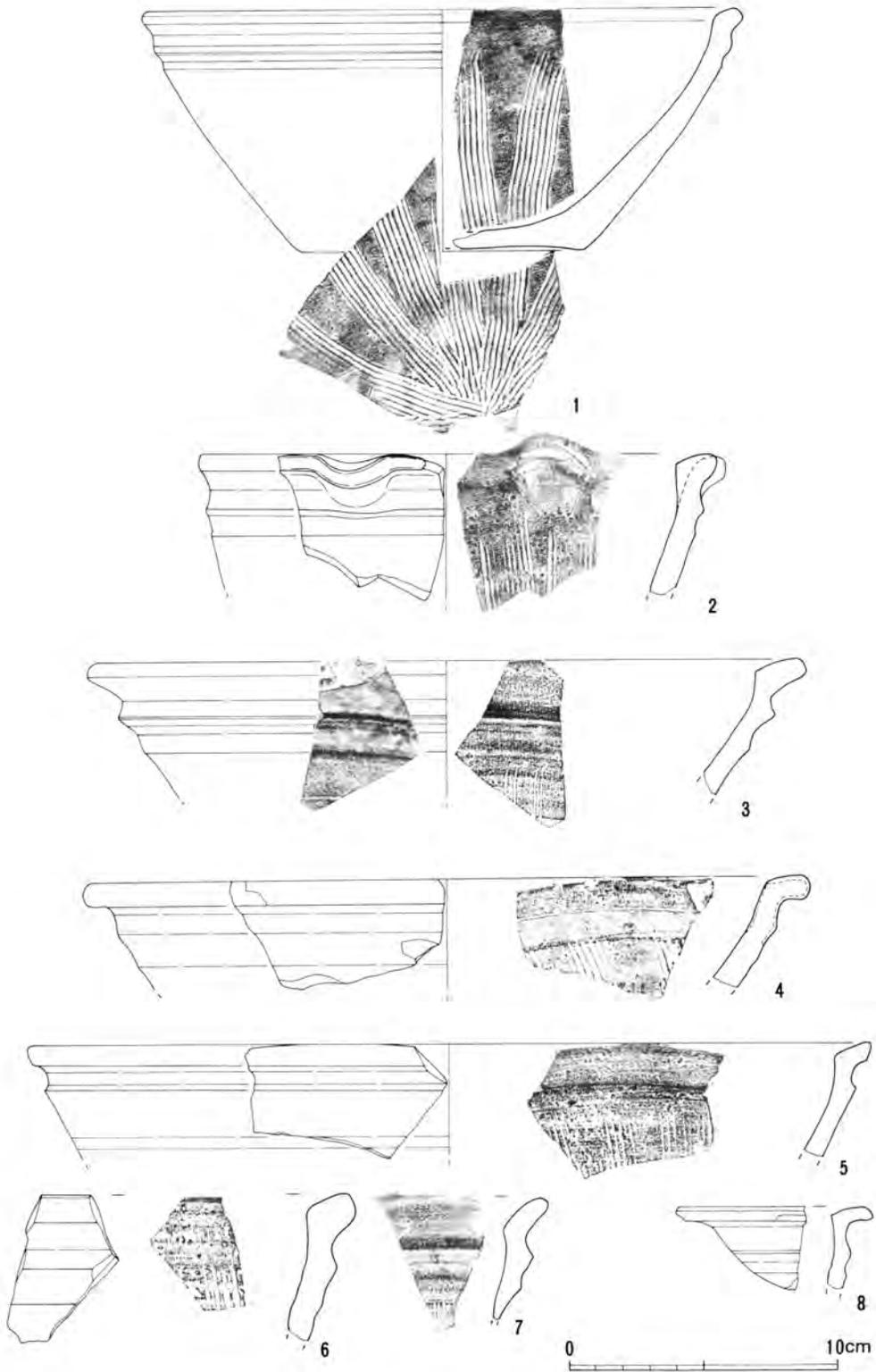
施釉の方法にはつぎの4種類がある。

- a. 外器面は褐釉を厚めに施し、内面は灰釉を施すもの
- b. 外器面は褐釉を厚めに施し、内面は白化粧後灰釉を施すもの
- c. 外器面は灰釉を施し、内面は褐釉を厚めに施すもの
- d. 外器面は褐釉を厚めに施し、内面も褐釉を厚めに施すもの

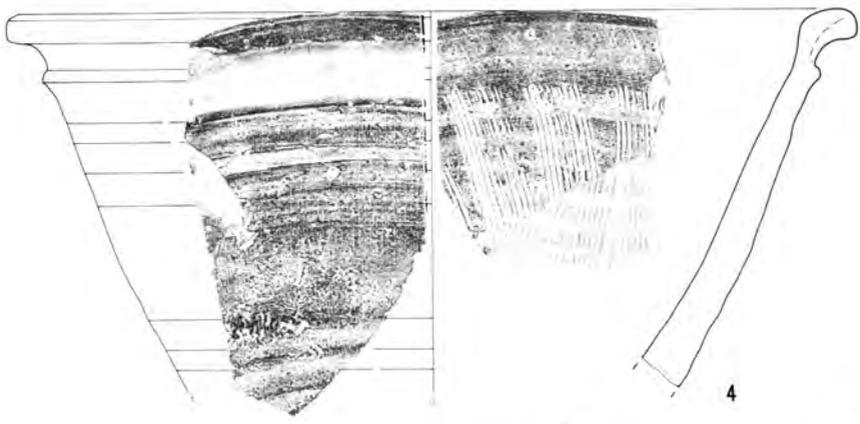
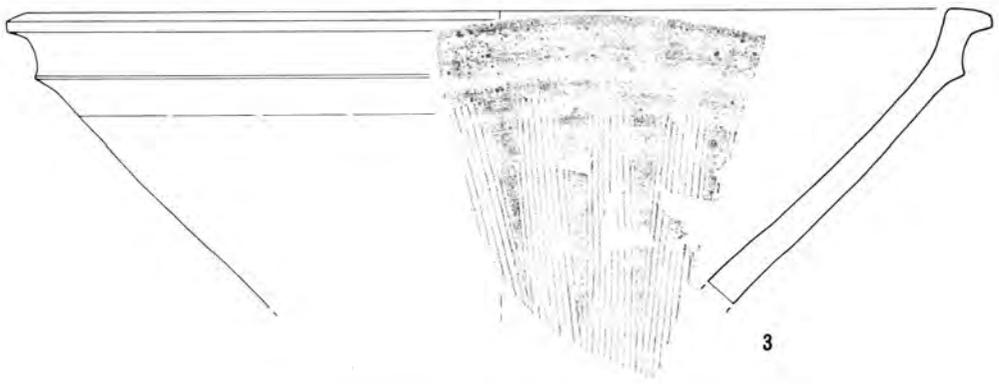
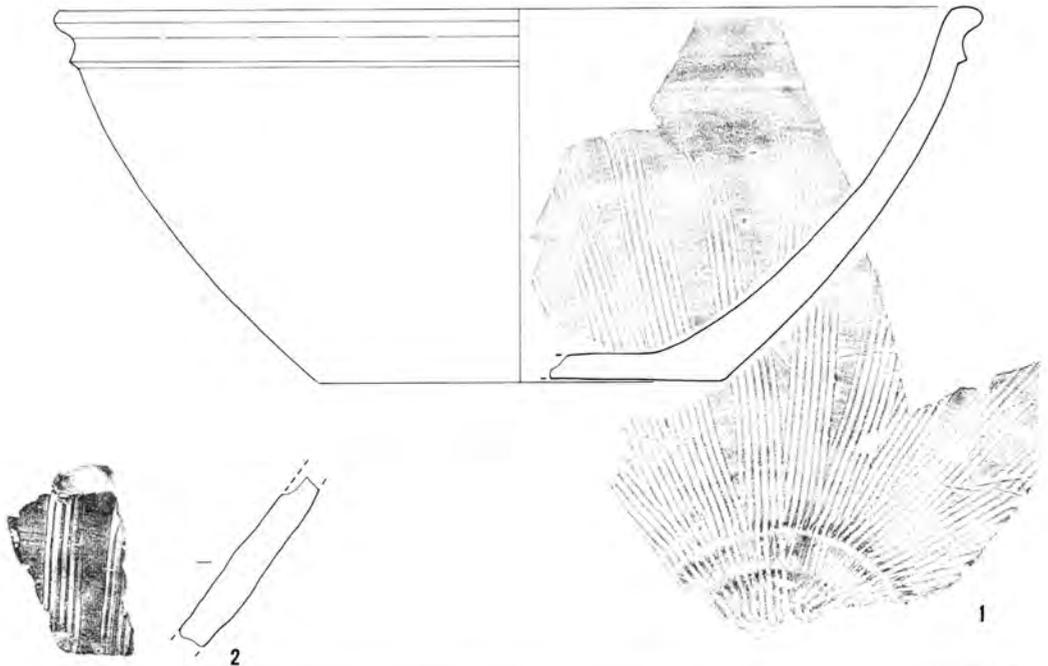
大型碗は口径が約20cmを計るもので、一般的にワンブーと呼ばれているものである。大型碗にあたるのは第56図1～8・10で、施釉の方法は、a類にふくまれるのは第56図1～3、b類に含まれるのは同図5・7、d類に含まれるのは同図6・8・10である。これらはいずれも重ね焼きをするらしく内面や畳付には、その痕跡を残して、高台にも施釉は施さない。

急須は同図9のもので、底面に突起状の脚をもつものである。施釉はa類に含まれるが、内面は無釉である。

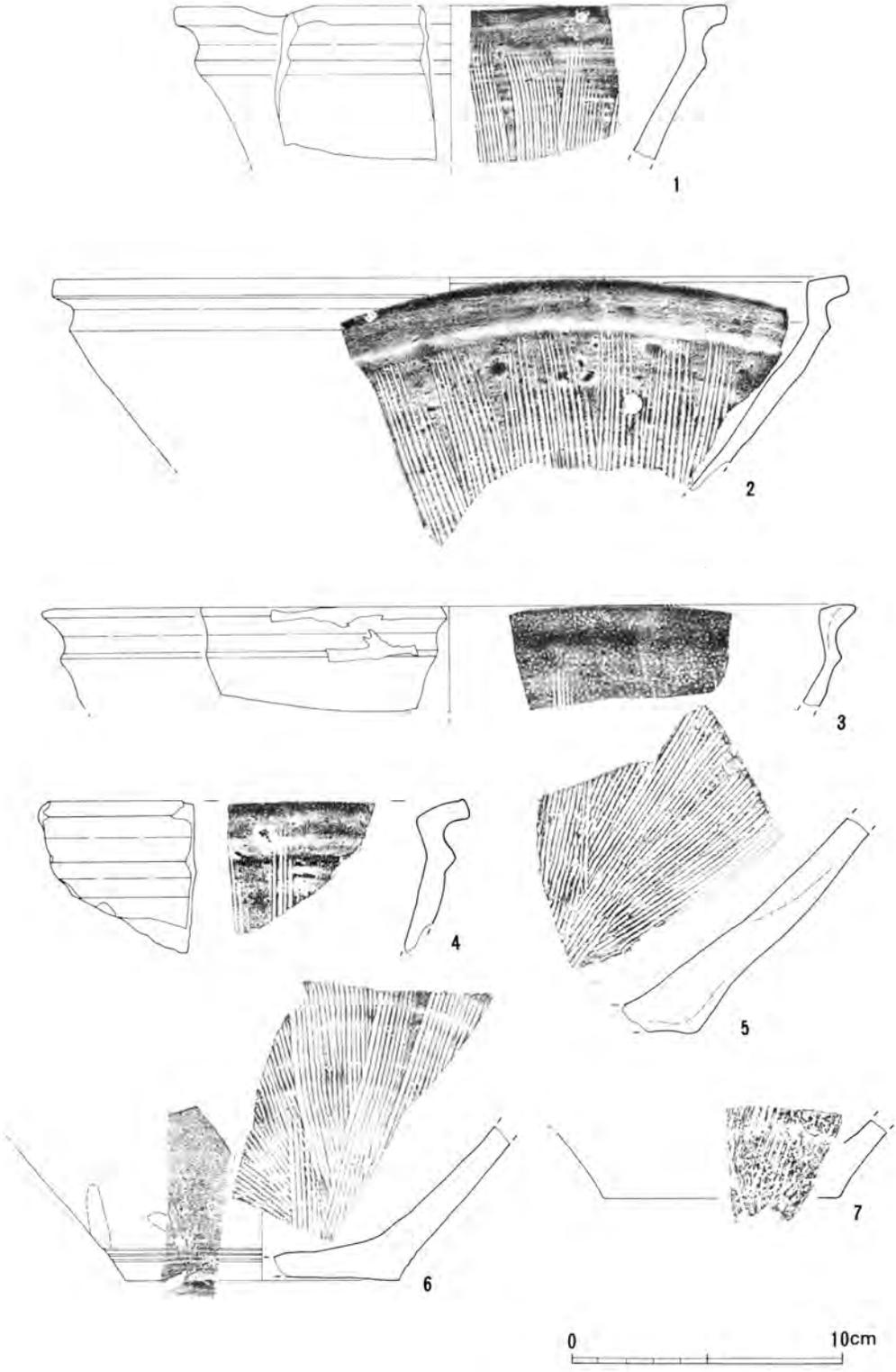
碗は口径約13cm、高さ6cm前後、高台約6cmを計るもので、腰部が丸みをもち胴・口縁部は直線的に開く形状をもつものである。碗にあたるのは第57図1～15・17・18で、施釉の方法は、b類に含まれるのは同図3・8・9・12・第59図1・4、c類に含まれ



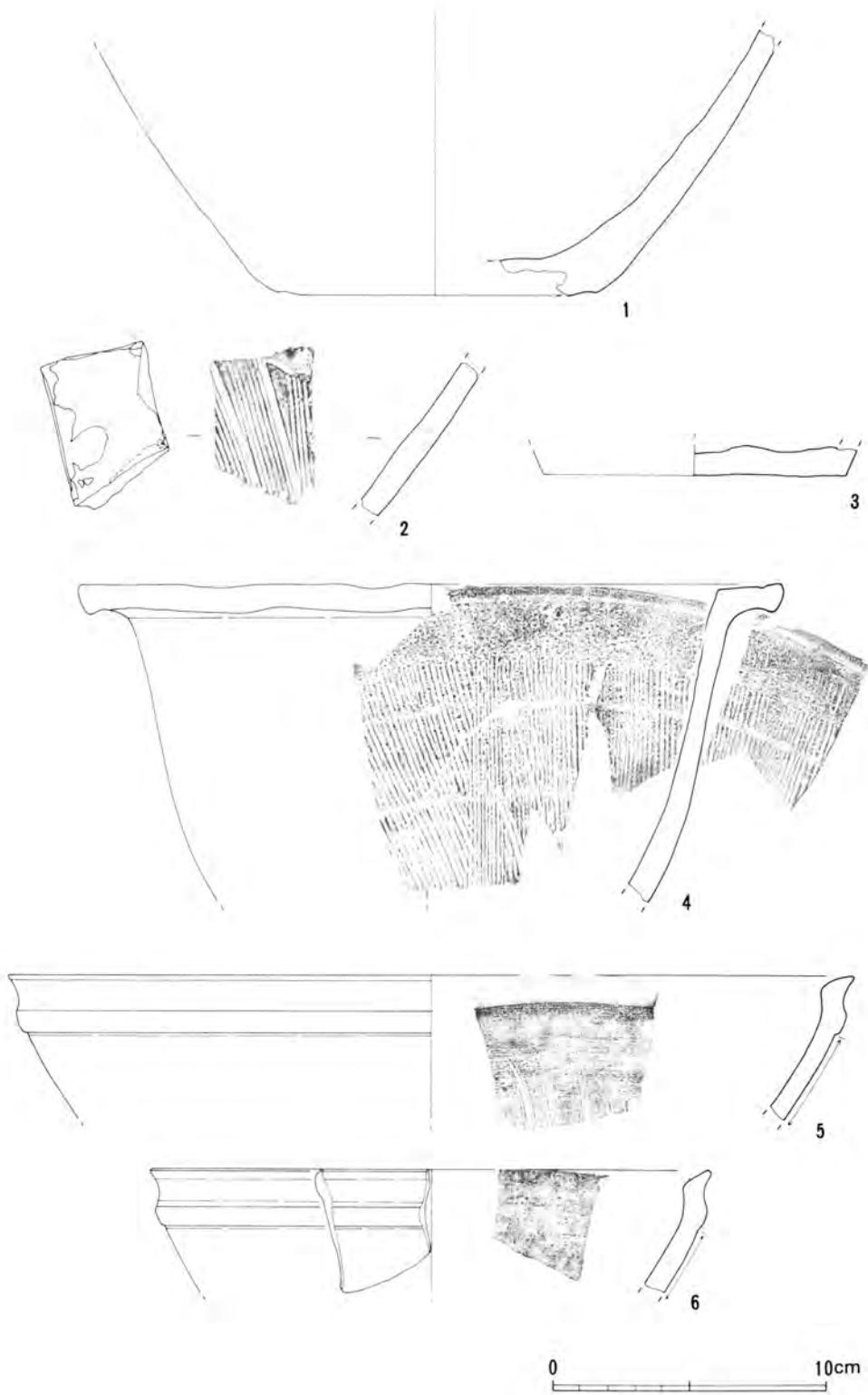
第45図 鑼鉢



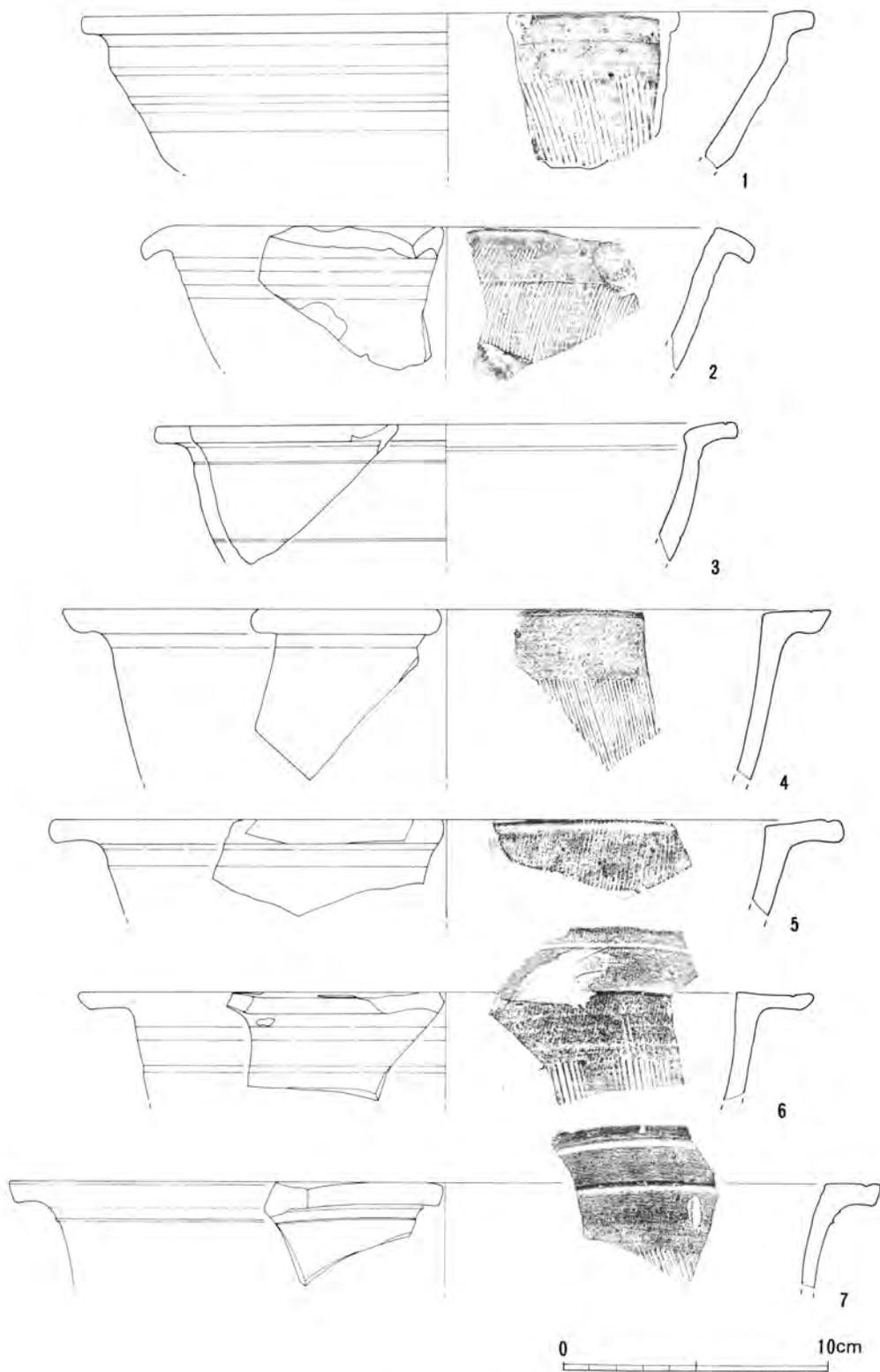
第46図 播鉢



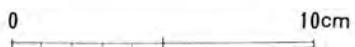
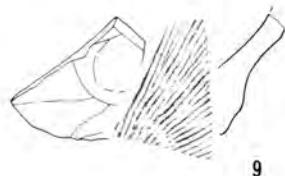
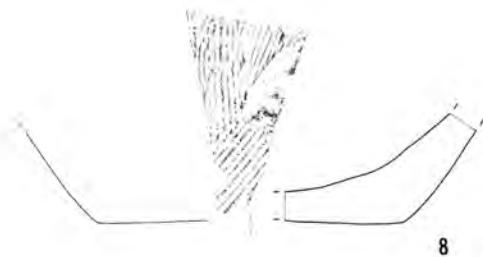
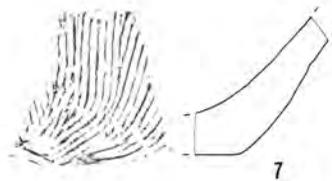
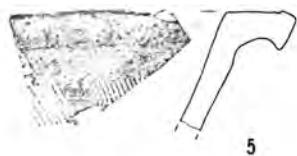
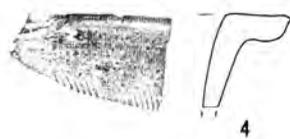
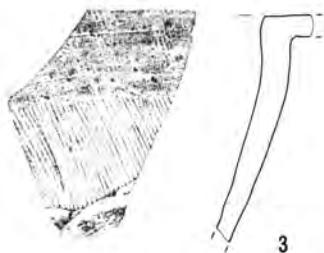
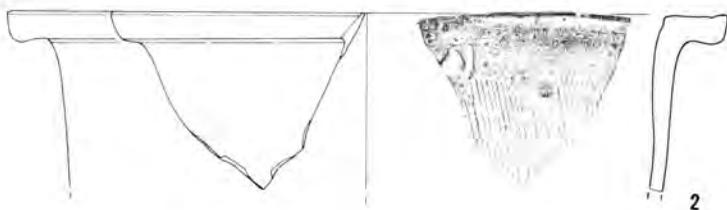
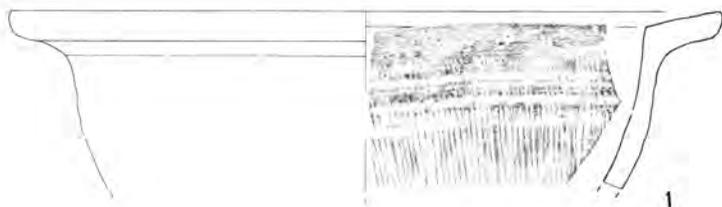
第47図 播鉢



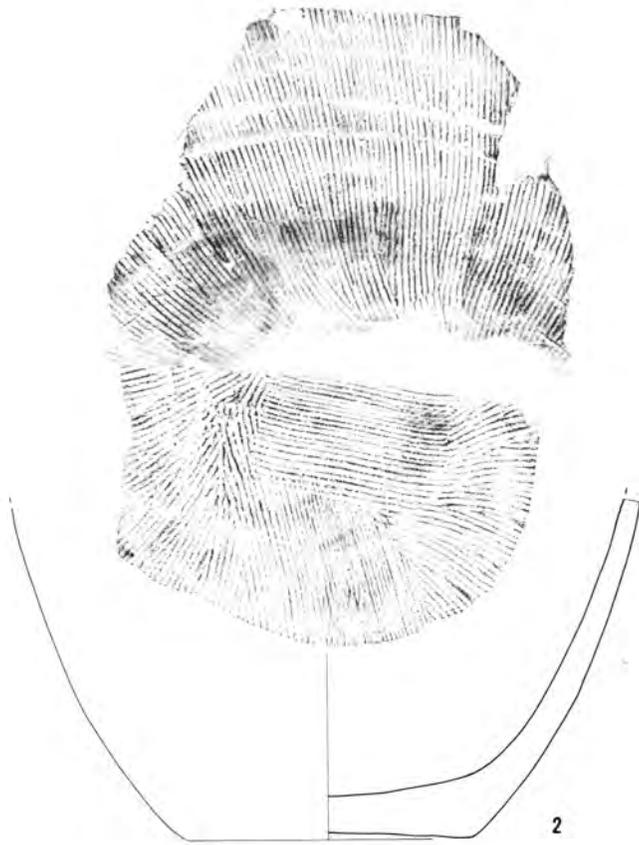
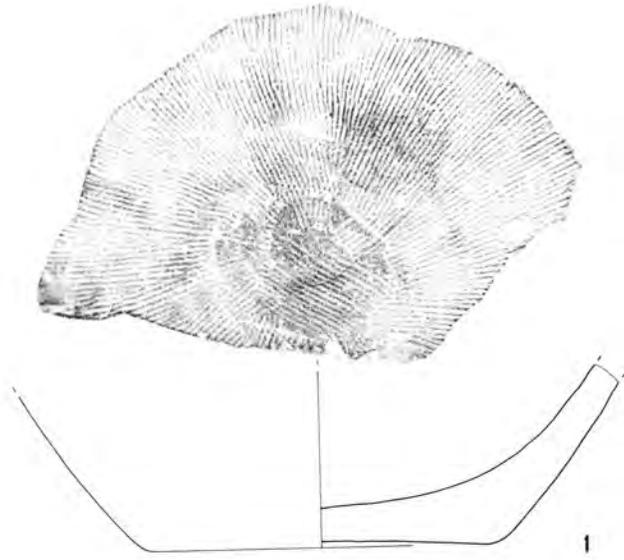
第48図 櫛鉢



第49図 播鉢

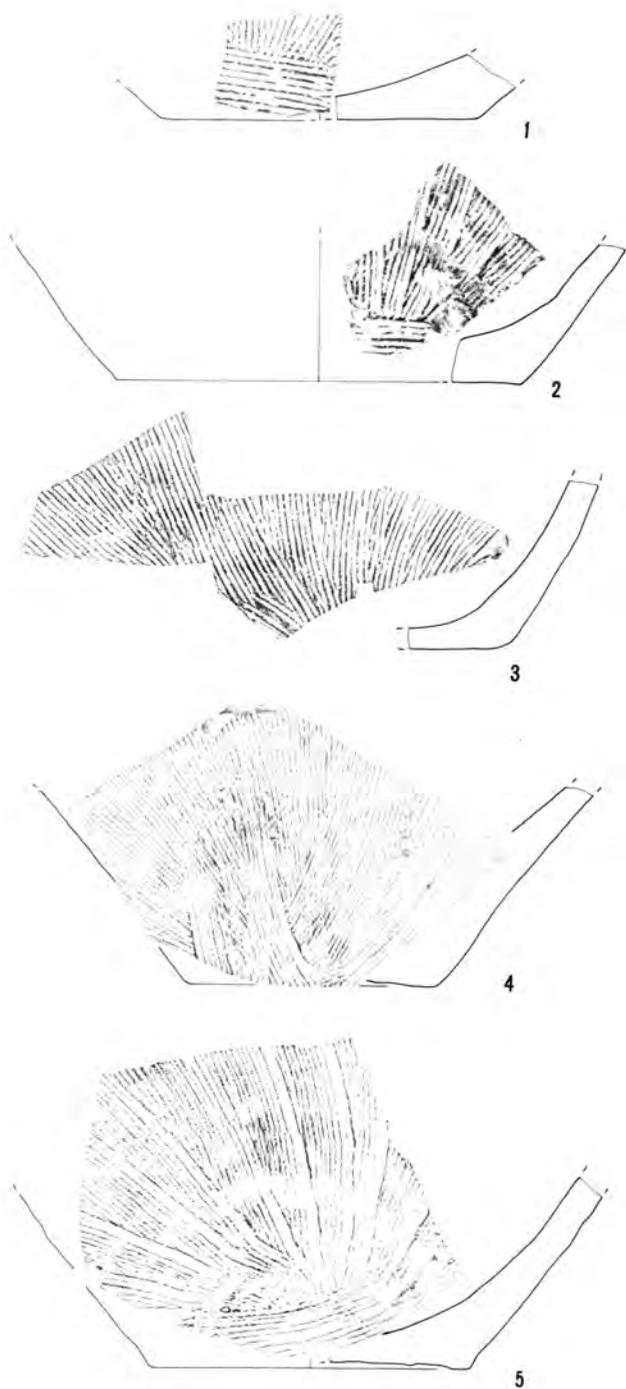


第50图 播鉢



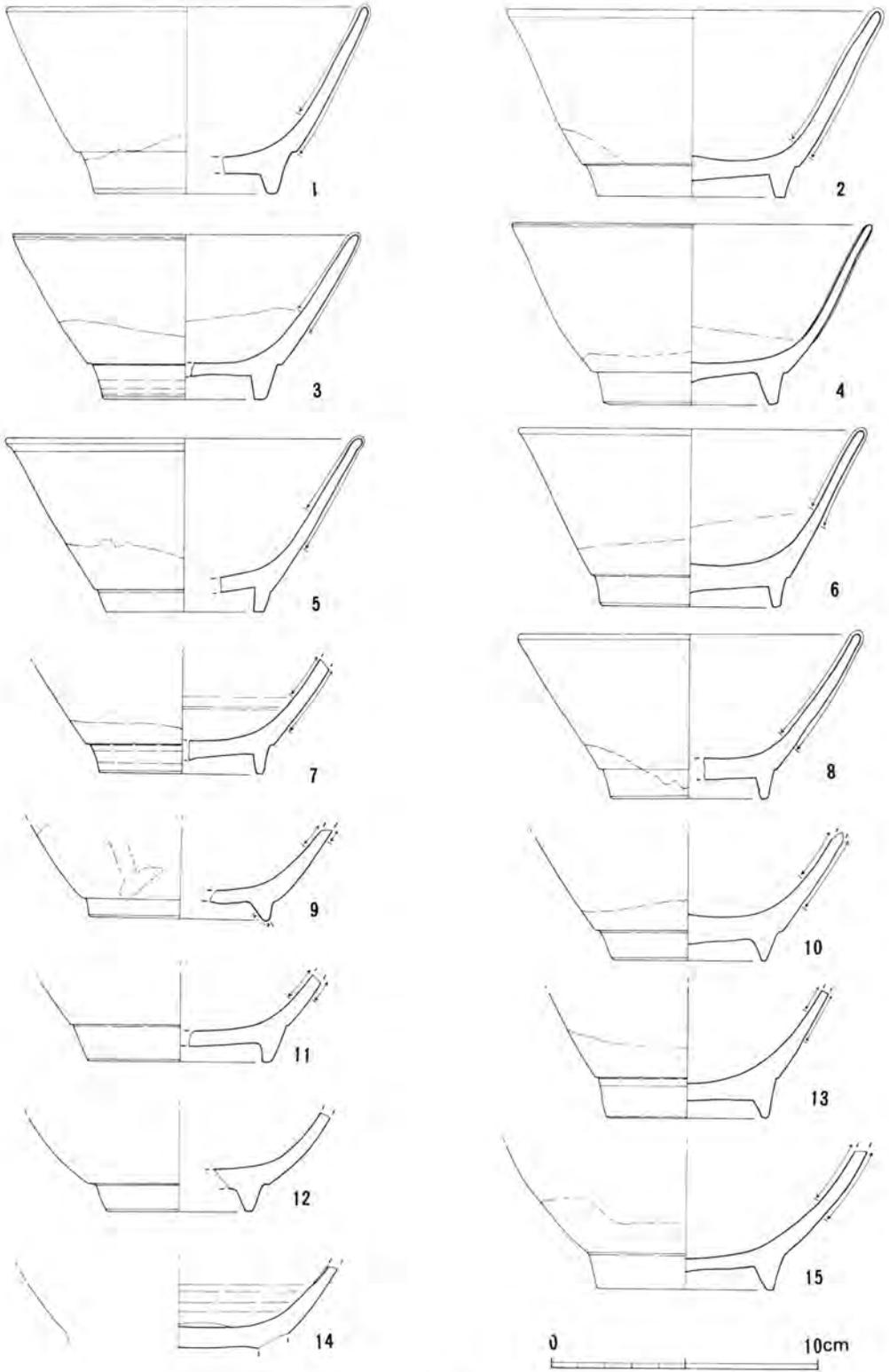
0 10cm

第51図 播鉢

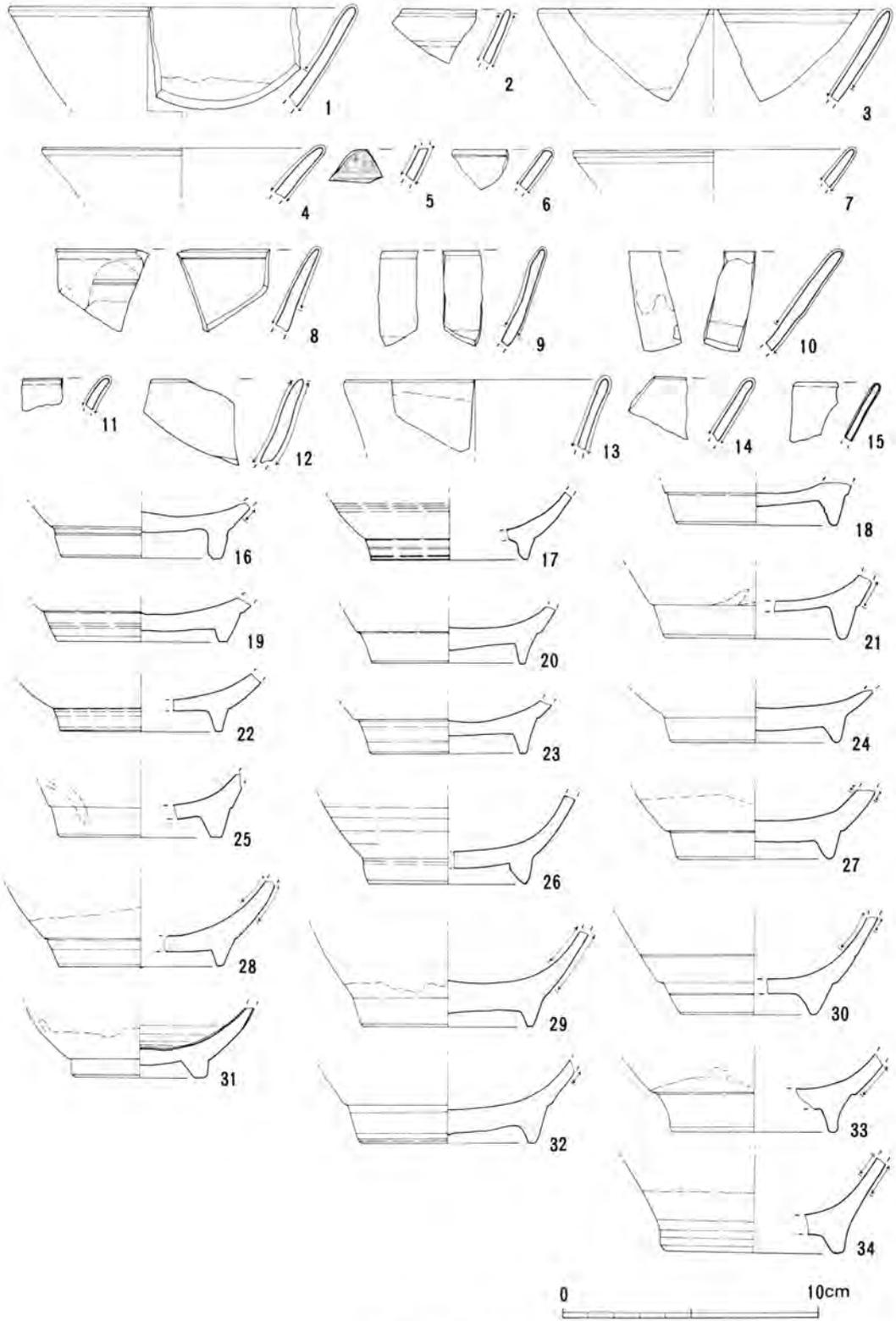


0 10cm

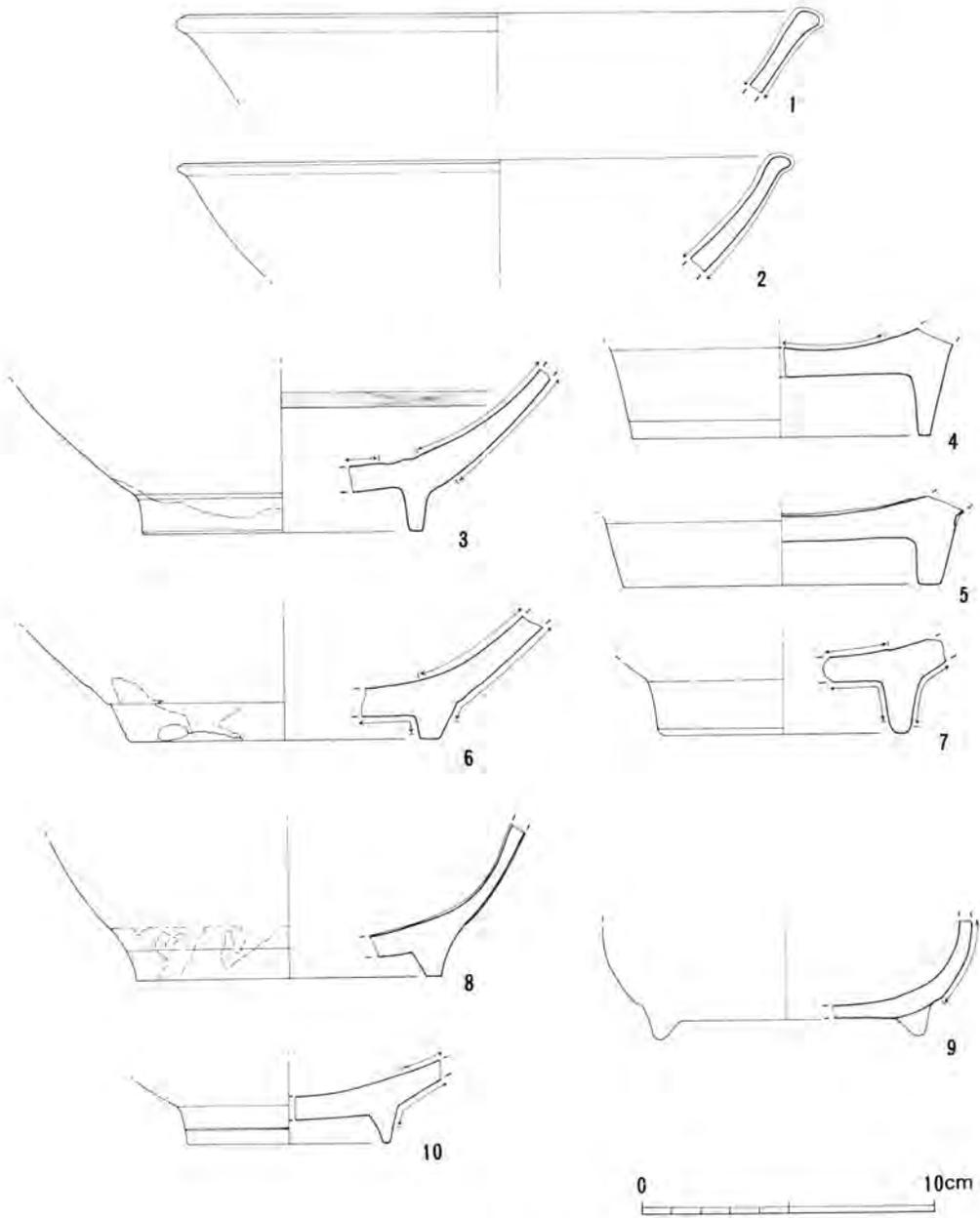
第52図 播鉢



第53図 湧田焼



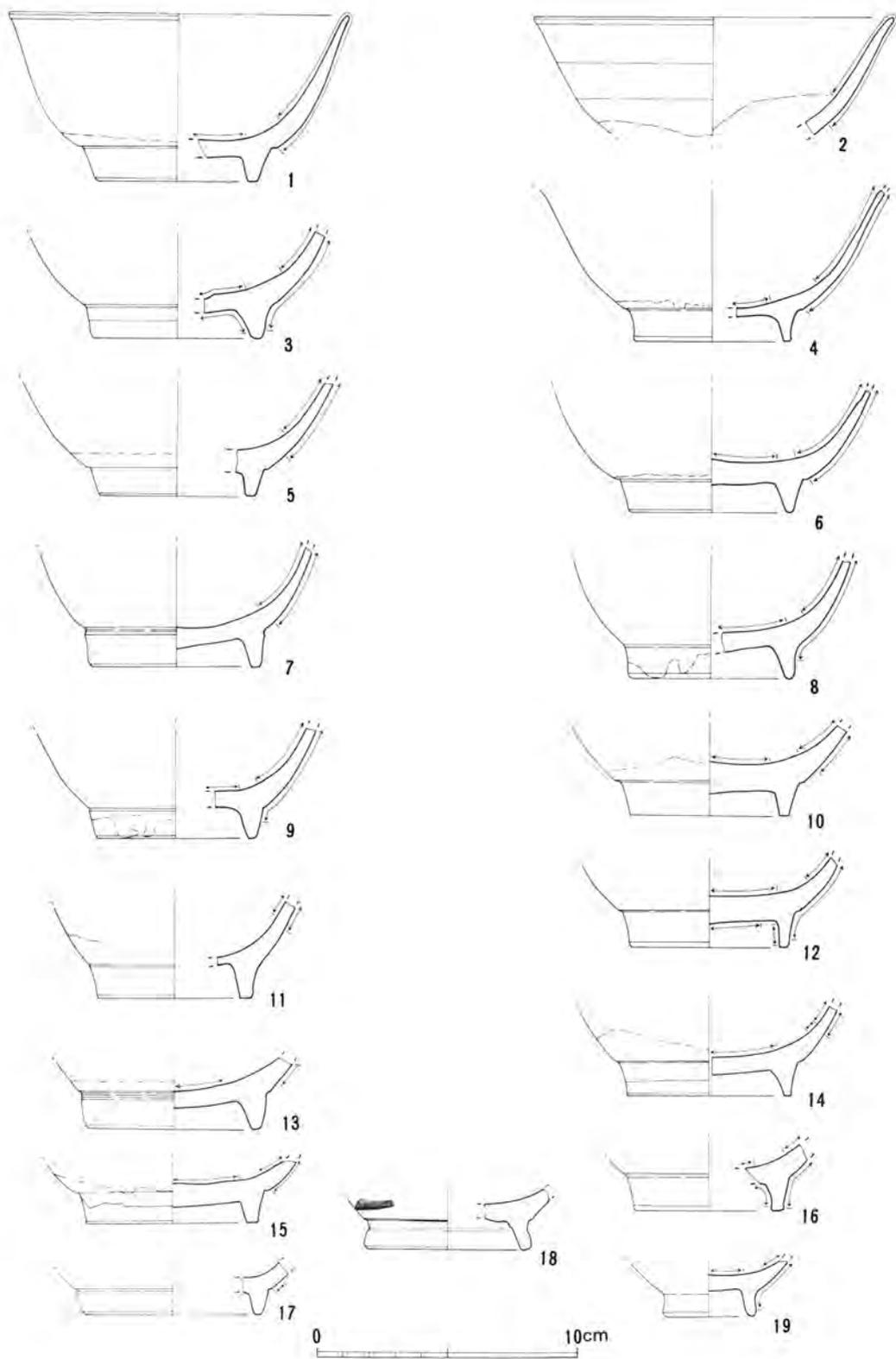
第54図 湧田焼



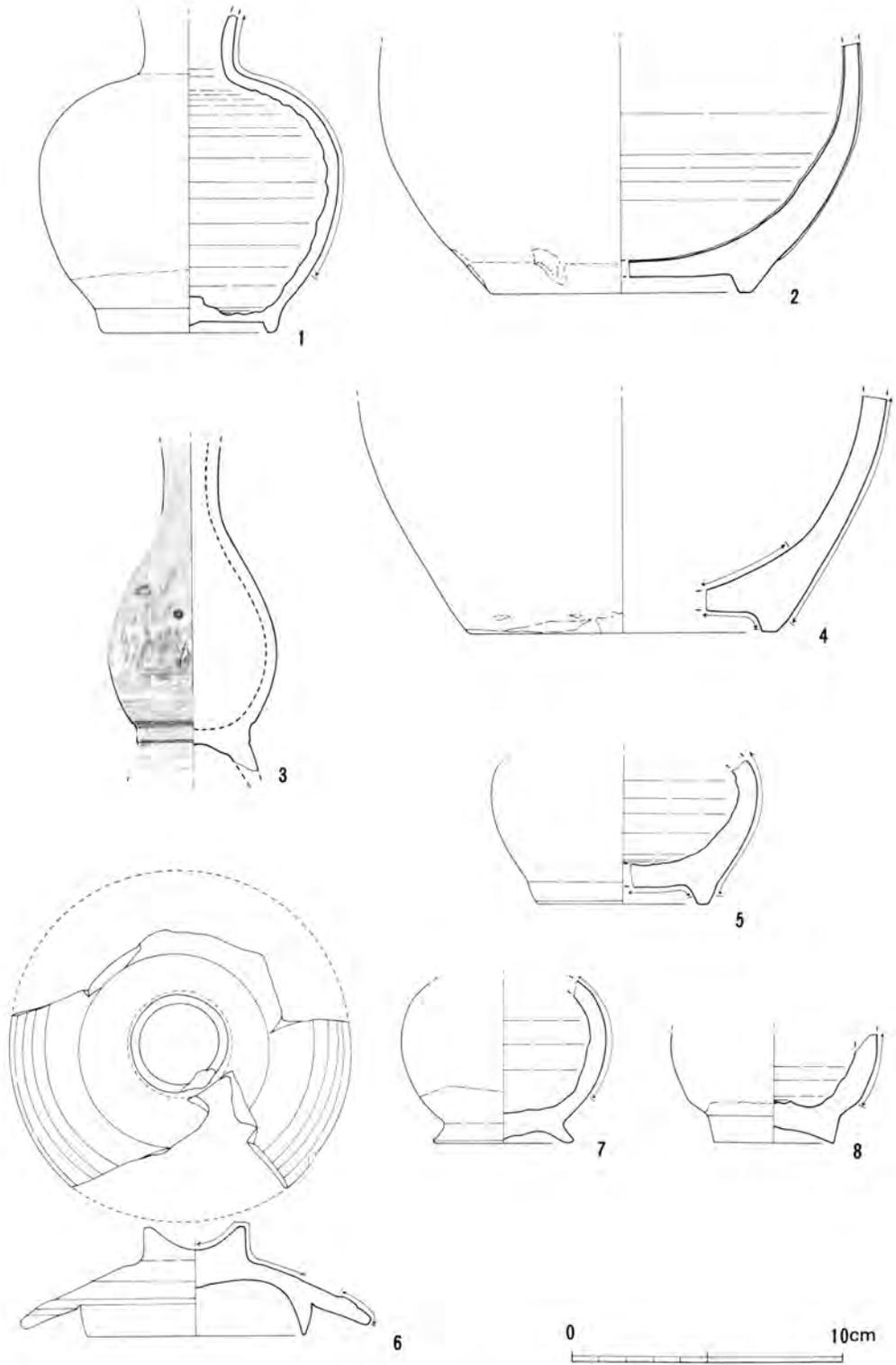
第55図 褐釉陶器

るのは同図14のみであり、d類に含まれるのは同図1・2・4・5～7・10・11・13～15・第59図2・3・5～10・12である。

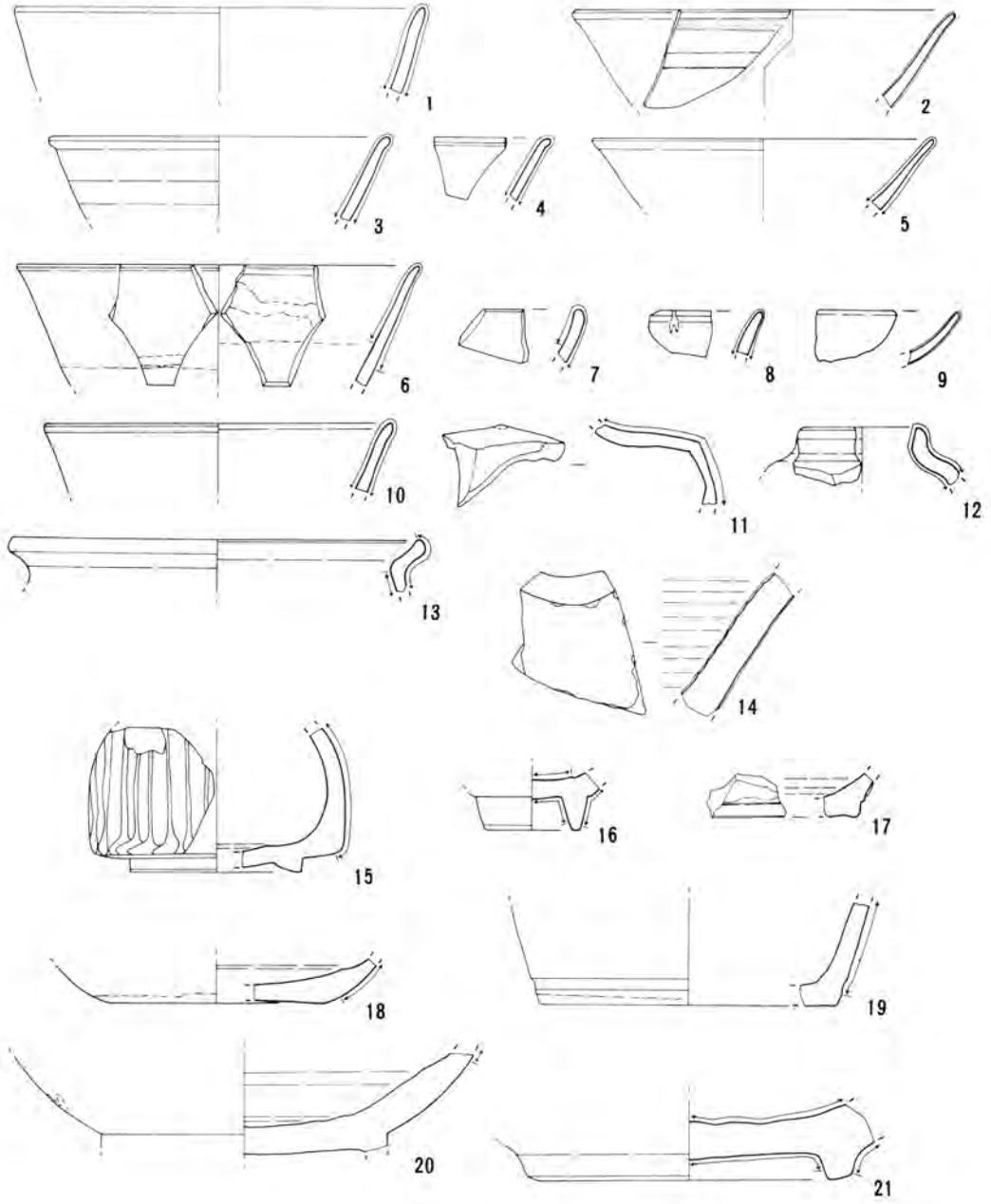
茶碗は第57図16・19、第59図18の3例である。施釉の方法はいずれもb類に属する



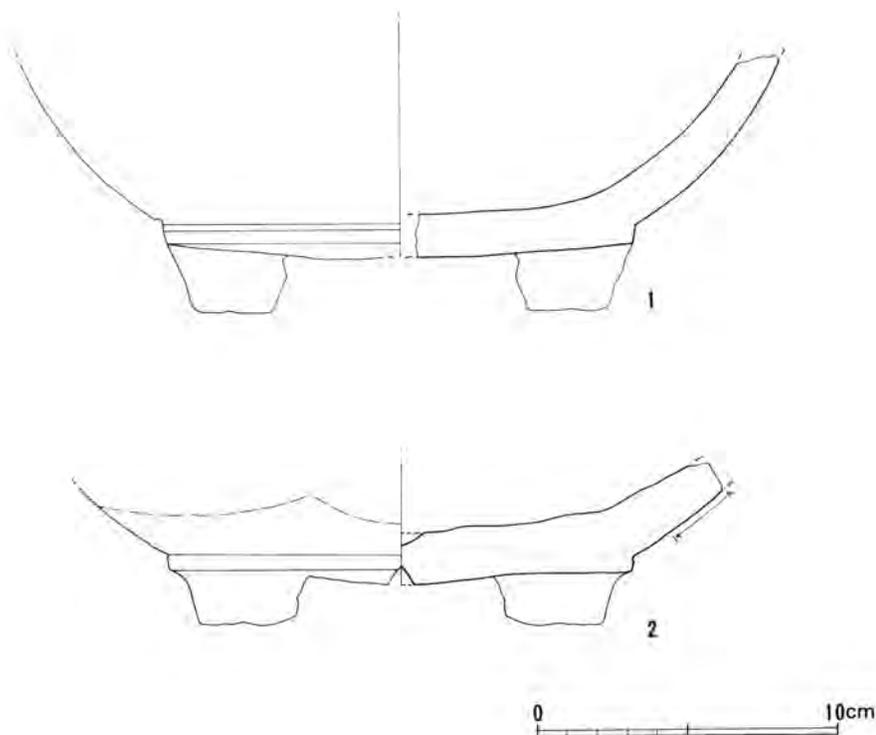
第56图 褐釉陶器



第57図 褐釉陶器



第58圖 褐釉陶器



第59図 褐釉陶器

ものである。

中型壺は第 58 図 2 の 1 例のみで、施釉の方法は d 類に含まれるものである。

小型壺は第 58 図 1・第 59 図 11・17 で、施釉の方法は a 類に含まれるが、釉が薄く淡褐色を呈する。内面は無釉である。

瓶は第 58 図 3・5・7・8 で、施釉の方法は a 類に含まれるが、内面は無釉である。

手焙鉢は第 39 図 1・2 で両者ともに底面に円盤状の脚をもつ底部片で、外器面は褐釉を厚めに施したものである。

7. 壺屋焼

沖縄産の壺屋焼の陶器で、施釉するいわゆる上焼に含まれるものである。ここでは白土陶土に外器面や内面に白化粧をおこなった後、褐釉あるいは呉須釉で絵を描くものと、無地でその上から長石の透明釉を施すものがある。ここでは白土陶土に白化粧後、透明釉で

仕上げるものをまとめた。

これに含まれる機種は碗、茶碗、急須、中皿であった。

碗は第 60 図 1～13・第 61 図 1～24・第 62 図 1～10・24 である。その内、文様を描くのは第 60 図 1・3・5・7・9・11・13・15・16・第 62 図 1・5・6・8・9・10 である。これらの文様は褐釉の円を中心に、その周辺に呉須による水玉を配置するものである。これはイングワッチャーと呼ばれる技法であるとのことである。第 62 図 1 のように褐釉のみで上記の拾三曜模様を施すものもある。その他の碗はすべて無地で終えている。

茶碗は第 61 図 25・第 62 図 12・15・18 である。いずれも無地である。同図 18 は腰部から胴部にかけて外周を 16 面に面取りしたものである。1 例の出土である。

急須の破片は第 62 図 11・13・14・20・21 である。同図 11 は叉状沈線による区画の後、呉須絵を施している。同図 15・19 は急須の蓋と考えられる。同図 19 は上面の二ヶ所に沈線で梅花を描いたのち、褐釉で施釉しているが暈している。

8. 陶質土器

陶質土器の総数は 245 点で図上復元できるものは 1 点あった。

器壁が 3 mm と極めて薄く形成された素焼きの容器である。容器の種類は鍋、手焙り、手荒い、大型碗、急須、蓋などの種類がみられる。

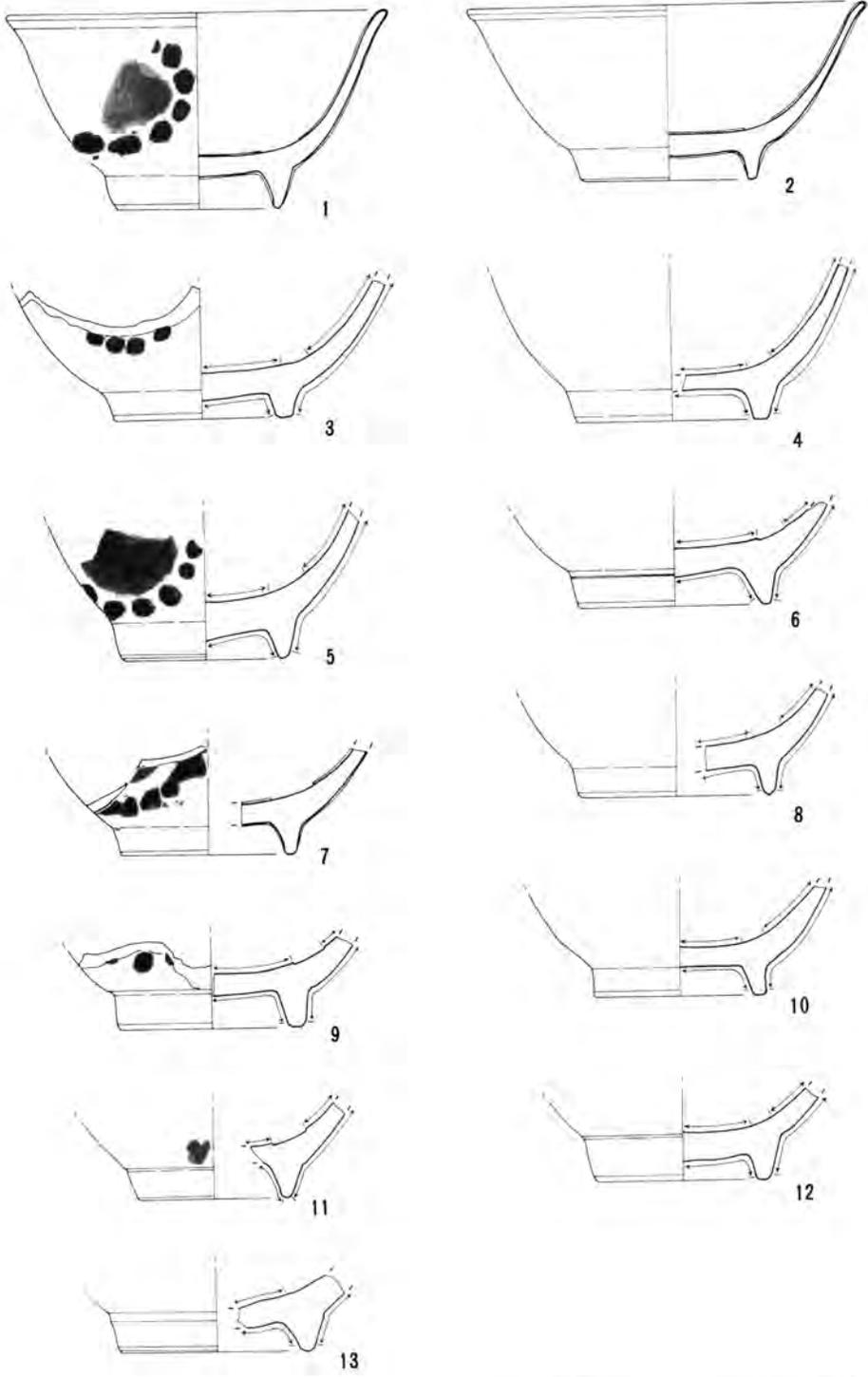
第 63 図 1 は口縁部がくの字状に外販し、さらに U 字状の把手をもつもので、胴部から底面にかけてほぼ全面に煤の付着がみられる煮沸容器である。同図 2 は同一固体である。同図 3～5 も外器面に煤の付着がみられることから煮沸容器と考えられる。

第 64 図 1・2、第 65 図は小型壺状に形成され、口縁部の内側に三角形の把手をもち、その部分に煤の付着がみられ、さらに胴部の外器面にも穴の穿たれた把手がみられることから、携帯用の手焙りと考えられる。第 65 図 1 は白土により圏線状に白化粧がほどこされている。第 64 図 4 は口縁部が内湾するボール状の手荒いである。第 64 図 5～7 は底面が広く、口縁部にゆくにつれ細まる急須である。底面近くには煤の付着が見られることから、煮沸にも用いたと考えられる。第 66 図 11・13 は急須の蓋と考えられる。

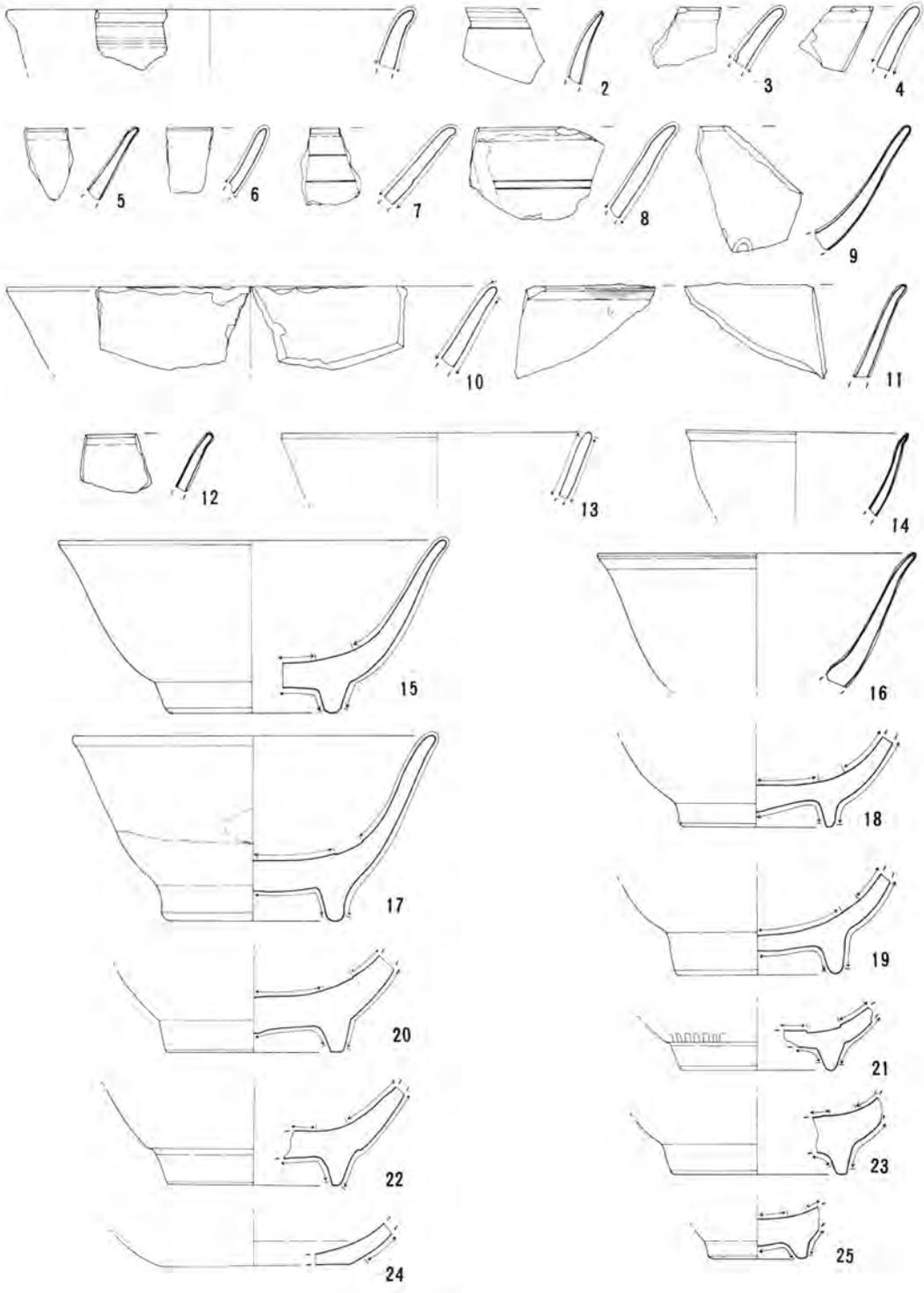
これらはいずれも壺屋で焼かれ、使用されたものと考えられているものである。

9. 瓦

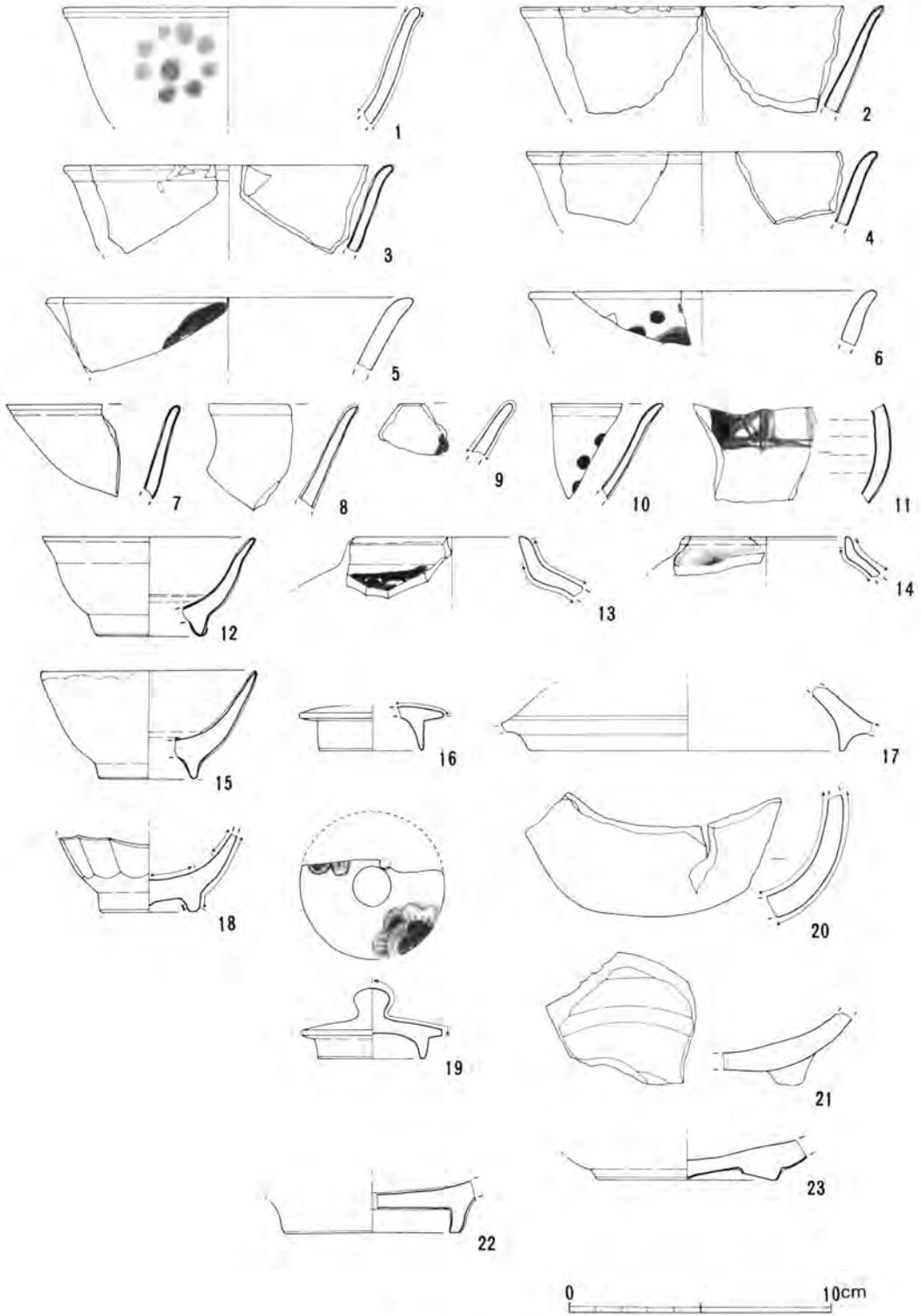
現在、使用されている赤瓦とは径がやや大ぶりで異なり、焼成も還元炎であることから、1 例の出土であるが取り上げることにした。第 68 図 1 は灰黒色の平瓦の破損品でやや変形しているが、樽の径を荒く推計すると約 35cm ほどで、いわゆる高麗瓦よりはやや小さいものである。



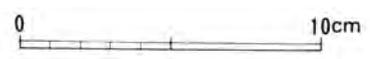
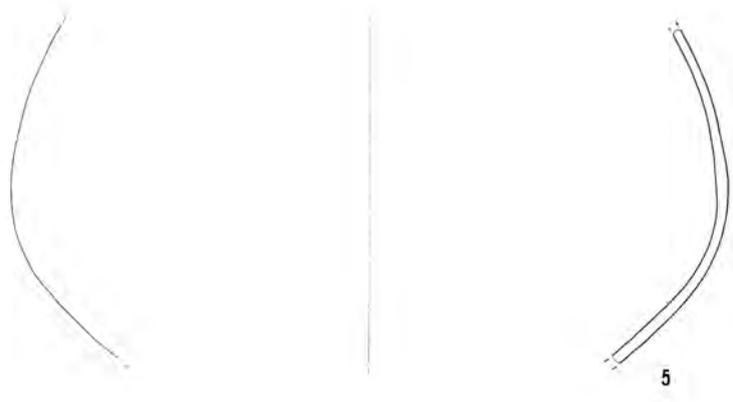
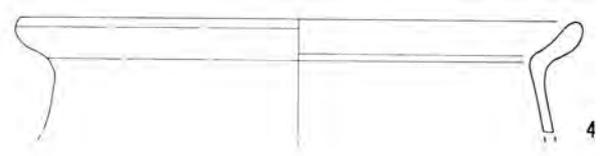
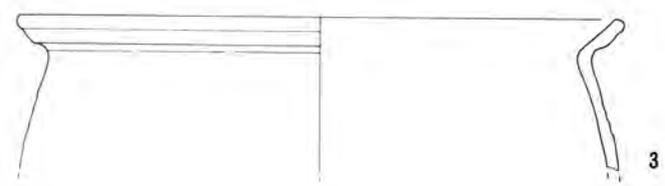
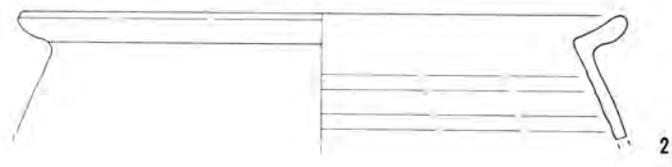
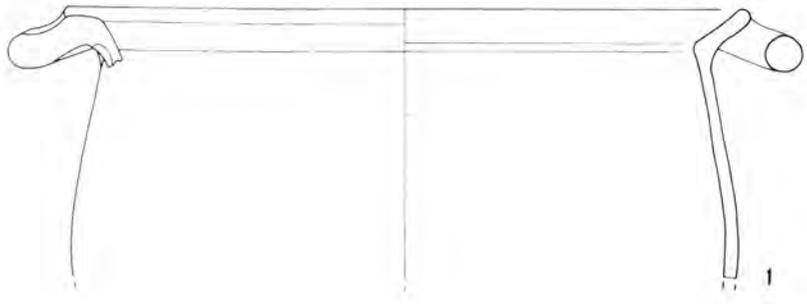
第60図 壺屋焼



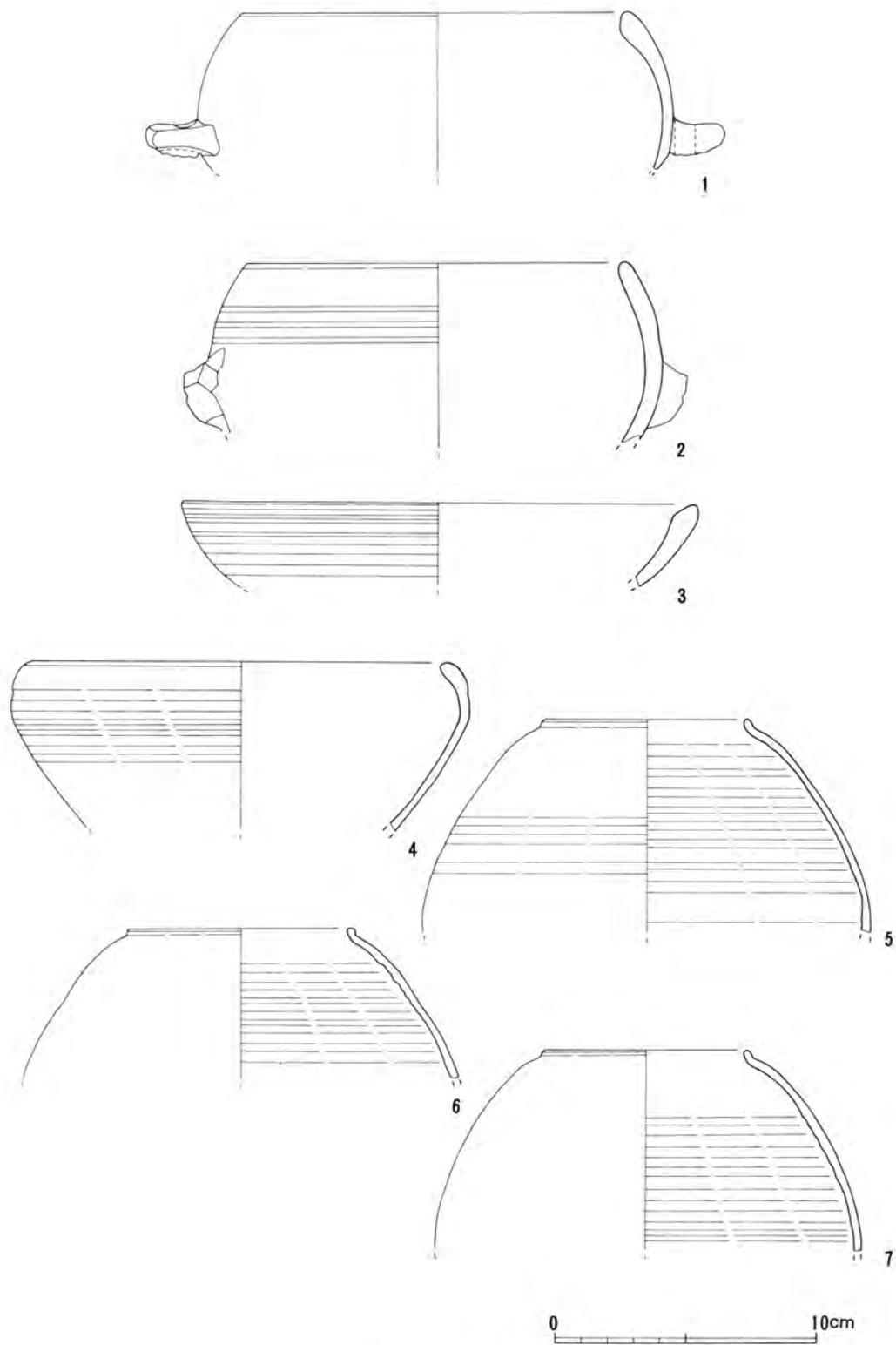
第61図 壺屋焼



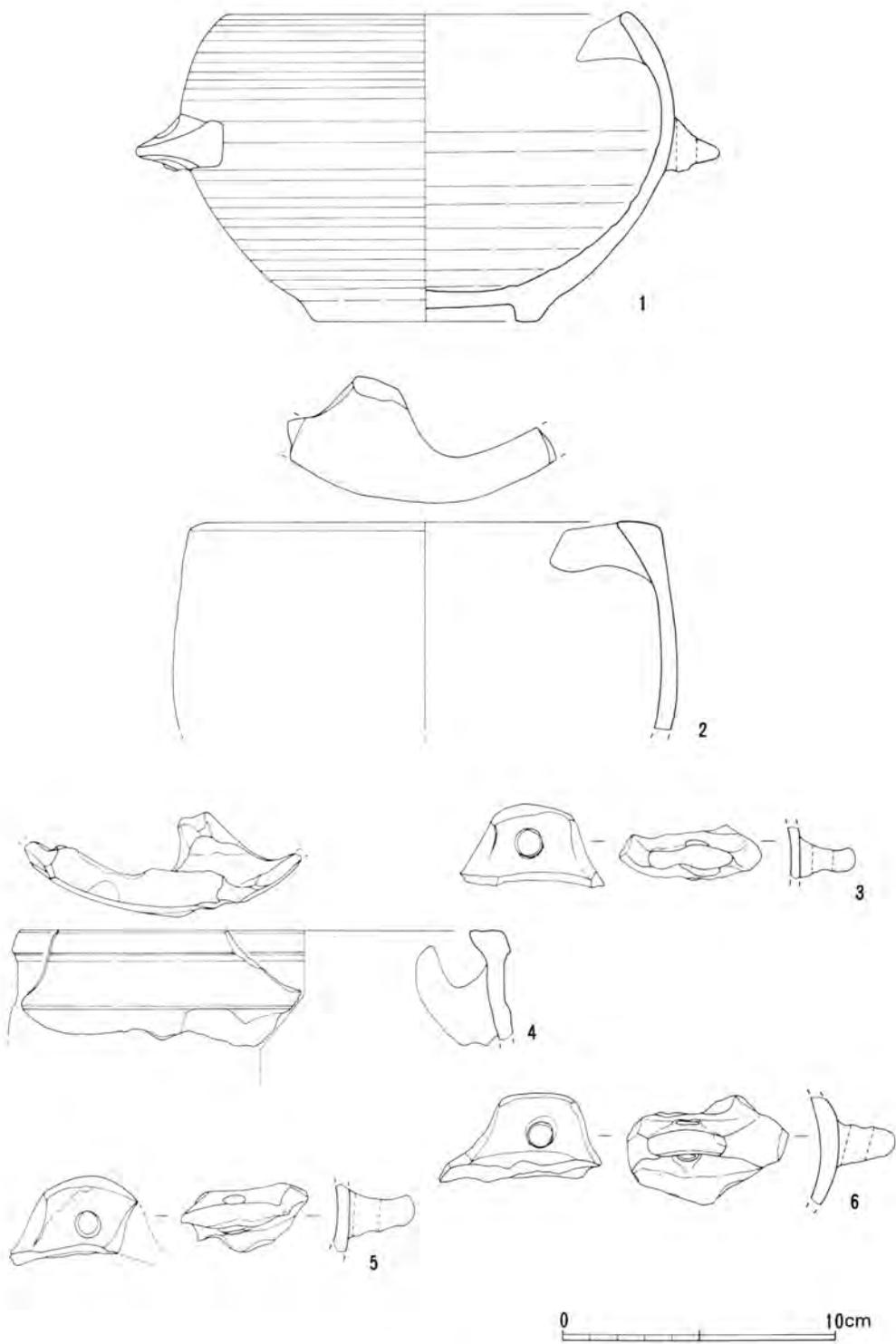
第62図 壺屋焼



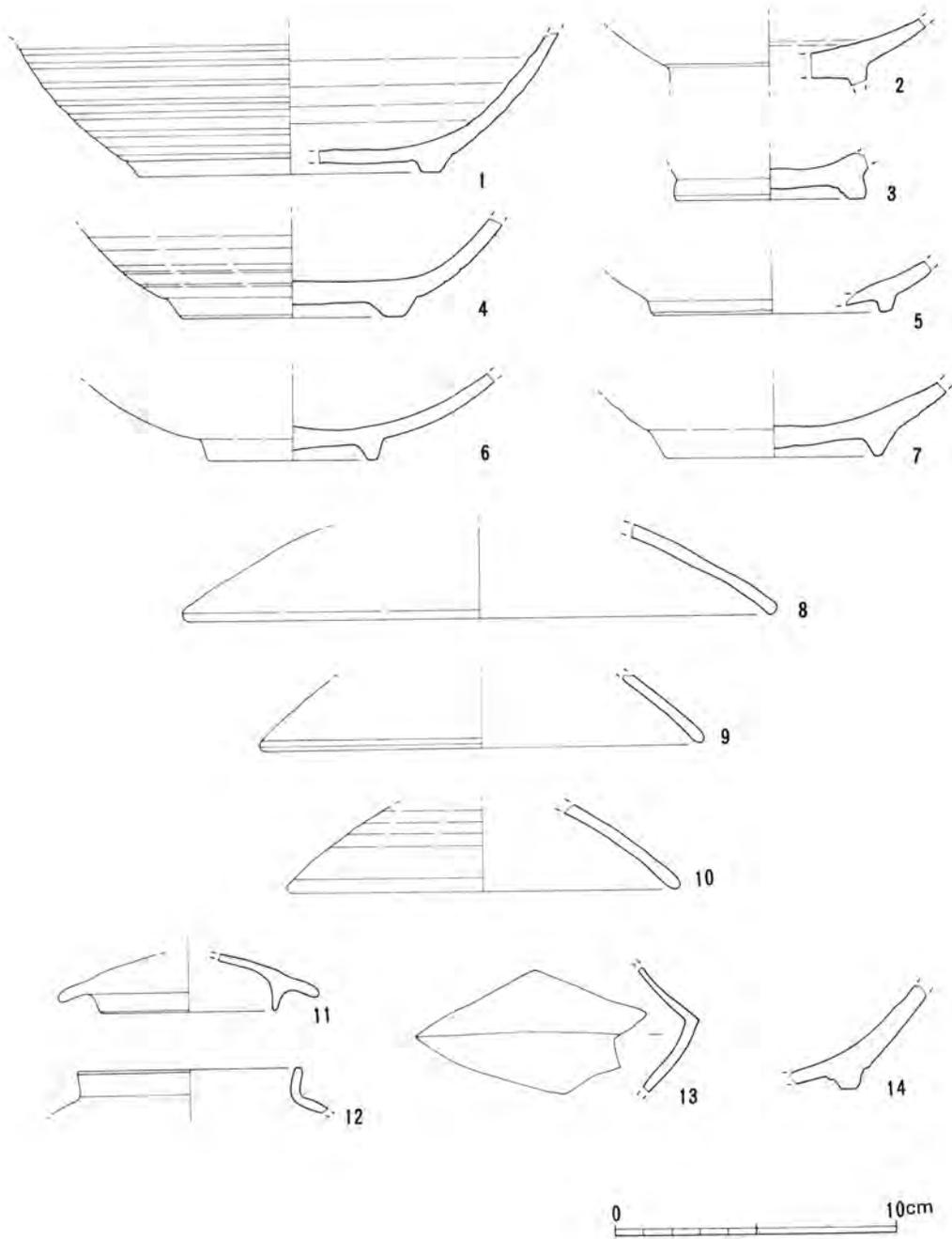
第63図 素焼



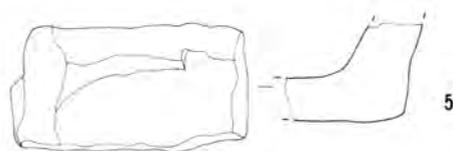
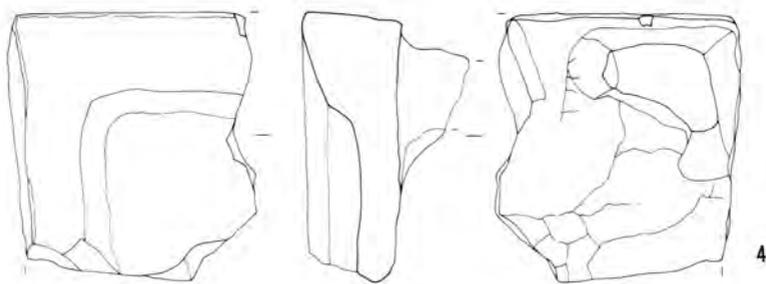
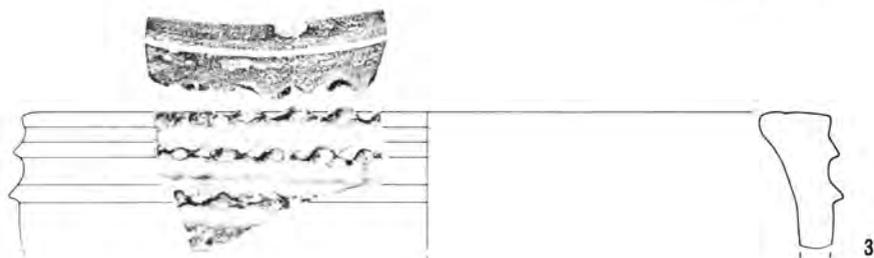
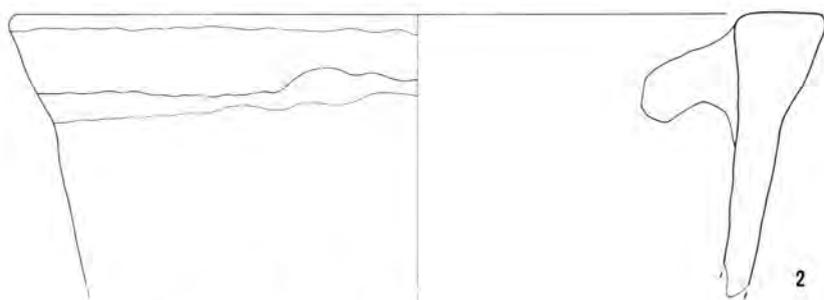
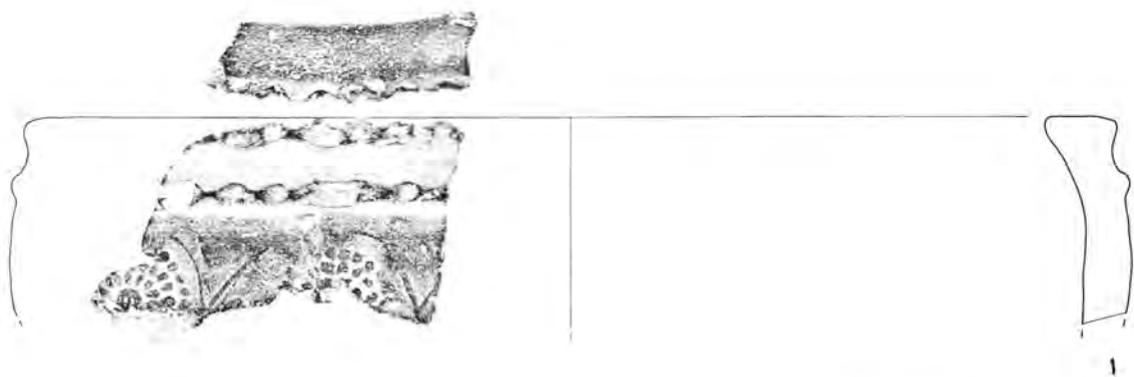
第64図 素焼



第65图 素烧

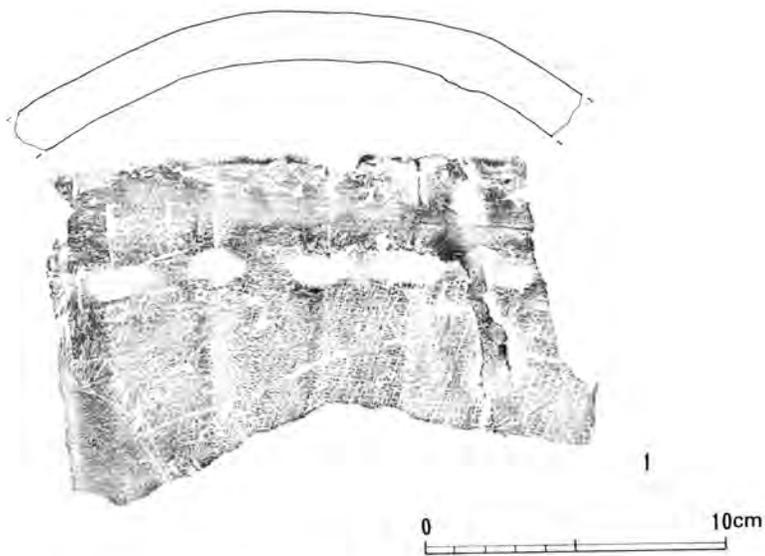


第66图 素烧

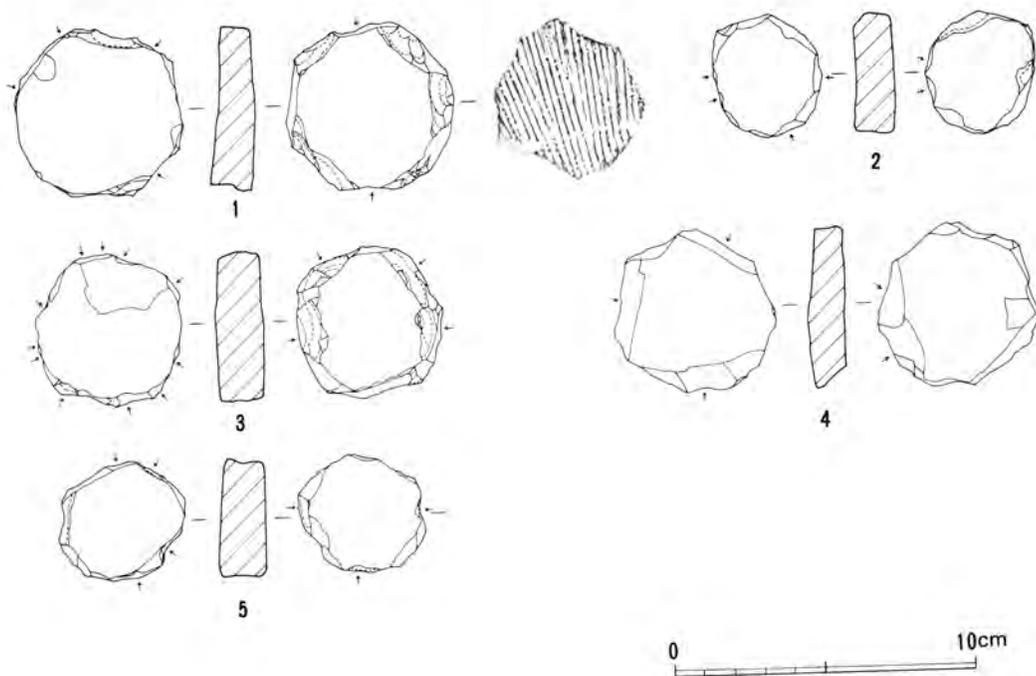


第67图 瓦器

0 10cm



第68圖 瓦



第69圖 遊具

10. 瓦質土器

瓦質土器の総数は5点である。第67図1は大型、同図3は中型の浅鉢で、口縁部の内側がやや内湾し、そのため口唇部がフラットな面をもつものである。外器面には2条から3条の突帯をもち、その上に斜めの押圧が加えられ凹凸をなしている。同図3はやや膨らむ胴部に5cm前後の蓮花文のスタンプが押印されて装飾されている。両者はいずれも手焙りの搬入品である。同図2は大型の鉢で、口縁部はやや肥厚し、内側に横位の把手をもつものである。作りは粗雑で形成時のケズリ手法が判断できるほどである。煮沸器を乗せることのできる在地産の手焙りと考えられる。同図4・5は方形状の脚台で、同図2と作りや胎土、焼成が類似したものである。

11. 遊具

遊具の総数は8点で、大型甕や播鉢、瓦などの無釉の焼物を転用したもので、青磁や釉薬を用いたものはなかった。第69図1・7・8の6cmの大型のものと、同図3・4の4cmほどの中型と、同図2・5・6の小型のもの3種類に分けることができる。円盤状にするための打ち欠きがみられるが、両面から交互に欠いたものは同図1・4・6・7で、片面から欠いたものは同図2・8、磨耗で判断できない同図2・5の小型のものがあ。同図3・4・7・8は喜名焼で、同図1・2・5・6が壺屋焼である。

ホ. 石器

石器の総数は74点で、その内第Ⅳ層出土のチャート製の打製石器と第Ⅱb層・第Ⅲ層出土の磨製石器に分けることができる。

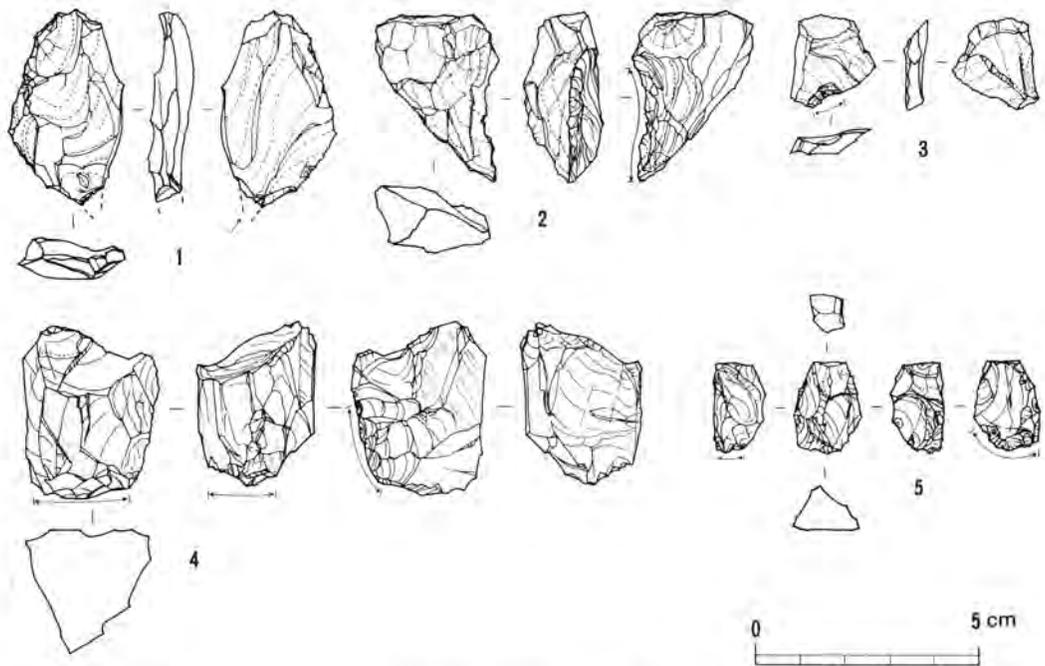
1. 打製石器

打製石器は総数14点の出土で、その内、コアやチップが9点で、あきらかに剥離に法則や使用痕が認められるのが第70図に示した5点である。

同図1は灰黒色で質の良いチャートの薄い剥片で、最終の剥離後、両端を斜めに折りV字状の刃部を作りだしている。V字状に溝を掘る工具で、彫刻刀である。使用したらしく刃部の先端は折れて欠落している。

同図2は灰褐色でやや質の悪いチャートの剥片で、正面や頭部に自然面を残すものである。最終剥離は頭部から打たれ、その際にできた鋭利な側面を刃部として使用している。棒状の物をケズルものとして使用したらしく、刃部はU字状に窪み、一方方向からの刃毀れが無数にみられる。

同図3は灰黒色で光沢をもつ質の良いチャートの薄い剥片で、不定形な剥片の鋭利な側



第70図 打製石器実測図

面を刃部として使用して工具としている。棒状の物をケズルものとして使用したらしく、下端の刃部はU字状に窪み、一方方向からの刃毀れが無数にみられる。

同図4は同図2と同様な灰褐色でやや質の悪いチャートの大型の剥片で、最終剥離後の上面観は三角形をしている。鋭利な側面は物をケズル刃部として使用し、下端部は数度の敲打痕がみられ刃潰れがみられる。

同図5は灰黒色で光沢をもつ質の良いチャートの平面四辺形をした剥片で、その技法からピエス・エスキューであると長野真一氏から教授を受けたものである。ピエス・エスキューは「多くは四辺形、両端に多くは両面加工による剥離をもつ、小片に砕かれた石器の意」と解釈されており、鹿児島県下では縄文晩期までその技法は残るといふ。同図5は下端部を刃部として使用しているらしく、多少の使用痕は残るものの、大半が欠損している。

2. 磨製石器

磨製石器の総数は60点で、その種類はボール状容器、石皿、敲石、凹石、石錘、磨石、弾球などがある。

ボール状容器は1点の出土である。第71図1はキク目サンゴ塊を用いた1/4欠損品で、幅約2.5cmの利器で抉られた容器である。手洗いなどのものに用いられたと考えられる。破損部は直線状に研磨されていることから、転用されたと考えられるが、その用途

は不明である。

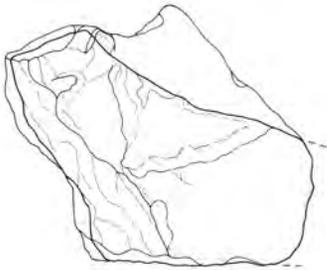
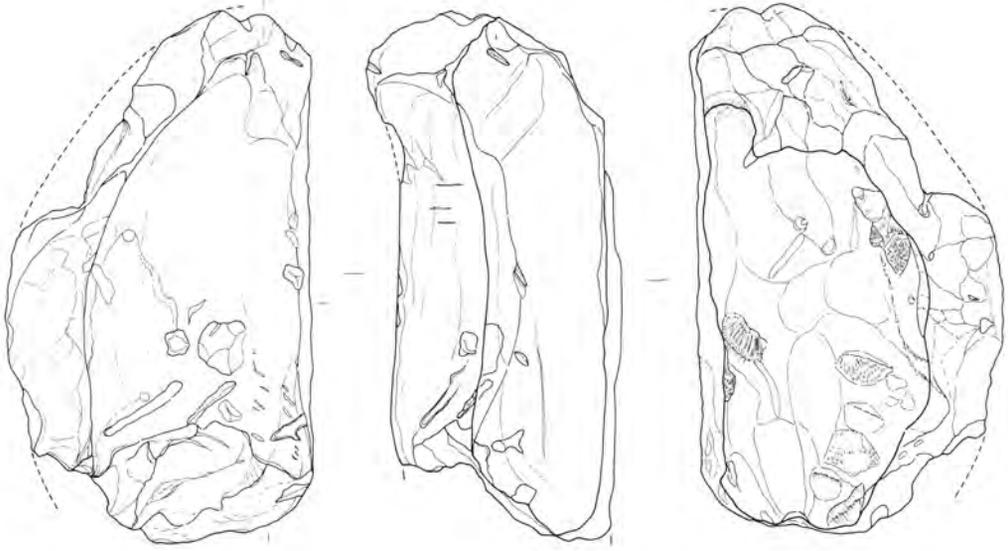
石皿は14点の出土であるが、形状が判明する大型破片5点を第71図2・第72図に掲げた。いずれの石皿も磨り面は深く窪むことがなく、やや平坦面をなしている。石質はすべて硬砂岩製（ニールビ芯）である。第71図2は1/3欠損品で、正面は3箇所集中的に磨耗痕を残す。使用中は土壌面に置いて用いたらしく、裏面の弱い凹凸面が万遍なく、水魔を受けたようなスレがみられる。第72図1は石質の木目が細かいもので、三面を欠落するものである。一方の端部は丸く下がりながら稜部まで使用された痕跡を残す。第72図2は1/4欠損品で正面や両側面に磨耗痕を残す。側面は一方方向にU字状に窪むことから刃物を砥ぐ砥石として転用したことが伺える。第72図3は両端が欠損し、1/3残るもので、やや小さめの石皿である。正面にやや弱い磨耗面を残すが、他は自然面である。第72図4は一辺を残すのみの破片で、側面に光沢をもつものである。

敲石は17点の出土であるが、形状が判明する11点を第73図1～5・7・第74図1・3・4・第75図3・5に掲げた。

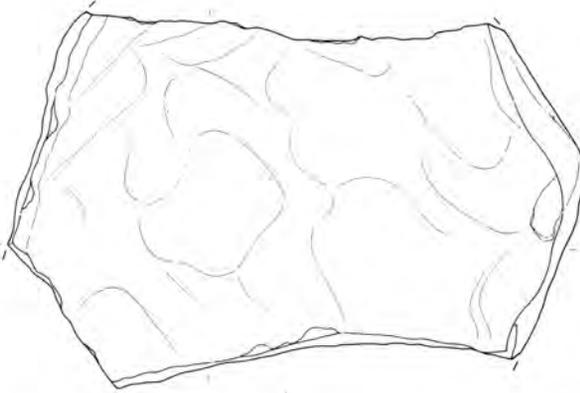
第73図1は正面の一部に自然面を残すもので、側面や頭部を粗い打ち欠きで成形し、その後、部分的に研磨を施した三角柱状の石斧破片を、敲石に転用したものである。頭部を敲石として使用したらしく、胴部の欠損部の縁辺部には手擦れの痕を残す。第73図2はやや偏平で、正面には磨耗の痕をもち、縁辺部に敲打痕の痕跡を多数残すものである。第73図3は三面を大きな打ち欠きで欠損するもので、正面には凹みをもち、両端に敲打痕をもつ併用石器である。第73図4は円礫の上・下端部に敲打痕をもつもので、裏面にはその際に薄く剥がれた面をもつ。その後も使用したらしく、縁辺部には手擦れの痕を残す。第73図5は三角柱状の円礫で、上・下端部に敲打痕をもち、正面には凹面をもつ凹石との併用石器である。第73図7はやや偏平な方柱状のもので、上・下端に敲打痕をもつものである。第74図1は1/3を欠失するもので、側面には磨耗の痕跡をもち、下端角に敲打痕をもつ。欠失部の縁辺部が手擦れがみられることから、欠失後はもっぱら敲石として使用されたと考えられる。第74図3はやや偏平な方柱状のもので、上・下端に敲打痕、正面の中央部には凹をもつ併用石器である。第74図4は胴部下半部が欠失した円筒状の典型的な敲石である。第75図3はやや太めの円筒状の敲石で、両側面に紐ズレの凹みをもつ。裏面の中央部には凹みをもつことから凹石との併用石器である。第75図5は小型で円盤状の河原石をもちいたもので、縁辺部に細かな敲打痕が面をもち、それが多面体をなしているものである。表裏面の中央部には凹みをもち、凹石との併用石器である。

磨石は総数13点の出土であるが、形状の判明する4点を第73図6・第74図2・6・第75図2に示した。

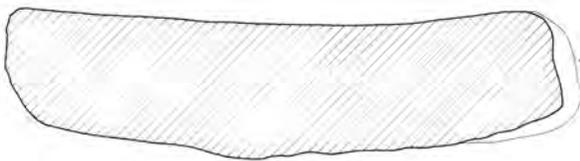
第73図6は立方形状の火山性物質（軽石）で淡黄褐色をなすもので、強弱はあるものの6面に研磨痕をもつ。ごく最近まで鉄製鍋の焦げや煤をスリ落とすものとして使用され



1

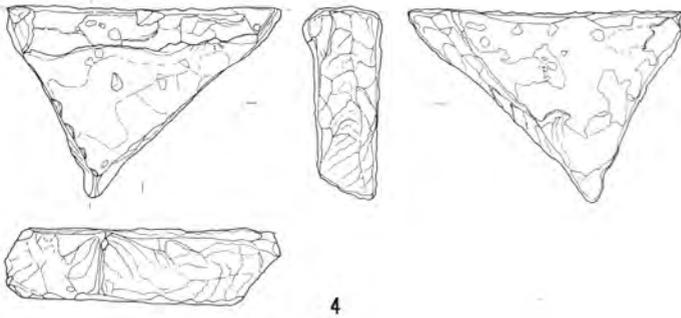
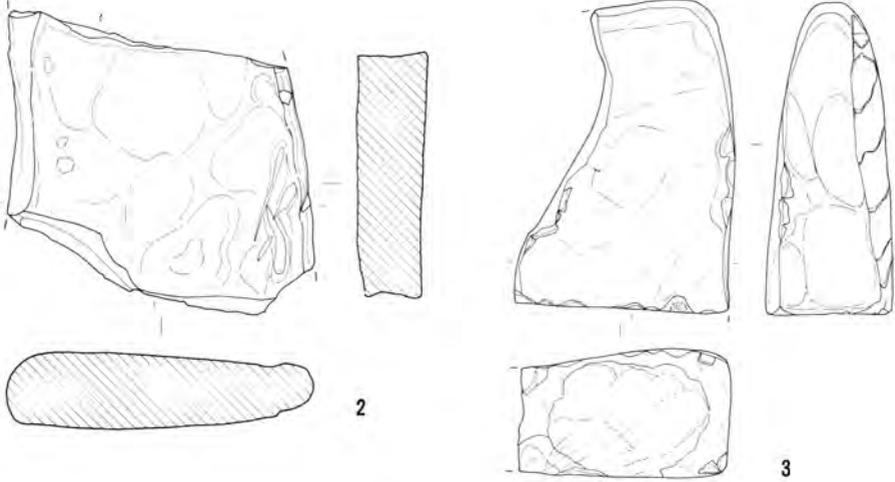
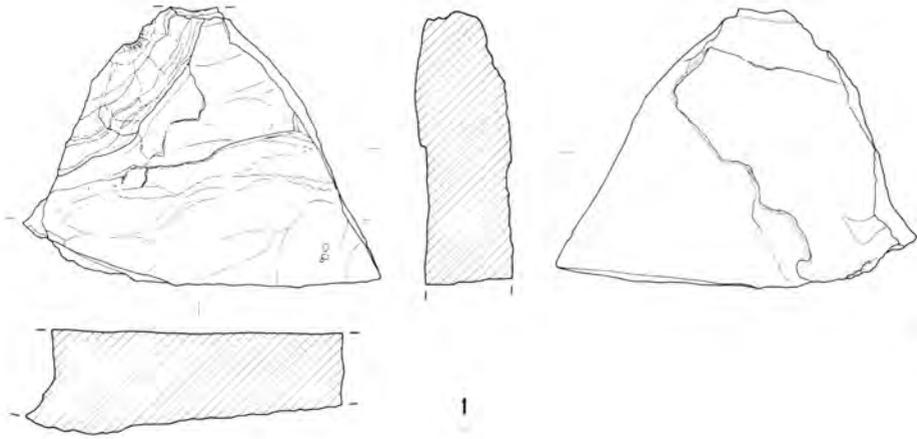


2



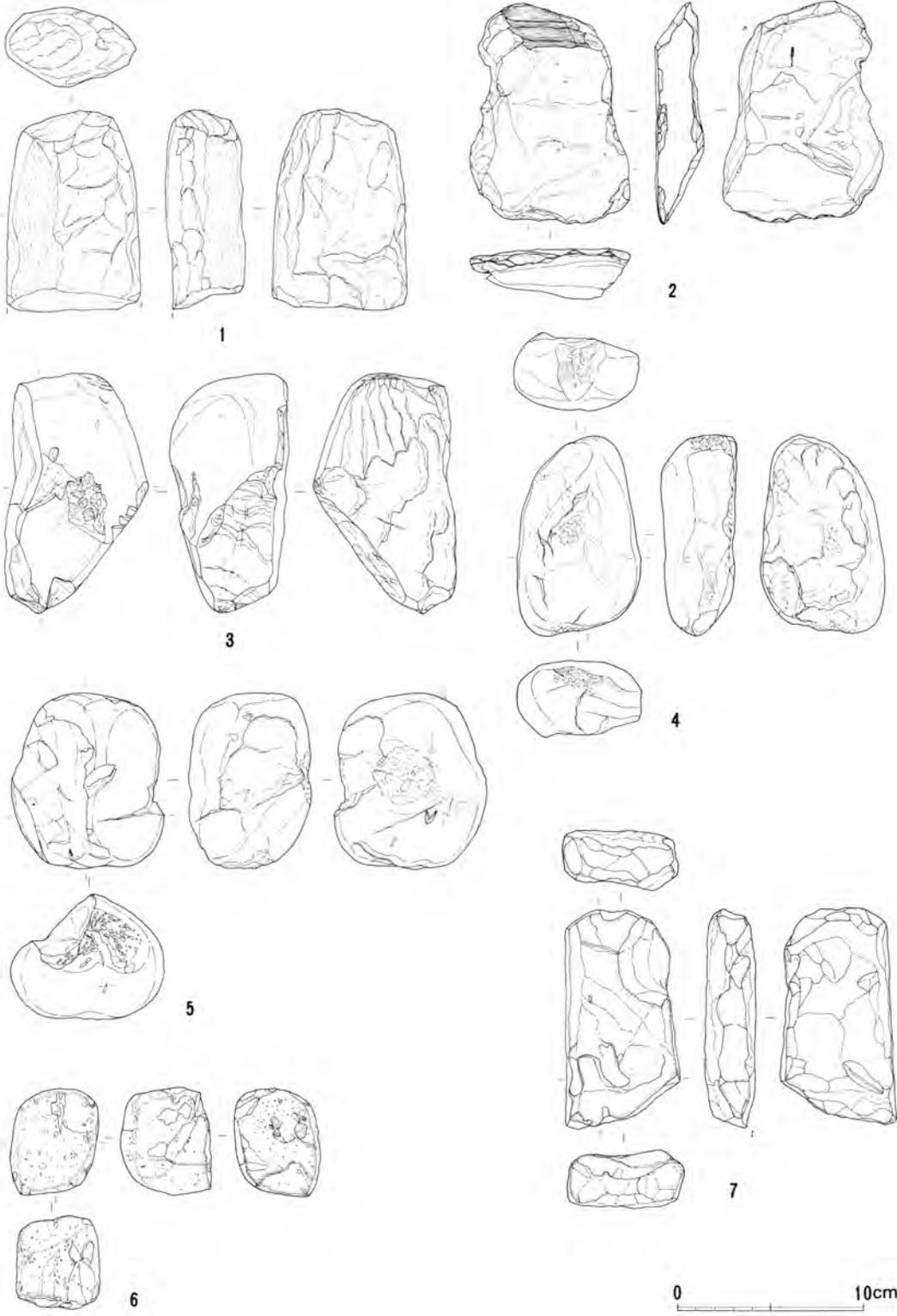
0 10cm

第71図 石器

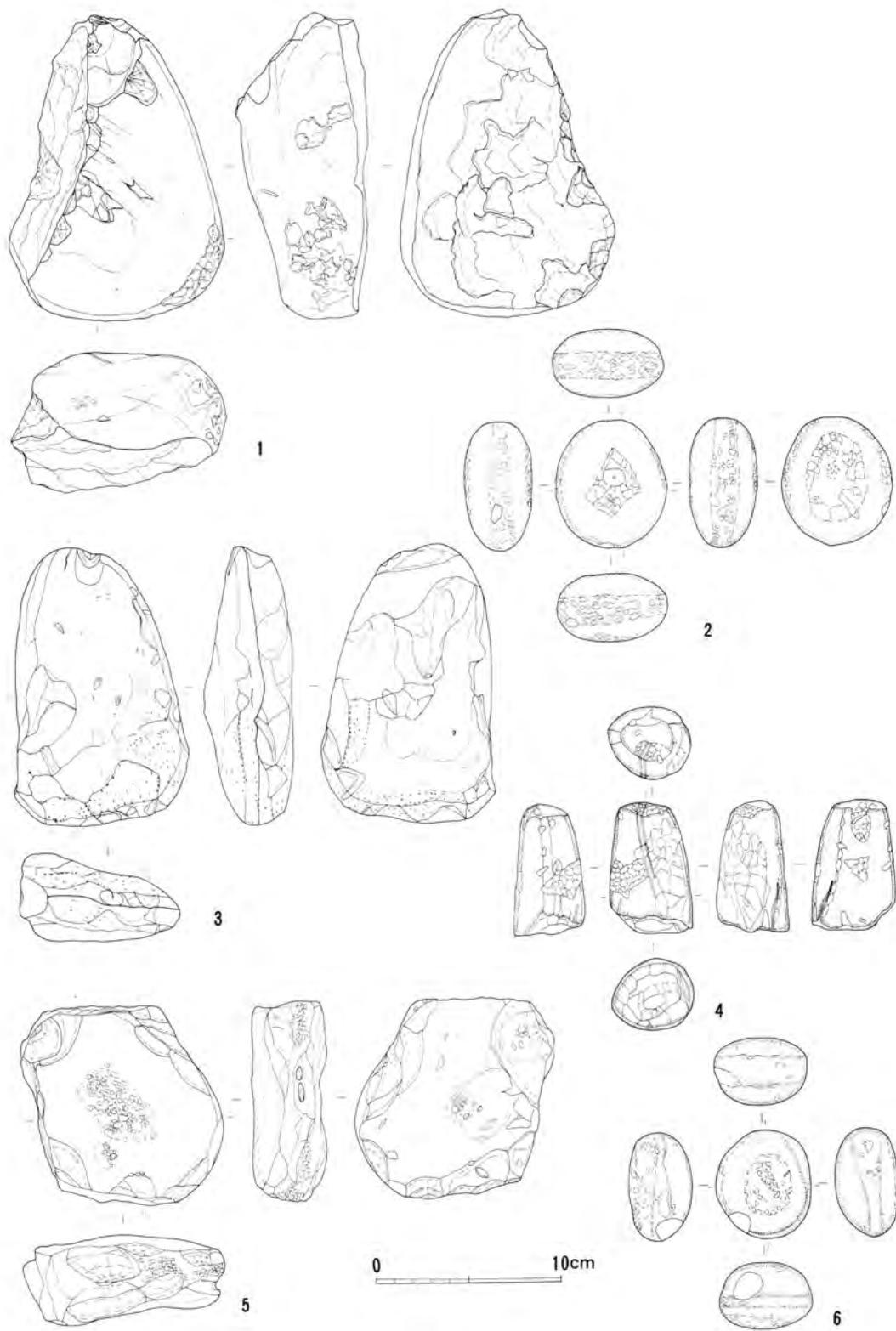


0 10cm

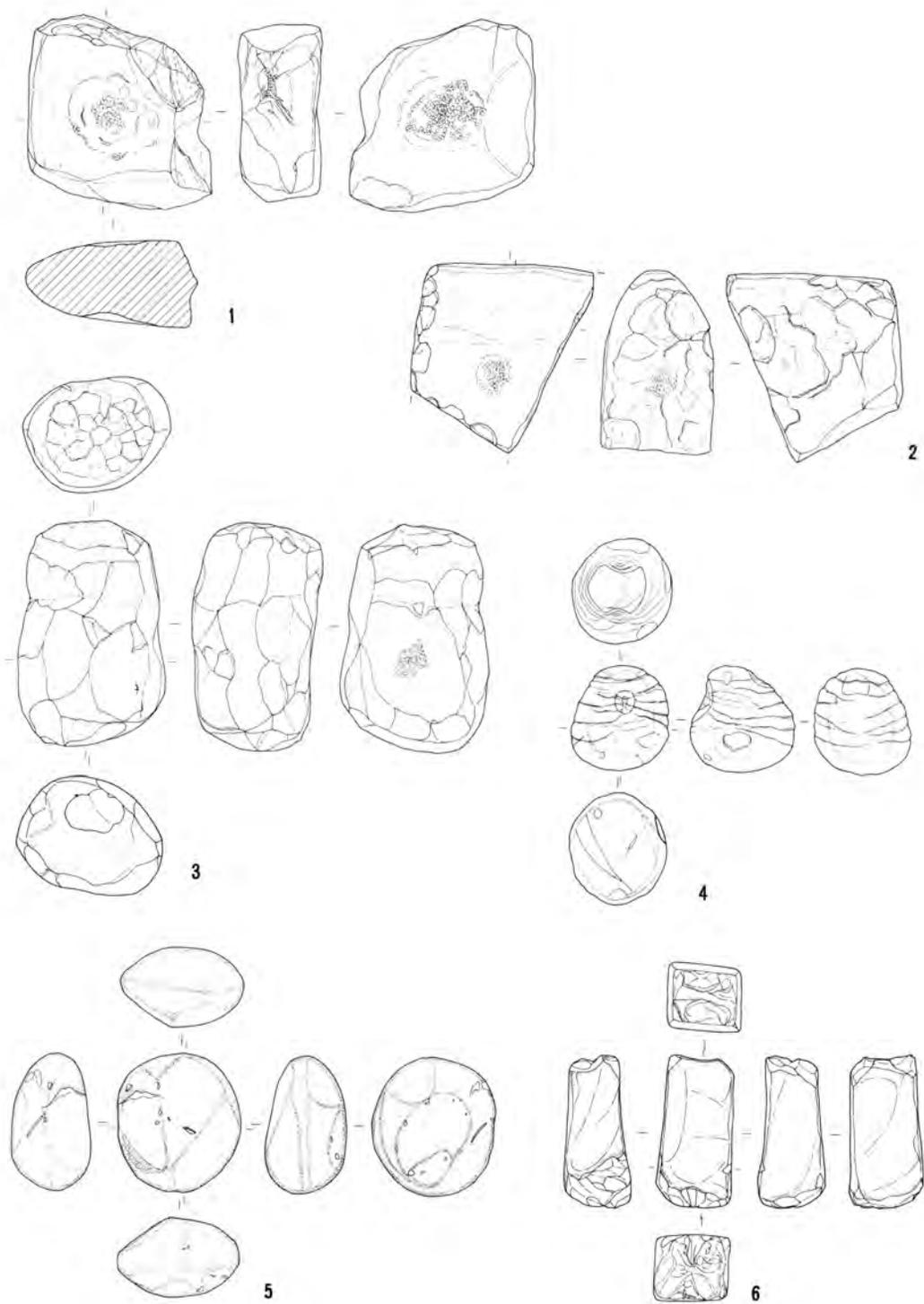
第72図 石器



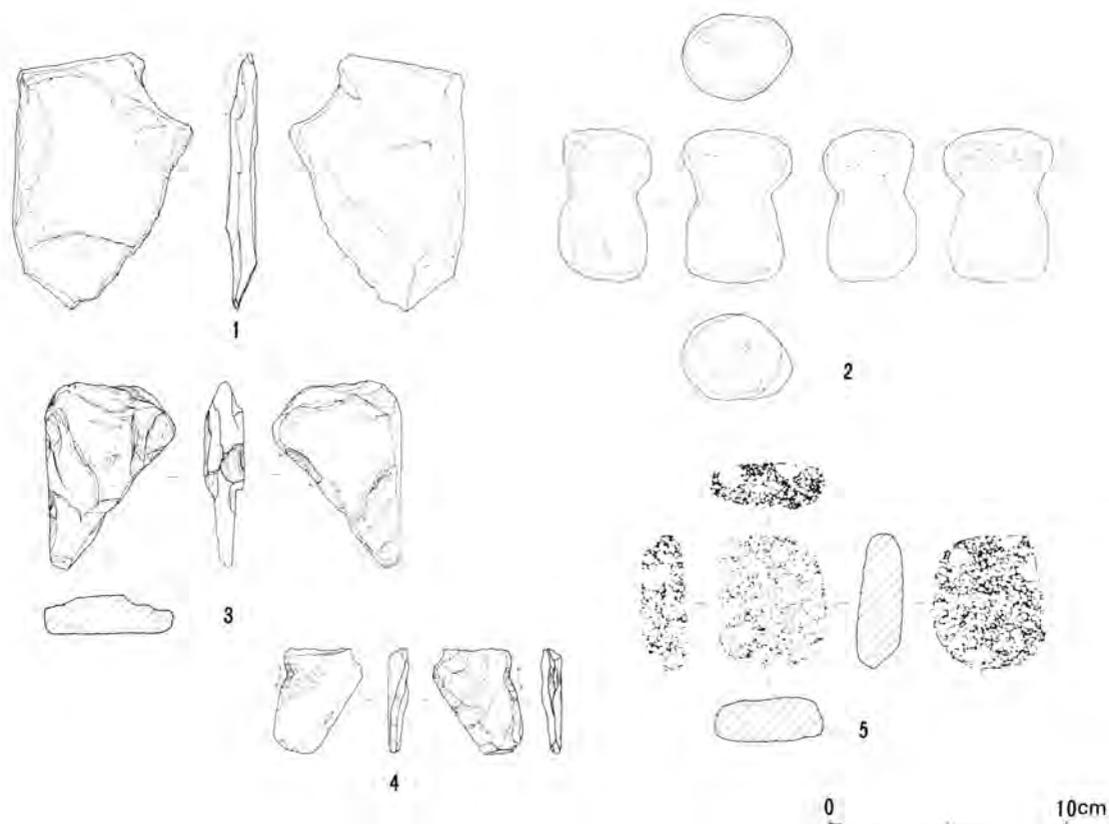
第73图 石器



第74图 石器



第75图 石器



第76図 石器

たものに類似している。第74図2・6は小型で円盤状の河原石を用いたもので、縁辺部に細かな研磨痕の面をもち、それが多面体をなしているものである。第75図2は石皿の破片を転用したもので、表裏面には弱い凹みがみられ、凹石との併用石器でもある。三方の破損部も手擦れなどで磨耗している。

凹石は総数2点のみの出土で、第74図5・第75図1に示した。

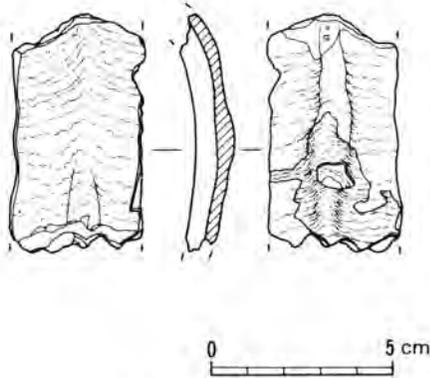
第74図5・第75図1はやや偏平で隅丸方形形状のもので、縁辺部が敲打後の手擦れがみられる、表裏面に凹みをもつものである。

石錘は1点のみの出土である。第76図2は円筒状の胴部に袂りを巡らしたもので、正面観はいわゆる楔形をなしている。民具の筵を編む際に用いる錘に類似している。

砥石は6点の出土で、形状が明瞭な第75図6・第76図1を示した。

第75図6は小型で四角柱の携帯用の砥石で、四面を刃物などの研ぎ出しに用いたものである。他の4点もすべて同様なものであった。第76図1は極めて薄いホルンフェルス製のもので、正面は細かな研磨面をもつが、他の五面は破損後の粗い研磨痕を残す。硯からの転用の可能性がある。

弾球は2点の出土である。第75図4は直径5cmほどの円礫である。底面に数箇所の打痕をもつが、他は自然面である。一応、弾球として扱って置く。



第77図 貝製品

へ. 貝製品

第77図1は今回の唯一の貝製品である。ヤコウガイ製の貝匙の両端が欠如する破損品である。柄の幅は3.3cmで、残欠部の長さは6.4cmである。柄の両端部は丸く整えられているが、一様でなく波形を描く。背部は光沢のある真珠層の露頭はみられるが螺肋頂部は残る。

ト. 古銭

古銭は総数9点の出土で、その内中国古銭が3点、日本古銭が1点、鳩目銭が4点、現代銭1点であった。

第78図1は1/3破損品で□元□□と、二番目の元と四番目の下字の貝が隷書でみられるものである。同図2は洪武通宝、同図3は永楽通宝、同図4は寛永通宝、同図5～8は鳩目銭である。

b. 自然遺物

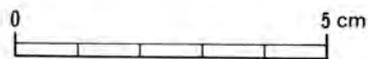
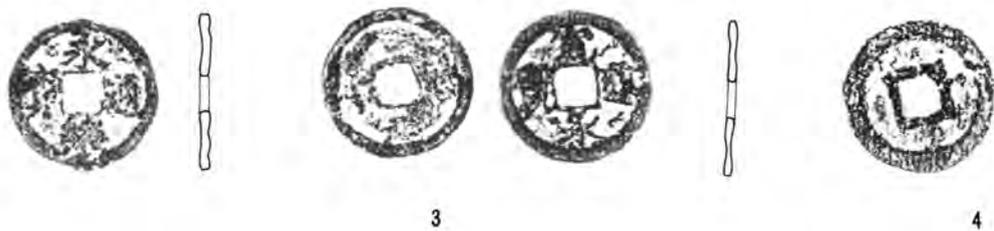
自然遺物は貝類と獣・漁骨がみられたが、漁骨は極めて少なかったので、今回は割愛した。

イ. 貝類

貝類の総数は5365点で貝種は153種に及んだ。集計を第21～24表に示した。貝類の所見については、千葉県立中央博物館学芸員の黒住耐二先生の論功に譲りたい。

ロ. 脊椎動物遺体

獣骨などの脊椎動物遺体は6種におよぶことが明らかになった。その具体的な所見については琉球大学農学部助教授の川島由次先生の論功に譲りたい。



第78図 古銭

第2表 土器 くびれ 観察一覧

挿図番号・図版番号	分類	口径器 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 其他の特徴	産	年代	出土地点
第10 図1	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 外側が指痕のようなものが見られる			982D-7 N
図2	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部すこし厚みがあり外反している			954D-7 10/20 N
図3	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部「く」の字に外反			518C-8 N
図4	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部ゆるやかに外反 口縁部一部破損			518C-8 N
図5	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部外反口縁			979D-7 10/20 N
図6	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片。手触りがガサガサ 口縁部「く」の字に外反			545C-7 N
図7	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部外反			979D-7 10/20 N
図8	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部外反			979D-7 10/20 N
図9	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部外反			1119C-7-8 表採
図10	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部大きく外反			411C-7 N
図11	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部ゆるやかに外反			333C-7 20/30 N
図12	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部が外反している			979D-7 10/20 N
図13	土器	— — —	レンガ色 粗粒 砂混入			口縁部小破片 手触りがガサガサ 口縁部が外反している			320C-6 N

第2表 土器 くびれ 観察一覧

第10 図14	土器	— — —	レンガ色 断面中央暗 灰色サンド イッチ状 微粒砂混入			口縁部小破片 手触りがササガサ 口縁部先端がふくらんでい て「く」の字に外反		1137D-7 D-8 攪乱
図15	土器	— — —	レンガ色 微粒砂 混入			口縁部小破片 手触りがササガサ 外口縁部がふくらみ外面に 指痕のようなものがみられ る		981D-7 N
図16	土器	— — —	レンガ色 微粒砂 混入			口縁部小破片 手触りがササガサ 外口辺下に指痕のようなも のがみられる		500C-7 N
図17	土器	— — —	レンガ色 微粒砂 混入			口縁部小破片 手触りがササガサ 口縁部「く」の字に外反指 痕のようなものがみられる		981D-7 N
図18	土器	— — —	レンガ色 微粒砂 混入			口縁部小破片 手触りがササガサ 口縁部ゆるやかに外反		287C-7 10/15 N
図19	土器	— — —	レンガ色 微粒砂 混入			口縁部小破片 手触りがササガサ 口縁部大きく「く」の字に 外反		958D-7 No.1ビョウ N
図20	土器	— — —	レンガ色 微粒砂 混入			口縁部小破片 手触りがササガサ 口縁部ゆるやかに外反指痕 のようなものがみられる		979D-7 10/20 N
図21	土器	— — —	レンガ色 断面中央暗 灰色サンド イッチ状			口縁部小破片 手触りがササガサ 口縁部外反している		1129D-E -7 攪乱
図22	土器	— — —	レンガ色 微粒子			口縁部小破片 手触りがササガサ 口縁部外反 外側口辺に指痕のようなも のがみられる		936D-7 10/20 N
図23	土器	— — —	レンガ色 微粒子			口縁部小破片 手触りがササガサ 外側口辺部の下はへらでけ ずられている		1121C-7 D-7 表採
図24	土器	— — —	レンガ色 断面中央暗 灰色サンド イッチ状 粗粒砂混入			口縁部小破片 手触りツルツル 口縁部やや外反		Noなし
図25	土器	— — —	レンガ色 断面中央暗 灰色サンド イッチ状 粗粒砂混入			口縁部小破片 手触りツルツル 口縁部外反している断面三 角形の凸帯を横位に貼付す る厚さ5mmほど細片の為そ 他の特徴は不明		383C-6 N

第2表 土器 くびれ 観察一覧

第10 図26	土器	— — —	レンガ色 断面中央暗 灰色サンド イッチ状 粗粒砂混入			口縁部小破片 手触りツルツル 口縁部外反している断面三 角形の凸帯を横位に貼付す る厚さ10mmほど細片の為そ 他の特徴は不明			397C-6 N
図27	土器	— — —	レンガ色 断面中央暗 灰色サンド イッチ状 粗粒砂混入			口縁部小破片 手触りツルツル 口縁部やや外反			410C-6 N
図28	土器	— — —	レンガ色 断面中央か ら内側は変 色している様 粗粒砂混入			口縁部小破片 手触りツルツル 口縁部やや外反			455C-7 N
図29	土器	— — —	レンガ色 微粒砂混入			口縁部小破片 手触りツルツル 口縁先端厚みがあり外反し ている			901E-3 II b
図30	土器	— — —	レンガ色 微粒砂混入			口縁部小破片 手触りツルツル 口縁先端厚みがあり外反し ている			954D-7 10/20 N
図31	土器	— — —	明レンガ色 微粒砂混入			口縁部から胴部にかけての 破片 胴部の部分は丸みを帯び頸 部部分は少なくほみ口縁 部へゆるやかに外反してい る			1003D-7 0/10 N
図32	土器	— — —	レンガ色 断面中央暗 黒灰色サン ドイッチ状 微粒子			口縁部破片 手触りツルツルしている 口縁部がゆるやかに外反し ている			676C-7 N
図33	土器	— — —	レンガ色 微粒子			口縁部小破片 先端部分破損 手触りツルツル 縦位に7mmほどの凸を貼位 している その他の特徴は不明			1123C-D -8 表採
図34	土器	— — —	黒色 微粒子			口縁部小破片口縁先端部分 はかけている縦位に3mmほ どの凸帯を貼位している細 片の為その他の特徴は不明			896D-7 N
図35	土器	6.9 — —	レンガ色 微粒砂混入			口縁部小破片 ツボ形、器形は丸味をおび ていて口縁部までやや水直 になっている			979D-7 10/20 N
図36	土器	4.3 — —	レンガ色 微粒砂混入			口縁部小破片 ツボ形、器形は丸味をおび ていて口縁部まで水直にな っている			936D-7 10/20 N

第2表 土器 くびれ 観察一覧

第10 図37	土器	— — —	明レンガ色 粗粒砂混入 断面中央部 暗茶色サン ドイッチ状			ナベ形土器口縁部の一部 横位に厚さ5mmほど大きめ の取手がついている			307C-7 20/25 N
図38	土器	— — —	明レンガ色 粗粒砂混入			ナベ形土器口縁部の一部 取手の先端は破損			334C-8 0/5 I
図39	土器	— — —	明レンガ色 粗粒砂混入 断面中央部 暗茶色サン ドイッチ状			ナベ形土器口縁部の一部 横位に厚さ5mmほど取手が ついている 取手は斜下に向いている			170E-6 I
図40	土器	— — —	明レンガ色 粗粒砂混入 断面中央部 暗茶色サン ドイッチ状			ナベ形土器底部の一部 厚みのある底部で外端が丸 みがあり平底である			Noなし

第2表 土器 くびれ工類泥質 観察一覧

挿図番号・図版番号	分類	口径 底器 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 その他の特徴	産年	年代	出土地点
第11 図1	土器	— 5.0 —	内面淡茶色 断面中央と 底面暗灰色 微砂粒混入			外底はくびれ胴部へ開く ザラザラの手ざわり			640E-3 II a
図2	土器	— 6.0 —	外面、内面淡黄色 断面中央暗灰色 粗砂粒混入			ゆるやかなカーブを示しながら 胴部へ移行する ザラザラの手ざわり			980D-7 N
図3	土器	— 5.0 —	外面、内面淡茶色 断面中央暗灰色 黒色礫物混入			ゆるやかなカーブを示しながら 胴部へ移行する ザラザラの手ざわり			676C-7 N
図4	土器	— 7.0 —	内面、外面淡茶色 断面中央灰色 微砂粒混入			底面の部分が凸凹になって いる外底部分ゆるやかにくびれ ザラザラの手ざわり			455C-7 N
図5	土器	— 7.5 —	内面、外面淡茶色 断面中央灰色 有色礫物混入			底面部分の中央部分がくぼ んでいる ザラザラの手ざわり			437C-6 N
図6	土器	— 6.0 —	内面、外面淡茶色 断面中央暗灰色 黒色礫物混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり			981D-7 N
図7	土器	— 5.7 —	内面、外面淡黄色 断面中央灰色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり			954D-7 10/20 N
図8	土器	— 6.5 —	内面淡茶色 断面中央、 底面灰色 粗砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ツルツルの手ざわり			437C-6 N
図9	土器	— 6.3 —	内面淡茶色 断面中央、 底面灰色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり			936D-7 10/20 N
図10	土器	— 6.8 —	内面、断面 中央暗灰色 外面、淡茶色 粗砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり			539D-8 N
図11	土器	— 5.7 —	外面、淡茶色 断面中央、 底面灰色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ツルツルの手ざわり			980D-7 N
図12	土器	— 6.3 —	両面灰色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ツルツルの手ざわり			824D-7 N
図13	土器	— 6.0 —	両面淡茶色 微砂粒混入			下端部でくびれて胴部へ開く ツルツルの手ざわり			632C-7 20/30 N

第2表 土器 くびれ工類泥質 観察一覧

第11 図14	土器	— 4.5 —	両面赤茶色 断面中央暗茶色 微砂粒混入			底面はやや厚くゆるやかな カーブで胴部へ移行 ザラザラの手ざわり		437C-6 N
図15	土器	— 5.5 —	内面、断面中央 暗灰色、外 面 淡茶色 粗砂粒混入			下端部でくびれて胴部へ開 く。底面は厚い。ザラザラ の手ざわり		979D-7 10/20 N
図16	土器	— 5.0 —	内面淡茶色 断面中央、 外面灰色 粗砂粒、 貝殻片混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		287C-7 10/15 N
図17	土器	— 5.0 —	両面淡茶色 断面中央灰色 粗砂粒混入			底面からストレートに開く ザラザラの手ざわり		387D-8 II
図18	土器	— 5.2 —	両面淡茶色 断面中央灰色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		640E-3 II a
図19	土器	— 6.0 —	両面淡黄色 断面中央暗灰色 粗砂粒混入			下端部でくびれ胴部へ開く ザラザラの手ざわり		609D-7 N
図20	土器	— 5.2 —	内面明茶色 断面中央、 外面淡黄色 粗砂粒、 貝殻片混入			底面からストレートに開く ザラザラの手ざわり		545C-7 N
図21	土器	— 6.0 —	内面灰色 外面淡茶色 黒色礫物、ガ ラス質礫物混入			底面からストレートに開く ザラザラの手ざわり		455C-7 N
図22	土器	— 5.2 —	内面淡茶色 断面中央、 底面暗灰色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		1120C-7・8 表
図23	土器	— 5.0 —	内面、断面 中央、灰色 外面淡茶色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		1129D E-7 攪乱
図24	土器	— 4.5 —	内面、外面淡茶色 断面中央灰色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行。底面は厚い。 ザラザラの手ざわり		718E-6 0/10 II a
図25	土器	— 4.5 —	両面明茶色 断面中央灰色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ツルツルの手ざわり		481C-7 N
図26	土器	— 5.3 —	両面淡茶色 微砂粒混入			下端部がくびれている ザラザラの手ざわり		979D-7 10/20 N
図27	土器	— 5.3 —	両面淡茶色 粗砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ツルツルの手ざわり		936D-7 10/20 N

第2表 土器 くびれ工類泥質 観察一覧

第11 図28	土器	— 6.5	両面淡黄色 粗砂粒混入			下端でくびれ胴部へ開く ザラザラの手ざわり		612D-7 N
図29	土器	— 4.0	両面明茶色 粗砂粒混入			底部が全部残っている 表面がツルツルしている ゆるやかなカーブで胴部へ 移行		1137D-7-8 攪乱
図30	土器	— 5.2	両面淡茶色 微砂粒混入			下端でくびれ胴部へ開く ザラザラの手ざわり		321C-7 N
図31	土器	— 2.8	両面淡黄色 黒色 礫物 微砂粒混入			底面の厚みがありゆるやか なカーブで胴部へ移行 ザラザラの手ざわり		640E-3 II a
図32	土器	— 4.0	両面淡茶色 断面中央灰色 粗砂粒混入			下端でくびれ胴部へ開く ザラザラの手ざわり		481C-7 N
図33	土器	— 5.0	両面淡茶色 断面中央灰色 粗砂粒、 貝殻片混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ツルツルの手ざわり		958D-7 N
図34	土器	— 4.7	内面淡茶色 底面灰色 粗砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ツルツルの手ざわり		355C-7 N
図35	土器	— 4.0	両面淡茶色 断面中央灰色 黒色礫物混入			底面の中央が盛り上がって いる ザラザラの手ざわり		1121CD-7 表採
図36	土器	— 3.9	内面淡黄色 断面中央、 底面、灰色 黒色礫物混入			底面からストレートに開く ザラザラの手ざわり		408表
図37	土器	— 1.8	両面明茶色 粗砂粒、 貝殻片混入			底面の厚みがあり底面から ストレートに開く ザラザラの手ざわり		333C-7 25/30 N
図38	土器	— 1.5	両面淡黄色 有色物質 微砂粒混入			下端でくびれ胴部へ開く ツルツルの手ざわり		640E-3 II a
図39	土器	— 5.0	両面淡茶色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		1003D-7 0/10 N
図40	土器	— 5.0	両面淡茶色 粗砂粒混入			下端でくびれ胴部へ開く ザラザラの手ざわり		609D-7 N
図41	土器	— 底 部	両面淡茶色 微砂粒混入			下端でくびれ胴部へ開く ザラザラの手ざわり		640E-3 II a
図42	土器	— 底 部	両面淡茶色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		612D-7 N

第2表 土器 くびれ工類泥質 観察一覧

第11 図43	土器	— 底 部 —	両面淡茶色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		849D-7 N
図44	土器	— 底 部 —	両面淡茶色 微砂粒混入			下端でくびれ胴部へ開く ツルツルの手ざわり		612D-7 N
図45	土器	— 底 部 —	内面淡黄色 断面中央、 底面、灰色 有色物質、 微砂粒混入			下端でくびれ胴部へ開く ザラザラの手ざわり		612D-7 N
図46	土器	— 底 部 —	内面、断面 中央灰色 底面淡茶色 粗砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		677D-8 N
図47	土器	— 底 部 —	両面暗灰色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		981D-7 N
図48	土器	— 底 部 —	内面明茶色 断面中央、 底面灰色 粗砂粒混入			底面からストレートに開く ザラザラの手ざわり		401C-7 N
図49	土器	— 底 部 —	両面淡茶色 微砂粒混入			底面からストレートに開く ザラザラの手ざわり		402C-8 N
図50	土器	— 底 部 —	内面灰色 外面淡茶色 粗砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		421D-6 (399) Ⅲ
図51	土器	— 底 部 —	両面淡茶色 有色物質 粗砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		402C-8 N
図52	土器	— 底 部 —	両面淡茶色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		402C-8 N
図53	土器	— 底 部 —	両面淡茶色 粗砂粒混入			底面からストレートに開く ザラザラの手ざわり		1121C-D -7 表採
図54	土器	— 底 部 —	両面淡茶色 粗砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		372C-6 N
図55	土器	— 底 部 —	両面淡茶色 微砂粒混入			底面からストレートに開く ザラザラの手ざわり		612D-7 N
図56	土器	— 4.0 —	両面淡黄色 断面中央灰色 黒色礫物混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		1137D-7 D-8 攪乱
図57	土器	— 4.2 —	内面灰色、 外面淡茶色 微砂粒混入			ゆるやかなカーブで胴部へ 移行 ザラザラの手ざわり		437C-6 N

第2表 土器 くびれ工類泥質 観察一覧

第11 図58	土器	— 4.4 —	両面淡茶色 黒色礦物混入		底面からストレートに開く ザラザラの手ざわり		896D-7 10/20 N
------------	----	---------------	-----------------	--	---------------------------	--	----------------------

第2表 土器 観察一覧

挿図 番号・ 図版 番号	分 類	口底器 径高 (cm)	素 地	釉色・施釉	貫 入	器形・文様 その他の特徴	産 年 代	出土地点
第12 図1	土 器	— — —	内外レンガ 色中央に灰 褐色のサン ド状粗粒砂 混 入	な し	な し	口縁部は僅かにくびれて外 反。ザラザラの手ざわり。内 側から外口縁部に粘土を補 足。指頭押圧痕がある。口 唇部は波状。口縁部破片		585C-7 274 N
図2	土 器	— — —	レンガ色 粗 粒 混 入	な し	な し	口縁部は長くやや直立気味 に外反。ザラザラの手触り 口縁部破片		897D-7 10/20 N
図3	土 器	— — —	レンガ色 微 粒 子	な し	な し	口縁部は「く」の字状にそ り返っている。ツルツル 口唇は面取りされて平坦。 外面が黒色になっている。 丁寧に形成。口縁部破片		655E-5 30/40 II b
図4	土 器	— — —	レンガ色 微 粒 混 入	な し	な し	口縁部は僅かにくびれ外反 ツルツルの手ざわり 口縁部の小破片		541D-8 N
図5	土 器	— — —	明 る い レンガ色 粗 粒 混 入	な し	な し	口縁部は若干内湾気味 口唇は面取りされて平坦で 肥厚する。ザラザラの手ざ わり。口縁部小破片		1046E-7 N
図6	土 器	— — —	濃いレンガ色 微 粒 混 入	な し	な し	口縁部はやや直線的(水平) 口唇は平坦で肥厚してい る。ツルツルの手ざわり。 口縁部小破片		1017E-5 60/70 III
図7	土 器	— — —	薄いレンガ色 粗 粒 混 入	な し	な し	胴部はやや直線的にふくら み口縁部にかけてはやや内 傾する。口縁外に手痕が残 る。口唇僅かに凹凸がある ザラザラの手ざわり。 口縁部破片		701C-7 N
図8	土 器	— — —	レンガ色と 灰 褐 色 粗 粒 混 入	な し	な し	胴部から僅かに開いて口縁 部がやや直線的に内傾 口縁部破片。ザラザラの手 ざわり		954D-7 10/20 N
図9	土 器	— — —	レンガ色と 灰 白 色 粗 粒 混 入	な し	な し	胴部から口縁部にかけて内 傾している ザラザラの手触り 口縁部破片		612D-7 N
図10	土 器	— — —	暗レンガ色 で灰褐色を サンド状 微 粒 混 入	な し	な し	口縁部は内湾気味。口唇部 は平坦。楕円形状の瘤状把 手が縦位に貼り付ける(把 手縦約3.5cm横2.5cm厚さ1 cm)器厚は厚い。口縁部破 片。ツルツルの手ざわり		56D-5 I

第2表 土器 観察一覧

第12 図11	土器	— — —	明レンガ色 微粒砂入 混	な し	な し	口縁部は内湾気味。口唇部は平坦。瘤状把手が縦位に貼り付ける(縦3cm横2cm厚さ1cm)器厚はやや厚い。把手の外面は中央部が凹む。ツルツルの手ざわり滑石混入 口縁部小破片		307C-7 20/25 V
図12	土器	— — —	明レンガ色 微粒砂入 混	な し	な し	口縁部は内湾気味。瘤状把手が縦位に貼りつけられる(縦3.5cm横2cm厚さ1.5cm)器厚は厚い。把手外面は指押圧痕で中央部が凸る。口唇部一部破損 口縁部小破片。ツルツルの手ざわり		696E-7 40/50 II b
図13	土器	— — —	レンガ色 黄褐色を サンド状 微粒砂入 混	な し	な し	口縁部は内湾気味 口唇部は平坦。瘤状把手が縦位に貼り付けられる(縦3cm横1.8cm厚さ1cm) ツルツルの手ざわり 口縁部小破片		334C-8 0/5 I
図14	土器	— — —	明るいレン ガ色で灰褐 色をサンド 状微粒砂入 混	な し	な し	牛角把手が横位に貼り付けられる(縦2.2cm横5.8cm長さ3.2cm)。把手のみの破片。器厚は厚い。 ツルツルの手ざわり		710E-4 20/30 II
図15	土器	— — —	レンガ色 微粒砂入 混	な し	な し	底部は平底で安定 下端部はくびれている。 器面はアバタ状である。 底部破片。器厚は厚い。 ツルツルの手ざわり		402C-8 IV
図16	土器	— — —	灰色で 灰黒色を サンド状 粗粒	な し	な し	底部は平底で安定 内底一部破損 器面はアバタ状 底部のみ破片 ザラザラの手ざわり		4表
図17	土器	— — —	灰色で 灰黒色 粗粒砂入 混	な し	な し	底部は平底。ゆるやかなカーブを示しながら胴部へ移行している。内面にナデ痕が残る。底部小破片 ザラザラの手ざわり		580C-7 205 IV

第3表 須 惠 器 観 察 一 覧

挿図 番号・ 図版 番号	分 類	口 径 底 器 (cm)	素 地	釉 色・施 釉	貫 入	器 形・文 様 其 他 の 特 徴	産 年 代	出 土 地 点
第13 図1	須惠器	18.1 — —	灰 色 粗 粒	無 釉		口縁部「く」状に外反口縁 部内側は、輪状にめんとり		表
図2	須惠器	11.9 — —	暗 灰 色 粗 粒	無 釉		頸部から口縁部にかけて、ゆるやかに外反、口縁部内側は輪状にめんとり		541D-8 N
図3	須惠器	— — 胴 部	暗 灰 色 粗 粒	無 釉		内面はタタキ目の痕外面にはロクロ回転引きによる波状の文様が見られる。		334C-8 0/5 I
図4	須惠器	— — 胴 部	表面は暗灰色・中央部赤茶色化になりサンドイッチ状	無 釉		内面はタタキ目の痕外面はロクロ回転引きによる波型の文様と輪状の線が引かれている。		514E-9 III
図5	須惠器	— — 胴 部	白 灰 色 粗 粒	無 釉		器内外面ともにゼラッととして細石粒を含む 外面はタタキ目が見られる		384C-7 N
図6	須惠器	— — 胴 部	灰 色 粗 粒	無 釉		外面に、木葉文様が見られる。珠州窯		1064E-3 III
図7	須惠器	— — 胴 部	灰 色 粗 粒	無 釉		外面はななめに線が引かれ、内面には、繊細なロクロ回転痕とタタキ目が見られる。		615D-8 0/10 N
図8	須惠器	— — 胴 部	表面は暗灰色で断面中央部が茶色化しサンドイッチ状になっている	無 釉		外面に幅広の平行状叩き痕が見られる		975E-6 50/60 III
図9	須惠器	— — 胴 部	外面は暗灰色中央部は灰色と茶がまざっていて内面は茶色化している。	無 釉		外面は格子目文様の痕が内面には、タタキ目が見られる。		924E-5 50/60 III
図10	須惠器	— — 胴 部	白 灰 色 粗 粒	無 釉		外面にはタタキ目、内面には、幅広の輪状の線と、不規則なラインが見られる。		678E-3 0/10 II b
図11	須惠器	— — 胴 部	表面は暗灰色で断面中央部が茶色化しサンドイッチ状になっている。	無 釉		内面にきれいな格子のタタキ目がありその上から輪状にいくつかの圏線を廻らせている。		668E-7 30/40 II b

第3表 須 患 器 観 察 一 覧

第13 図12	須患器	— — —	淡灰色の粗粒	外・内面とも淡灰色		外面にへら状の工具による平行線の削り跡が見られる。内面は凹凸が見られる。	国産？	13C～ 14C？	965E-6 50/60 Ⅲ
図13	須患器	頸部 — —	表面は暗灰色で断面中央部は赤茶色化しサンドイッチ状になっている。	無袖		胴部から頸部にかけて「く」の字になっている様に見られる。表面は両面ともタタキ目はない。			357C-8 5/10 N
図14	須患器	— — 胴部	表面は暗灰色で断面中央部は赤茶色化しサンドイッチ状になっている。	無袖		丸みをおびている胴部の部分で外内面ともタタキ目はない。			968E-4 20/30 Ⅲ
図15	須患器	— — 底部	表面は暗灰色で断面中央部は赤茶色化しサンドイッチ状になっている。	無袖		外内面ともタタキ目はみられない。			668E-5 20/30 Ⅱ b

第4表 青磁(13C~14~15C) 観察一覧

挿図番号・図版番号	分類	口径器径高(cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 其他の特徴	産年	年代	出土地点
第14図1	青磁	11.4 — —	淡灰石色質	淡青白色釉	なし	外面に篋彫刻の蓮弁文。(碗)	中国	13C~14C	944E-6 50/60-III
図2	青磁	13.8 — —	淡灰白色微粒子	明綠色釉	なし	外面に篋描き無錫蓮弁文が施される。(碗)	中国	14C後~15C中	116D-5 II b
図3	青磁	口縁部 — —	淡灰石色質	淡灰綠色釉	ある	口縁部の外面に篋描きの雷文帯が施される。(碗?)	中国	14C後~15C中	73D-4 II
図4	青磁	口縁部 — —	灰微粒子色	淡灰色釉	なし	稜花口縁で2本1組の線刻文を描いている。(皿)	中国	15C中~16C前半	830E-6 III
図5	青磁	口縁部 — —	淡灰石色質	暗綠色釉	ある	稜花口縁で3本1組の線刻文があり、その下部に唐草文がある。(皿)	中国	15C	322C-8 0/5-I
図6	青磁	口縁部 — —	淡灰白色微粒子	黄白色	なし	焼成不良の碗。	中国	14C~15C	448D-8 876D-6 10/15 接合(III)(IV)
図7	青磁	口縁部 — —	淡灰石色質	明綠色釉	なし	稜花口縁で、内面に二条の圈線が施されている。(皿) 焼成不良。	中国	15C中~16C前半	496E-9 476E-9 325D-8 5/10 (III)(II)(I)
図8	青磁	口縁部 — —	灰石色質	暗綠色釉	ある	稜花口縁内面に3本1組の線刻文があり、外面に唐草文の一部?(皿)	中国	15C中~16C	161D-5 II b
図9	青磁	口縁部 — —	灰白石色質	暗綠色釉	なし	稜花口縁で内面に3本1組の線刻文がある。(皿)	中国	15C中~16C	904E-3 40/50 II b
図10	青磁	口縁部 — —	灰白石色質	青綠色釉	ある	稜花口縁で内面に3本1組の線刻文がある。(皿)	中国	15C中~16C	837D-3 III
図11	青磁	口縁部 — —	灰白石色質	灰綠色釉	ある	稜花口縁で内面に2本1組の線刻文がある。(皿)	中国	14C~15C	247C-7 0/5-I
図12	青磁	口縁部 — —	白石色質	青白色釉	ある	稜花口縁で内面に2本1組の線刻文がある。(皿)	中国	14C~15C	818D-6 III
図13	青磁	口縁部 — —	灰白石色質	淡綠色釉	なし	内面に一条の圈線を廻らせている、外面、太目の圈線と文様らしきものがあるが不鮮明。(皿)	中国	14C後半~15C中	562E-9 III

第4表 青磁(13C~14~15C)観察一覧

第14 図14	青磁	口縁部 —— ——	淡黄 粗粒 色子	灰釉	ある	内面に二条の圈線を廻らせている。(盤)	中国	14C~ 15C前半	56D-5 I
図15	青磁	口縁部 —— ——	灰白 微粒 色子	緑色釉	ある	内面、口縁部から内底面に向い2本の線刻細蓮弁文。外面は唐草文様。(皿)	中国	14C後半 ~15C中	717E-6 0/10 II a
図16	青磁	9.6 —— ——	灰白 微粒 色子	暗緑色釉	ある	外面篋影り蓮弁文(小鉢)	中国	14C	972E-5 60/70 III
図17	青磁	口縁部 —— ——	灰白 微粒 色子	緑色釉	なし	口縁部は若干肥厚し玉縁状を呈する。(折縁皿)	中国	14C後半 ~15C中	212E-8 I
図18	青磁	口縁部 —— ——	灰白 微粒 色子	暗灰緑色釉	なし	口唇部は極端に先ずぼまりになっている。(折縁皿)	中国	14C後半 ~15C中	1031E-5 III
図19	青磁	口縁部 5.2 —— ——	灰白 石質 色子	外底面を除き青白色釉	ある	無文でやや厚手 外反口縁皿	中国	14C~ 15C中	1078E-4 III
図20	青磁	—— 7.2 —— ——	灰白 微粒 色子	外底面を除き、暗緑色釉	なし	底部小破片 外面蓮弁文 篋書 (皿形)	中国	14C後半 ~15C前半	23D-4 I
図21	青磁	—— 7.8 —— ——	灰白 石質 色子	外底面を除き、淡緑白色釉	ある	高台脇から胴部へストレー トに開く。(盤)	中国	14C後半 ~15C中	56D-5 I
図22	青磁	—— 6.0 —— ——	淡灰 石質 色子	疊付、外底面部分を除き淡青白釉	なし	焼成不良の為、釉に光沢がない。(皿)	中国	14C後半 ~15C前半	2表
図23	青磁	—— 5.3 —— ——	淡灰 石質 色子	外底面を除き、灰緑釉	ある	高台部分の小破片。(皿)	中国	14C後半 ~15C前半	7E-4
図24	青磁	—— —— 胴部	灰白 微粒 色子	灰緑釉	ある	外面にぼたん花文 内面にロクロ跡 瓶?壺?	中国	14C後半 ~15C前半	424E-7 84 II a
図25	青磁	—— 10.8 —— ——	灰白 微粒 色子	外底面を除く淡緑釉	ある	外面の立ち上がり部分及び内底面に一条の圈線を廻らす。内底面に幅広の連弁文(盤)	中国	14C~ 15C	748E-4 30/40 II
図26	青磁	—— 15.3 —— ——	灰白 微粒 色子	暗灰緑色釉	ある	外面の立ち上がり部分及び内底面に一条の圈線を廻らす。内底面に幅広の連弁文(盤)	中国	14C後~ 15C中	433D-3 154 III
第15 図1	青磁	口縁部 —— ——	淡灰 石質 色子	淡灰緑釉	ある	口縁下部に二条の圈線を廻らせている。 口縁部小破片。(碗)	中国	14C後半 ~15C	77D-5 0/5 I
図2	青磁	口縁部 —— ——	淡灰 石質 色子	淡灰緑釉	なし	口縁下部に一条の圈線を廻らせている。(碗?)	中国	15C~ 16C前半	768E-6 10/20 II a

第4表 青磁(14C~15~16C)観察一覧

第15 図3	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 岩 石 質	暗 緑 色 釉	あ る	口縁部若干肥厚する。 〔碗〕	中 国	15C	336D-8 0/5 I
図4	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 白 色 岩 石 質	淡 灰 青 色 釉	あ る	口縁部ゆるやかな外反。 口縁に一条の圈線を廻らせて いる。 〔碗〕	中 国	14C後半 ~15C中	273C-6 10/15 II
図5	青磁	口縁部 —— ——	淡 黄 白 色 粗 粒 子	淡 褐 色 釉	な し	内外面共、カナガサの口縁 部小破片。 焼成不良。	中 国	15C~ 16C	11E-3 I
図6	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 色 岩 石 質	暗 灰 緑 色 釉	あ る	口縁部の小破片。 〔碗〕	中 国	14C後半 ~15C	793D-6 0/10 III
図7	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 白 色 岩 石 質	淡 緑 白 釉	あ る	口縁部の小破片で厚みがあ る。 〔碗〕	中 国	15C	717E-6 0/10 II a
図8	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 白 色 岩 石 質	淡 灰 緑 釉	あ る	口縁部に一条の圈線を廻ら せた口縁部小破片。 〔碗〕	中 国	14C後半 ~15C	904E-3 40/50 II b
図9	青磁	口縁部 —— ——	淡 白 色 岩 石 質	淡 灰 緑 釉	あ る	口縁部に一条の圈線を廻ら せた口縁部小破片。	中 国	14C後半 ~15C	514E-9 III
図10	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 色 岩 石 質	淡 灰 緑 釉	な し	口縁部に一条の圈線を廻ら せた口縁部小破片。	中 国	15C~ 16C前半	170E-6 I
図11	青磁	口縁部 —— ——	淡 白 色 岩 石 質	明 緑 白 釉	あ る	口縁部は直口で一条の圈線 を廻らせている。	中 国	14C後半 ~15C	404D-8 10/15 III
図12	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	淡 灰 青 色 釉	な し	両面に凹凸が多く釉につや がない。	中 国	15C~ 16C前半	757E-5 40/50 II b
図13	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 白 色 岩 石 質	淡 灰 緑 釉	あ る	口縁部小破片。	中 国	14C後半 ~15C	876D-6 30/40 IV
図14	青磁	口縁部 —— ——	茶 白 色 粗 粒 子	淡 茶 白 色 釉	な し	焼成不良。 内面釉垂れあり。	中 国	15C~ 16C前半	782D-3 0/10 III
図15	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 白 色 岩 石 質	淡 緑 白 釉 で やや厚い	あ る	口縁部を5mmほどを残した 胴部の小破片。外面の立ち 上がり部分に一条の圈線ら しきものを確認。	中 国	14C後~ 15C	2表
図16	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 白 色 岩 石 質	淡 灰 緑 色 釉	な し	無丈で外反口縁部。	中 国	14C後~ 15C中	924E-5 50/60 III
図17	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 白 色 岩 石 質	淡 緑 白 釉	あ る	口縁部の小破片。 口縁はやや内湾する。 両面共釉が厚い。	中 国	14C後~ 15C	968E-4 20/30 III
図18	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 色 岩 石 質	暗 灰 色 釉	あ る	口縁部若干外反しており、 外面の口縁直下に一条の圈 線を廻らす。 〔碗〕	中 国	14C後~ 15C	341C-5 20/25 II a

第4表 青磁 (14C~15~16C) 観察一覧

第15 図19	青磁	— — 頸部	淡灰白色 岩石質	外面淡緑白 釉、内面淡 灰釉	あ る	頸部から肩にやや開いてい く外面は三条の圈線を廻ら せて縦に1本の線がある。 (瓶)	中 国	14C後~ 15C中	758E-5 40/50 II b
図20	青磁	口縁部 — —	淡灰白色 岩石質	淡灰緑釉	あ る	口縁部は、ゆるやかな外 反。二次的焼成を受けてい る。	中 国	14C後~ 15C中	486D-7 III
図21	青磁	18.6 — —	淡灰白色 岩石質	淡灰緑釉	あ る	口縁部は若干肥厚口。 (碗)	中 国	14C後~ 15C中	755E-5 30/40 II b
図22	青磁	口縁部 — —	淡灰白色 岩石質	淡緑白色釉	あ る	口縁部が直口で、器は厚 め。内外面共に、雷文帯を 描く。 (碗)	中 国	15C~ 16C前半	2表
図23	青磁	口縁部 — —	淡灰白色 岩石質	淡灰緑色釉	な し	口縁部は直口。 口縁部の一部欠失。 内面口縁部下、約2cm幅に 及ぶ釉垂れあり。 (碗)	中 国	14C後半 ~15C	1112表
図24	青磁	12.7 — —	チョコレ ット色 粗粒 子	暗灰茶釉	あ る	外面にロクロ痕あり。	中 国	15C~ 16C	782D-3 0/10 III
図25	青磁	11.5 — —	灰白色 岩石質	明緑釉 やや厚い	あ る	口縁部はゆるやかな外反。 (碗)	中 国	14C後~ 15C中	3表
図26	青磁	12.5 — —	灰白色 岩石質	淡灰色釉	あ る	口縁部分に一条の圈線を廻 らせている剣先蓮弁文様。	中 国	15C後~ 16C中	476E-9 5/10 II
図27	青磁	12.6 — —	灰白色 岩石質	灰緑釉 やや厚い	あ る	口縁部は若干肥厚する。	中 国	14C後半 ~15C中	511D-8
図28	青磁	12.2 — —	灰白色 岩石質	灰緑釉	な し	胴部にロクロ痕あり。 内外面の口縁部に、釉垂れ あり。器形は内湾してい る。 (碗)	中 国	15C~ 16C中	127D-3 II
図29	青磁	15.0 — —	淡灰白色 岩石質	淡青緑釉	あ る	口縁部が外反している。	中 国	14C後~ 15C中	247E-7 0/5
図30	青磁	13.0 — —	灰白色 岩石質	灰緑色釉	な し	器形は内湾し、胴部にロク ロ痕あり。 (碗)	中 国	15C~ 16C中	433D-3 16L III
図31	青磁	15.2 — —	淡灰白色 岩石質	灰緑釉	あ る	口縁部が外反している。	中 国	14C後~ 15C中	733E-3 11E-3 (II b)(I)
図32	青磁	17.3 — —	淡黄白色 岩石質	淡黄灰色釉	あ る	口縁部若干直口。 口縁より胴部にかけてやや 内湾し、内外面共に、凹凸 している。 (碗)	中 国	14C後~ 15C中	345C-7 25/30 N
図33	青磁	14.5 — —	レンガ色 粗粒 子	白色	な し	焼成不良の為、内外面、白 色化している。 (碗)	中 国	15C~ 16C中	127D-3 II

第4表 青磁(15C~16~17C) 観察一覧

第16 図1	青磁	12.8 —— ——	淡灰色で褐色の微粒子が混入	淡灰色釉	あ る	外面に線刻細の蓮弁文。蓮弁の線と弁先は一致せず、雑に描く。	中国	15C前半 ~16C後半	170E-6 I
図2	青磁	口縁部 —— ——	淡灰色微粒子	淡緑色釉	あ る	口縁部は内湾気味である。口唇部は丸味を持つ。	中国	14C後半 ~16C中	1127D, E-7 攪乱
図3	青磁	13.4 —— ——	灰白色褐色微粒子混入	淡緑白色釉	な し	口縁部の小片。器形はかなり内湾する。弁先は描かず雑に描く。	中国	15C ~16C前半	56D-5 I
図4	青磁	10.15 —— ——	灰白色褐色微粒子混入	淡緑色釉	あ る	口縁部の小片。器形は、かなり内湾する。外面に剣先蓮弁文を描く。	中国	15C後半 ~15C中	667E-7 40/50 II b
図5	青磁	9.2 —— ——	灰 色 岩 石 質	暗緑色釉	あ る	器形はやや内湾する。口縁直下に片切彫で雷文帯を描く。	中国	14C後半 ~15C中	815D-5 III
図6	青磁	9.4 —— ——	灰 色 微 粒 子	暗緑色釉	あ る	器形は内湾する。外面の口縁直下に片切彫で雷文帯を描く。	中国	14C後~ 15C中	864D-5 III
図7	青磁	13.4 —— ——	淡 灰 色 岩 石 質	淡 灰 緑 釉	あ る	胸部から口縁部に向って厚みがでてくる。口縁部は直口。(蓮弁文)(碗)	中国	15C後半 ~16C中	793D-6 0/10 III
図8	青磁	口縁部 —— ——	淡灰白色粗粒子	黄緑色釉	あ る	青磁碗の小片、内面に印花文が見られる。(碗)	中国	15C	895C, D-5 表採
図9	青磁	口縁部 —— ——	淡灰白色粗粒子	黄緑色釉	あ る	青磁碗の小片、内面にスタンプ文様が見られる。(碗)	中国	15C	121E-6 I
図10	青磁	口縁部 —— ——	淡灰白色粗粒子	淡灰色釉	あ る	口縁部の破片。器形はやや内湾する。片切彫で蓮弁文を雑に描く。	中国	15C後半 ~16C前半	1090表
図11	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	暗灰緑色で薄い透明釉	あ る	器形は、内湾気味である。外面の口縁直下に一条の沈線を廻らし、弁先に重なる。	中国	15C後~ 16C前半	264C-7 5/10 I
図12	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	淡灰緑色で厚い透明釉	あ る	器形は、やや内湾気味である。口唇部は丸味を持つ。	中国	15C後~ 16C中	567 攪乱
図13	青磁	口縁部 —— ——	淡 灰 色 粗 粒 子	淡青緑色で厚い透明釉	あ る	口縁は、直口状をなす。外面に線刻細蓮弁文。	中国	15C後~ 16C中	1078E-4 III
図14	青磁	口縁部 —— ——	淡灰白色粗粒子	淡青緑色で厚い透明釉	あ る	口縁は、直口状をなし口唇部は、尖り気味である、外面に線刻細蓮弁文。	中国	15C後半 ~16C中	306C-6 20/25 III
図15	青磁	口縁部 —— ——	淡灰白色粗粒子	灰緑色で薄い透明釉	あ る	器形は、やや内湾気味。外面に線刻細蓮弁文。	中国	15C後半 ~16C中	723E-7 50/60 II b

第4表 青磁(15C~16~17C)観察一覧

第16 図16	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	濃茶緑色で 薄い透明釉	あ る	口縁は、直口状をなし口唇部は、丸味を帯びる。 (剣先蓮弁文)	中国	15C~ 15C後	946E-3 30/40 Ⅲ
図17	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	淡灰緑色釉	あ る	口縁は、直口状をなし口唇部は、丸味を帯びる。 (剣先蓮弁文)	中国	15C後~ 16C中	161D-5 Ⅱb
図18	青磁	口縁部 —— ——	淡灰白色 粗粒子	淡灰色釉	な し	口縁は、直口状をなし口唇部は、丸味を帯びる。 (剣先蓮弁文)	中国	15C中~ 15C後	3表
図19	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	暗灰緑色	あ る	口縁部の破片。口唇部は、丸味を帯びる。器形は、やや内湾気味。 (剣先蓮弁文)	中国	15C後~ 16C前半	562E-9 Ⅲ
図20	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	淡灰色釉	な し	口縁部の小破片。器形は、やや内湾気味である。 (剣先蓮弁文)	中国	15C後~ 16C前半	406E-9 0/5 Ⅰ
図21	青磁	口縁部 —— ——	黄白色 微粒子	淡黄緑色	あ る	口縁部の小破片、器形はやや内湾気味。 外面に線刻細蓮弁文。 (剣先蓮弁文)	中国	15C後半 ~16C中	345C-7 25/30 Ⅳ
図22	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	淡灰緑色釉	あ る	口縁部の破片、器形はやや内湾気味で外面に線刻細蓮弁文。 (剣先蓮弁文)	中国	15C後半 ~16C前半	506D-8 攪乱
図23	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	黄緑色釉	あ る	口唇部は丸味を帯びる。 (剣先蓮弁文) (碗)	中国	15C後~ 16C前半	99E-6 0/5 Ⅰ
図24	青磁	口縁部 —— ——	灰色で黒色 微粒子混入	淡灰色釉	な し	口縁部の小破片。口縁部内外面にシャープな稜線を有する。口縁より胴部にかけて細くなっている。 (剣先蓮弁文)	中国	15C後半 ~16C中	340D-8 5/10 Ⅱ
図25	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	暗灰色釉	あ る	器形は、かなり内湾する。外面に、削り出しにより、蓮弁文を造る。	中国	15C後~ 16C中	843D-5 Ⅲ
図26	青磁	口縁部 —— ——	黄白色 粗粒子	黄緑色釉	あ る	口縁部は、内湾する 口唇部は肥厚し、丸味を持つ。 (剣先蓮弁文)	中国	15C後~ 16C中	602E-7 Ⅱa
図27	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 微粒子	淡黄緑色 薄い透明釉	な し	器形は内湾気味。 外面に線刻細蓮弁文。	中国	15C後~ 16C前	112D-4 Ⅲ
図28	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	淡灰緑色釉	あ る	口縁部の小破片。片切彫で蓮弁文を雑に描くが、弁先と蓮弁の間に隙間があることもある。	中国	15C後~ 16C前	170E-6 Ⅰ
図29	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	淡灰緑色釉	な し	口縁は、直口状をなし、先端に向かって細くなる。片切彫で蓮弁文を雑に描く。弁先は丸味を帯びる。	中国	-	1078E-4 Ⅲ

第4表 青磁(15C~16~17C)観察一覧

第16 図30	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	灰緑色 厚い失透釉	あ る	口縁部の破片、口縁は直口 状をなす。外面に線刻細蓮 弁文を描く。	中 国	15C後半 ~16C中	944E-6 50/60 Ⅲ
図31	青磁	口縁部 —— ——	灰色 粗粒子	暗灰緑色 厚い失透釉	あ る	口縁は直口状をなす 外面に線刻細蓮弁文を描 く。	中 国	15C後半 ~16C中	158E-7 I
図32	青磁	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	暗黄緑色 厚い失透釉	あ る	器形は、内湾する。口唇直 下に二条の沈線を廻らし範 影で蓮弁文を描く。	中 国	15C後半 ~16C中	904E-3 40/50 Ⅱb
図33	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	淡茶緑色 薄い失透釉	あ る	口縁は、直口状をなす。 外面に線刻細蓮弁文を描 く。	中 国	15C後半 ~16C中	406E-9 0/5 I
図34	青磁	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡黄緑色	あ る	器形は、やや内湾気味。 外面の口縁直下に片切影で 雷文帯を描く。	中 国	14C後半 ~15C中	73D-4 Ⅱ
図35	青磁	口縁部 —— ——	灰色 粗粒子	灰青色 薄い失透釉	あ る	外面に蓮弁の線と弁先は、 一致せず、両者の間には隙 間がある。弁先は丸味を帯 びる。	中 国	15C後半 ~16C中	112D-4 Ⅲ
図36	青磁	口縁部 —— ——	淡赤茶 微粒子	赤茶緑色 薄い失透釉	あ る	外面に線刻細蓮弁文、蓮弁 の線と弁先は一致せず、雑 に描く。	中 国	15C後半 ~16C中	127D-3 Ⅱ
図37	青磁	口縁部 —— ——	灰色 粗粒子	暗灰緑色	あ る	外面に線刻細蓮弁文。 弁先は描かない。	中 国	15C後半 ~16C中	153E-6 I
図38	青磁	口縁部 —— ——	灰色 粗粒子	暗灰緑色	あ る	蓮弁の線と弁先は一致せ ず、両者の間には隙間があ く。弁先は丸味を帯びる。	中 国	15C後半 ~16C中	47D-3 I
図39	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 粗粒子	淡緑色 薄い失透釉	あ る	外面の口縁直下に片切影で 雷文帯を描く。 口縁は、直口状をなす。 口唇部は肥厚する。	中 国	14C~ 15C前	998E-4 30/40 Ⅲ
図40	青磁	口縁部 —— ——	濁白色 粗粒子	淡黄緑色	あ る	器形は、やや内湾する。 外面口縁直下に片切影で雷 文帯を描く。	中 国	14C~ 15C前	472D-8 攪乱
図41	青磁	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	茶緑色 厚い透明釉	あ る	口唇部は肥厚する。 外面口縁直下に片切影で雷 文帯を描く。	中 国	14C~ 15C前	199D-6 0/5 I
図42	青磁	口縁部 —— ——	灰色 粗粒子	淡青緑色 厚い透明釉	あ る	外面に線刻細蓮弁文。 蓮弁の線と弁先は一致せ ず、雑に描く。	中 国	15C後~ 16C中	161D-5 Ⅱb
図43	青磁	口縁部 —— ——	灰白色 微粒子	淡緑色 厚い透明釉	な し	片切影で蓮弁文を雑に描く が、弁先と蓮弁の間に隙間 があくこともある。	中 国	15C後~ 16C中	938E-3 40/50 Ⅲ
図44	青磁	口縁部 —— ——	灰色 粗粒子	淡茶緑色 薄い透明釉	あ る	蓮弁の線と弁先は一致せず 両者の間には隙間があく、 弁先は丸味を帯びる。	中 国	15C後~ 16C中	924E-5 50/60 Ⅲ

第4表 青磁(15C~16~17C) 観察一覧

第16 図45	青磁	口縁部 —— ——	濁灰色 粗粒子	淡茶褐色 厚い失透釉	あ る	外面に線刻細蓮弁文。 蓮弁の線と弁先は一致せず、 雑に描く。	中国	15C後~ 16C中	83E-6 I
図46	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	淡青緑色	あ る	外面に線刻細蓮弁文。 蓮弁の線と弁先は一致せず 雑に描く。 外面口辺部にくぼみあり。	中国	15C後~ 16C中	60E-6 I
図47	青磁	口縁部 —— ——	灰白 色 粗 粒 子	灰 緑 色 薄い失透釉	あ る	外面に線刻細蓮弁文。 蓮弁の線と弁先は一致せず 雑に描く。	中国	15C後~ 16C中	858D-3 30/40 III
図48	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	灰 緑 色 薄い透明釉	あ る	外面に蓮弁文を雑に描く。 口縁は、直口状をなす。	中国	15C後~ 16C中	962E-5 50/60 III
図49	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	淡いオリ ーブ色 薄い透明釉	あ る	口縁は、直口状をなす。 片切彫で蓮弁文を描く。	中国	15C後~ 16C中	602E-7 II a
図50	青磁	口縁部 —— ——	黄灰 色 粗 粒 子	淡 緑 色 薄い失透釉	あ る	外面に線刻細蓮弁文。弁先 は描かない。	中国	15C後~ 16C中	179D-6 0/5 I
図51	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	灰緑色で口 縁上部から 序々に釉が 厚い	あ る	蓮弁の線と弁先は一致せず 両者の間には隙間があく。 弁先は丸味を帯びる。	中国	15C後~ 16C中	830E-6 III
図52	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	薄 緑 色 薄い透明釉	あ る	外面に線刻細蓮弁文。	中国	15C後~ 16C中	472D-8 攪乱
図53	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 微 粒 子	淡 緑 色 厚い透明釉	な し	口縁は直口状をなす 外面に線刻細蓮弁文。	中国	15C後~ 16C中	938E-3 40/50 III
図54	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	灰青緑色 薄い透明釉	あ る	片切彫で蓮弁文を雑に描く が、弁先と蓮弁の間に隙間 があくこともある。	中国	15C後~ 16C中	170E-6 I
図55	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	黒灰緑色 薄い透明釉	あ る	蓮弁の線と弁先は一致せず 両者の間には隙間があく弁 先は丸味を帯びる。	中国	15C後~ 16C中	150D-7 I
図56	青磁	口縁部 —— ——	灰 色 粗 粒 子	灰青緑色	あ る	口唇部は丸みを帯びる。 口縁は肥厚する。 外面口縁直下に蓮弁文。	中国	15C後~ 16C中	378D-8 II

第4表 青磁(14C~15~16C)観察一覧

第17 図1	青磁	— 4.3 —	灰色がかかった乳白色で粗粒子	内・外面とも多少のつやのあるごく薄い緑色	あ る	内、外側に剣先蓮弁文らしきものがみられる。	中国	15C後～ 16C中	433D-3 153 Ⅲ
図2	青磁	— 3.8 —	淡灰色で粗粒子	内・外面ともつやのあるくすんだ淡緑色	あ る	内底面にうず巻き状の文様がある。	中国	15C～ 16C前半	704E-3 10/20 Ⅱb
図3	青磁	— 5.8 —	乳白色で粗粒子	内・外面ともつやのある薄緑色	あ る	器厚が厚く、内底面に印花文様と漢字の「玉」がみられる。外底面半分まで施釉されている。(碗)	中国	14C後半 ～15C	306C-6 20/25 Ⅲ
図4	青磁	— 4.9 —	淡灰白色で岩石質	外側底面を除き、淡緑色釉	な し	底部半分が破損 見込み部分に双魚文が見られる。(皿)	中国	14C後～ 15C中	938E-3 40/50 Ⅲ
図5	青磁	— 4.4 —	赤味がかかった乳白色で粗粒子	内・外面ともつやのある薄緑色	な し	器厚厚く、内底部に菊文様が施されている。外底面半分まで施釉されている。	中国	15C～ 16C前半	904E-3 Ⅱb
図6	青磁	— 5.2 —	淡黄色と淡灰色で粗粒子	内外面ともつやのある薄緑色	あ る	高台内部分まで施釉されている。(碗)	中国	16C前	17E-5 0/5 Ⅰ
図7	青磁	— 3.8 —	灰色で粗粒子	内・外面ともつやのある暗目の淡緑色	あ る	内底面にうず巻き状の文様がある。疊付はわずかに欠損している。(碗)	中国	15C～ 16C前半	438D-5 141 Ⅲ
図8	青磁	— 3.9 —	淡灰色で粗粒子	内外面ともつやのある薄緑色	あ る	見込み印花文様に施されている。外底面、疊付に多くの欠損がみられる。(碗)	中国	14C後～ 15C	654E-5 20/30 Ⅱb
図9	青磁	— 3 —	最も白に近い乳白色で微粒子	内外面ともつやのある薄緑色	あ る	器厚非常に厚く内底面に文様らしきものがある。高台内側部分まで施釉されている。(碗)	中国	14C後～ 15C中	175E-7 Ⅰ
図10	青磁	— 4 —	黄味がかかった灰色で粗粒子	内・外面ともつやのある茶色がかかったくすんだ緑色	な し	高台がわずかに欠損している。内底面の中央に盛りあがりがあり、うず巻き状の文様がある。(碗)	中国	15C～ 16C前半	433D-3 157 Ⅲ
図11	青磁	— 4.5 —	灰色がかかった淡黄土色で粗粒子	淡灰緑釉	あ る	高台がわずかに欠損している焼成不良の碗。	中国	15C～ 16C中	830E-6 77D-5 0/5 接合 (Ⅲ)(Ⅰ)
図12	青磁	— 4.6 —	淡灰色で岩石質	疊付を除く淡灰緑釉	あ る	内面腰部は屈折気味 外反口縁皿	中国	15C前半 ～16C中	7E-3 Ⅰ
図13	青磁	— 3.9 —	淡赤褐色で粗粒子	内・外面ともつやのある薄い茶褐色	あ る	高台部分に釉垂れが見られる。内底面の中央部にくぼみがある。(碗)	中国	15C～ 16C前半	433D-3 159 Ⅲ

第4表 青磁(14C~15~16C) 観察一覧

第17 図14	青磁	— 6.0 —	淡茶白色 粗粒色子	両面ともつやのある薄茶緑色	あ る	高台の一部が欠損している(碗)	中国	14C後~ 15C中	654E-5 20/30 II b
図15	青磁	— 6.0 —	灰白色 岩石質	内・外面ともくすんだ淡緑色	あ る	外面に蓮弁文様を描く。高台部破損。	中国	15C~ 16C	1122C, D-8 畦
第18 図1	青磁	口縁部 — —	灰白色 岩石質	暗緑色釉	あ る	稜花口縁で内面に2本1組の線刻文様がある。	中国	14C~ 15C	4表
図2	青磁	口縁部 — —	白粗粒 色子	緑白色釉	あ る	口縁端部は垂直に屈折 外面はゆるやかなカーブ (盤)	中国	14C後~ 15C中	972E-5 60/70 III
図3	青磁	口縁部 — —	淡灰白色 岩石質	明緑色釉	あ る	稜花口縁	中国	15C中~ 16C前半	378D-8 II
図4	青磁	口縁部 — —	淡黄白色 粗粒色子	黄灰色釉	あ る	口縁端部は上方に折り曲がる 篋影描堅筋文 (盤)	中国	14C後~ 15C中	486D-7 III
図5	青磁	口縁部 — —	灰白色 岩石質	淡緑色釉	あ る	外面に唐草文様の一部を確認。 (皿)	中国	14C~ 15C	551D-8 IV
図6	青磁	11.2 — —	灰白色 微粒色子	暗灰緑色釉	なし	外面篋蓮弁文 折縁皿	中国	14C~ 15C	161D-5 II b
図7	青磁	15.5 — —	灰白色 岩石質	灰緑釉 やや厚い	あ る	口縁部は直口 口辺部に二条の圈線を廻らせている	中国	14C後~ 15C	108D-3 II
図8	青磁	13.6 — —	灰白色 岩石質	暗緑色釉	あ る	口縁部は直口 両面口縁部下に釉のムラが点状にある。	中国	14C後~ 15C	628E-7 20/30 II b
図9	青磁	— — —	灰白色 岩石質	暗灰緑色釉	あ る	瓶の頸部	中国	14C後~ 15C	127D-3 II
図10	青磁	口縁部 — —	灰白色 岩石質	緑白色釉	あ る	口縁端部は上方へ折り曲がる。 屈折部内面はゆるやかなカーブ (盤)	中国	14C後~ 15C中	134D-5 II b
図11	青磁	口縁部 — —	灰白色 岩石質	緑白色釉	あ る	口縁端部上方は折り曲がる 屈折部内面はゆるやかなカーブ (盤)	中国	14C後~ 15C中	404D-8 10/15 III
図12	青磁	— 5.6 —	淡灰白色 岩石質	外側底面を除き、淡灰緑釉	あ る	内側底面に一条の圈線を廻らせている。 (皿)	中国	15C~ 16C前半	150D-7 I
図13	青磁	— 8.4 —	灰白色 微粒色子	暗緑色釉	あ る	3本1組の線刻文様を描いている。 (皿)	中国	14C後~ 15C前半	3表

第4表 青磁(14C~15~16C)観察一覧

第18 図14	青磁	— 4.9 —	灰白 粗粒 色子	暗めの淡緑 色	あ る	底部の小破片で、素地に空洞あり	中 国	15C後~ 16C中	486D-7 Ⅲ
図15	青磁	— 4.1 —	肌 粗粒 色子	淡灰白色	な し	光沢がなく高台部分が所々はがれている。 内底面の中央にもり上がり がみられる。(皿)	中 国	15C~ 16C	242C-6 0/5 134D-5 (1)(Ⅱb)
図16	青磁	— 8.3 —	淡灰白 岩石 色質	淡青白色高 台から胴部 内側、全面 に釉	な し	焼成不良の為、釉に光沢がない。(皿)	中 国	14C後半 ~15C	322C-8 0/5 I
図17	青磁	— 4.0 —	灰白 粗粒 色子	高台から胴 部内面茶溜 り茶筌摺淡 緑白釉	な し	底面中央に厚みがある。 茶筌摺に重焼きの跡あり。 高台部分に釉垂れがある。 (小碗)	中 国	14C後~ 15C中	436E-5 165 Ⅱa
図18	青磁	— 3.8 —	レンガ 粗粒 色子	淡黄灰白色	な し	光沢がない 高台が一部欠損している。 内底面中央にもり上がり がみられる。焼成不良。	中 国	15C後~ 16C中	767E-6 0/10 Ⅱa
図19	青磁	— 底 部 —	淡レンガ 色	底部中央以 外が淡灰緑 色	あ る	器厚が厚く、高台部分が欠損している。茶筌摺に重焼きの跡あり。(皿)	中 国	14C後~ 15C	273C-6 10/15 Ⅱ
図20	青磁	— 底 部 —	白 粗粒 色子	内・外面とも、くすんだつやのある淡緑色	な し	外底部に茶色の文様がある。高台はわずかに欠損している。(碗)	中 国	14C後~ 15C中	47D-3 I
図21	青磁	— 3.7 —	赤こげ 粗粒 茶子	灰茶緑色	あ る	高台部分が欠損している。 内底面の中央にうず巻き文 様がある 光沢がある (碗)	中 国	15C~ 16C中	596E-5 Ⅱa
図22	青磁	— 8.0 —	灰白 岩石 色質	淡緑白色釉	あ る	腰部は丸味をもつ(皿形)	中 国	14C後~ 15C中	153E-6 I
図23	青磁	— 6.4 —	淡黄 粗粒 色子	茶溜り、外 側底面を除 き淡灰緑釉	あ る	内側底面が若干くぼんでいる。(皿)	中 国	15C	962E-5 50/60 Ⅲ
図24	青磁	— 4.1 —	淡茶白 岩石 色質	高台から胴 部淡緑白釉	あ る	底径は小さいが底面は、厚さがある。内底面の中央にうず巻き文様がある。(瓶)	中 国	14C後半 ~15C	567 攪乱

第5表 白磁 観察一覧

挿図番号・図版番号	分類	口径部 底器 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 その他の特徴	産	年代	出土地点
第19 図1	白磁	口縁部 —— ——	淡灰色で 微粒子	薄い透明釉	あ る	口縁部はゆるやかに外反する。 (碗)		——	386C-8 IV
図2	白磁	口縁部 —— ——	淡灰色で 微粒子	薄い失透釉	な し	口縁部は、大きく外反する。 (皿)		16C	668E-7 30/40 II b
図3	白磁	口縁部 —— ——	淡灰色で 微粒子	薄い透明釉	あ る	口縁部の小片。口唇部は厚みがあり、ゆるやかに外反する。 (碗)		——	452D-8 15/20 III
図4	白磁	口縁部 —— ——	淡灰色で 微粒子	薄い透明釉	な し	口縁部の小片。器形は直口タイプで、口唇は丸みを帯びる。 (碗)		16C前半 ~17C	60E-6 I
図5	白磁	口縁部 —— ——	淡灰色で 微粒子	薄い失透釉	な し	口縁部の小片。口縁部の外反の度合が、極めてきつい。 (皿)		16C~ 17C	688E-5 20/30 II b
図6	白磁	口縁部 —— ——	青白色で 粗粒子	薄い透明釉	あ る	口縁部が肥厚し、胴部に向けて、序々に細くなる外面に三条の圈線を廻らす。		16C前半 ~17C	717E-6 0/10 II a
図7	白磁	口縁部 —— ——	青白色で 微粒子	薄い失透釉	な し	口縁部の小片。口唇部は厚みがあり、わずかに外反する。 (皿)		16C~ 17C	1078E-4 III
図8	白磁	口縁部 —— ——	淡灰色で 微粒子	薄い失透釉	な し	口縁部の小片。口唇部の外反の度合が極めてきつい。 (皿)		15C後半 ~16C前半	99E-6 0/5 I
図9	白磁	口縁部 —— ——	淡灰色で 微粒子	薄い失透釉	な し	口縁部の小片。口唇部の外反の度合が極めてきつい。 (皿)		15C後半 ~16C前半	596E-5 II a
図10	白磁	口縁部 —— ——	淡灰色で 微粒子	薄い透明釉	あ る	口縁部はゆるやかに外反する。 (碗)		——	386C-8 IV
図11	白磁	口縁部 —— ——	淡灰色で 粗粒子	薄い失透釉	あ る	口縁部の小片で、器形はやや内湾気味である。(碗)		——	1022E-6 60/70 III
図12	白磁	口縁部 —— ——	乳白色で 微粒子	薄い失透釉	な し	内外共、朱色の模様が描かれている。赤絵 (皿) 口縁部は、ゆるやかに外反する。		16C	602E-7 II a
図13	白磁	口縁部 —— ——	淡灰色で 微粒子	薄い透明釉	な し	口縁部の小片。口縁部は外反し、口唇部は丸みを帯びる。 (碗)		——	424E-7 104 II a

第5表 白磁 観察一覧

第19 図14	白磁	9.3 — —	乳白色で 微粒子	薄い失透釉	なし	器形はやや内湾気味である。内面一部に赤絵の文様?が描かれている。 (碗)	明治以降	804D-3 0/10 III
図15	白磁	10.9 — —	灰白色で 微粒子	薄い透明釉	なし	口縁部の小片。やや外反し口唇部は内外共浅く削られている。	15C後半 ~16C前半	688E-5 20/30 II b
図16	白磁	10.5 — —	青白色で 微粒子	薄い透明釉 が内外面に 施釉する。	あ る	口縁部は肥厚し、丸味を帯びている。口縁直下に一条の厚い釉がかかる頸部に向けて細くなる。 (壺)	16C~ 17C前半	334C-8 0/5 I
図17	白磁	— 5.55 —	灰白色 微粒子	畳付を除き 薄い失透釉 がかかる。	なし	底部の小片。高台が浅く、畳付の部分に破損あり。 (皿)	16C	704E-3 10/20 II b
図18	白磁	— — 底 部	淡灰色で 微粒子	薄い失透釉	なし	底部の破片。内底面から畳付、高台中途まで露胎する。 (皿)	16C	26E-3 I
図19	白磁	— 5.9 —	黄白色で 粗粒子	内面の茶溜 りから茶笥 摺までの間 は露胎にする。	あ る	底部の1/2程破損する。底部内面に重ね焼きの跡が見られる。 (皿)	16C~ 17C	654E-5 20/30 II b
図20	白磁	— 5.5 —	淡灰色で 微粒子	薄い失透釉	なし	底部は露胎。畳付外端を小さく削り取る。	16C~ 17C	697E-7 40/50 II b
図21	白磁	— 6.5 —	淡灰色で 微粒子	薄い失透釉	なし	底部は露胎、それ以外は、総釉。畳付外端を大きく削り取って畳付を狭く造る。	16C~ 17C	717E-6 0/10 II a
図22	白磁	— 5.6 —	青白色で 粗粒子	薄い失透釉	なし	高台内、畳付の部分は露胎。外面の胴部から腰部にかけて圈線を廻らす。	14C後半 ~15C中	1065E-3 III
図23	白磁	— 5.2 —	灰白色で 黒色鑛物混入	なし	なし	底部半分破損。畳付外端を小さく削り取る。中央部を盛り上げて残す。 (皿)	17C後~ 18C中	957D-7 20/30 IV
図24	白磁	— 6.8 —	灰白色 微粒子	薄い失透釉	なし	底部の小片。高台が浅く、高台内の釉が雑にぬられ、一部砂が付着する。 (皿)	16C	1127D-7 E-7 攪乱
図25	白磁	— 6.4 —	青白色で 褐色微粒子 混入	薄い失透釉 を内外面の 高台中途ま で施釉。	なし	底部1/3程度破損する。内外底面中央部が周囲よりもわずかに盛り上がる。	16C	904E-3 40/50 II b
図26	白磁	10.2 3.1 4.25	淡灰色で 粗粒子	薄い失透釉	あ る	内面茶笥摺の途中から畳付外面胴部から畳付までは露胎する。 (皿)	—	574E-4 II
図27	白磁	— 5.3 —	淡灰色で 微粒子	薄い失透釉	なし	内外底面見込み部まで露胎する。外面に鈿目が確任される。 (碗)	17C~ 18C中	212E-8 I

第5表 白磁 観察一覧

第19 図28	白磁	7.5 5.6 1.9	灰白 色 微粒 子	疊付、高台 内を除き、 濁った灰白 色の釉がか かる	な し	色絵の皿の型づくり口縁は 口ハゲ。	福建省	18C後～ 19C	247C-7 I
図29	白磁	— —	灰白 色 粗粒 子	疊付以外は すべて施釉	あ る	疊付の幅が狭い。 底部破損する。(白碗)		16C～ 17C	1108E-8 II
図30	白磁	— 7.5	淡黄 色 粗粒 子	高台中央か ら胴部にか けて暗茶色 釉内面茶筴 摺と茶溜り は灰釉	あ る	疊付は平坦で、その外端の 素地は面取りされている。		16C～ 17C	424E-7 II a
図31	白磁	— 6.4	淡灰 白 色 岩石 質	高台の一部 から胴部へ 淡灰緑釉茶 溜り淡灰緑 釉	あ る	疊付は平坦で、その外端の 素地面取りされている。底 部小破片。		16C～ 17C	834C-6 N
図32	白磁	— 6.4	淡茶 白 色 粗粒 子	高台部分と 茶溜り部分 淡灰色釉	な し	疊付の外端は、面取りがさ れている。底部小破片。		16C～ 17C	161D-5 II b
図33	白磁	— 6.8	淡黄 白 色 粗粒 子	高台脇から 胴部へ灰茶 色釉内部茶 溜りと茶筴 摺部分灰茶 色釉	あ る	底部の全形底面は中央に厚 みがあり、重い。外端の素 地は面取りされている。		16C～ 17C	225表
図34	白磁	— 6.8	淡黄 白 色 粗粒 子	高台から胴 部茶溜りと 茶筴摺灰茶 色釉	あ る	疊付の平坦で外端は面取り されている。		16C～ 17C	710E-4 20/30 II b
図35	白磁	— 6.2	淡黄 白 色 岩石 質	茶溜りと高 台胴部へ淡 灰緑色釉	あ る	底部の全形、底面は中央に 厚みがあり、重い 外端の素地は面取りされて いる。		16C～ 17C	表
図36	白磁	— 5.5	淡黄 色 粗粒 子	高台上部と 茶溜りの部 分灰白釉	な し	疊付は平坦で、外端の素地 2段に面取りされている底 面中央厚みがある。		16C～ 17C	826E-6 III
図37	白磁	— 7.4	淡灰 色 岩石 質	高台から胴 部へ灰釉内 側茶筴摺を 除き灰釉	な し	疊付は平坦で、その外端の 素地面取りされている。 底部小破片。		16C～ 17C	746E-4 20/30 II b
第20 図1	白磁	口縁部 — —	乳白 色 微粒 子	白色。総釉	な し	口縁部分は外側にゆるく反 っている。口ハゲ。	—	18C後～ 19C	1027E-4 III
図2	白磁	口縁部 — —	乳白 色 微粒 子	口縁上部は 露胎。白色	な し	口縁部は外反しており口ハ ゲ。(皿)	福 健 中 国	18C後～ 19C	2表

第5表 白磁 観察一覧

第20 図3	白磁	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰色。口 縁上部は露 胎	なし	外反気味の口縁で、口ハ ゲ。外面、口縁部付近に約 5mmの圈線が見られる。 (皿)	—	13C～ 14C中	550D-7 III
図4	白磁	15.0 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	なし	両面無文。 口縁部は平たんで口さが有 り。	中国	17C～ 18C前	36E-5 I
図5	白磁	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	白色の総釉	なし	口縁部は外反しており、口 ハゲ。外側口縁途中に段差 が見られる。 (皿)	—	16C	8E-3 I
図6	白磁	口縁部 —— ——	乳白色 微粒子	透明に近い 白色。総釉	なし	口縁部は外反している。 口ハゲ。 (皿)	中国	——	170E-6 I
図7	白磁	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	なし	外内面とも無文。 口縁部分外反している。 口縁部小破片。 (皿)	中国	17C後半	190E-7 0/5 I
図8	白磁	口縁部 —— ——	淡灰白色 岩石質	両面淡灰釉	なし	口縁下部の内外に厚めの釉 垂れが見られる。	—	16C～ 17C	596E-5 II a
図9	白磁	口縁部 —— ——	淡茶黄白色 微粒砂混入	淡茶黄白色	ある	口縁部なめらかに外反して 波状 両面無文。 (皿)	中国	16C後～ 17C前	619C-5 10/20 II b
図10	白磁	口縁部 —— ——	乳白色 微粒子	淡緑白色 総釉	なし	口縁部が外反している。 (碗?)	中国	17C～ 18C?	804D-3 0/10 III
図11	白磁	口縁部 —— ——	淡茶黄色 微粒子	淡灰色 総釉	ある	外側面に凹線がある。内側 に3mm程の穴があいてい る。 碗か皿	中国	16C後～ 17C	5表
図12	白磁	7.6 —— ——	灰白色 微粒子	灰白色	なし	口縁の形状は立ち上り部か ら外反する文様なし。	中国	16C	628E-7 20/30 II b
図13	白磁	—— 4.4 ——	淡灰白色 微粒子	淡灰色。畳 付は露胎	なし	胴部から底部にかけてゆる やかな外反。畳付部分に砂 が付着。 (皿)	中国	16C	4表
図14	白磁	—— 6.4 ——	淡灰白色 微粒子	内部底面中 央と高台部 分に淡灰緑 釉	なし	畳付は平坦で外端に面取り がある。 (皿)	—	16C	704E-3 10/20 II b
図15	白磁	—— 3.4 ——	淡黄白色 微粒子	乳白色。畳 付は露胎	なし	畳付の施釉はきれいに施さ れておらず凸凹になってい る。外に向けゆるやか。 型づくりの茶碗。	中国	18C後～ 19C	1112表
図16	白磁	—— 5.2 ——	暗灰色 微粒子	暗灰色 両底面に噴 き出しのつ ぶつぶあり	なし	無文(皿) 腰部が丸みを持って口縁部 へ向うもので高台は低くつ くられている。	中国	17C後半 ～18C前 半	3表
図17	白磁	—— 6.5 ——	淡黄白色 粗粒子	淡茶白色	なし	底部の小破片。	中国	16C後～ 17C後	596E-5 II a

第5表 白磁 観察一覧

第20 図18	白磁	— 6.5 —	淡灰白色 岩石質	外面は釉垂れ内面は赤褐色	なし	高台の小破片。	—	—	558E-7 II a
図19	白磁	— 6.5 —	淡灰白色	高台と内側底面淡灰釉	なし	疊付は平坦で外端に面取りがある。	—	16C後～ 17C後	678E-3 0/10 II b
図20	白磁	— 6.8 —	淡黄色粗 粒子	高台脇白釉 他無釉	なし	底部半分が破損。	—	17C後半 ～18C前 半	757E-5 40/50 II b
図21	白磁	— 6.6 —	灰白色 黒色の微粒 子混入	淡灰色	なし	底部の1/5しか残っておらず、見込みは釉がかかってなく、一条の圈線が、あったと思われる。(碗)	中国	17C後～ 18C	710E-4 20/30 II b
図22	白磁	— 6.4 —	淡灰白色 岩石質	内側茶筌摺 外側、高台 から胴部へ 灰釉	ある	疊付の外側と高台部分に面取りがある。	—	14C後半 ～15C前 半	678E-3 0/10 II b
図23	白磁	— 5.6 —	淡茶白色 岩石質	茶溜り茶筌 摺と外面胴 部淡灰茶色 釉	ある	疊付・外端面取りされている。	—	14C後半 ～15前C 半	596E-5 II a
図24	白磁	— 5.0 —	乳白色粗 粒子	乳白色無 釉	ある	底部部分、立ちあがり部がわりと残る胴部は丸みを帯び口縁部へはぼまっすぐにのびる。	中国	16C～ 17C前半	433D-3 155 III

第6表 染付 観察一覧

挿図 番号 ・ 分類 図版 番号	口 径 底 径 器 高 (cm)	素 地	釉色・施釉	貫 入	器形・文様 其他の特徴	産 年 代	出上地点
第21 図1	染付 口縁部 —— ——	淡黄白色	淡青色 総釉	なし	口縁部の一部だけなので器形は不明。口縁上部に2条の圈線。外面に渦巻き文の一部が見られる。(碗)	15世紀後半～16世紀前半	704E-3 10～20 II b
図2	染付 口縁部 —— ——	淡黄白色	淡青色 総釉	内面にはこまかく外面は粗い。	口縁部は外反している。内外口縁部付近に二条の圈線渦巻き文の一部が外面に見られる。(碗?)	15後半～16世紀	850E-6 III
図3	染付 口縁部 —— ——	淡黄白色	淡灰色 口縁上部の一部が露胎	なし	外面口縁部付近に一条の圈線。また草文様の一部らしきものも見られる。(碗)	16世紀前半	23D-4 I
図4	染付 —— —— 胴部	乳白色	淡灰白色 総釉	なし	外側に三条の輪状の線があり、また草文の一部も見られる。(瓶)	15世紀後半～16世紀前半	800E-6 10～20 II a
図5	染付 口縁部 —— ——	淡灰白色	淡青白色 総釉	なし	内面は細い二条の圈線、外面には太い一条の圈線が口縁部付近に見られる。また外面に波文様。(碗)	15世紀中	134D-5 II b
図6	染付 —— —— 胴部	淡黄白色	淡青白色 総釉	外面に粗くある	外面に草花文の一部が見られる。(碗)	17世紀	737E-3 20～30 II b
図7	染付 —— —— 胴部	淡黄白色	淡青白色 総釉	外面に粗くある	外面に唐草文様の一部らしきものが見られる。(碗)	15世紀後半～16世紀前半	56D-5 I
図8	染付 —— —— 底部	黄白色	淡青灰色 総釉	内外面とも細かくある	底部にいくにつれ器壁が厚くなる。見込み部分と外側面に花唐草文。(皿)	16世紀前半～中	628E-7 20～30 II b
図9	染付 —— —— 胴部	淡灰白色	淡青白色 総釉	なし	外面に唐草文様の一部がある。(碗)	16世紀前半～中	134D-5 II b
図10	染付 —— —— 胴部	乳白色	淡青白色 総釉	内外面とも細かくある	外面に花唐草文の一部が見られる。(碗)	15世紀後半～16世紀前半	555E-5 II a
図11	染付 —— —— 胴部	乳白色	淡青白色 総釉	なし	外面に唐草文の一部が見られる。(碗)	15世紀後半～16世紀前半	208E-7 I
図12	染付 —— —— 胴部	乳白色	淡灰白色 総釉	なし	外面に花文の一部が見られる。(碗)	15世紀後半～16世紀前半	14E-4 I
図13	染付 —— —— 胴部	黄白色	淡灰色 胴部の一部が露胎	なし	焼成不良の為、外面は光沢がない。外面に花文様があるが、不鮮明。(瓶?)	15世紀～16世紀	717E-6 0～10 II a

第6表 染付 観察一覧

第21 図27	染付	— — 胴部	茶黄色	淡青緑色	内外面に 細かくある	外面の一部が飛び出ている 外面には花木文が見え見込 みにもあるが不明。呉須手 の碗		16前半～ 17前半	8E-3 I
図28	染付	— 7.6 —	灰白色	淡青色 疊付は露胎	なし	見込み部分に二重方形の中 に鳥文様(?)。疊付に三重 圏線が見られる。(皿)		16世紀前 半	23D-4 I
図29	染付	— 4.8 —	黄灰色	淡青灰色 疊付のみ露 胎。	外面に粗 くある	見込み部分に渦巻き文の一 部が見られる。高台は凸凹 している。(碗)		16世紀前 半～中	628E-7 20～30 II b
図30	染付	— 4.4 —	乳白色	淡青色 疊付は露胎	なし	見込みに十字花文。 (皿?)		16世紀半 ～中	654E-5 20～30 II b
図31	染付	— 底部 —	茶黄色	淡青色、疊 付は欠失し ている為、 総軸かどう かは不明	内外面に 細かくある	見込みには二重圏線の中に 唐草文様。外側面にも同じ く唐草文様が見られる。 (碗)		16世紀前 半～中	170E-6 I
図32	染付	— 底部 —	淡灰白色	淡青色 疊付が欠失 のため総軸 かどうかは 不明	なし	見込みは樹下人物像が描 かれ、高台に一重圏線・枠内 に「長命富貴」の銘のうち 命と貴である。(皿)		16世紀	620C-5 20～30 II b
図33	染付	13.2 7.4 3.1	灰白色	淡灰色 疊付のみ露 胎	なし	口縁部は外反している。見 込みに二重枠内に玉取り 獅子の文様外側面は唐草文 様。(皿)		15世紀後 半～16世 紀前半	26E-3 I
第22 図1	染付	口縁部 — —	灰白色	灰色	なし	内面口縁部付近に一重圏線 外面には文様があるが不明 (碗)		16世紀～ 17世紀	83E-6 I
図2	染付	口縁部 — —	白色	淡青色	外面に細 かくある	口縁部は外反。内面には二 重の外面には一重の圏線が 頸部に見られる。外面に花 唐草文。(碗)		15世紀後 ～16世紀 前半	757E-5 40～50 II b
図3	染付	— — 胴部	淡黄白色	淡青色	なし	頸部の一部が見られるので この染付は口縁部が外反ら しい。内面は雷文帯、外面 は花文様が見られる。(碗)		15後～16 世紀	486D-7 III
図4	染付	口縁部 — —	乳白色	淡青色	なし	口縁部の一部。口縁部は外 反している。また内外面共 に一条の圏線が見られる。 外面には葉文様。		17世紀～ 18世紀前 半	647E-4 II
図5	染付	— — 胴部	黄白色	淡青灰色	内外面に 粗くある	胴部の一部。外面には1本 の圏線と葉文様がある。 (碗)		15世紀後 半～16世 紀前半	542D-7 30～35 III
図6	染付	— — 胴部	乳白色	淡灰白色	なし	胴部の一部。外面には花唐 草文様が見られる。(碗)		15世紀後 半～16世 紀前半	47D-3 I
図7	染付	— — 胴部	乳白色	淡青色	内外面に 粗くある	胴部の一部。外面に唐草文 様が見られる。(碗)		15世紀後 半～16世 紀前半	846D-6 III

第6表 染付 観察一覧

第22 図8	染付	口縁部 —— ——	黄白色	淡青色	内外面に 粗く貫入	口縁部の一部。口縁部は外 反。外面は花文様らしい。 スタンプ	17世紀～ 18世紀	678E-3 0～10 II b
図9	染付	口縁部 —— ——	黄白色	淡青色	内外面に 細かく貫 入	口縁部の一部。内面口縁部 の圈線は一条。外面頸部 に見られる圈線は不鮮明。外 面は花文らしい。	15世紀後 半～16世 紀前半	10E-5 I
図10	染付	口縁部 —— ——	淡灰白色	淡灰色	なし	口縁部の一部。外面に波文 様 (碗)	17世紀～ 18世紀	2表
図11	染付	口縁部 —— ——	灰色	淡灰色	なし	口縁部の一部。全体に小さ な噴き出しが見られる。内 面口縁部付近に2mm程の圈 線らしきものが2本。外面 には草文様が見られる。(碗)	16世紀後 ～17世紀	558E-7 II a
図12	染付	—— —— 胴部	淡灰白色	濃青色	なし	胴部の一部。底部にいくに つれ器壁が厚くなる。花文 様らしいものが外面に見ら れる。	17世紀以 後	834C-6 N
図13	染付	口縁部 —— ——	淡灰白色	淡青灰色	なし	口縁部の一部。内面口縁部 付近に不鮮明だが2本の圈 線、外面には大小合わせて 4本もの圈線が見られる が、これも不鮮明。(碗)	16世紀	36E-5 I
図14	染付	口縁部 —— ——	茶褐色	淡灰青色	内外面と も細かく 貫入	口縁部の一部。文様は不明 外面の釉は凸凹している。 焼成悪い。(碗)	17世紀以 降～18世 紀	153E-6 I
図15	染付	口縁部 —— ——	乳白色	淡灰色	内外面と も細かく 貫入	口縁部は一部。外面口縁部 付近に4mmの圈線。外面に ある文様は不明。	17世紀以 後～18C	800E-6 10～20 II a
図16	染付	—— —— 胴部	乳白色	淡青灰色	内面に多 少見られ る。	胴部の一部。文様は外面に 見られるが不明。(碗)	16世紀～ 17世紀	83E-6 I
図17	染付	—— —— 胴部	乳白色	淡灰青色	外面に細 かい貫入	胴部の一部。唐草文様らし い一部が外面に見られる。 (碗)	15世紀後 ～16世紀 前	8E-3 I
図18	染付	—— —— 胴部	淡白灰色	淡灰白色	なし	胴部の一部。唐草文様の一 部らしきものが外面に見ら れる。(碗)	15世紀～ 16世紀前	815D-5 III
図19	染付	—— —— 胴部	乳白色	淡白青色	なし	胴部の一部。外面に、斑点 文様が見られる。(碗)	18世紀	1073E-3 30～40 III
図20	染付	口縁部 —— ——	淡灰白色	淡灰青色	なし	口縁部の一部。内外面口縁 部に一条の圈線。外面に見 える文様は不明。(碗)	17世紀以 後～18世 紀	153E-6 I
図21	染付	—— —— 胴部	淡白灰色	透明に近い 白色。	内面に3 本の縦線 の貫入	胴部の一部。頸部も少し見 られる。口縁部は外反らし い。外面は葉文様。内面見 込み近くに2条の圈線。	18世紀後 ～19世紀 前	1004E-4 30～40 III

第6表 染付 観察一覧

第22 図22	染付	口縁部 —— ——	灰 色	淡 緑 色	外面口縁部に貫入	口縁部の一部。口縁部は外反。内外面口縁部に一条ずつ圈線。外面胴部に文様あり (碗)	17世紀以後~18世紀	83E-6 I
図23	染付	12.6 —— ——	乳 白 色	淡 白 灰 色	な し	口縁部の一部。口縁付近に内外面共二条の圈線。外面の文様は不明。 (碗)	16世紀末~17世紀	619C-5 10~20 II b
図24	染付	13.8 —— ——	淡 白 灰 色	淡 青 色	な し	口縁部の一部。口縁部は外反している。喜字文様が外面に施されている。 (碗)	18世紀	704E-3 10~20 II b
図25	染付	13.6 —— ——	乳 白 色	淡 青 白 色	な し	口縁部の一部。口縁部は外反。外面に花木文様。	18世紀後~19世紀前	1065E-3 III
図26	染付	14.6 —— ——	灰 色	淡 灰 緑 色	内外面とも細かく貫入	口縁部の一部。外面に花木文様。スタンプ、碗	17世紀以後~18中	710E-4 20~30 II
図27	染付	13.0 —— ——	淡 白 灰 色	淡 灰 色	な し	口縁部の一部。口縁付近に内外面共一条の圈線。外面には花唐草文様。	17世紀以後~18世紀	208E-7 I
第23 図1	染付	口縁部 —— ——	にごった白	淡 灰 青 色	あ る	口縁部の内外に一条の圈線を廻らす。 (皿?)	16世紀後半~17世紀前	704E-3 10~20 II b
図2	染付	口縁部 —— ——	にごった白	淡 灰 青 色	な し	口縁部の内側に二条の圈線を廻らす。 (碗)	16世紀~17世紀前	212E-8 5~10 I
図3	染付	15.0 —— ——	淡 灰 白 色	淡 青 灰 白 色	な し	口縁部の内外に一条の圈線あり。 (碗)	17世紀後半~18世紀	121E-6 I
図4	染付	口縁部 —— ——	乳 白 色	淡 灰 青 色	な し	口縁部の内外に一条の圈線を廻らす 外面草文の一部 (皿)	16世紀	170E-6 I
図5	染付	口縁部 —— ——	乳 白 色	淡 灰 白 色	な し	頸部から口縁部にかけて外反している。草文のような模様かみえる (碗)	18世紀後半~19世紀前	727E-3 III
図6	染付	—— —— 胴部	淡 茶 黄 色	淡 灰 黄 色	あ る	口縁部内部から外部胴部にかけて4本の界線がみられる (碗)	17世紀後半~18世紀前半	47D-3 I
図7	染付	口縁部 —— ——	にごった白 色	灰 黄 色	あ る	頸部から口縁部にかけて外反している (碗)	17世紀以降~18世紀	190E-7 I
図8	染付	口縁部 —— ——	にごった白	淡 灰 黄 色	な し	内側に二条の圈線 外側には一条の圈線を廻らす、草文様のようなものが一部みえる (皿)	16世紀	165D-6 I
図9	染付	口縁部 —— ——	乳 白 色	淡 青 色	な し	外側に花文様のようなものが見られる (碗)	19世紀後半?	3表

第6表 染付 観察一覧

第23 図10	染付	口縁部 —— ——	乳白色	淡灰青色	なし	内外口縁部に一条の圈線が みられる唐草文の模様 (皿)	16C	4表
図11	染付	口縁部 —— ——	にごった白	淡灰黄色	なし	内外面口縁部に一条の圈線 がみられる (小盃?)	16C後半 ~17C前 半	199D-6 0/5 I
図12	染付	—— —— ——	にごった白	淡灰青色	なし	口縁部に一条の圈線を廻ら す (碗)	16C~ 17C前半	678E-3 0/10 II b
図13	染付	口縁部 —— ——	乳白色	淡灰青色	なし	外側口縁部に一条の圈線を 廻らす。草文様のようなも のの一部。 (小盃)	17C~ 18C	11E-3 I
図14	染付	口縁部 —— ——	にごった白	淡灰青色	なし	上部に斑点がみられる。外 部口縁部に一条の圈線を廻 らす。 (小盃)	16C後半 ~17C前 半	194E-7 0/5 I
図15	染付	口縁部 —— ——	にごった白	淡灰青色	なし	草文様の一部 (小盃)	16C~ 17前半	717E-6 0/10 II a
図16	染付	口縁部 —— ——	にごった白	淡灰青色	なし	口縁内部に二条外部に二条 の圈線を廻らす草文様の一 部。 (小鉢?)	15C後半 ~16C前 半	190E-7 0/5 I
図17	染付	—— —— 胴部	乳白色	淡青白色	なし	草文様のようなものの一 部。 (碗)	15C~ 16C前半	453E-9 II
図18	染付	—— —— 胴部	にごった白	淡灰青色	なし	草文様のようなものの一 部。 (小盃)	16C前半 ~17C前 半	1065E-3 III
図19	染付	—— —— 胴部	淡灰白色	淡灰黄色	なし	草文様のようなものの一 部。 (皿)	16C	406E-9 I
図20	染付	—— —— 胴部	にごった 白 色	淡灰青色	なし	草文のようなものの一部。 (皿)	16C~ 17C	717E-6 0/10 II a
図21	染付	—— —— 胴部	にごった白	淡灰青色	なし	花文様のようなものが見ら れる。 (碗か小鉢)	16C後半 ~17C前 半	904E-3 40/50 II b
図22	染付	—— —— 底部	にごった白	淡青色	なし	内側は二条の圈線を廻らす 外側は圈雲のような文様。 (皿?)	16C~ 17C前半	369E-7 表
図23	染付	—— —— 底部	にごった白	淡青色	なし	外側高台に二条の圈線を廻 らす。 (皿?)	15C後半 ~16C	804D-3 0/10 III
図24	染付	—— 4.2 ——	乳白色	淡青白色	なし	内底面にわずかな盛り上が りがある 重ね焼きの痕がある(小碗)	17C後半 ~18C	20E-5 5/10 I
図25	染付	—— 7.2 ——	淡灰色	薄い透明釉 を高台外面 中途まで施 釉する	なし	外底面の削り出しは浅く底 部の器厚は厚い。 昼付端部をわずかに削り取 る。重ね焼きの痕がある	17C後半 ~18C	704E-3 10/20 II b

第6表 染付 観察一覧

第23 図26	染付	— 6.4 —	灰白色で微 粒子黒色・ 褐色微粒子 を混入する	薄い透明釉 を高台脇ま で施釉する	なし	底部のみ全形を残す。底部 の器厚は厚くどっしりと重 たい。 (碗)	17C後～ 18C中	1027E-4 Ⅲ
図27	染付	— 7.8 —	乳白色	淡灰緑白色	なし	高台内に施釉 内底面に重ね焼きの痕があ り、雑である。 (碗)	17C後～ 18C	713E-5 30/40 Ⅱ b
図28	染付	— 3.2 —	にごった 白色	内面は淡青 色 外面は茶褐 色	なし	内側に二条の圈線を廻らす 草文外面・高台は鉄釉で褐 色	17C後～ 18C	9E-4 Ⅰ
図29	染付	— 底 部 —	淡灰色	淡灰青色	なし	内側に二条の圈線を廻らす 十字花文。 高台にも二条圈線と文様あ り (碗)	16C前半 ～後半	17E-5 0/5 Ⅰ
図30	染付	— 底 部 —	にごった 白色	淡青白色	あ る	外側に二条の圈線を廻らす その内に草文 (碗)	15C後半 ～16C中	843D-5 Ⅲ
図31	染付	— 底 部 —	にごった 白色	淡青白色	なし	内側に一条、外面に二条の 圈線を廻らす。(高足盃)	16C前半	793D-6 Ⅲ
図32	染付	— 6.6 —	乳白色	淡青白色	なし	内底面に草文様が描かれて いる。 (碗)	18C後半 ～19C前 半	2表
図33	染付	3 — —	乳白色	淡白色	なし	外面にゴム印が見られるが 文様は不明。	19C後半	904E-3 40/50 Ⅱ b
図34	染付	— 底 部 —	にごった 白色	淡黄青白色	なし	高台に二条、腰部に一条の 圈線あり。内底面にも二条 の圈線。 (碗)	18C～ 19前半	225表

第6表 染付(中国)観察一覧

挿図番号・図版番号	分類	口径高 器(㎝)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 その他の特徴	産地	年代	出土地点
第24 図1	中国 (染付)	口縁部 — — —	淡灰白色 微粒子	淡青白色	なし	内面にうすく圈線外面に不鮮明な文様が見られる (淡灰色)	中国	16C前半 ~16C中	704E-3 20/30 II b
図2	中国	9.6 — —	淡灰白色 微粒子	淡青白色	なし	内面にうすく圈線外面に葉文様が見られる。碁笥底の皿	中国	16C前~ 中	619C-5 10/20 II b
図3	中国	12.0 — —	濁黄白色 微粒砂混入	濁黄白色	なし	内面口縁部に圈線外面に不鮮明な文様が見られる (碗)	中国	16C前半 ~中半	654 E-5 20/30 II b
図4	中国	口縁部 — — —	淡灰茶白色 微粒砂混入	濁灰白色	ある	内面口縁部にうすく圈線外面に不鮮明な文様が見られる (碗)	中国	16C	710E-4 20/30 II
図5	中国	11.0 — —	淡灰白色 微粒子	淡青白色	なし	外面に淡青色で不鮮明な文様が見られる。 (碗)	中国	16C前~ 中半	795D-6 0/10 III
図6	中国	11.0 — —	灰茶色 微粒砂混入	灰茶色	ある	内面口縁部にうすく圈線外面に不鮮明な文様が見られる(灰青色) (碗)	中国	16C	620C-5 20/30 II b
図7	中国	口縁部 — — —	淡黄白色 微粒砂混入	淡灰白色	ある	内面なし。口縁部の小破片外面に不鮮明なスタンプの文様有り (碗)	中国	17C後半~ 18C中半	1073E-3 30/40 III
図8	中国	口縁部 — — —	乳白色 微粒子	淡青白色	なし	口縁部に一条の圈線や斑点がみられ、下部の様子は不明。型づくり。 (小碗)	中国 福建省	18C~ 19C前半	1065E-3 III
図9	中国	口縁部 — — —	淡灰白色 微粒子	濁灰白色	ある	内面口縁部にうすく圈線外面に淡暗灰色の文様が見られる。 (碗)	中国	17C後半 ~18C中	782D-3 5/10 III
図10	中国	口縁部 — — —	淡黄茶白色 微粒子	淡黄茶白色	ある	内面なし。外面に淡灰茶色で圈線と網目文様。	中国	17C後半 ~	4表
図11	中国	口縁部 — — —	乳白色 微粒子	淡青色	なし	内外面の口縁部付近に一重の圈線。文様は不明。 (碗)	中国	16C前半	99E-6 0~5 I
図12	中国	— — —	淡黄茶白色 微粒子	淡灰茶白色	ある	外内面口縁部付近に輪状の圈線が見られる。	中国	17C後半 ~18C	1108E-8 II

第6表 染付(中国)観察一覧

第24 図13	中国	—— —— ——	淡黄茶白色 微粒子	淡灰茶白色	あ る	内外面口縁部付近に輪状の線。胴部から頸部の方が少しへこみ口縁部までまっすぐになっている。 ロクロ回転痕が外面にみられる。(口)	中国	17C後半 ~18C	619C-5 10/20 II b
図14	中国	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰 色 総 釉	あ る	口縁部は外反している。内外口縁部付近に一条の圈線。外面には、草文様の一部が見られる。(皿)	中国	15C~ 16C	782D-3 0~10 III
図15	中国	口縁部 —— ——	にごった白 微粒子	淡青白色	あ る	口縁部の内側に二条の圈線を廻らす 外面草文の一部。(碗)	中国	16C	794D-6 10/20 III
図16	中国	口縁部 —— ——	乳白色 微粒子	淡灰青色	な し	口縁外部に一条の圈線を廻らす。 草文模様の一部。(小盃)	中国	17C前半	153E-6 I
図17	中国	口縁部 —— ——	にごった白 微粒子	淡灰青色	な し	口縁外部に一条の圈線を廻らす。口縁直下に文様が見られるが、不鮮明。(小盃)	中国	15C後半 ~16C前 半	1表
図18	中国	—— —— ——	淡黄茶白色 微粒子	淡灰茶白色	あ る	内外面とも口縁部付近に輪状の線がみられる。内面は他に1本の線がある。(碗)	中国	17C後~ 18C前	1065E-3 III
図19	中国	12.1 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	な し	口縁内外に輪状の線。	中国	17C後~ 18C前 半	1065E-3 III
図20	中国	—— —— ——	淡茶黄白色 微粒砂混入	淡灰黄白色	あ る	内外面に輪状の線。(碗)	中国	17C後半 ~18C前 半	141E-6 5/10 I
図21	中国	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	な し	内面口縁部付近に一条の圈線。外面に唐草文様があるが、不鮮明。(碗)	中国	17C以降 ~18C	985E-4 30~40 III
図22	中国	—— —— ——	淡灰白色 微粒子	淡青白色	あ る	頸部から口縁にかけてなめらかに外反している 内面には雷文帯 外面口縁部にうすい圈線と文様の一部。	中国	16C~ 17C前 半	738E-3 30/40 II b
図23	中国	—— —— ——	淡灰青白色 微粒子	淡灰茶色	あ る	口縁部は外反している内外面とも口縁部付近に圈線があり外面に花文様の一部が見られる。(碗)	中国	17C~ 18C中	56D-5 I
図24	中国	—— —— ——	淡黄茶白色 微粒砂混入	淡灰黄白色	あ る	口縁部は外反している。 外側口縁部に圈線と文様の一部。(碗)	中国	17C後~ 18C前	678E-3 0/10 II b
図25	中国	—— —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	な し	内外面口縁部に圈線、外面に文様の一部が見られる。(碗)	中国	17C後~ 18C前	717E-6 0/10 II b
図26	中国	—— —— ——	淡灰白色 微粒子	暗灰青白色 表面に茶砂 ?が付着	な し	外内口縁部付近に圈線、外面に文様の一部がみられる(碗)	中国	17C	11E-3 I

第6表 染付(中国)観察一覧

第24 図27	中国	— — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色 表面に茶砂 ?が付着	なし	外側口縁部が多少ふくらみ をもつ。外面に印製の文様 の一部が見られる。	中国	17C後～ 18C前	17E-5 0/5 I
図28	中国	— — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色 表面に茶砂 ?が付着	なし	内面口縁部に5mmの輪状の 線、外面には口縁部と胸部 に輪状の線、間に草文様の 一部が見られる。	中国	17C	8E-3 I
図29	中国	— — —	淡黄茶白色 微粒子	灰茶色	ある	口縁部はゆるやかに外反、 外面はこげ茶色で渦巻き文 様の一部が見られる。口縁 は口バゲ。	中国	17C後～ 18C前	727E-3 III
図30	中国	— — —	淡茶黄白色 微粒子	淡黄茶白色	ある	内面は無文 外面は草文の一部が見られ る。(碗)	中国	17C	968E-4 20/30 III
図31	中国	— — 胸部	乳白色 微粒子	淡青白色 総釉	ある	外面に唐草文様の一部らし きものが見られる。(碗)	中国	15C～ 16C	628E-7 20～30 II b
図32	中国	口縁部 — —	乳白色 微粒子	淡青色	ある	口縁部の一部。口縁部が外 反している。また口縁部付 近内外面に一本ずつの圈 線。外面に草文様らしきも のが見られる。(大鉢)	中国	17C～ 18C	36E-5 I
図33	中国	— — —	淡茶黄白色 微粒砂混入	淡灰茶黄色 表面に黒砂 が付着	なし	両面口縁部付近に圈線、内 面底部近くにも輪状の線が 見られる。外面には草文の 一部が見られる。(碗)	中国	17C～ 18C	647E-4 II
図34	中国	— — 胸部	乳白色 微粒子	淡灰色 総釉	なし	外面にまだら文様の一部が 見られる。	中国	15C～中	108D-3 II
図35	中国	— — —	淡灰色 微粒子	淡灰茶黄色	なし	両面口縁部付近に圈線があ る。(碗)	中国	17C後半 ～18C前	620C-5 20/30 II b
図36	中国	13.4 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰黄白色	なし	内面は無文 外面は龍のたてがみ文様か 見られる。焼成不良。	中国	17C後半	9E-4 I
図37	中国	14.8 9.8 5.2	淡茶黄白色 微粒砂混入	淡灰茶黄色	ある	内底見込部輪状にけずられ ている。外面胸部に草文様 の一部が見られる。	中国	18C後半 ～19C前 半	678E-3 0/10 II b
図38	中国	— 5 —	にごった白 微粒子	淡青色	なし	内側に一条、外面高台に二 条の圈線を廻らす 外面文様あるが、不明。 (碗)	中国	17C	175E-7 I
図39	中国	— 6.0 —	淡茶黄白色 微粒砂混入	淡青色	ある	内底見込部輪状にけずられ ている。内底に1、外底に 二条の圈線が引かれている 外面に文様の一部がみられ る高台はやや高めにつくら れている	中国	17C後半 ～18C	96D-5 308C-7 20/25 接合 (II b)(N)

第6表 染付(中国)観察一覧

第25 図1	中国	口縁部 —— ——	乳白色の 微粒子	青白色	なし	内面上部に二条の圈線が見られ、その上に文様が見られるが、小破片のため不明	中国	15C～ 16C前	406E-9 0/5 I
図2	中国	13.3 —— ——	にごった 白色の 微粒子	淡青白色	なし	花唐草文で外側口縁部に二条の圈線と内側口縁部に一条の圈線がある。(皿)	中国	16C中～ 17C前	208E-7 I
図3	中国	13.2 —— ——	乳白色の 微粒子	淡黄白色	ある	口縁部内側に薄い水色の圈線が見られる。(碗)	中国	17C以降	917E-6 0/10 III
図4	中国	口縁部 —— ——	乳白色の 微粒子	透明釉	なし	口縁部の内側に一条の圈線を廻らず外面草文の一部	中国	16C末～ 17C前	1031E-5 III
図5	中国	—— —— 胴部	乳白色の 微粒子	淡青白色 総釉	なし	外面に唐草文様らしきものが見られるが、不鮮明である。スタンプ	中国	17C～ 18C中	628E-7 20～30 II b
図6	中国	11.9 —— ——	淡青白色 微粒子	淡緑青白色	なし	花模様の一部がみられる。(碗)	中国	17C以降 ～18C	968E-4 20/30 III
図7	中国	口縁部 —— ——	黄白色の 粗粒子	淡青色	なし	口縁部の一部。口縁部付近に2本の圈線が内外面共に見られる。外面の文様は不明。(碗)	中国	16C後半 ～17C前半	287C-7 10-15 IV
図8	中国	14.7 —— ——	淡黄白色 微粒子	淡緑青白色	ある	口縁部に一条の界線がみられる。口縁部上部にロハゲがある。(碗)	中国	17C後～ 18前半	968E-4 20/30 III
図9	中国	16.6 —— ——	にごった 黄白色 粗粒子	青白色	ある	口縁部内外に一条の圈線あり、外面に不鮮明な文様が見られる。	中国	17C以降 ～18C	767E-6 0/10 II b
図10	中国	12.5 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡青白色	ある	口縁部内外に一条の圈線あり。胴部も内外に一条の圈線。(皿)	中国 福建広 東辺り	16C後～ 17C前半	710E-4 20/30 II
図11	中国	口縁部 —— ——	乳白色の 微粒子	淡青色	なし	口縁内外に二条の圈線を廻らす。外面に唐草文様が見られる。(碗)	中国	17C後～ 18C	1065E-3 III
図12	中国	11.8 —— ——	淡黄白色 微粒子	淡青白色	なし	口縁部上部に茶褐色のロハゲがあり、その下部に唐草文様らしき文様が見られる。	中国	18C前半	984E-4 30/40 III
図13	中国	4.6 —— 1.2	淡灰黄色 微粒子	淡青白色	なし	内側は釉がかかってない。外面に二条の圈線と文様があるが不明。側面に一条の圈線。(合子の蓋)	中国	16C	409E-8 表採
図14	中国	—— —— 底部	乳白色の 微粒子	淡青白色	なし	草文様が描かれており内底面に二条の圈線あり。高台にも一条の圈線あり。(皿)	中国	16C後～ 17C前	872D5.6 表採
図15	中国	—— —— 底部	乳白色の 微粒子	淡青白色	なし	碁笥底の皿	中国	16C前半 ～16C中	619C-5 10/20 II b

第6表 染付(中国) 観察一覧

第25 図16	中国	— 4.2 —	乳白色 微粒子	淡青白色	なし	外側下部に斑点のようなものがみられる。高台に一条の圈線を廻らす。(小碗)	中国 福建省	18C~ 19C前半	1表
図17	中国	— 底 部 —	にごった 淡黄白色 微粒子	淡灰白色	なし	腰部に蓮弁文が描かれており、その上に二条の圈線がある。内底部に二条の圈線がある。(碗)	中国	18C後~ 19C前	60E-6 I
図18	中国	— 底 部 —	にごった白 微粒子	淡青色	なし	基筋底の皿。	中国	16C前~ 中	647E-4 II
図19	中国	— 底 部 —	にごった 白色 微粒子	青白色	なし	花文様が描かれている。内底面に2本の圈線	中国	18C後半 ~19C前	968E-4 20/30 III
図20	中国	— 底 部 —	黄白色 微粒子	淡青色。疊 付は欠失し ている為、 総釉かどう かは不明	なし	底部にいくにつれ器壁が厚くなってくる。外側面は二重方形と草文様があり、見込みも二重方形の中に文様があるようだが不明。(碗)	中国	15C後半 ~16C前半	225表
図21	中国	— 底 部 —	乳白色 微粒子	淡灰白色	あ る	内底面に1本の界線と2本の圈線を廻らす。(皿)	中国	18C後~ 19C前半	104E-6 5/10 I
図22	中国	— 4.6 —	にごった白 微粒子	淡青白色	なし	内外側面に一条の圈線を廻らす。中央に花文様有り。高台に、砂目が付着している。(碗)	中国 福建省	16C未~ 17C前半	1065E-3 III
第26 図1	中国	10.1 — —	淡灰白色 微粒子	淡青灰白色	なし	口縁部内外に一条の圈線あり。(碗)	中国	17C後~ 18C	225表
図2	中国	10.2 — —	淡黄灰白色 粗 粒子	淡青灰色	あ る	口縁外部に一条の圈線あり	中国	17C後~ 18C	20E-5 5/10 I
図3	中国	8.8 — —	乳白色 微粒子	淡青白色	あ る	口縁部外部に一条の圈線がうすくある。	中国	17C後半 ~18C	287C-7 10/15 N
図4	中国	8.9 — —	淡灰白色 微粒子	淡青灰白色	なし	口縁部外部に一条の圈線がある	中国	17C後半 ~18C	1004E-4 30/40 II
図5	中国	口縁部 — —	灰黄色 微粒子	緑灰色 総 釉	あ る	外反の口縁で、胴部に二条の圈線が見られる。	中国	16C~ 17C	993E-5 20~30 III
図6	中国	口縁部 — —	淡茶白色 粗 粒子	淡茶 釉	あ る	口辺から口縁部にかけてくびれている。胴部は横に5mm前後の面取を施している	中国	17C~ 18C	26E-3 I
図7	中国	— 7.0 —	乳白色 粗 粒子	乳白色透明 釉内底見込 み輪状に無 釉	あ る	外底面円状にけずられている。底部一部破損、内底部外面に文様の一部。内面見込に圈線が見られる。	中国	17C~ 18C中	424E-7 98 II b

第6表 染付(中国)観察一覧

第26 図8	中国	— 5.7 —	淡黄白色 粗粒子	淡黄白色	なし	胴部に一条の圈線あり。高台が所々欠損あり。内底面に二条の線があり内側の線は途中で切れている。 吳須の碗	中国	17C後～ 18C	427E-6 129 II a
図9	中国	— 底 部 —	淡青灰白色 粗粒子	淡青白色	なし	底部の小破片で内面が重ね焼きの痕がある。	中国	17C後半 ～18C	1065E-3 III
図10	中国	— 5.8 —	黄白色 粗粒子	淡黄灰白色	なし	内底面の中央がくぼみ腰部に一条線がある。	中国	17C後半 ～18C	568 攪乱
図11	中国	— 8.0 —	淡黄白色 粗粒子	淡灰白色 高台の一部 分に釉だれ	あ る	内底、高台内に施釉、内外底共に重ね焼き痕あり。	中国	17C後～ 18C	968E-4 20/30 III
図12	中国	— 底 部 —	灰白色 微粒子	淡黄灰白色	なし	底部の小破片で高台に一条の線がある。 高台は露胎	中国	17C後半 ～18C	968E-4 20/30 III
図13	中国	— 底 部 —	淡灰白色 微粒子	淡青白色	なし	高台上部に一条の線あり内底面に重ね焼きの跡が見られる。疊付部分鋭く削られる。	中国	17C後半 ～18C	917E-6 0/10 III
図14	中国	— 底 部 —	灰白色 微粒子	灰白色	なし	底部の小破片である。疊付の部分をわずかに削り取る。	中国	17C後半 18C	704E-3 10/20 II b
図15	中国	— 7.3 —	淡黄白色 粗粒子	乳白色 疊付と茶笏 摺は無釉	なし	底部の小破片 疊付部分の内側を鋭く削り取る。	中国	17C～ 18C	628E-7 20/30 II b
図16	中国	— 7.2 —	淡黄白色 粗粒子	灰白色 疊付無釉	あ る	淡青色の文様あり。 印線有り。(碗)	中国	17C～ 18C中	576E-5 247 II a
図17	中国	— 底 部 —	灰白色 粗粒子	淡青白色	なし	高台上部に、一条の圈線有り。高台上部まで釉が雑にぬられ、高台部分も一部釉がかかる。	中国	17C後半 ～18C	427E-6 118 II a
図18	中国	— 底 部 —	灰白色 粗粒子	茶灰白色	なし	内面見込み部と外面高台上方に、それぞれ一条の圈線を廻らす。	中国	17C後半 ～18C	619C-5 10/20 II b
図19	中国	— 底 部 —	淡黄灰白色 微粒子	黄灰白色	なし	腰部に一条の線あり 文様らしきものが見られるが途中破損している為不明。	中国	17C後半 ～18C	620C-5 II b
第27 図1	中国	13.2 — —	黄白色 微粒子	乳白色	あ る	口縁部がなめらかに外反している。外面に文様が見られるが小破片の為不明。	中国	17C後～ 18C	141E-6 5/10 I
図2	中国	14.4 — —	暗灰白色 微粒子	暗灰白色	なし	口縁部は内湾気味である。内外口縁部に圈線が見られる。	中国	17C～ 18C前半	965E-6 50/60 III
図3	中国	9.4 — —	茶黄白色 微粒子	灰茶白色 表面に砂? が付着	なし	文様はなし 内面はロタロ回転痕が見られる	中国	17C	904E-3 40/50 II b

第6表 染付(中国) 観察一覧

第27 図4	中国	— — —	灰白 色 微粒 子	灰白 色	なし	文様なし 胴部の小破片。内側の茶笥 摺は無釉。 (碗)	中国	17C~ 18C中	26E-3 I
図5	中国	11.6 — —	淡茶 色 微粒 子	全体に薄く 施釉。茶色	ある	内面はスベスベしているが 外面はろくろ回転跡あり。 (皿)	中国?	18C頃	713E-5 30~40 II b
図6	中国	— 5.1 —	淡黄 白 色 微粒 子	乳白 色 茶溜りと 畳付は無 釉	なし	底部の小破片 内底面露胎、外底面から高 台途中釉を拭きとる。	中国	17C後半 ~18C	900E-3 40/50 II b
図7	中国	— 6.3 —	淡黄 白 色 微粒 子	高台底 部 無 釉	なし	高台脇に輪状に削られてい る。中央部分、若干盛り上 る。	中国	17C~ 18C	683E-4 10/20 II
図8	中国	— 4.9 —	淡灰 茶 色 粗粒 子	茶笥摺部分 に黒褐色釉 が輪線状に なっている 外面の腰部 分は灰釉、 内面と高台 底部は無釉	ある	高台脇に円のようなくぼみ が不鮮明に並んでいる。 カンナケズリ痕が残る。 (碗)	中国?	16C後半 ~17C	596E-5 II a
図9	中国	— 5.3 —	乳白 色 粗粒 子	乳白色無 釉	なし	底部小破片 無文 (碗)	中国	17C~ 18C	9E-4 I
図10	中国	— 7.2 —	淡黄 白 色 粗粒 子	淡灰白 色 畳付と茶 笥摺は無 釉	なし	底部の半分が破損 中央部分、若干くぼみに施 釉	中国	17C後半 ~18C	555E-5 II a
図11	中国	— 6.9 6.9	黄 白 色 粗粒 子	乳白 色 無 釉	なし	底部小破片 高台は畳付けの方へ細くな るようにつくられている。	中国	17C~ 18C	713E-5 30,40 II b
図12	中国	— 7.5 —	乳白 色 粗粒 子	乳灰白 色 外高台ぎ わ 釉だれ	なし	底部破片、高台は畳付の方 へやや細くなり厚めにでき ている。高台部破損。高台 脇面取りされている。中央 部盛り上げる。	中国	17C~ 18C	710E-4 20/30 II
図13	中国	— 6.7 —	乳白 色 粗粒 子	乳白 色 無 釉	なし	底部小破片 畳付の外側に面取り している。	中国	17C~ 18C	596E-5 II a
図14	中国	— 4.9 —	乳白 色 粗粒 子	乳灰白 色 底部内外 露胎	なし	中央部分盛り上がる。 高台中途から畳付まで鋭く 削り取る。	中国	17C~ 18C	4表
図15	中国	— 7.4 —	乳白 色 粗粒 子	高台から 胴部にか け青白 釉、内外 底面白 釉	ある	高台脇面取りされている。 外面から外底面まで釉が雑 にぬられている。内底の中 央凹みにも施釉	中国	17C後半 ~18C	619C-5 10/20 II b
図16	中国	— 6.8 —	乳白 色 粗粒 子	白釉で二 次焼成見 込み輪 状で無 釉	なし	高台脇面取り 畳付以外 は釉がか かり内 外から 浅く削 り取る。 底部破 片	中国	17C後半 ~18C	758E-5 40/50 II b

第6表 染付(中国)観察一覧

第27 図17	中国	— 7.5 —	乳白色粗粒	白釉で二次焼成見込み輪状で無釉	あ る	疊付の外端部を削りとり、高台外側を面取りされている。内底外底共に施釉	中国	17C	14E-4 I
図18	中国	— 6.5 —	淡黄白色粗粒	淡灰白釉疊付と茶筌摺は無釉	あ る	腰部から斜めに開く。内底面に重ね焼の跡が、見られる。	中国	17C後～ 18C	913E-6 III
図19	中国	— 8.0 —	乳白色粗粒	白釉内見込み輪状で無釉	な し	疊付内端を斜めにけずってある。内底外底共に施釉 (碗)	中国	17C後半 ～18C	1112表
図20	中国	— 8.0 —	乳白色粗粒	灰白釉底部外側内部見込み部輪状無釉	あ る	高台外側を面取り。胴部に文様の一部がみられる。(碗)	中国	17C後半 ～18C	692E-6 0/10 II a
図21	中国	— 8.0 —	乳白色粗粒	灰黄白色外側底部砂付着	あ る	疊付内側が斜めにけずられている。外側高台付近に1本の圈線、内面見込部に2本の圈線が、両面に花文様らしきものが見られる。外底面から疊付まで砂目ができる。吳須の鉢	中国 福建省	17C前半	620C-5 20/30 II b
図22	中国	— 7.7 —	淡黄白色粗粒	乳白色疊付と茶筌摺は無釉	な し	底部の半部分は破損内底面の中央部分は釉が雑にぬられ、外底面高台の途中まで釉が拭きとられる。	中国	17C頃～ 18C	1065E-3 III
図23	中国	— 6.3 —	乳白色粗粒	乳灰白色外高台ざわ	あ る	内底中心部はもりあがり、外面に文様と一部に釉だれあり。高台は低く安定した造りになる。	中国	17C後半	212E-8 I

第7表 有田焼 観察一覧

挿図番号・図版番号	分類	口径 底器 径高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 その他の特徴	産	年代	出土地点
第28 図1	有田焼	口縁部 —— ——	乳白色 微粒子	淡灰青色	あ	る 内面に草文様のようなもの の一部が見られる。	肥前	17C中～ 末	104E-6 5/10 I
図2	有田焼	口縁部 —— ——	白色 微粒子	淡青白色	な	し 内面花唐草文で、外面は草 文様の一部 (皿)	肥前	18C～	985E-4 30/40 III
図3	有田焼	15.8 —— ——	淡黄白色 微粒子	淡青白色	あ	る 口縁部内面に二条の圈線と 界線がみられる 唐草文を描く	肥前	16C後～ 17C初	929E-3 50/60 III
図4	有田焼	12.0 —— ——	灰白色 微粒子	薄い釉が全 体的に施 釉。白色。	な	し 外面には枝、内面は花の文 様がある。 (皿)	肥前	18C前半	1065E-3 III
図5	有田焼	—— —— ——	灰白色 微粒子	灰白色	な	し 内外面とも口縁部付近1本 の界線を廻らす 口縁部小破片	肥前	17C後半	8E-3 I
図6	有田焼	11.4 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	な	し 内外面口縁部付近に輪状の 線、胴部の方にうすく文様 が見られる。 口縁部小破片	肥前	17C後半	190E-7 0/5 I
図7	有田焼	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰色	な	し 内面には1本、外面には2 本の界線を描く。外面にあ る文様は不明。(染付碗)	肥前	17C以後	8E-3 I
図8	有田焼	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	な	し 内外面共に口縁部付近に界 線を描く。しかし不鮮明。 (碗)	肥前	17C以後	704E-3 10～20 II b
図9	有田焼	口縁部 —— ——	乳白色 微粒子	淡灰青色	な	し 口縁外部に界線を廻らし龍 文?を配す。 (皿)	肥前	16C中頃	555E-5 II a
図10	有田焼	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰色	な	し 口縁部の一部。口縁部付近 に内面は1本、外面は2本 の界線。文様は龍の胴体 (染付)	肥前	15C後半 ～16C前 半	121E-6 I
図11	有田焼	口縁部 —— ——	乳白色 微粒子	淡灰白色	な	し 内面1本、外面は2本の界 線、外体面に龍文を配す。	肥前	17C以後	737E-3 20～30 II b
図12	有田焼	口縁部 —— ——	淡灰色 微粒子	淡灰青色	な	し 口縁部の一部。口縁部付近 の1本の界線の下に龍の文 様。 (染付碗)	肥前	17C以降	530E-6 II a
図13	有田焼	口縁部 —— ——	乳白色 微粒子	淡灰白色	あ	る 2本の界線と、草花文があ る。 (染付)	肥前	17C以後	826E-6 III
図14	有田焼	13.4 —— ——	淡灰白色 微粒子	淡灰色	な	し 口縁部の一部。口縁部は外 反。頸部内外面に一条の圈 線。山水文	肥前	17C以後	60E-6 I

第7表 有田焼 観察一覧

第28 図15	有田焼	7.0 — —	灰 白 色 微 粒 子	灰 白 色 総釉。	な し	外側に松の葉が描かれている。 (碗)	肥 前	19C前～ 幕末	5表
図16	有田焼	口 縁 部 — —	淡 青 白 色 微 粒 子	淡 青 白 色	な し	口縁部の一部。全体の施釉 に気泡が見られる。外面の 文様は不明。(碗)	肥 前	17C以後 ～18C前	678E-3 0～10 II b
図17	有田焼	12.0 — —	に じ ゃ っ た 白 色 微 粒 子	淡 灰 白 色	あ る	透明釉が施釉され、光沢を 有す 松文様?	肥 前	17C以降 ～18C	208E-7 I
図18	有田焼	16.6 — —	灰 白 色 微 粒 子	灰 白 色	な し	内外の口縁部に淡青灰色の 圏線が1本廻る。外部には さらに文様らしきものがある。	肥 前	17C後～	904E-3 40～50 II b
図19	有田焼	口 縁 部 — —	乳 白 色 微 粒 子	透 明 釉	あ る	口縁部の一部。外面口縁部 付近に二条の圏線。胴部 には葉状の文様	肥 前	17C以後	83E-6 I
図20	有田焼	13.5 — —	淡 灰 白 色 微 砂 粒 混 入	淡 青 灰 色	な し	口縁部内外に一条の圏線あ り、胴部に草文様がある。	肥 前		968E-4 20/30 III
図21	有田焼	口 縁 部 — —	淡 灰 白 色 微 砂 粒 混 入	淡 青 灰 色	な し	口縁部内外に一条の圏線あ り、胴部に草文様がある。	肥 前	17C後半	I表 II b
図22	有田焼	2.4 — —	灰 白 色 微 粒 子	灰 白 色	あ る	器形は内湾気味で外面に綱 目文が描かれている。 (小碗)	肥 前	17C～ 18C	942E-5 40/50 III
図23	有田焼	10.7 — —	灰 白 色 微 粒 子	灰 白 色	あ る	外面に綱目文を描いている。 器形は丸味を帯びてい る	肥 前	17C後半	688E-5 20/30 II b
図24	有田焼	— — —	白 色 微 砂 粒 混 入	内側は無釉 胴部淡青白 色釉	な し	胴部に幅広い綱目文様でそ の下に輪線状		17C後半	904E-3 40/50 II a
図25	有田焼	— — —	白 色 微 粒 子	淡 青 白 色	あ る	頸部に二条の圏線を横に廻 らし、頸部から肩部は張 る。髪用の油壺。		17C後半	692E-6 0/10 II
図26	有田焼	— — —	淡 灰 白 色 微 粒 子	両面淡青白 釉	な し	胴部に雲龍文がある。	肥 前	17C後半	710E-4 20/30 II b
図27	有田焼	— — —	白 色 微 砂 粒 混 入	内側は無釉 胴部淡青白 色釉	な し	胴部に幅広い綱目文様でそ の下に輪線状		17C後半	704E-3 10/20 II b
図28	有田焼	— — —	淡 灰 白 色 微 砂 粒 混 入	内側は露胎 外側淡青白 色釉	あ る	外面肩部に三条の圏線があ る。内面は無釉 (瓶)	肥 前	17C後半	704E-3 10/20
図29	有田焼	口 縁 部 — —	乳 白 色 微 粒 子	淡 青 白 色。	な し	外面に流線文様?で逆三角 の文様。内面は雷文帯。 端反形碗の蓋	肥 前	江戸 1820～ 1860	1004E-4 30～40 III

第7表 有田焼 観察一覧

第28 図30	有田焼	14.8 7.4 2.4	白粗粒子色	淡青白色。疊付と内側中心から3.5cmのところは露胎	なし	外側底面に一条、高台に二条、腰部に一条の圈線が廻っている。内面には口縁部付近に草花文(皿)	肥前	18C前～	710E-4 20/30 II
図31	有田焼	— — —	淡レンガ色粗粒子	内外褐色。胴部は露胎で一部袖垂れ	なし	天目茶碗の二次焼成? 口辺が一度内へすばまり、弱く外反する。口縁部小破片(焼成不良)		17C前半	424E-7 108 II a
図32	有田焼	— 9.6 —	灰粗粒子色	外は露胎。内は白色と灰色と暗緑色が輪状に施釉	ある	外面にへら調整痕が残る。内底面見込み部には、重ね焼きの際の袖着を妨ぐために削り取っている。一部に砂目	肥前	17C後～ 18C前半	2表
第29 図1	有田焼	— — —	淡灰白色微砂粒混入	淡青白釉	ある	胴部上下に二条の圈線がある。つる草文様。内面は8mm前後の面取りを施す。(瓶)	肥前	17C後半	968E-4 20/30 III
図2	有田焼	— 底 部 —	灰白色微砂粒混入	淡青灰白色	ある	内底面につる草文様。胴部と高台中央に一条の圈線あり、疊付に砂目が付着。	肥前	17C後半	424E-7 67 II a
図3	有田焼	— 5.2 —	淡青白色微砂粒混入	淡緑色。疊付以外総袖。口縁部は欠落。	なし	外側高台に三条の圈線が廻る。	肥前	17C後半	768E-6 II a
図4	有田焼	— 底 部 —	灰白色微砂粒混入	淡青白色	なし	高台と胴部に一条の圈線を廻らしている。(碗)	肥前	18C後半	36E-5 I
図5	有田焼	— — —	白微砂粒混入	内面上部から外面全体に淡乳白色釉	なし	頸～肩部にかけての瓶で器外面に圈線があり、細い網目文様。(瓶)	肥前	17C後半	692E-6 0/10 II a
図6	有田焼	4.2	白粗粒子色	淡青白色	なし	外側、胴部、高台に一条の圈線を廻らす。(瓶)	肥前	17C後半	184D-7 0/5 I
図7	有田焼	12.2 — —	濁白微粒子色	内面から口縁部に淡灰釉があり口縁部から胴部へ灰釉が流れ垂れして一部青緑釉外側透明釉	なし	胴部から口縁部にロクロ回転の痕がある。	肥前	18C前半	856D-3 20/30 III
図8	有田焼	— — —	淡灰白色粗粒子	内面から外側、口唇部にかけて淡灰白色。外側は褐釉	なし	外面は外面口唇部までロクロ回転の痕がみられる。口縁部小破片	肥前	17C～18	903E-3 40/50 II b

第7表 有田焼 観察一覧

第29 図9	有田焼	口縁部 —— ——	淡黄白色 微粒子	外側口辺部 から内側 に向って淡青 緑釉、胴部 淡黄色釉	あ る	口縁部は直口 口縁部小破片 外面口縁直下に厚めの釉だ れあり。 (皿)	肥 前	18C前半	1136C、 D-8 表採
図10	有田焼	—— 底部 ——	灰白色 微砂粒混入	淡青灰白色	あ る	内底面に一条の圈線と胴部 に二条の圈線を廻らす。疊 付以外は釉が、ぬられるの が難である。	肥 前	18C前半	990E-5 60/70 III
図11	有田焼	—— —— ——	濁白色 岩石質	口縁から胴 部にかけて 灰釉	な し	口縁部は若干外反するタイ プのもので口縁部の小破 片。 (碗)	肥 前	18C前半	692E-6 0/10 II a
図12	有田焼	—— —— ——	淡灰白色 微砂粒混入	内面から外 側口唇部 にかけて淡灰 白色外側は こげ茶	な し	外面口縁部付近に何か細 い圈線が見られる。 口縁部小破片 外面口縁直下に鉄釉がぬら れている。 (碗)	肥 前	15C~ 16C	620C-5 20/30 II b
図13	有田焼	—— —— ——	にごった白 岩石質	口縁から胴 部に向け、 灰釉青緑釉	な し	口縁部の小破片で若干、外 反するタイプである。 青緑釉 (碗)	肥 前	18C前半	717E-6 0/10 II a
図14	有田焼	口縁部 —— ——	茶白色 岩石質	淡灰白色。 総釉。	内外面共 に細かく 貫入	極端に外反した口縁部で、 胴部に一条の突線が施され ている。	肥 前	17C前半	628E-7 20~30 II b
図15	有田焼	12.5 —— ——	淡黄色 粗粒子	胴部から口 縁部は青緑 釉、内側淡 黄色釉	あ る	口縁部の小破片で口縁は、 若干内湾する。 (碗)		17C	121E-6 I
図16	有田焼	11.2 —— ——	淡灰白色 黒色礫物混入	全体的に薄 く施釉。淡 緑色。	外側は少 なく、内 側は細か く多い	口縁部の小破片でやや外反 するタイプのもの。外面胴 部に一部青釉が見られる。 (碗)	肥 前	17C前?	713E-5 30~40 II b
図17	有田焼	口縁部 —— ——	淡茶色 微粒子	薄く全体的 に施釉。茶 色。鉄釉	な し	外面にろくろ回転痕あり。 底部にいく程器壁は厚い。 口縁部が内湾するタイプの もの。	肥 前	18C前半	718E-6 0~10 II a
図18	有田焼	口縁部 —— ——	濁白色 微粒子	胴部から口 縁部は淡青 緑色釉、内 側は淡灰白 色釉	あ る	口縁部は直口 口辺の部分輪線状あり 外面は、青緑釉。		17C	17E-5 0/5 I
図19	有田焼	口縁部 —— ——	淡灰白色 微粒子	胴部から口 縁部は淡青 緑釉、内側 は淡灰釉	あ る	口縁部は直口 淡青、淡黄、淡緑の三色で 交互に雑にぬられた文様	肥 前	17C	717E-6 0/10 II a
図20	有田焼	—— 4.2 ——	淡黄白色 粗粒子	内面濁黄白 色釉、外面 腰部は青緑 釉、高台脇 から底部露 胎	あ る	高台が低く、底面は厚く、 疊付部分にススがついてい る。外面一部に釉だれあ り。 (碗)		18C前半	985E-4 30/40 III

第7表 有田焼 観察一覧

第29 図21	有田焼	— 4.7 —	淡黄色 粗粒子	内面濁白釉 外面腰部から 胴部に淡 緑釉	なし	高台は雑に削られた跡。 内面白化粧で、外面全体鉄 釉がかかる。極めて珍らしい 製品である。		18c 前半	904E-3 40/50 II b
図22	有田焼	— — —	淡黄色 微粒子	内外黄褐色 口縁部輪状 に茶褐色	なし	口縁部は僅かに外反、口唇 部がへらで削られる。内外 に無で調整痕が残る(碗)	肥前	18c 前半	744E-4 20/30 II
図23	有田焼	4.7	淡黄白色 微粒子	淡黄灰白色 わら灰釉	ある	高台部分が全体的にすり減 っている。光沢がなく裏底 面にひび割れがみられる。 (陶器タイムス)	肥前	15c ~ 16c	968E-4 20/30 III
図24	有田焼	— 5.7 —	淡黄色 粗粒子	内面透明釉 外面疊付を 除き淡青緑 色釉	なし	底面の厚さは薄い 高台より胴部へ丸く立ち上 がる。外面は青釉がかかる。 瓶か壺?	内野山	17c 後半 ~18c	683E-4 10/20 II
図25	有田焼	— 4.2 —	淡黄白色 粗粒子	内面濁黄白 釉、胴部青 緑釉	ある	腰部に多くの点状のくぼみ がある。底面は厚い 高台部分は比較的安定した 造りになっている。		18c 前半	757E-5 40/50 II b
図26	有田焼	— 4.2 —	灰色、黒色 砂粒が多く 混入 粗粒子	高台から外 底まで露胎 内側底面鉄 釉	ある	底部全形、内底に鉄釉で円 文が描かれている。 (碗)	肥前	18C 前半	1004E-4 30/40 III
図27	有田焼	— 5.0 —	淡灰色 粗粒子	内側灰釉 底部から高 台脇露胎	なし	高台部分が低く平坦な造 り。器壁底面は厚いタイプ のもの。 (皿?)	肥前	16C 末~ 17C 初	718E-6 0/10 II a
図28	有田焼	— 4.8 —	淡灰色 微砂粒混入	内面は鉄釉 外面青緑釉	なし	台から胴部へ丸く立ち上 がる。口縁部欠失。高台付近 まで釉がかかる。丁寧な造 りの碗。		18C 前半	1082E-5 III
図29	有田焼	— 3.8 —	淡青白色で 微粒子	疊付以外は すべて施釉 する。	ある	茶筌摺部分に、重ね製の跡 が見られる。 (碗)		18C 後半	14E-4 I
図30	有田焼	— 4.4 —	淡灰白色 微粒子	青緑釉	なし	底径が小さく高台際から直 線的に外側へ開いていくも のようである。		18C 前半	17E-5 0/5 I

第8表 現代陶・磁器 観察一覧

挿図 番号・ 図版 番号	分 類	口 底 器 径 高 (cm)	素 地	釉色・施釉	質 入	器形・文様 その他の特徴	産 年 代	出土地点	
第30 図1	近 世	15.8 — —	白 色 微 粒 子	やや厚い釉 が全体的に 施釉され、 淡白色。	な し	内外面の口縁部に淡青色の 圈線がある。さらに内面には 太い圈線あり。(皿)	中 国	18C	4表
図2	近 世	口 縁 部 — —	白 色 微 粒 子	白色。総釉	な し	外面口縁直下に「山陞」らし き文字が確認できる。	昭和～ 大正	678E-3 0~10 II b	
図3	近 世	14.2 — —	白 色 微 粒 子	やや薄い釉 が全体的に 施釉されて いる。白色	な し	内側に青緑色の斜線が引か れ、桜の花とつばみ、葉が 描かれている。釉下彩。	明治以降 ～大正	11E-3 I	
図4	近 世	14.2 — —	淡 灰 色 微 砂 粒 混 入	口唇部は鉄 釉で両面淡 青白色	あ る	口辺部分に2本の界線。 呉須は淡い藍色	中 国	17C後～ 18中	17E-5 0~5 I
図5	近 世	8.4 — —	白 色 微 砂 粒 混 入	緑色。総釉	な し	口縁部が、玉縁状に肥厚す る。口縁内外一部に緑釉が 見られる。	明治以降	9E-4 I	
図6	近 世	10.2 — —	白 色 微 砂 粒 混 入	薄い釉が全 体的に施釉 されている。 白色。	な し	外面に青色と緑色で山の絵 と、波の絵が描かれている。	国 産	昭和	737E-3 20~30 II b
図7	近 世	12.0 — —	白 色 微 砂 粒 混 入	全体に施釉 されており、 色は濃 緑色。	な し	やや外側へ関く 直口口縁で無文	国 産	昭和	947E-4 III
図8	近 世	8.0 — —	淡 緑 白 色 微 粒 子	淡緑色。総 釉	な し	口縁部から胴部にかけて は、あまり変化は見られな いが、底部付近にかけ、ゆ るやかな曲線になっている。 銅板転写	明治以降	421D-6 5~10 III	
図9	近 世	9.6 — —	白 色 微 粒 子	乳白色。総 釉。	な し	口縁部きつく外反する。口 縁部の小破片。	中国?	明末?	9E-4 I
図10	近 世	— — —	白 色 有 色 礫 物 混 入	やや厚い釉 が全体に施 釉されてお り、白色。	な し	白色に赤色の細い線が何本 もつらねている。(色絵)	中 国	18C～ 19前	1065E-3 III
図11	近 世	9.6 — —	淡 黄 白 色 微 粒 子	乳白色。総 釉。	な し	外面にあじさいが描かれて いる小碗。底部は欠失。銅 板転写	明治後半 ～大正	1112表	
図12	近 世	10.8 — —	白 色 微 粒 子	やや薄く全 体的に施釉 淡白色	な し	外面に濃青色で葉と実が描 かれている。 ゴム印。	昭和	287C-7 10~15 IV	

第8表 現代陶・磁器 観察一覧

第30 図13	近 世	7.6 3.2 4.8	乳 白 色 微砂粒混入	白色。疊付 以外総釉。	な し	外側に菊の花文様が描かれて おり疊付は面取りされて いる。 袖下彩 小碗	昭和	947E-4 Ⅲ	
図14	近 世	— 3.2	淡 灰 白 色 微砂粒混入	透明に近い 白色。疊付 のみ露胎	な し	疊付は面取りされ高台に圈 線。胴部にまりが描かれる	明治後半 ～大正	737E-3 20～30 Ⅱ b	
図15	近 世	8.2 2.6 4.6	白 色 微 粒 子	白色。疊付 以外総釉。	な し	胴部に二条の圈線が廻り、 その間に傘の文様が描かれ ている。色絵のゴム印。 (小碗)	昭和	737E-3 20～30 Ⅱ b	
図16	近 世	8.2 3.2 3.9	乳 白 色 微 粒 子	疊付から外 底にかけて 露胎。クロ ム青磁	な し	外側に1cm前後の線が交互 に描かれている。口縁部は 欠落しているが底部にかけ てゆるやかな曲線である。	明治後半	1048D-8 表採	
図17	近 世	6.2 — —	白 色 微砂粒混入	透明に近い 白色。総 釉。	な し	口縁上部を中心に5mmほど の線が内外面に廻っている。 また、外面に松の木と 波が描かれている。 銅板転写	明治後半 ～大正	36E-5 Ⅰ	
図18	近 世	— 3.6 —	淡 黄 白 色 微 粒 子	透明に近い 白色。疊付 は露胎。	あ る	胴部から底部にかけてゆる やかな曲線。 底部の小破片。	中 国	18C後 ～19C	153E-6 Ⅰ
図19	近 世	7.4 1.7 4.6	淡 黄 白 色 微砂粒混入	白色。疊付 のみ露胎。	な し	外面、銅板転写で花籠が描 かれている。	18C後 ～19C	568 攪乱	
図20	近 世	— 2.0 —	淡 黄 白 色 微砂粒混入	淡青白色。 疊付は露胎	な し	高台に二条の圈線。内底の 面積はあまりない。 小盃	中国？	17C～ 18？	23D-4 Ⅰ
図21	近 世	— 2.2 —	淡 灰 白 色 微 粒 子	淡灰色。疊 付は露胎。	な し	疊付は面取りが施されてい る。 小盃？	中国？	17C？	1表
図22	近 世	4.6 0.9 2.8	乳 白 色 微 粒 子	透明に近い 白色。疊付 のみ露胎。	な し	内側面にスタンプで花文様 とさくが描かれている。色 絵。 小盃	国 産	明治以降	904E-3 40～50 Ⅱ b
図23	近 世	— 4.0 —	白 色 微 粒 子	淡灰白色。 疊付は露胎	な し	口縁部部分は欠失。胴部か ら底部にかけゆるやかな曲 線。器壁は薄い。	明治以降	1表	
図24	近 世	8.2 3.6 4.7	白 色 微砂粒混入	疊付は施釉 されていない 所もある がほぼ総 釉。	な し	外側に桜の木が描かれ、高 台に二条の圈線が廻ってい る。小銅板転写。(小碗)	明治後半 ～大正	1073E-3 30～40 Ⅲ	
図25	近 世	11.2 5.2 6.2	白 色 微砂粒混入	薄く施釉さ れている が、疊付の み露胎とす る。	な し	口縁部に、鉄錆(口紅)を ほどこしている。 文様は、ゴム印	国 産	昭和	947E-4 Ⅱ
図26	近 世	— 3.8 —	白 色 微砂粒混入	白色。総釉	な し	高台部分が厚い。 底部の小破片。	福建省	18後半～ 19C	947E-4 Ⅱ

第8表 現代陶・磁器 観察一覧

第30 図27	近世	— 3.2 —	淡灰白色 微粒子	淡緑白色。疊付のみ露胎。	なし	外側に花が描かれている。小碗。	国産	明治後半 ～大正	5表
図28	近世	— 3.0 —	淡灰白色 微砂粒混入	乳白色。高台の施釉は、均一に施されていない。疊付は露胎。	なし	底部の小破片。疊付以外は釉がかかるが雑に仕上げる。	国産	明治以降	872D-5.6 表採
図29	近世	— 4.6 —	白色 微粒子	淡青白色。疊付から底部にかけて露胎。	なし	高台に二条の圈線。疊付は幅広で、安定した造りである。(皿?)	中国	17C	596E-5 II a
図30	近世	— — 6.2	白色 微砂粒混入	やや厚い釉が施釉されているが、疊付のみ露胎とする。外側は濃青色、内底は白色。内体面も施釉	なし	小瓶の様な形で上部は細く疊付は面取りされており、安定した形である。	国産	明治以降	727E-3 III
図31	近世	11.0 6.4 1.9	淡緑白色 微粒子	疊付以外総釉。タロム青磁	なし	内側に花籠が描かれている。小皿。		明治～ 大正	737E-3 20～30 II b
図32	近世	8.2 3.0 4.4	黄白色 微粒子	疊状を除く総釉。淡黄色	ある	外側に梅の花と枝らしきものがあり、外底に薩摩の文様があり、小碗である。		明治以降	904E-3 40～50 II b
図33	近世	— 3.6 —	白色 微粒子	淡緑白色。疊付のみ露胎。	なし	外面部分に桜の花、枝、葉が描かれ、高台外側に電光形の文様を廻らせる。釉下彩		明治後半 ～大正	2表
図34	近世	— 3.0 —	白色 微砂粒混入	疊付を除く総釉。淡青白色。	なし	高台と腰部の境目と、高台中心に圈線が廻る。外側胴部は竹葉が描かれている。高台内側にも圈線	国産	大正以降	737E-3 20～30 II b
図35	近世	— — —	白色 微砂粒混入	薄い釉が全体的に施釉されている。白色。	なし	外面に淡青色の圈線が2本廻る。(蓋)	中国?	19C頃	717E-6 0～10 II a
図36	近世	— 底部 —	白色 微粒子	透明釉。疊付は露胎。	なし	高台際から丸味を持ちながら、ほぼまっすぐに向かうタイプである。		明治後半 ～大正	26E-3 I
図37	近世	— 6.8 —	淡灰白色 微粒子	淡緑色。疊付は露胎。外底は極端に施釉が薄く、外側高台に釉が集まっている。タロム青磁	なし	底部面積は広く、小皿と思われ、内底に型紙摺で草文様が描かれている。(皿)		明治後半 ～大正	904E-3 40～50 II b

第9表 砥部焼 観察一覧

挿図 番号・ 図版 番号	分類	口底器 径高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 その他の特徴	産	年代	出土地点
第31 図1	スシカ ンマカ イ	12.4 4.4 5.7	淡灰白色 微粒子	青白色	なし	口縁は外反する。内面外全 前面に竹の文様が見られ る。内面に細い圈線が見ら れる。(型紙刷り)	国産	明治～ 大正	1065E-3 III
図2	スシカ ンマカ イ	13.4 — —	淡灰白色 微粒子	灰青白色	なし	口縁部の小片、口縁は外反 する内面口縁から胴部にか けてと、外面に花文様あり (型紙刷り)	国産	明治～ 大正	10E-5 I
図3	スシカ ンマカ イ	13 — —	淡灰白色 微粒子	灰青白色	なし	口縁は外反し、口唇はやや 尖り気味である器内外面 には青色の文様が施される。 (型紙刷り)	国産	明治～ 大正	904E-3 40/50 II b
図4	スシカ ンマカ イ	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	青白色	なし	口縁の小片、口縁はかなり 外反する内面口縁から胴部 にかけてと、外面に竹の文 様あり。(型紙刷り)	国産	明治～ 大正	904E-3 40/50 II b
図5	スシカ ンマカ イ	— 8 —	淡灰白色 微粒子	灰白色	なし	底部破片、外底面中心部 には直径2.6cmのくぼみがあ りくぼみの端から疊付途中 までは露体。器内外面に文 様あり。(型紙刷り)	国産	明治～ 大正	106E-6 5/10 I
図6	スシカ ンマカ イ	— 7.2 —	淡灰白色で 褐色の微粒 子混入	青白色	なし	底部破片、高台内面から中 央くぼみの端まで光沢のな い施釉が見られる。器内 面、花文様あり。 (型紙刷り)	国産	明治～ 大正	567 攪乱
図7	スシカ ンマカ イ	— 8.4 —	淡灰白色で 褐色の微粒 子混入	青白色	なし	底部破片、疊付外端は面取 りされ、疊付から外底面中 心部途中まで露胎 図、1、5、6、7は足付 きハマの熔着痕が見られ る。器内面に文様あり。 (型紙刷り)	国産	明治～ 大正	225表

第10表 南 蛮 観 察 一 覧

挿図 番号・ 図版 番号	分 類	口 底 器 径 高 (cm)	素 地	釉色・施釉	貫 入	器形・文様 その他の特徴	産 年 代	出土地点	
第32 図1	南 蛮	20.5 — —	淡灰色で 粗粒子	外・内面とも 緑がかった 黒褐色	な し	口唇部は平坦に成形している 頸部から胴部にかけてL 字型に造る。	中国か 東南ア ジア	明の時代 14C後半 ～15C	10E-5 他3接合 I
図2	南 蛮	口 縁 部 — —	淡灰茶色 粗粒子	内面茶褐色 や淡黄色の まじった釉	あ る	口唇は肥厚の形状口四角形 状を呈する。	中国か 東南ア ジア	14C～ 16C	421D-6 (53) III
図3	南 蛮	19.3 — —	淡灰色で 粗粒子	外・内面とも 緑がかった 黒褐色	な し	口唇部は厚みがあり、平坦 に形成している。頸部から 胴部にかけて膨らむ。	中国か 東南ア ジア	14C後～ 15C後	161D-5 5/10 II b
図4	南 蛮	11.0 — —	赤みがかっ た茶色の 粗粒子	内面は赤み がかった黒 褐色外面は 褐釉が白く 変色	な し	口縁部は外反し肥厚してい る。外面と内面一部に二次 焼成の跡か？	中国か 東南ア ジア	15C～ 16C	1100E-5 III
図5	南 蛮	12.2 — —	所々に黄み がかった茶 褐色の微粒 子	暗茶褐色	な し	口縁部は外反し肥厚してい る内面直下に一条の沈線を 廻らす。	中国か 東南ア ジア	15C～ 16C	703E-3 10/20 II b
図6	南 蛮	11.0 — —	茶色の中央 部に青みが かった灰色 の微粒子	外面はチョコ レート色 で内面は所 々に黄色が みられる茶 褐色	な し	膨らみもった肩部から頸部 が垂直に立ち上がり折り返 し気味の口縁部、肩部に二 条横走。	中国か 東南ア ジア	16C～ 17C	683E-4 10/20 II
図7	南 蛮	— — —	灰 白 色 細 粒 子	両面茶褐色 と青色釉が かかる	あ る	頸部に2本の圈線を廻らす 肩は胴部へかけて張る。	中国か 東南ア ジア	14C後半 ～16C	336D-8 0/5 I
第33 図1	南 蛮	— 16.5 —	淡灰色の 粗粒子	内面は緑が かった茶褐 色内面は淡 茶色	な し	弱い上げ底。器面はナデ調 整で仕上げている。底面か らほぼ垂直に立ち上がり、 途中で外側に開く。	中国か 東南ア ジア	14C後～ 15C	710E-4 20/30 II
図2	南 蛮	— 底 部 —	淡 橙 色 茶色砂粗粒 子混入	光沢のない 灰色釉	な し	褐釉の壺 ベタ底器面はナデ調整で雑 に仕上げている。	中国か 東南ア ジア	14C～ 16C	593D-8 0/10 IV
図3	南 蛮	— 10.7 —	灰 色 岩 石 質	無 釉	な し	素地に白色物質が流水状に 混入している。 ベタ底	中国か 東南ア ジア	14C後半 ～16C	2 表
図4	南 蛮	— 13.5 —	暗紫色で黄 土色の微粒 子混入	外、内面共 に淡い紫色	な し	ベタ底、張り付けによりく びれを作る。内面はナデ仕 上げ。	中国か 東南ア ジア	14C～ 16C	表
図5	南 蛮	— 11.0 —	赤茶褐色 白色物質混 入	全面露胎	な し	素地に、白色物質が流水状 に混入している。 両面ナデ調整痕。ベタ底	中国か 東南ア ジア	14C～ 16C	190E-7 0/5 I

第10表 南 蛮 観 察 一 覧

第33 図6	南 蛮	— 14.5 —	灰 白 色 黒色薬物混入 細 粒 子	外面暗茶褐色釉、内面露胎	な し	ベタ底、中央にかけて上げ底。	中国か 東南ア ジア	14C ~ 16C	596E-5 II a
図7	南 蛮	— 11.3 —	淡 紫 色 細 粒 子	光沢のない 黒灰色釉	な し	ベタ底、内面ロクロ跡。	中国か 東南ア ジア	14C ~ 16C	830E-6 III
図8	南 蛮	— 14.5 —	灰 黄 白 色 白色物質が 流水状に混 入している	内・外面共に 黄色がか った茶褐色。 底部から 腰部にか けて茶褐色	な し	ベタ底、中央にかけて上げ底。底面の厚さが薄い器面はナデ調整で仕上げる内底面に遺物が付着している。	中国か 東南ア ジア	14C ~ 16C	4表
図9	南 蛮	— 底 部 —	橙 褐 色 黒色薬物混入	茶 褐 色	な し	二次的火熱?をうけ光沢を失っている。ベタ底	中国か 東南ア ジア	14C ~ 16C	555E-5 II a
図10	南 蛮	— 13.2 —	淡 黄 灰 色 粗 粒 子	両面黄茶褐色釉	あ る	内面ロクロ痕 外面胴部に幅3mmの沈線を廻らす。ベタ底、中央にかけて上げ底。	中 国	14C後~ 16C	683E-4 10/20 II
図11	南 蛮	— 7.3 —	レ ン ガ 色 粗 粒 子	両面は薄レ ンカ色		内面に変色の痕あり。底部の中央に盛り上がりが見られる。ロクロ引きのあともみられる。 外面は釉垂れ(褐釉の壺)	中国か 東南ア ジア	14C ~ 16C	900E-3 40/50 II b
図12	南 蛮	— — —	淡 灰 茶 色 岩 石 質	両面茶褐色釉	あ る	施釉の上から文様を削りとった跡がある 文様の形は不明。	中国か 東南ア ジア	14C後~ 16C	360D-6 II
図13	南 蛮	— — —	淡灰色と淡 黄土色の二 厚微粒子	内、外面と もに淡黄土 色	な し	外面はヘラ状の工具による平行線の削り跡が見られ、釉だれが見られる。内面は、うず巻状のナデ仕上げ。	中国か 東南ア ジア	14C ~ 16C	448D-8 10/15 III
図14	南 蛮	— — —	淡灰色と淡 黄土色の二 厚微粒子	内、外面と もに淡黄土 色	な し	外面はヘラ状の工具による平行線の削り跡が見られ、内面はうず巻状のナデ仕上げ。	中国か 東南ア ジア	14C ~ 16C	225表

第11表 タイ 焼 観察一覧表

挿図 番号・ 図版 番号	分 類	口 底器 径高 (cm)	素 地	釉色・施釉	貫 入	器形・文様 その他の特徴	産 年 代	出土地点
第34 図1	タ イ	20.5 — —	淡茶褐色で 粗 粒 子	外面は黄み がかかった黒 褐色、内面 は白く変色	な し	頸部から斜めに立ち上がり 口縁部を強く外反させ口唇 部外端から口縁部下部にか けて肥厚している	タ イ 15C～ 16C	242C-6 0/5 I
図2	タ イ	— — —	チョコレート 色 細砂粒混入	外面黒褐色 内面黒褐色 釉にムラが ある。	な し	胴部から頸部にくびれ、肩 のあたりにわずかなふくら みがある。(壺)	タイ? 15C～ 16C	596E-5 II a
図3	タ イ	— — —	淡 茶 色 粗 粒 子	外面黒褐色 釉、内面上 部釉ダレ	な し	2? 頸部に耳が付いている 壺。小破片のため大きさは 不明。(壺)	タイ? 15C～ 16C	1 表
図4	タ イ	口 縁 部 — —	淡 紫 色 粗 粒 子	両面黒褐色 釉	あ る	頸部から口縁部にかけて、 折り曲げ丸く成形 (壺)	タイ? 15C～ 16C	116D-5 II b
図5	タ イ	口 縁 部 — —	淡 紫 色 粗 粒 子	口唇部を除 く黄黒褐色 釉	な し	口唇部平たく成形される。	タ イ 15C～ 16C	88D-3 5/10 II
図6	タ イ	10.5 — —	黄 茶 色 の 粗 粒 子	外面黒褐色 で白く変色 している 内面茶褐色 釉にムラが ある。	な し	口縁部が玉縁状をなし、ほ ぼ垂直気味の頸部から緩い 肩部に移行する。既してこ のタイプの器形には肩部に 3～4の耳を貼付するもの が多い。	タイ? 15C～ 16C	83E-6 0/5 I
図7	タ イ	10.2 — —	茶 色 粗 粒 子	外面黒褐色 釉、内面茶 褐色釉白く 変色してい る	な し	頸部から口縁部にかけて折 りまがって、口縁部内 側は、輪状に削られている (壺)	タイ? 15C～ 16C	555E-5 II a
図8	タ イ	— — —	淡 灰 白 色 細砂粒混入	淡 灰 白 釉 外下部は露 胎、内面は 無釉	な し	胴部に灰色と黒色の縞文様 (壺)	タ イ 15C～ 16C	620C-5 20/30 II b
図9	タ イ	— 11.4 —	茶 色 細砂粒混入	底部脇の露 胎部分に厚 い黒釉だれ 内側、外底 は露胎	な し	底は平底で半部が破損 底面中央部やや上がる。 (壺)	タイ? 15C～ 16C	1077E-4 III
図10	タ イ	— 4.6 —	淡 灰 白 色 細砂粒混入	外面高台か ら底部は黒 褐色釉、内 面は透明釉	あ る	底部から高台部分へくびれ て胴部に向って開いている フタの付く壺	タ イ 15C～ 16C	4 表
図11	タ イ	— 4.8 —	淡 茶 色 細砂粒混入	内側底部外 側高台の一 部無釉、高 台から畳付 まで茶褐色 の釉ダレ	な し	高台部分がやや平坦で高台 部分がくびれている (壺)	東南ア ジア? 15C～ 16C	8E-3 I

第11表 タ イ 焼 観察一覧表

第34 図12	タ イ	— 12.3 —	茶色 細砂粒混入 断面中央灰 色サンド状	胴部の一部 に黒褐色の 釉垂れがあ る。内側と 胴部、底部 露胎	な し	底は平底で若干上げ底、半 部が破損 両面細砂ツブ状が出来、ガ サツキがある。	タ イ	15~16C	619C-5 10/20 800E-6 10/20 (IIb)(IIa)
------------	-----	----------------	-------------------------------	---	-----	---	-----	--------	--

第12表 陶器 観察一覧

挿図番号・図版番号	分類	口底器 径高 (cm)	素地	光沢	質入	器形・文様 その他の特徴	産年	年代	出土地点
第35 図1	陶器	17.4 — —	チョコレート色で微粒子	外面が濃茶 内面が茶色		口縁部が大きく外反して逆八の字状に開き、頸部から緩やかに膨らみをもつ 〔壺〕	沖縄	17C末～ 18C頃	703E-3 10/20 II b
図2	陶器	16.6 — —	チョコレート色で微粒子	外面が濃茶 内面が赤茶色		口縁部が大きく外反して逆八の字状に開き、頸部から緩やかに膨らみをもつ	沖縄	17C末～ 18C頃	11E-3 I
図3	陶器	23.8 — —	チョコレート色で断面中央部に灰色の微粒子	外面が淡茶 内面が赤茶色		折縁口縁を呈し、頸部から肩部に凹線文が数条廻る。	沖縄	17C末～ 18C頃	703E-3 10/20 II b
図4	陶器	15.0 — —	チョコレート色で微粒子	外内面 赤茶色		口縁断面が四角状を呈し、薄手の大型壺である。頸部に輪状の削りが入っている	沖縄	17C末～ 18C頃	757E-5 40/50 II b
第36 図1	陶器	15.6 — —	チョコレート色で断面中央部に灰色の微粒子	外面が茶色 内面が赤茶色		口縁部が把厚口になっている。素地の中央に空洞あり 〔壺〕	沖縄	17C末～ 18C頃	688E-5 20/30 II b
図2	陶器	14.6 — —	赤褐色で微粒子	外面が茶色 内面が薄茶色		素地にタテの白いすじが入っている。	沖縄	17C末～ 18C頃	1004E-4 30/40 III
図3	陶器	14.5 — —	チョコレート色微粒子	外面が黄緑茶色 内面が赤茶色		口縁部が把厚口になっている。	沖縄	17C末～ 18C頃	280C-5 10/15 II a
図4	陶器	— — —	灰色で下部がチョコレート色	外面が茶色 内面上部だけ肌色他灰色		胴部で取手がついている。素地に所々白いすじ有。 (内面にタタキ跡)	沖縄	17C	104E-6 5/10 I
図5	陶器	頸部 — —	チョコレート色微粒子	外面が薄茶色 内面は白地だが褐色の付着あり		頸部に凹凸の模様あり。素地に白いすじ有。	沖縄		567 攪乱
図6	陶器	頸部 — —	上部は灰色で下部はチョコレート色微粒子	外面は薄茶色 内面は赤茶色		頸部にろくろ回転引きによる2本の輪状線。	沖縄		596E-5 757E-5 40/50 II a) II b)
第37 図1	陶器	頸部 — —	チョコレート色微粒子	外面が薄茶 内面が濃茶		頸部と胴部にろくろ回転引きによる輪状線。	沖縄		800E-6 10/20 II a
図2	陶器	12.0 — —	チョコレート色微粒子	外面が赤茶色 内面が灰色		内面に擦痕がみられる。底部に1カ所、三つ足がみられ、素地に空洞あり。	沖縄		1100E-5 III
図3	陶器	頸部 — —	チョコレート色微粒子	外面が茶色 内面が赤茶色		頸部と胴部にろくろ回転引きによる輪状線。(瓶)	沖縄		2表

第12表 陶器 観察一覧

第37 図4	陶器	— 底 部 —	チョコレート色 微粒子	外面が赤茶色 内面が灰色		内部にナデ模様が残る。 (カメ)	沖 縄		984E-4 30/40 968E-4 20/30 (Ⅲ)(Ⅲ)
第38 図1	陶器	— 底 部 —	チョコレート色 微粒子	外面が濃茶 内面が赤茶		内部にナデ模様あり。	沖 縄		2表
図2	陶器	— 底 部 —	チョコレート色、下部 が灰色の微 粒子	外面が濃茶 内面が茶色		内部にナデ模様あり。	沖 縄		424E-7 Ⅱ a
図3	陶器	11.9 — —	半分はチョコ レート色 で半分は灰 色。中央に 濃灰色の微 粒子	外面が茶褐色、内面は 薄茶色		内部にナデ模様あり。	沖 縄		639E-3 Ⅱ a
図4	陶器	17.7 — —	黒灰色と灰 色が混ざっ ている 微粒子	外面が茶褐色、内面は 灰色		大きめの壺で、内部にナデ 模様があり、素地に白いす じが入っている。	沖 縄		984E-4 30/40 Ⅲ
第39 図1	陶器	14.2 — —	チョコレート 粗粒子	外面は濃茶 内面は赤茶		口縁は玉縁状である。 素地の中央に空洞あり。	沖 縄		1表
図2	陶器	11.0 — —	チョコレート 微粒子	外面は黄茶 内面は赤茶		口縁は玉縁状である。 素地に小さな空洞あり。	沖 縄		30E-4 Ⅰ
図3	陶器	13.0 — —	チョコレート 色で周り が灰色の微 粒子	外面は黒褐 色 内面は黄茶		口縁部が把厚口になってい る。	沖 縄		655E-5 30/40 Ⅱ b
図4	陶器	10.7 — —	チョコレート 色 微粒子	表面は濃茶		口縁は玉縁状で薄手の壺で ある。	沖 縄		137E-6 0/5 Ⅰ
図5	陶器	10.6 — —	チョコレート 色 微粒子	外面は淡黄 灰色、内面 は薄茶		口縁は把厚口で、頸部が長 い。 頸部は薄い灰色で胴部は薄 黄色がまじっている。	沖 縄		1表
図6	陶器	9.0 — —	チョコレート 色 微粒子	表面濃茶		口唇部が肥口している。 頸部が胴部へややりはりだ している。 (瓶)	沖 縄		968E-4 20/30 Ⅲ
図7	陶器	11.9 — —	チョコレート 色 微粒子	外面が淡茶 内面が茶色		口縁は把厚口で頸部が長い (瓶)	沖 縄		225表
図8	陶器	10.6 — —	チョコレート 色 微粒子	外面が赤茶 内面が灰色		口縁部が把厚口になってい る。 (瓶)	沖 縄		713E-5 30/40 Ⅱ b

第12表 陶器 観察一覧

第39 図9	陶器	9.7 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面がこげ茶、内面が茶色		口縁は把厚口で頸部が長く薄手である。(瓶)	沖縄	1077E-4 III
図10	陶器	口縁部 —— ——	チョコレート色 微粒子	表面茶色		口唇部が肥口している。頸部が胴部へややはりだしている。(瓶)	沖縄	190E-7 0/5 I
図11	陶器	9.3 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面が茶色 内面が赤茶色		口縁は玉縁状で薄手の垂である。肩部に2本線の削りが入っている。	沖縄	568 攪乱
図12	陶器	頸部 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面が黒褐色、内面は薄灰色		頸部に輪状の削りが入っている。	沖縄	768E-6 10/20 II a
第40 図1	陶器	—— 底部 ——	チョコレート色 微粒子	外面は茶褐色と露胎、内面は茶褐色		内面にナデ模様あり。素地に白いすじが入っている。	沖縄	767E-6 0/10 II a
図2	陶器	—— 底部 ——	チョコレート色 微粒子	外面はこげ茶、内面は濃灰色		素地の中央一部に灰色の微粒子	沖縄	1表
図3	陶器	—— 底部 ——	黒灰色で中央にチョコレート色	外面はこげ茶、内面は赤茶		両面にろくろ回転引きがある。	沖縄	195E-8 0/5 I
図4	陶器	—— 底部 ——	チョコレート色で、外側は灰色の微粒子	外面は赤茶色、内面は黒灰色		両面にろくろ回転引きがある。	沖縄	985E-4 30/40 III
図5	陶器	—— 底部 ——	チョコレート色で、外側は灰色の微粒子	外面は赤茶色、内面は黒灰白色		内面、ナデ調整により仕上げるが雑である。	沖縄	647E-4 II
図6	陶器	—— 底部 ——	チョコレート色 微粒子	両面チョコレート色		素地の中央に空洞あり。内面にろくろ回転引きあり。	沖縄	1表
図7	陶器	—— 底部 ——	チョコレート色 微粒子	外面は茶色 内面は赤茶色		内面にろくろ回転引きあり、素地に空洞あり	沖縄	567 攪乱
図8	陶器	—— 底部 ——	チョコレート色 微粒子	外面は茶色 内面は灰色		ベタ底。器面はナデ調整で雑に仕上げる。	沖縄	1064E-3 III
図9	陶器	—— 底部 ——	赤茶・灰色が混じっている。	外面は薄茶色、内面は灰色		胴部がうす茶で底部が黄色になっている。内面になで模様あり。	沖縄	1082E-5 III

第12表 陶器 観察一覧

第40 図10	陶器	底 部	チョコレート色 微 粒 子	外面は濃茶 内面は灰色	素地に赤茶と白色のすじが入っている。	沖 縄	2表
図11	陶器	底 部	チョコレート色 微 粒 子	外面は黒茶 内面は灰色	素地に小さな空洞が多くみられる。	沖 縄	60E-6 I
第41 図1	陶器	11.7	茶色 中央に灰色 の微粒子	外面はこげ 茶、内面は 濃赤茶	口縁部が逆「く」の字になっている。	沖 縄	表
図2	陶器	11.2	チョコレート色 微 粒 子	両面茶色	口縁部が把厚口になっている。	沖 縄	表
図3	陶器	13.9	チョコレート色 微 粒 子	外面茶色 内面赤茶色	玉縁を内側に折り曲げ丸く成形されている。	沖 縄	596E-5 II a
図4	陶器	6.9	チョコレート色 微 粒 子	両面とも茶 褐色	小破片のため大きさは不明だが、口縁部は玉縁状で頸部から口縁部の中央に膨らみがあり肩がはっている。口縁部の内側にも膨らみがある。	沖 縄	692E-6 0/10 II a
図5	陶器	2.8	赤 茶 色 微 粒 子	両面とも赤 茶	頸部が長く、直口である。 (きゅうすの取っ手)	沖 縄	225表
図6	陶器	口 縁 部	チョコレート色 微 粒 子	外面は黒褐色、内面はこげ茶	口縁部が把厚口になっている。素地に白いすじが見られる。	沖 縄	121E-6 I
図7	陶器	7.5	灰 色 微 粒 子	外面は黄茶 色、内面は 灰色	口縁部は小さく玉縁をつくる。素地の中央に濃灰色の微粒子がある。	沖 縄	985E-4 30/40 III
図8	陶器	5.9	黒 灰 色 微 粒 子	外面はチョコレート色 内面は赤茶 色	花瓶口縁部の破片である。 (瓶)	沖 縄	767E-6 0/10 II a
図9	陶器	5.8	チョコレート色 微 粒 子	両面とも緑 茶色	口縁部がやや四角状になっている。 (瓶)	沖 縄	900E-3 40/50 II b
図10	陶器	底 部	チョコレート色 微 粒 子	外面は淡茶 色、内面は チョコレート 色	頸部に五条の輪状線がある。内面全体に1cm前後の面取りがある。 (瓶)	沖 縄	713E-5 30/40 II b
図11	陶器	頸 部	チョコレート色 微 粒 子	外面は黒茶 内面は濃茶	縄状のような凹凸の模様あり。素地に白いすじあり。	沖 縄	568 攪乱
図12	陶器	口 縁 部	チョコレート色 微 粒 子	外面は黒褐色、内面は緑茶	口縁部は把厚口である。	沖 縄	718E-6 0/10 II a

第12表 陶器 観察一覧

第41 図13	陶器	頸部 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面は灰黄色、内面は濃灰色		頸部に三条の輪状線がある (瓶)	沖縄	2表
図14	陶器	底部 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面はこげ茶、内面は黄茶色		素地に小さな空洞あり。	沖縄	406E-9 0/5 I
図15	陶器	9.5 —— ——	赤茶色 微粒子	外面は赤茶、内面は灰色		底部に浅い削りが入っている。	沖縄	968E-4 20/30 III
図16	陶器	6.6 —— ——	赤茶色 微粒子	外面は濃黄茶色、内面は茶色		内面はろくろ回転引きがある。	沖縄	655E-5 30/40 II b
図17	陶器	7.3 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面は濃赤茶、内面は薄茶		素地に空洞あり。	沖縄	768E-6 10/20 II a
図18	陶器	7.0 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面は黄白色、内面は濃灰色		素地に空洞あり。底部全体の形が残っている。	沖縄	1064E-3 III
図19	陶器	6.4 —— ——	濃茶色 微粒子	外面は茶色、内面は灰色		底部が薄い赤茶になっている。素地に白いすじあり。 (瓶?)	沖縄	619C-5 10/20 II b
第42 図1	陶器	23.2 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面は濃灰色、内面は赤茶		口縁部が把厚口になっている。口縁部の下に輪状の削りが入っている。	沖縄	1064E-3 III
図2	陶器	19.3 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面は黒灰色、内面はこげ茶		口縁上端部が外側へ張り出し、口唇部が広くなり全体的に丸味のある器形となっている。	沖縄	947E-4 III
図3	陶器	17.5 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面は茶色、内面は赤茶		頸部から胴部にかけてはっている。口縁部内側に、はし描きによる波状文がある	沖縄	596E-5 II a
図4	陶器	17.3 —— ——	赤茶色とチョコレート色 色が混じっている	両面ともこげ茶		口縁上端部が外側へ、張り出している。	沖縄	516E-9 10/20 III
図5	陶器	16.4 —— ——	こげ茶 微粒子	両面とも黒茶		頸部から胴部にかけてはっている。	沖縄	421D-6 399 III
図6	陶器	15.0 —— ——	茶色 微粒子	両面ともこげ茶		頸部にはし描きによる細かい波状文がみられる。	沖縄	647E-4 II
図7	陶器	12.5 —— ——	赤茶色 微粒子	両面とも赤茶		口縁部上部には4本1組の波状文、頸部には6本1組の波状文がある。	沖縄	190E-7 0/5 I
第43 図1	陶器	頸部 —— ——	チョコレート色 微粒子	外面はこげ茶、内面はうす茶		素地に空洞あり。肩から口縁部にかけて斜めにすぼんでいる。	沖縄	2表

第12表 陶器 観察一覧

第43 図2	陶器	8.4 — —	チョコレート色 粗粒子	外面は黒茶 内面は薄黄色	内部になて模様あり。	沖縄	77D-5 0/5 I
図3	陶器	10.1 — —	チョコレート色 微粒子	黒褐色 釉垂れ (両面)	頸部から口縁部にかけて斜めにすぼんでいる。	沖縄	2表
図4	陶器	10.8 — —	チョコレート色 微粒子	外面は濃赤茶、内面は薄茶色	頸部から口縁部にかけて斜めにすぼんでいる。 素地に空洞あり。	沖縄	99E-6 0/5 I
図5	陶器	— 底部 —	赤茶色 微粒子	外面は薄茶 内面はレンガ色	胴部にろくろ調整痕がある 底部はベタ底で二条の削りがある。	沖縄	3表
図6	陶器	11.2 — —	チョコレート色 微粒子	黒褐色 釉垂れ (両面)	頸部から口縁部にかけて直角にすぼんでいる。	沖縄	555E-5 692E-6 0/10 (IIa)IIa)
図7	陶器	— 底部 —	チョコレート色 粗粒子	外面釉垂れ 内面は黒褐色	三つ足の1つが残っている。 素地に白いスジが残っている。 内部に白い釉が雑に付着。	沖縄	768E-6 10/20 IIa
図8	陶器	— 頸部 —	チョコレート色 微粒子	外面はこげ茶、内面は茶緑	外部に白い釉が雑に付着している。 素地に小さな空洞あり。	沖縄	713E-5 30/40 IIb
図9	陶器	— 底部 —	チョコレート色 微粒子	外面は濃茶 内面は茶色	高台筋にろくろ調整痕がみられる。 三つ足の1つが残っている	沖縄	158E-7 I
図10	陶器	— 底部 —	チョコレート色 微粒子	外面は茶色 内面は灰色	外面に淡い黄色い釉が付着 底部に模様(?)が削られている。	沖縄	140E-6 0/5 I
図11	陶器	7.0 — —	赤茶色 微粒子	外面は茶色 内面は灰色	素地に白いスジあり。	沖縄	768E-6 10/20 IIa
図12	陶器	— 底部 —	赤茶色 微粒子	外面は黒灰色、内面は茶色	素地に白いスジあり。	沖縄	678E-3 0/10 IIb
第44 図1	陶器	15.6 — —	チョコレート色 微粒子	外面は茶色 内面は釉垂れ	頸部に耳があり穴があいている。 素地に白いスジあり	沖縄	678E-3 0/10 IIb
図2	陶器	— 頸部 —	茶色 微粒子	外面は茶色 内面は薄茶	頸部に耳があり穴があいている。 口縁部にかけて斜めに上がっている。 内部にひび割れあり。	沖縄	99E-6 0/5 I
図3	陶器	7.4 — —	チョコレート色 微粒子	両面暗紫色	素地に灰色の微粒子あり。 頸部から口縁部にかけて直角になっており、 胴部は緩やかな丸みになっている。	沖縄	158E-7 I

第12表 陶器 観察一覧

第44 図4	陶器	10.8 — —	赤茶色 微粒子	外面は茶色 内面は赤茶		頸部から口縁部にかけて直 角になっており、胴部は緩 やかな丸みになっている。 肩部に2本の削りが入って いる。	沖縄		768E-6 10/20 II a
図5	陶器	7.1 — —	チョコレ ト色 微粒子	外面はこげ 茶、内面は 灰色		急須の口縁部になっており 素地に白いスジあり。	沖縄		683E-4 10/20 II
図6	陶器	口縁部 — —	チョコレ ト色、灰色 の微粒子	外面は淡黄 色、内面は 色にむらが ある。		ふたの一部?	沖縄		190E-7 0/5 I
図7	陶器	— — —	チョコレ ト色、灰色 の微粒子	外面は赤茶 色、内面は 濃茶		素地に白いスジあり。	沖縄		730E-3 30/40 III
図8	陶器	16.3 — —	赤茶色 微粒子	外面は茶色、 内面は薄茶 色		口唇部がかなり内湾してい る。	沖縄		984E-4 30/40 III
図9	陶器	— — —	チョコレ ト色 微粒子	外面は濃こ げ茶、内面 は釉垂れ		底部の中央にくぼみあり	沖縄		2表
図10	陶器	— — —	レンガ色 微粒子	外面はこげ 茶、内面は 薄いレンガ 色		素地中央に灰色の微粒子あ り。胴部下はレンガ色にな っている。底部に釉が雑に 付着。	沖縄?		619C-5 10/20 II b
図11	陶器	— — —	チョコレ ト色 微粒子	外面は赤茶 色、内面は 釉垂れ		内部にろくろ模様あり。底 部にてこぼこあり。	沖縄		743E-4 20/30 II
図12	陶器	— — —	薄灰色 粗粒子	外面は茶色、 内面は灰色		素地に小さな空洞あり。	沖縄		596E-5 II a
図13	陶器	— — —	赤茶色 微粒子	外面は茶色、 内面はレン ガ色		内部の底部に白い釉が付着 している。	沖縄?		1082E-5 III
図14	陶器	— 7.8 —	淡灰色 粗粒子	無釉		底部外端に一条の沈線状を 廻ぐらせている。	沖縄?	17後～ 18C	T表
図15	陶器	— — —	チョコレ ト色 微粒子	両面暗紫色		素地の周りに灰色の微粒子 あり。内部の一部に黄色の 釉が付着。素地に空洞あり 胴部に1本削り線あり。	沖縄		745E-4 20/30 II
図16	陶器	— 10.3 —	チョコレ ト色 微粒子	外面高台か ら胴部に黒 釉、疊付底 部内側露胎 で一部釉厚 い黒釉ダレ		内側全体に8mm前後の輪状 の面取りがある。(壺)	沖縄		678E-3 0/10 II b

第13表 播鉢 観察一覧

挿図 番号・ 図版 番号	分 類	口 径 底 器 高 (cm)	素 地	光 沢	貫 入	器形・文様 その他の特徴	産 年 代	出土地点
第45 図1	スリ鉢	22.0 10.0 9.5	褐 色	つ や 有		立ち上がりが緩やかな丸みを持つ。播目は7本で、工具幅1.4cm。上方へいくにつれ、間隔が開く。口縁部直下1.5cmの所まで、ナデ消す。	沖 縄	619C-5 10/20 II b
図2	スリ鉢	18.2 — —	褐 色	つ や 無		立ち上がりが直線になっている。播目が10本で、工具幅1.9cm。口縁部直下1.5cmの所まで、ナデ消す。指痕で凹みを作っている。注口の播鉢であったと思われる。	沖 縄	688E-5 20/30 II b
図3	スリ鉢	26.2 — —	褐 色	つ や 有		口縁部が丸みを帯び、上がり気味に作られていて、丁寧にナデ仕上げられている。播目は、8本で、工具幅1.5cm。口縁部直下2.0cmの所まで、ナデ消す。	沖 縄	99E-6 0/5 I
図4	スリ鉢	26.5 — —	褐 色	つ や 無		口縁部は丸みを帯びる。播目は7本で工具幅1.5cm。口縁部直下2.0cmの所まで、ナデ消す。播目は粗い。	沖 縄	1116表
図5	スリ鉢	31.2 — —	褐 色	つ や 無		口縁部が、上がり気味に作られている。播目は口縁部直下2.8cmの所まで、ナデ消されているが、きれいに仕上がっていない、所々に播目が残る。	沖 縄	984E-4 10/20 III
図6	スリ鉢	口 縁 部 — —	褐 色	つ や 無		胎土中に赤色粒が混入。播目は4本しか確認できないので全体像はつかめない。内面口縁部直下2.5cmの所までナデ消す。	沖 縄	683E-4 10/20 II
図7	スリ鉢	口 縁 部 — —	褐 色	つ や 無		第45-3と同一個体と思われる。	沖 縄	6E-4 I
図8	スリ鉢	口 縁 部 — —	褐 色	つ や 無		口縁部下から胴部にかけて、薄手である。下部の稜の直下に凹線様のものを廻らしている。破片の為、播目は、確認できない。	沖 縄	26E-3 I
第46 図1	スリ鉢	31.0 13.2 12.3	褐 色	つ や 無		立ち上がりが、緩やかな丸みを持つ。播目は6本で工具幅1.5cm。内底面中央より、口縁に向けて、一気に描き上げている。口縁直下4.0cmの所までナデ消している。	沖 縄	1027E-4 683E-4 10/20 (III)(II)

第13表 播 鉢 観 察 一 覧

第46 図2	スリ鉢	— — 胴部	褐色	(外)つや無 (内)つや有		胴部の破片。内面のみ光沢があり、なめらか。播目は5本で工具幅1.2cmを計る。	沖縄		718E-6 0/10 II a
図3	スリ鉢	31.2 — —	褐色	つや無		外反部直下に凹面を形成し、その下部に稜を設けている。播目は9本で、工具幅1.8cm。播目粗く、明瞭に残っている。口縁部直下2.7cmの所まで、ナデ消す。	沖縄		2表
図4	スリ鉢	27.2 — —	褐色	つや無		胴部より斜め直線上に立ち上がるが、口縁部直下で、やや内傾ぎみに立ち上がらせて端反りになる。内外面共に、成形時の水挽き轆轤目をそのまま残す。播目は9本で工具幅1.7cm。口縁直下2.3cmの所まで、ナデ消す。	沖縄		968E-4 20/30 III
第47 図1	スリ鉢	20.1 — —	褐色	つや有		胴部より斜め直線上に立ち上がり、口縁部直下でやや内傾ぎみに立ち上がらせて端反りになる。内外面に光沢がある。播目は11本で工具幅1.7cm。内面、磨減し、滑らかである。	沖縄		1064E-3 III
図2	スリ鉢	28.5 — —	褐色	つや有		轆轤引きの跡が残っている。内外面に大小の気泡が生じ、光沢あり。播目は、8~10本の間で描く。工具幅約2.0cm。口縁部の直下1.8cmの所までナデ消す。	沖縄		703E-3 10/20 II a
図3	スリ鉢	29.2 — —	褐色	つや有		口縁から胴部にかけて薄手である。内面自然釉がかかり、滑らかである他、混和剤が、アタタ状になって表面に明瞭に出ているのがわかる。播目はナデ消しと、磨減により、6本しか確認できない。	沖縄		9E-4 I
図4	スリ鉢	口縁部 — —	褐色	つや有		外反部直下に凹面を形成し、その下部に稜を設けている。内面気泡が生じている。播目は6本で工具幅1cm。口縁部直下1.3cmの所までナデ消す。	沖縄		2表
図5	スリ鉢	— — 底部	褐色	一部つや有		底部から斜め方向に立ち上がる。外面に重ね焼き痕有り。播目はあまり、すり減っていないく、明瞭である。	沖縄		1108E-8 II
図6	スリ鉢	— — 底部	褐色	一部つや有 (自然釉)		底部から斜め方向に立ち上がる。外面に重ね焼き痕有り。底部より1cm上辺りに三条の沈線を廻らしている。播目は、やや粗い。	沖縄		424E-7 II a

第13表 擂鉢 観察一覧

第47 図7	スリ鉢	底 部	褐色	つ や 無		底部から斜め方向に立ち上がる。播目は粗く、かなり磨滅している。	中国か? 東南アジア?	14~16C	1137C-7 ・ 8 畦
第48 図1	スリ鉢	底 部	褐色	つ や 有		底部から斜め方向に立ち上がる。器の内外面、共に調整に入念さが、欠けている。播目も粗く、一部磨滅している。	沖 縄		655E-5 30/40 648E-4 0/10 (IIb)(II)
図2	スリ鉢	胴 部	褐色	(外)つや無 (内)つや有		胴部小破片の為、播目は何本なのかは明確ではないが、磨滅し、表面が、滑らかである。	沖 縄		830E-6 I
図3	スリ鉢	— 11.0 —	褐色	つ や 無		底部のみしか残っておらず、播目も無し。陶片に類似しているか?	沖 縄		900E-3 40/50 II b
図4	スリ鉢	25.0 — —	褐色	つ や 無		外側への開きがほとんどなく、ほぼ直方向である。口縁部の上面に一条の沈線を廻らす。播目は口縁部直下、約2.0cmの所まで、密に施されている。	沖 縄		755E-5 30/40 II b
図5	スリ鉢	30.8 — —	褐色	つ や 無		図5、6の2点は他の擂鉢と異なり、口縁が先すぼまりになっている事と、ナデ仕上げにより、特に丁寧に仕上げられている。更に、器外面は、自然釉ではなく、意識的に釉をかけてある。	沖 縄		99E-6 0/5 I
図6	スリ鉢	20.3 — —	褐色	つ や 無		立ち上がりは、口縁より胴部にかけて、緩やかな丸みを持つ。播目は、一旦ナデ仕上げした後に、3~5本で、引きあげている。	沖 縄		1077E-4 III
第49 図1	スリ鉢	26.7 — —	褐色	つ や 無		口縁部直下で、内傾気味に立ち上がらず、ストレートにいて端反りになるタイプ。器外面、水挽き轆轤目を有する。播目は7本で、工具幅1.4cm。	沖 縄		755E-5 30/40 II b
図2	スリ鉢	20.6 — —	褐色	つ や 無		口縁部の張りが平行にならず、やや外側へ斜めに成形されている。水挽き轆轤目を残す。播目は口縁直下2.0cmまで、密に施されており、かなり、磨滅している。	沖 縄		900E-3 40/50 II b
図3	スリ鉢	20.7 — —	褐色	つ や 無		立ち上がりは、緩やかな丸みを持つ。沈線を、口縁部上面、内外面の口縁部直下に、一条ずつ、外面の胴部の4カ所に廻らす。播目は小破片の為、確認できない。	沖 縄		713E-5 30/40 II b

第13表 擂鉢 観察一覧

第49 図4	スリ鉢	28.6 — —	褐色	つや無		外側への開きが、ほとんどなく、ほぼ直方向で、口縁に向う。口縁部は水平。口縁の上面に一条の沈線を廻らす。播目は口縁部直下2.5cmまで密に施されている。	沖縄		998E-4 30/40 Ⅲ
図5	スリ鉢	29.4 — —	褐色	つや無		外側への開きが、ほとんどなく、ほぼ直方向で、口縁の上面及び、口縁部直下に一条ずつ沈線を廻らす。播目は口縁部直下2.0cmまで、密に施されている。ナデ仕上げが悪く、所々に播目が残っている。	沖縄		2表
図6	スリ鉢	27.4 — —	褐色	つや無		外側への開きが、ほとんどなく、ほぼ直方向で、口縁の上面及び、外面の胴部に一条ずつ沈線を廻らす。播目は10本で、工具幅2.0cm。口縁部直下、2.5cmの所まで、ナデ消す。	沖縄		984E-4 30/40 Ⅲ
図7	スリ鉢	32.2 — —	褐色	つや無		外側への開きが、ほとんどなく、ほぼ直方向で、口縁の上面に一条の沈線を廻らす。外面は、口縁部直下、段状に成形されている。播目は密に施され、口縁部直下2.5cmの所まで、ナデ消す。	沖縄		985E-4 30/40 Ⅲ
第50 図1	スリ鉢	22.6 — —	褐色	外面つや有		立ち上がりが緩やかな丸みを持ち、口縁部は水平。口縁の上面に一条の沈線を廻らす。器内外面に気泡が生じている。播目は密に施され、口縁部直下、2.5cmの所まで、ナデ消す。	沖縄		30E-4 0/5 Ⅰ
図2	スリ鉢	22.4 — —	褐色	つや無		外側への開きがほとんどなく、ほぼ直方的。口縁から胴部にかけて薄手である。口縁部は水平で、上面に一条の沈線を廻らす。播目は口縁部直下2.0cmまでは、ナデ消されているが、密に施されている。	沖縄		1027E-4 Ⅲ
図3	スリ鉢	口縁部 — —	褐色	つや無		立ち上がりが、緩やか丸みを持つ。播目は口縁部直下約3.0cmまではナデ消され斜めに密に施されている。	沖縄		1027E-4 Ⅲ
図4	スリ鉢	口縁部 — —	褐色	つや無		外側への開きが、ほとんどなく、ほぼ直方向で口縁に向う。口縁部は、水平。胎土中に赤色粒が、混入。高温による溶解の為、器が変形している。播目は、口縁直下2.0cmまでナデ消されており密に、施されている。	沖縄		1064E-3 Ⅲ

第13表 播 鉢 観察一覧

第50 図5	スリ鉢	口縁部 —— ——	褐色	つや無		外側への開きが、ほとんどなく、ほぼ直方向で口縁部は水平であり、口縁部先端は逆L字状に折り曲げて作ってある。口縁上面に一条の沈線を廻らす。播目は口縁直下2.5cmの所までナデ消されており、12本が、確認できたが、工具幅は計測できない。	沖縄		10E-5 I
図6	スリ鉢	—— 7.6 ——	褐色	つや無		器外面に指痕を残す他、器面調整に入念さが欠けている。播目はかなり粗い。	沖縄		1064E-3 III
図7	スリ鉢	—— 底部 ——	褐色	つや無		底部から斜め方向に立ち上がる。外面重ね焼きの跡が見られる。断面の胎土中に赤色粒が、無数に混入。播目は粗く、「く」の字に描かれている。	沖縄		712E-5 30/40 II b
図8	スリ鉢	—— 10.0 ——	褐色	つや無		底部はベタ底に作られ、底面からの立ち上がりが、緩やかな丸みを持ち外側に開く。播目は粗く、一部磨減痕が見られる。	沖縄		55D-4 30/40 II
図9	スリ鉢	—— 底部 ——	褐色	つや無		底部の小破片で、底面からの立ち上がりが斜め直線上に作る播目は、シャープで外底が若干上げ底の様である。外面に指痕が見られる。	沖縄		83E-6 0/5 I
第51 図1	スリ鉢	—— 11.4 ——	褐色	つや無		底部はベタ底に作られ、底面からの立ち上がりが、丸みを持ち外側に開く、播目は粗く所々磨減痕が、見られる。外面、底面共にナデ調整により丁寧に仕上がる。	沖縄		968E-4 20/30 III
図2	スリ鉢	—— 9.4 ——	褐色	つや無		底部はベタ底である。播目は立ち上がり部分まで全面に施されるが内底面中央に3~4回縦位に引いただけである。素地はサンドイッチ状になる。	沖縄		758E-5 40/50 II b
第52 図1	スリ鉢	—— 10.4 ——	褐色	つや無		底部の小破片。底面からの立ち上がりは、胴部破損の為、明瞭でない、播目は粗く、一部磨減痕が見られる。	沖縄		1064E-3 III
図2	スリ鉢	—— 13.4 ——	褐色	つや無		底部はベタ底、底面からの立ち上がりが、直線的に胴部へ延びる。播目は粗く所々磨減痕が見られ、内底面中央に縦位の播目を引いている。	沖縄		702E-3 10/20 II b
図3	スリ鉢	胴部 —— ——	褐色	つや無		底部はベタ底。胴部にヘラ削りの調整痕が、1部分見られる。内面は黒色、播目は粗く一部磨減。	沖縄		1027E-4 III

第13表 摺鉢 観察一覧

第52 図4	スリ鉢	— 8.0 —	褐色	つや無		立ち上がりが、斜め直線上になっている。内底面は、ゆるやかなカーブではなく、中央に向けて、極端に落ち込む様な作りである。摺目は粗い。外面、ほとんど調整されておらず、出来が悪い。	沖縄		741E-4 20/30 II
図5	スリ鉢	— 10.4 —	褐色	つや無		立ち上がりが、直線的に胴部へ延びる。摺目は立ち上がり部分まで全面に施されるが、内底面は何回か不明だが、縦位に引いていて摺目は粗い。	沖縄		712E-5 30/40 II b

第14表 湧田 焼 観察一覧

挿図 番号・ 図版 番号	分 類	口 底 器 径 高 (cm)	素 地	釉色・施釉	貫 入	器形・文様 その他の特徴	産 年 代	出土地点
第53 図1	湧 田	13.4 6.8 7	底部はレン ガ色 胴部は黒灰 色で微粒子	底部をのぞ いて総釉 灰 色 釉	な し	胴部よりストレートに立ち あがり、直口タイプ。この タイプは17世紀～18世紀頃 の中国の技法をとり入れて いる。	沖 縄 18C頃	746E-4 20/30 II
図2	湧 田	13.8 7 7	底部は肌色 胴部は灰色 粗 粒 子	底部をのぞ いて総釉 灰 白 色 釉	な し	胴部よりストレートに立ち あがり直口タイプ。	沖 縄 18C頃	683E-4 10/20 III
図3	湧 田	12.8 6.2 6.1	暗 灰 色 微 粒 子	両面胴下 半部まで 灰 色 釉	な し	胴部よりストレートに立ち あがり直口タイプ。疊付外 端の素地は丸く成形され る。	沖 縄 18C頃	678E-3 0/10 II a
図4	湧 田	13.4 6.2 6.7	淡 灰 色 粗 粒 子	両面胴下 半部まで 灰 白 色 釉	あ る	胴部よりストレートに立ち あがり直口タイプ。内外底 面にロクロ痕が見られる。	沖 縄 18C頃	655E-5 30/40 II b
図5	湧 田	13.2 5.6 6.4	淡 灰 色 微 粒 子	両面胴下 半部まで 灰 黄 色 釉	あ る	口縁部は、やや外反し内外 面共に、不鮮明な圈線が見 える。内面上部に釉だれあ り。	沖 縄 18C頃	746E-4 20/30 II
図6	湧 田	12.8 6.6 6.5	淡 灰 色 微 粒 子	両面胴下 半部まで 淡灰緑色釉	あ る	疊付は平坦、高台外面に釉 垂れあり。作りはわりと丁 寧。	沖 縄 18C頃	1112表
図7	湧 田	— 6.2 —	底部は淡黄 白色で下 部は灰色 微 粒 子	両面胴下 半部まで 灰 色 釉	な し	疊付は平坦に仕上げる釉の 透明度は内外面共良好。内 外底面中央部のみ影みを持 つ。	沖 縄 18C頃	984E-4 30/40 III
図8	湧 田	12.6 5.6 6	淡 灰 色 微 粒 子	外面高台 ぎわ、内面 見込部まで 暗 灰 色 釉	あ る	胴部よりストレートに立ち あがり直口タイプ。一部高 台下部まで厚い釉だれあ り。	沖 縄 18C頃	984E-4 30/40 III
図9	湧 田	— 6.6 —	淡 灰 色 粗 粒 子	淡灰緑色釉	な し	一部高台上部まで釉だれあ り。疊付から高台内側途中 まで粗い砂が付着。	沖 縄 18C頃	26E-3 I
図10	湧 田	— 5.6 —	底部は淡茶 白色で下部 は淡灰色 粗 粒 子	両面胴下 半部まで 灰 白 色 釉	な し	高台部分破損する。底部内 面中央部に釉が雑にぬられ ている。	沖 縄 18C頃	1065E-3 1029E-4 III
図11	湧 田	— 6.6 —	淡 茶 白 色 粗 粒 子	両面胴下 半部まで 灰 白 色 釉	な し	底部破損する。疊付内外端 の素地は僅かに面取りされ るが一様ではない。	沖 縄 18C頃	I 表
図12	湧 田	— 5.2 —	灰 色 微 粒 子	両面胴下 半部まで 灰 白 色 釉	な し	底部の小破片。高台内側か ら疊付まで浅く削り取る。	沖 縄 —	1008E-4 III
図13	湧 田	— 5.8 —	淡黄茶白色 微 粒 子	両面胴下 半部まで 灰 白 色 釉	な し	高台は幅広、疊付内外端の 素地は丸く成形される。	沖 縄 —	947E-4 II

第14表 湧田 焼 観察一覧

第53 図14	湧田	— 5.8 —	淡灰色 粗粒子	両面胴下 半部まで 灰白色釉	なし	高台破損、内面白化粧の 後、透明釉をかける。 内底面中央も施釉	沖縄	—	1065E-3 III
図15	湧田	— 6.4 —	にごった白 微粒子	両面胴下 半部まで 白色釉	ある	内面底部の中央部分に、透 明釉がかかる。	沖縄	—	704E-3 10/20 II b
第54 図1	湧田	13.4 — —	灰色 粗粒子	灰色釉	ある	口縁部の小破片。口縁はや や外反する。	沖縄	—	985E-4 30/40 III
図2	湧田	口縁部 — —	淡黄茶白色 微粒子	淡灰白色釉	なし	内外面、ロクロ回転痕が見 られる。口縁部小破片。	沖縄	17C～ 18C	568 攪乱
図3	湧田	13.6 — —	淡灰色 粗粒子	淡灰白色釉	なし	口縁部の小破片。口縁はや や内湾する。	沖縄	—	2表
図4	湧田	10.8 — —	淡灰色 粗粒子	淡灰白色釉	なし	口縁部の小破片。 口縁は外反する。	沖縄?	—	1082E-5 III
図5	湧田	— — 胴部	淡灰白色 微粒子	淡青色釉	両面に細 かくある	内面なし。 外面に不鮮明な文様が見ら れる。(淡灰青色) (胴部一部破片)	沖縄	19C	1004E-4 30/40 III
図6	湧田	口縁部 — —	淡灰黄白色 微粒子	淡灰白色釉	なし	内外面とも無文。 外側口縁部先端部分が輪状 にけずられている。口縁部 小破片。	沖縄?	17C後～ 18C	904E-3 40/50 II b
図7	湧田	10.8 — —	淡灰色 微粒子	淡灰白色釉	なし	口縁部の小破片。 口縁は直口タイプ。	沖縄	—	868D-5 20/30 III
図8	湧田	口縁部 — —	淡灰色 粗粒子	淡灰白色釉	なし	口縁部直口状を呈する。 口縁から胴部にかけて一部 釉だれがみられる。見込に 細かい圏線を廻らす。	沖縄	—	5表
図9	湧田	口縁部 — —	黒色微粒子 を少量混入 する	両面胴下 半部まで 淡灰白色釉	外面口縁 の上部に わずかに ある	内面口縁から茶筌摺に細か い圏線を廻らす。	沖縄	—	998E-4 30/40 III
図10	湧田	口縁部 — —	淡灰色 黒色微粒子 混入	灰色釉	ある	口縁部の小破片。 一部外面途中に厚い釉垂れ が見られる。	沖縄	—	1078E-4 III
図11	湧田	口縁部 — —	淡灰色 微粒子	淡灰白色釉	ある	化粧かけの上に透明口縁部 の小破片。口縁は外反する。	沖縄	—	5表
図12	湧田	口縁部 — —	淡灰色 粗粒子	淡灰白色釉	なし	口縁部の小破片。 内面胴部から露胎する。	沖縄	—	1004E-4 30/40 III
図13	湧田	10.2 — —	灰茶色 微粒子	淡灰白色釉	なし	外側口縁部に厚い釉垂れ が、見られる。	沖縄	15C～ 16C	704E-3 10/20 II b

第14表 湧田 焼 観察一覧

第54 図14	湧田	口縁部 — —	淡灰色粗 微粒子	淡灰色釉	あ る	口縁部の小破片。 口縁わずかに外反する。	沖縄	—	1027E-4 Ⅲ
図15	湧田	口縁部 — —	灰色粗 微粒子	淡灰色釉	あ る	口縁部の小破片。 ストレート直口。口唇部わ ずかに肥厚する。	沖縄	—	678E-3 0/10 Ⅱa
図16	湧田	— 6.2 —	淡灰色粗 微粒子	灰色釉	な し	内外底部中央に盛りあがり がある。	沖縄	—	904E-3 40/50 Ⅱb
図17	湧田	— 6 —	淡灰白色粗 微粒子	底部露胎	な し	畳付の素地は内端が雑に削 られ、高台脇に一部砂が付 着。	沖縄	—	968E-4 20/30 Ⅲ
図18	湧田	— 6 —	淡灰色粗 微粒子	底部露胎	な し	内外底部中央にわずかに盛 りあがりがある。	沖縄	—	947E-4 Ⅲ
図19	湧田	— 6.4 —	淡灰白色粗 微粒子	底部露胎	な し	高台脇に一部釉がかかって いる。畳付の素地は外端が 浅く削られる。	沖縄	—	968E-4 20/30 Ⅲ
図20	湧田	— 6 —	赤茶色で端 はやけている 微粒子	底部露胎	な し	内外底部中央に盛りあがり がある。高台部に圈線を廻 らす。	沖縄	—	Ⅰ表
図21	湧田	— 7 —	淡茶黄色粗 微粒子	器外面高 台ぎわまで 灰色釉	な し	一部高台部に釉だれあり、 内外底面にロクロ痕が見ら れる。	沖縄	—	710E-4 Ⅱ
図22	湧田	— 6.2 —	淡灰白色粗 微粒子	底部露胎	な し	高台部に圈線を廻らす畳付 から高台途中に粗い砂が付 着。	沖縄	—	391E-9 Ⅰ
図23	湧田	— 5.8 —	淡灰白色粗 微粒子	底部露胎	な し	内外底部中央にわずかに盛 りあがりがある。	沖縄	—	1100E-5 Ⅲ
図24	湧田	— 6.4 —	淡灰白色粗 微粒子	底部露胎	な し	底部の小破片。 高台内側から畳付まで斜め に削られ底部は厚い。	沖縄	—	745E-4 20/30 Ⅱ
図25	湧田	— 6.4 —	淡茶黄白色粗 微粒子	底部露胎	な し	高台に一部釉だれが見られ る。畳付は平坦。底部の小 破片。	沖縄	—	683E-4 10/20 Ⅲ
図26	湧田	— 6.2 —	淡茶黄白色粗 微粒子	底部露胎	な し	底部を半分程度破損する。 高台下端は内面から斜めに 削られる。	沖縄	—	710E-4 20/30 Ⅱ
図27	湧田	— 5.8 —	にごった灰色粗 微粒子	底部露胎	な し	高台外面上部に圈線を廻ら す、高台下部は内外両面か ら斜めに削られ、畳付は狭 小。	沖縄	—	1027E-4 Ⅲ
図28	湧田	— 6.2 —	淡灰色粗 微粒子	両面胴下 半部まで 灰白色釉	あ る	底部の小破片。 内外両面共見込みから畳付 まで露胎。	沖縄	—	567 攪乱

第14表 湧田 焼 観察一覧

第54 図29	湧田	— 6.6 —	淡灰黄色 微粒子	両面胴下 半部まで 灰白色釉	なし	内外底部中央にわずかな盛りあがりがある。高台部に 圏線を廻らす。	沖繩	—	1004E-4 30/40 Ⅲ
図30	湧田	— 5.6 —	淡灰黄色 微粒子	器外面高 台ぎわまで 灰白色釉	なし	高台部に圏線を廻らす。 内底面見込み部と畳付に粗 い砂が付着する。	沖繩	—	1078E-4 Ⅲ
図31	湧田	— 5 —	淡灰白色 微粒子	内面茶褐色 外面、胴下 半部まで 灰白色釉	なし	内面底部にうずまき状の面 取りがある。 沖繩産の壺である。	沖繩	—	984E-4 30/40 Ⅲ
図32	湧田	— 6.6 —	淡灰黄白色 粗粒子	底部露胎	なし	底部を半分破損する。畳付 は平坦、高台幅が広く、外 底にロクロ痕。	沖繩	—	1004E-4 30/40 Ⅲ
図33	湧田	— 6.4 —	灰黄色 微粒子	両面胴下 半部まで 灰白色釉	なし	外底にロクロ痕が見られ る。高台内外下部に砂が付 着している。	沖繩	—	1078E-4 Ⅲ
図34	湧田	— 6.8 —	下部は淡灰 色 底部は淡灰 黄色 粗粒子	両面胴下 半部まで 灰白色釉	なし	高台に圏線を廻らす。 畳付の素地は外端が丸く成 形される。	沖繩	—	1065E-3 Ⅲ

第15表 褐釉陶器 観察一覧

挿図 番号・ 図版 番号	分 類	口 底器 径 高 (cm)	素 地	釉色・施釉	貫 入	器形・文様 その他の特徴	産 年 代	出土地点
第55 図1	褐 釉 陶 器	21.0 — —	淡 灰 色 で 微 粒 子	口唇から 外面にかけ て黒色。内 面は灰色 釉は厚い。	あ る	大碗 口縁部が肥厚している 口縁部小破片	沖 縄	755 E-5 30/40 II b
図2	褐 釉 陶 器	20.4 — —	淡 黄 色 で 粗 粒 子	内口縁から 外面まで黒 色 内面は灰色 見込み部に 黒釉垂れ 釉は厚い。	あ る	大碗 口縁部僅かに折れて外反 口縁部小破片	沖 縄	309 C-5 攪乱
図3	褐 釉 陶 器	— 9.4 —	淡 黄 色 粗 粒 子	外は黒色 内は灰色 高台と外底 は露胎 高台外面に 釉垂れ。 釉は厚い。	あ る	大碗 内底見込み部輪状に削る。 畳付は白色物質が付着 茶筌摺に緑褐色釉を輪状に 施釉。 高台が高く底部器厚が厚い。 底部資料	沖 縄	947 E-4 III
図4	褐 釉 陶 器	— 11.0 —	淡 黄 色 粗 粒 子	内底は黒褐 色 高台から外 底と見込み 部は露胎	な し	高台は高く外底は平坦である。 高台下位から畳付に白 色物質が付着 底部器厚が厚い。 底部資料	沖 縄	1064 E-3 III
図5	褐 釉 陶 器	— 10.8 —	淡 黄 色 粗 粒 子	高台脇に黒 色高台から 外底にかけて 露胎内底 は灰白色	あ る	高台は高く外底は平坦。底 部器厚が厚い。 底部資料 内面白化粧の後 透明釉をかけている	沖 縄	957 D-7 20/30 IV
図6	褐 釉 陶 器	— 10.5 —	灰 黄 色 微 粒 子	内外黒色で 釉が厚い。 高台脇から 畳付まで露 胎。高台外 面に釉垂れ	あ る	高台外面に円形の凹がある 畳付一部破損 底部資料	沖 縄	1064 E-3 III
図7	褐 釉 陶 器	— 8.2 —	淡 黄 色 粗 粒 子	外は黒色 内は灰白色 畳付以外全 面にやや厚 い釉	あ る	高台は高く外底は平坦 見込み部輪状に削る 底部資料 内面白化粧をほどこした後 透明釉をかけている	沖 縄	6 E-4 I
図8	褐 釉 陶 器	— 10.4 —	淡 黄 色 粗 粒 子	内外に黒褐 色高台脇か ら外底にか けて露胎 高台に釉垂 れ	な し	高台は低く高台脇が僅かに なっている 底部資料	沖 縄	984 E-4 30/40 III

第15表 褐釉陶器 観察一覧

第55 図9	褐釉 陶器	— 9.0 —	淡黄色 粗粒子	外は黒色で 釉は厚い 内面と外底 は露胎	なし	ゆったりした丸底で逆三角 形状の足がついている 内面に撫で痕が残る 器厚が薄い、底部資料	沖繩	968E-4 30/40 1004E-4 30/40 III III
図10	褐釉	— 6.9 —	淡黄色 粗粒子	内外茶褐色 高台中途か ら外底と内 底は露胎	なし	高台の断面は三角形 底部資料	沖繩	985E-4 30/40 III
第56 図1	褐釉 陶器	13.0 6.5 6.0	淡黄白色で 粗粒子	内外黒褐色 高台際から 外底まで露 胎見込み部 輪状に無釉 鉄泥鉄釉	なし	口縁部は僅かに外反高台は 入念な形成。疊付から高台 内外下位に白色物質が付着 外面にへら削り痕が残る 高台脇に鑄がある。口縁部 から底部にかけての破片	沖繩	1064E-3 III
図2	褐釉 陶器	13.7 — —	淡黄色 粗粒子	内外黒褐色 高台脇と見 込み部のみ 露胎	なし	口縁部僅かに外反 外面にへら削り痕が残る 口縁部小破片	沖繩	938E-3 40/50 III
図3	褐釉 陶器	— 6.4 —	灰黄色で 微粒子	疊付を除く 総釉 外は黒色 内は灰白色	なし	高台脇に鑄が二状ある 高台部に白色物質が付着 見込み部輪状に削る 底部資料	沖繩	755E-5 30/40 II b
図4	褐釉 陶器	— 5.8 —	灰黄白色 微粒子	内外黒褐色 高台際から 外底まで露 胎見込み部 輪状に無釉	なし	高台は入念な形成 高台脇に鑄がある 疊付に白色物質が付着 底部資料	沖繩	30E-4 I
図5	褐釉 陶器	— 5.8 —	灰黄白色 微粒子	内外黒褐色 高台際から 外底まで露 胎見込み部 輪状に無釉	なし	高台は入念な形成 高台脇に鑄がある 疊付に白色物質が付着 底部資料	沖繩	1064E-3 III
図6	褐釉 陶器	— 6.2 —	淡黄色 粗粒子	内外黒褐色 高台際から 外底まで露 胎見込み部 輪状に無釉	なし	高台は入念な形成 高台脇に鑄がある 疊付に白色物質が付着 底部資料	沖繩	968E-4 20/30 III
図7	褐釉 陶器	— 6.3 —	淡黄色で 粗粒子	内外黒褐色 高台際から 外底まで露 胎見込み部 輪状に無釉	なし	高台は入念な形成 高台脇に鑄がある 疊付に白色物質が付着 底部資料	沖繩	904E-3 40/50 II b
図8	褐釉 陶器	— 6.0 —	灰黄白色 微粒子	外は黒褐色 高台中途か ら外底まで 露胎 高台 に釉垂れ 内は灰白色	あ る	高台は入念な形成 高台脇に鑄がある 疊付に白色物質が付着 見込み部輪状に削る 底部資料 (白化粧して透明釉かける)	沖繩	1065E-3 III

第15表 褐釉陶器 観察一覧

第56 図9	褐釉 陶器	— 6.0 —	灰黄色 微粒子	外は黒褐色 高台途中から 外底まで 露胎。高台 に釉垂れ。 内は灰白色	な し	高台は入念な形成。 高台脇に鎬がある。 見込み部輪状に削る。 内面に茶褐色物質が無数に 付着。 底部資料	沖縄	748E-4 II
図10	褐釉 陶器	— 6.0 —	淡黄色で 粗粒子	内外に黒褐色。 高台際 から外底ま で露胎。 見込み部輪 状に無釉	な し	高台は入念な形成。 高台脇に鎬がある。 畳付に白色物質が付着。 底部資料	沖縄	947E-4 III
図11	褐釉 陶器	— 5.7 —	灰白色で 微粒子	内外に黒褐色。 高台際 から外底ま で露胎。 見込み部輪 状に無釉	な し	高台は入念な形成 高台脇に鎬がある 畳付に白色物質が付着 底部資料	沖縄	703E-3 10/20 II b
図12	褐釉 陶器	— 5.9 —	灰白色 微粒子	外は黒褐色 畳付と内底 一部露胎 内は灰色	あ る	高台は入念な形成 高台脇に鎬がある 畳付に白色物質が付着 底部資料（内面に白化粧）	沖縄	746E-4 20/30 II
図13	褐釉 陶器	— 6.2 —	淡黄色で 微粒子	内外に黒褐色。 高台際 から外底ま で露胎 見込み部輪 状に無釉	な し	高台は入念な形成 高台脇に鎬がある 底部資料	沖縄	1098E-4 III
図14	褐釉 陶器	— 6.2 —	淡黄色 微粒子	内外灰白色 高台際から 外底まで露 胎 内底は 黒褐色 見込み部輪 状に無釉	な し	高台は入念な形成 高台脇に鎬がある 高台中途から内高台中途ま で白色物質が付着 底部資料	沖縄	957D-7 20/30 IV
図15	褐釉 陶器	— 6.5 —	淡黄褐色 微粒子	内外黒褐色 高台際から 外底まで露 胎。 見込み部輪 状に無釉。	な し	高台は入念な形成 高台脇に鎬がある 高台中途から内高台中途ま で白色物質が付着 底部資料	沖縄	1004E-4 30/40 III
図16	褐釉 陶器	— 5.6 —	淡黄色で 微粒子	外は黒褐色 畳付は露胎 内は灰白色	な し	高台脇に鎬がある 見込み部輪状に削る 底部資料	沖縄	985E-4 30/40 III
図17	褐釉 陶器	— 6.7 —	灰白色で 微粒子	高台際から 外底と見込 み部露胎	な し	底部資料	沖縄	572E-3 237 II a
図18	褐釉 陶器	— 6.0 —	黄褐色 微粒子	内外黒褐色 高台際から 外底と見込 み部は露胎	な し	高台脇に鎬がある 高台中途から内高台中途に 白色物質が付着 底部資料（高台に白手）	沖縄	158E-7 I

第15表 褐釉陶器 観察一覧

第56 図19	褐釉 陶器	— 3.3 —	灰白色で 微粒子	外は黒色で 釉が厚い。 畳付から外 底まで露胎 内は灰白色	あ る	内底と畳付に白色物質が付 着 底部資料 (内面に白化粧)	沖繩	311C-6 攪乱
第57 図1	褐釉 陶器	— 6.2 —	灰褐色で 粗粒子	暗褐色の薄 い釉 高台際から 外底まで露 胎	あ る	小型の壺。胴部から肩部に かけて膨らむ。頸部は2.4 cmに絞る。口縁部破損、接 合によりほぼ完成した壺資 料。		985E-4 30/40 III
図2	褐釉 陶器	— 9.6 —	灰黄色で 微粒子	外は黒色で 厚い釉 高台際から 外底まで露 胎。高台に 釉垂れ内は 茶褐色	な し	内は輪状の撫で痕が残る基 筋底で底面から僅かに開い て腰部から胴部にかけて丸 みをもつ 見込み部の器厚が1.5mmと厚 く胴部に向けて薄くなって いる。大型壺の底部資料	沖繩	1100E-5 III
図3	褐釉 陶器	— — —	灰黄色で 微粒子	外は黒緑色 で薄く施釉 外底と内は 露胎	な し	徳利。口縁部と高台は一部 破損。底部から丸味を帯び て立ち上がり、最大径を胴 部にもち、さらに肩部より 緩やかに絞って、細かい頸 部に移行。高台脇に輪状に 削られている。高台は八の 字に開いている。	沖繩	730E-3 III
図4	褐釉 陶器	— 11.3 —	淡黄白色で 粗粒子	内外に黒褐 色の厚い釉 高台中途か ら畳付。内 高台中途ま で露胎外底 一部釉を拭 きとる。内 底に施釉 見込み部に 釉垂れ	な し	内に撫で痕が残る 高台が低い。 基筋底で底面から僅かに開 いている 大型壺の底部資料	沖繩	968E-4 20/30 III
図5	褐釉 陶器	— 6.3 —	淡黄色で 粗粒子	外は黒色で 厚い釉 高台中途か ら内高台中 途まで露胎 内は露胎	な し	内底中央部が輪状に削られ ている。胴部から肩にかけ て膨らみ、頸部にかけて内 傾している。 内面に撫で痕が残る 小型壺の底部資料	沖繩	758E-5 40/50 II b
図6	褐釉 陶器	— — —	淡黄色で 粗粒子	外は黒色で 厚い釉 一部輪状に 無釉 内は露胎	な し	上面が斜めで傘状に開く蓋 上面の中央が輪状に削られ ている。 沖繩製耳壺(ミンガミー) の蓋	沖繩	704E-3 10/20 II b
図7	褐釉 陶器	— 5.1 —	暗灰褐色で 微粒子	外は黒褐色 高台際から 外底と内面 は露胎	な し	内外にヘラの調整痕が残る 高台は八の字に開いている 底部から丸味を帯びて立ち 上がり胴部で最大に膨らみ したいに内傾している 小型壺の破片	沖繩	不明

第15表 褐釉陶器 観察一覧

第57 図8	褐 陶 器	— 4.4 —	灰 微 粒	白 色 で 子	外は黒褐色 高台際から 外底と内部 は露胎	あ る	高台部は入念に形成。外底 中央が削られている。内に 撫で痕が残る 小型壺の底部資料	沖 縄	567 攪乱
第58 図1	褐 陶 器	14.3 — —	淡 粗	黄 粒 色 子	蓋受から内 面まで灰白 色 外は黒褐色	あ る	口縁部は僅かに外反。外面 にへら調整痕が残る 口縁部小破片 (内面白化粧)	沖 縄	985E-4 30/40 Ⅲ
図2	褐 陶 器	13.3 — —	淡 粗	黄 粒 色 子	内外黒褐色	な し	口縁部は僅かに外反 口縁部小破片	沖 縄	904E-3 40/50 Ⅱb
図3	褐 陶 器	11.8 — —	淡 粗	黄 粒 色 子	内外黒褐色	な し	口縁部は僅かに外反 口縁部小破片	沖 縄	985E-4 30/40 Ⅲ
図4	褐 陶 器	— — —	淡 微	灰 黄 粒 色 子	外は黒色 蓋受から内 面にかけて 灰白色	な し	口縁部は僅かに外反 口縁部小破片 内面白化粧	沖 縄	不明
図5	褐 陶 器	11.9 — —	淡 粗	黄 粒 色 子	内外黒褐色	な し	口縁部は僅かに外反 口縁部小破片	沖 縄	1004E-4 30/40 Ⅲ
図6	褐 陶 器	14.0 — —	灰 微	黄 粒 色 子	内外黒緑色 腰部から下 位にかけて 露胎	な し	口縁部は僅かに外反 口縁部小破片 釉にムラがある	沖 縄	3表
図7	褐 陶 器	— — —	淡 粗	黄 粒 色 子	内外黒褐色 口縁部内か ら下位は釉 が拭きとら れる	な し	口縁部は僅かに内傾 口縁部破片	沖 縄	938E-3 40/50 Ⅲ
図8	褐 陶 器	— — —	淡 粗	黄 粒 色 子	内外黒褐色	な し	口縁部は僅かに外反 口縁部小破片	沖 縄	904E-3 40/50 Ⅱb
図9	褐 陶 器	— — —	灰 粗	黄 粒 色 子	内外黒褐色	あ る	口縁部は僅かに外反 口縁部小破片	沖 縄	1065E-3 Ⅲ
図10	褐 陶 器	12.1 — —	淡 粗	黄 粒 色 子	内外茶褐色	な し	口縁部は僅かに外反 口縁部小破片	沖 縄	30E-4 Ⅰ
図11	褐 陶 器	— — —	灰 微	白 色 子	外は黒色 内は無釉	な し	瓶の肩の部分の小破片 肩から胴にかけてやや垂直 に折れる	沖 縄	1027E-4 Ⅲ
図12	褐 陶 器	4.1 — —	灰 微	白 色 子	内外に茶褐 色、所々に 黒釉、内は 一部露胎	な し	口縁部は「く」字状に外反 口縁部のみ小破片	沖縄?	表
図13	褐 陶 器	14.5 — —	灰 粗	色 粒 子	内外黒褐色 口縁部内側 は釉が拭き とられる	な し	口縁部は「く」字状に外反 口縁部小破片	沖 縄	1077E-4 Ⅲ

第15表 褐釉陶器 観察一覧

第58 図14	褐 陶 器	— — —	灰 微 —	白 粒 —	色 子	内外黒色 釉は厚い	あ る	内面は5～6mm幅で輪状に 規則的に削られ凹凸になっ ている 胴部破片	沖 縄	2表 Ⅲ
図15	褐 陶 器	— 5.9 —	灰 微 —	白 粒 —	色 子	外は茶色で 釉は厚い。 高台際から 外底と内面 はすべて露 胎	な し	胴部は縦にはほぼ規則的に細 かく削られた線が不規則な 間隔で全体にある。 底部が胴部にかけてほぼ垂 直に立ち上がり肩にかけて 僅かに内傾。底部破片	沖 縄	968E-4 20/30 Ⅲ
図16	褐 陶 器	— 3.2 —	淡 粗 —	黄 粒 —	色 子	外は黒色 内は灰白色 骨付は露胎	な し	見込み部輪状に削る 底部高台の破片 (内面白化性)	沖 縄	683E-4 10/20 Ⅱ
図17	褐 陶 器	— — —	灰 微 —	白 粒 —	色 子	外は黒褐色 釉は厚い。 高台際から 外底と内面 はすべて露 胎	な し	ベタ底 高台脇が輪状に削られてい る 内に撫で調整痕が残る 底部小破片	沖 縄	968E-4 20/30 Ⅲ
図18	褐 陶 器	— 7.5 —	灰 微 —	黄 粒 —	色 子	外は黒色 釉は厚い。 外底と内部 は露胎	な し	ベタ底 内に撫で調整痕が残る 底部破片	沖 縄	9E-4 攪乱
図19	褐 陶 器	— 10.3 —	灰 微 —	— 粒 —	色 子	外はミョウ 色 釉は厚い。 高台下位か ら外底と内 面はすべて 露胎	な し	ベタ底 高台脇が輪状に削られる 胴部はやや直線的に開いて いる 底部小破片	沖 縄	1004E-4 30/40 Ⅲ
図20	褐 陶 器	— 10.0 —	灰 微 —	白 粒 —	色 子	内外露胎 高台際に釉 垂れ	な し	内面に撫で調整痕が残る 器厚が厚い 高台部が破損 底部破片	沖 縄	900E-3 Ⅱ b
図21	褐 陶 器	— 10.1 —	灰 微 —	— 粒 —	色 子	内外黒色 釉は厚い。 骨付は露胎	あ る	内底が輪状に削られ凹凸が 残る。器厚が厚い。(12mm) 破損面に褐色物質がある。 高台外面破損。底部資料	沖 縄	746E-4 Ⅱ
第59 図1	陶 器	— 底 部 —	— — —	白 粗 —	黄 粒 —	色 子	外面は褐色 釉、内面は 白黄色鉄釉		沖 縄	984E-4 30/40 Ⅲ
図2	陶 器	13.3 — —	白 粗 —	灰 粒 —	色 子	外面褐色釉 と露胎 内面は薄茶		胴部は褐色釉。高台脇から 底部にかけて露胎。 大きめの三つ足の1つが残 っている。	沖 縄	957D-7 20/30 Ⅳ

第16表 壺屋焼 観察一覧

挿図 番号・ 図反 番号	分 類	口 底 器 径 高 (cm)	素 地	釉色・施釉	貫 入	器形・文様 その他の特徴	産 年 代	出土地点
第60 図1	壺屋	13.4 5.7 6.9	淡 灰 色 微 粒 子	乳 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	外胴部に黄茶褐色の胎釉で円を描き、その周辺に呉須により7個の斑点文がある。内面中央に重焼きの跡あり。	沖 縄 19C頃	1078E-4 III
図2	壺屋	14.0 6.2 6.1	淡 灰 色 微 粒 子	灰 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	口唇部の一部に黒灰色の釉がかかる。茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	— 957D-7 20/30 IV
図3	壺屋	— 6.3 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	外胴部に呉須により4個の斑点文がある。茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	— 30E-4 0/5 I
図4	壺屋	— 6.7 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	— 2表
図5	壺屋	— 5.8 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	外胴部に茶褐色の胎釉で円を描き、その周辺に呉須により7個の斑点文がある。茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	— 938E-3 40/50 III
図6	壺屋	— 6.7 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	— 678E-3 0/10 III
図7	壺屋	— 6.2 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	外胴部に呉須により5個のくすんでまだらになっている斑点がある。茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	— 1表
図8	壺屋	— 6.8 —	淡 灰 色 粗 粒 子	灰 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	— 872D-5-6 表採
図9	壺屋	— 6.6 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	外胴部に呉須により3個の斑点文がある。茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	— 1表
図10	壺屋	— 6.1 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	— 947E-4 III
図11	壺屋	— 5.4 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	外胴部に呉須による、まだらな文様がある。茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	— 947E-4 III
図12	壺屋	— 6.2 —	淡 灰 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	茶筌摺に重焼きの跡あり。(白化粧)	沖 縄	— 704E-4 10/20 II b
図13	壺屋	— 6.9 —	淡 灰 白 色 粗 粒 子	灰 白 色 畳 付 除 く 総 釉	あ る	茶筌摺に重焼きの跡あり。底部に呉須による文様あり。(白化粧)	沖 縄	— 1055E-3 III

第16表 壺屋焼(白土)観察一覧

挿図番号・図反番号	分類	口底器径高(cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 その他の特徴	産	年代	出土地点
第61 図1	壺屋土 白	15.3 — —	淡黄白色 粗粒	乳白色	あ	外反口縁部である。 (内外白化粧)	沖繩	—	1108E-8 II
図2	壺屋土 白	口縁部 — —	灰白色 粗粒	淡灰白色	あ	外反口縁部である。 (内外白化粧)	沖繩	—	747E-4 20/30 II
図3	壺屋土 白	口縁部 — —	黄白色 粗粒	乳白色	あ	外反口縁部である。 (内外白化粧)	沖繩	—	3表
図4	壺屋土 白	口縁部 — —	淡黄白色 粗粒	乳白色	あ	外反口縁部である。 (内外白化粧)	沖繩	—	1023E-7 5/10 表採
図5	壺屋土 白	口縁部 — —	淡黄白色 粗粒	乳白色	あ	外反口縁部である。 (内外白化粧)	沖繩	—	568 攪乱
図6	壺屋土 白	口縁部 — —	淡黄白色 粗粒	乳白色	あ	口縁部は直口 口縁部小破片 (内外白化粧)	沖繩	—	9E-4 I
図7	壺屋土 白	口縁部 — —	淡黄白色 粗粒	乳白色	あ	口縁部はゆるやかな外反を示す。外面胴部は輪状に削られている。口縁部小破片 (内外白化粧)	沖繩	—	255C-6 0/5 I
図8	壺屋土 白	口縁部 — —	淡黄白色 粗粒	乳白色	あ	口辺部輪状に削られている 口縁部ゆるやかな外反 口縁部小破片 (内外白化粧)	沖繩	—	20E-5 5/10 I
図9	壺屋土 白	口縁部	淡黄白色 粗粒	乳白色	あ	口縁部は胴部より ストレート直口 口縁部小破片	沖繩	—	1表
図10	壺屋土 白	18.5 — —	淡黄白色 粗粒	乳白色	あ	口縁部全体に釉破損 口縁部小破片 (内外白化粧)	沖繩	—	1065E-3 III
図11	壺屋土 白	口縁部 — —	淡灰白色 粗粒	淡灰白色	あ	口縁部ゆるやかな外反 口縁部の一部に茶褐色の胎釉がある。 (内外白化粧)	沖繩	—	984E-4 30/40 III
図12	壺屋土 白	口縁部 — —	灰白色 粗粒	乳白色 総釉	あ	外側に粒状のものが多数見られる。口縁部から頸部は外側にゆるやかに反っている。	沖繩	18C後～ 19以降	737E-3 20～30 II b
図13	壺屋土 白	11.6 — —	灰茶白色 粗粒	灰茶白色	あ	文様なし 口縁部は多少内湾気味である。	沖繩	17C	8E-3 I

第16表 壺屋焼(白土) 観察一覧

第61 図14	壺 白	屋 土	8.2 — —	濁 白 色 微 粒 子	あ ぎ や か な 青	な し	先端に向かって細くなって いる。内面は細かい圈線を 廻らす。(瑠璃絵)	沖 縄	18C~	736E-3 30/40 II b
図15	壺 白	屋 土	14.6 5.8 6.4	淡 黄 白 色 粗 粒 子	淡 灰 白 色 疊 付 と 茶 笥 摺 は 無 釉	あ る	茶笥摺に重焼きの跡 口縁部はゆるやかな外反。	沖 縄	—	904E-3 40/50 II a
図16	壺 白	屋 土	12.0 — —	淡 茶 白 色 粗 粒 子	乳 白 色	あ る	下部から底部に向かって灰 色の貫入が多くある。口縁 部小破片 茶笥摺に重焼 きの跡あり。(内外白化粧)	沖 縄	—	904E-3 40/50 II a
図17	壺 白	屋 土	13.7 6.5 6.8	淡 茶 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 疊 付 と 茶 笥 摺 は 無 釉	な し	茶笥摺に重焼きの跡 口縁部ゆるやかな外反。	沖 縄	—	968E-4 20/30 III
図18	壺 白	屋 土	— 5.6 —	淡 灰 白 色 微 粒 子	淡 青 緑 色 疊 付 と 茶 笥 摺 は 無 釉	あ る	底部半破片、立ちあがり部 が多少残っている。胴部丸 みをおびている。茶笥摺に 重焼きの跡あり。	沖 縄	17C	727E-3 III
図19	壺 白	屋 土	— 6.0 —	淡 灰 白 色 微 粒 子	淡 青 緑 色 疊 付 と 茶 笥 摺 は 無 釉	あ る	底部半分破片、立ちあがり が多少残っている。胴部丸 みをおびている。茶笥摺に 重焼きの跡あり。	沖 縄	18後半	947E-4 III
図20	壺 白	屋 土	— 6.6 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 疊 付 と 茶 笥 摺 は 無 釉	な し	底部の小破片 茶笥摺に重焼きの跡あり。 (内外白化粧)	沖 縄	—	I 表
図21	壺 白	屋 土	— 5.2 —	濁 白 色 粗 粒 子	淡 灰 色 疊 付 と 茶 笥 摺 は 無 釉	あ る	高台脇に不鮮明な柳描堅筋 文がある。疊付内外面から 高台途中まで砂が付着 茶笥摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	—	i 表
図22	壺 白	屋 土	— 6.4 —	黄 白 色 粗 粒 子	淡 灰 白 色 疊 付 と 茶 笥 摺 は 無 釉	あ る	底部の小破片 茶笥摺に重焼きの跡あり。 (内外白化粧)	沖 縄	—	7E-3 I
図23	壺 白	屋 土	— 6.6 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	淡 灰 白 色 疊 付 と 茶 笥 摺 は 無 釉	あ る	底部から高台の小破片 疊付内外端の裏地は丸く成 形される。高台内面途中か ら露胎 茶笥摺に重焼きの跡あり。	沖 縄	—	727E-3 III
図24	壺 白	屋 土	— 7.1 —	淡 黄 白 色 微 粒 子	乳 白 色 内 面 と 底 部 無 釉	な し	高台部分がなく平坦な底部 をしている。 (内外白化粧)	沖 縄	—	710E-4 20/30 II
図25	壺 白	屋 土	— 3.5 —	淡 黄 白 色 粗 粒 子	乳 白 色 疊 付 は 無 釉	あ る	底径が小さい 疊付のみ露胎する 内底面に重焼きの跡が見ら れる。	沖 縄	—	947E-4 III

第16表 壺屋焼 観察一覧

挿図番号・図反番号	分類	口径器 径高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 その他の特徴	産地	年代	出土地点
第62 図1	壺屋	13.5 — —	淡灰色 粗粒	淡灰色 両面施釉	あ る	胴部に黄緑色と淡茶色の呉須の花文様がある。 口辺はなめらかな外反	沖繩	—	1065E-3 Ⅲ
図2	壺屋	13.8 — —	淡黄色 粗粒	乳白色 両面施釉	あ る	口辺はなめらかな外反 口縁部小破片 (内外白化粧)	沖繩	—	904E-3 40/50 Ⅱ b
図3	壺屋	12.5 — —	淡灰色 粗粒	淡灰白色 両面施釉	あ る	口辺はなめらかな外反で口辺の1/3所に呉須による文様がある。(内外白化粧)	沖繩	—	1052E-3 Ⅲ
図4	壺屋	13.4 — —	淡灰色 粗粒	淡灰白色 両面施釉	あ る	口辺はなめらかな外反 (内外白化粧)	沖繩	—	11E-3 Ⅰ
図5	壺屋	14.0 — —	淡黄色 粗粒	乳白色 両面施釉	あ る	口辺はなめらかな外反 口辺の下部に呉須による文様がある。(内外白化粧)	沖繩	—	1052E-3 Ⅲ
図6	壺屋	13.3 — —	淡黄色 粗粒	乳白色 両面施釉	あ る	口辺から胴部にかけて黄茶褐色の飴釉で円を描き、その周辺に呉須により2個の斑点文がある。 (内外白化粧)	沖繩	—	1073E-3 30/40 Ⅲ
図7	壺屋	口縁部 — —	淡黄色 粗粒	淡灰白色 両面施釉	あ る	口辺はなめらかな外反 (内外白化粧)	沖繩	—	1078E-4 Ⅲ
図8	壺屋	口縁部 — —	淡茶白色 粗粒	淡灰白色 両面施釉	あ る	口辺はなめらかな外反 (内外白化粧)	沖繩	—	1065E-3 Ⅲ
図9	壺屋	口縁部 — —	淡灰色 粗粒	淡灰白色 両面施釉	あ る	口辺の下部に呉須による文様がある。 口辺はなめらかな外反	沖繩	—	704E-3 10/20 Ⅱ b
図10	壺屋	口縁部 — —	濁灰色 粗粒	乳白色 口縁部の 釉は破損	あ る	口辺の胴部にかけて呉須により3個の斑点文がある。	沖繩	—	6E-4 Ⅰ
図11	壺屋	— — —	濁灰色 粗粒	淡灰色 両面施釉	あ る	胴部に黒色の線彫りした後に紺色と緑色の呉須を施してある。(土瓶)	沖繩	—	14E-4 Ⅰ
図12	壺屋	8.0 4.2 3.7	淡灰色 粗粒	外面淡灰色 内面淡灰白色 畳付と 茶筌摺無釉	あ る	腰部から胴部へ丸味を持ち、口縁へゆるやかな外反 茶筌摺に重焼きの跡あり。	沖繩	—	947E-4 Ⅲ
図13	壺屋	6.5 — —	淡黄色 粗粒	淡灰白色 口縁部から 内側口 辺は無釉	あ る	紺色の線状の後に淡紺色と黄茶色呉須を施してある。 頸部から口縁部へ内側にすぼんでいる。(土瓶)	沖繩	—	1065E-3 Ⅲ

第16表 壺屋焼 観察一覧

第62 図14	壺屋	6.2 — —	淡灰 微粒 色子	淡灰白色 口縁部か ら内側の 口辺にか けて無釉	あ る	淡緑色の呉須による文様がある。頸部から口縁部へ内側にすぼんでいる。(土瓶)	沖縄	—	225表
図15	壺屋	8.2 3.6 4.0	淡黄 粗粒 白色子	乳白色 疊付茶笥 摺無釉	あ る	胴部から口縁部にストレートで直口。茶笥摺に重焼き跡あり。(内外白化粧)	沖縄	—	36E-5 I
図16	壺屋	3.9 — —	淡灰 微粒 色子	上面は淡青 白色の釉で 内側は無釉	あ る	上面がほぼ水平になった蓋である。	沖縄	—	710E-4 20/30 II
図17	壺屋	11.8 — —	濁白 粗粒 色子	上面は乳白 色の釉で内 側は無釉	あ る	上面が斜めの傘状になった蓋である。(内外白化粧)	沖縄	—	704E-4 10/20 II b
図18	壺屋	— 3.6 —	灰粗 粒色 子	淡灰釉 底部中央に 黒釉が付き 疊付と茶笥 摺は無釉	あ る	腰部から胴部にかけて約1cm間隔に直線状の面取りを施し口縁部欠失。茶笥摺に重焼きの跡あり。	沖縄	—	1055E-3 III
図19	壺屋	4.0 — 2.6	淡茶 粗粒 白色子	上面淡灰白釉 内面白釉	あ る	花文様の線彫りした後に茶褐色、淡緑色の呉須を施してある。上面はほぼ水平になって中央につまみがついた蓋である。	沖縄	—	1044E-7 30/40 IV
図20	壺屋	— — —	淡灰 粗粒 白色子	両面淡灰白釉	あ る	腰部から胴部にかけて丸くなっている。口縁部と底部は欠失	沖縄	—	704E-3 10/20 II b
図21	壺屋	— — —	淡黄 粗粒 色子	外面の高台 脇から上に 施釉。内面 と底部無釉	あ る	高台がなく底部は平坦になって、三足の一ヵ所が残っている。内面に輪状の面取りが施している。	沖縄	—	1表
図22	壺屋	— 6.6 —	濁黄 粗粒 白色子	乳白色釉 疊付と茶笥 摺は無釉	あ る	底部約半分は破損 細い貫入が多くみられる。	沖縄	—	1107D-6 表採
図23	壺屋	— 6.7 —	淡黄 粗粒 色子	乳白色釉 内面と疊付 無釉	あ る	底部の高台の部分が低く 底部の中央部と疊付が地に 付き安定している。 (外側白化粧)	沖縄	—	270C-5 10/15 II a

第17表 陶質土器 観察一覧

挿図 番号・ 図版 番号	分 類	口 径 底 器 高 (cm)	素 地	釉色・施釉	貫 入	器形・文様 その他の特徴	産 年 代	出土地点
第63 図1	素焼き	22.4 — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	口縁が「く」の字状に折り 曲る。口縁に把手が付いて いる。内面は回転擦痕で仕 上げる。外面にスス付着。	—	744E-4 20/30 957D-7 20/30 (他7接合) (II)(IV)
図2	素焼き	19.8 — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	口縁が「く」の字状に折り 曲る。口縁の把手部分は欠 失。外面にスス付着。	—	1064E-3 III
図3	素焼き	19.7 — —	淡レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	口縁が「く」の字状に折り 曲る。外面にスス付着。	—	900E-3 40/50 II b
図4	素焼き	18.4 — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	口縁部は「く」の字状に折 り曲る。外面にスス付着。	—	744E-4 20/30 II
図5	素焼き	— — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	胴部の膨みが下半部にあ る。 丸底の器形になる 外面にスス付着	—	710E-4 20/30 968E-4 20/30 (II)(III)
第64 図1	素焼き	14.7 — —	レンガ色 粗 粒 子	な し	な し	内面口縁部は肥厚し胴上部 に有孔の把手を貼付ける。 口唇にススが付着。	—	1064E-3 III
図2	素焼き	14.5 — —	レンガ色 粗 粒 子	な し	な し	内湾口縁で、口唇にススが 付着。胴上部に取手を貼付 ける。	—	1077E-4 III
図3	素焼き	19.4 — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	内湾口縁で、若干肥厚し外 面に白土のロクロ痕あり口 唇にススが付着。	—	498E-9 30/40 III
図4	素焼き	15.8 — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	内湾口縁で、若干肥厚し両 面ロクロ痕、外面口縁下部 に圏線状にヘラ削り。	—	947E-4 984E-4 30/40 (III)(III)
図5	素焼き	7.8 — —	レンガ色 粗 粒 子	な し	な し	急須の身の部分?で、口縁 端部を外反させる。内面に 篋削り。	—	968E-4 20/30 744E-4 20/30 (III)(II)
図6	素焼き	8.5 — —	レンガ色 粗 粒 子	な し	な し	急須の身の部分?で、口縁 端部を外反させる。内面に 篋削り	—	900E-3 40/50 II b
図7	素焼き	7.8 — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	急須の身の部分?で、口縁 端部を外反させる。内面に 篋削り。	—	744E-4 20/30 710E-4 20/30 (II)(II)

第17表 陶質土器 観察一覧

第65 図1	素焼き	14.2 8.0 11.1	レンガ色 粗粒子	な し	な し	内湾口縁で胴上部に取手を貼付け内面はロクロ痕があり外面は口縁から高台脇まで篋削り、口唇にススが附着口縁内面に三角状の突起がある。(白手)	—	633C-7 20/30 IV
図2	素焼き	16.0 —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	内湾口縁で肥厚している口縁内面に三角状の突起を貼付ける。全体にスス附着。	—	984E-4 30/40 998 30/40 (III)(III)
図3	素焼き	— — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	取手の部分で半月形で中央に8ミリの孔を縦位に穿っており孔周辺は丁寧に調整	—	985E-4 30/40 III
図4	素焼き	17.0 — —	淡レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	口縁内面に蓋を受ける為の突起を貼付ける。頸部が2cm幅で圏線状に削られている。	—	984E-4 30/40 III
図5	素焼き	— — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	取手の部分で、中央に8ミリの孔を縦位に穿っており孔周辺は丁寧に調整。	—	10E-5 I
図6	素焼き	— — —	淡レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	取手の部分で、半月形で厚みがあり、中央に8ミリの孔を縦位に穿ってある。	—	1027E-4 0/10 III
第66 図1	素焼き	— 10.6 —	レンガ色 粗粒子	な し	な し	外面は胴部から高台脇まで白土色の篋削り、内面はロクロ痕。(白手)	—	1027E-4 III
図2	素焼き	— 底部 —	レンガ色 粗粒子	な し	な し	内面はロクロ痕。高台からの立ち上がりは、胴部へ直線的に移行。	—	9E-4 I
図3	素焼き	— 6.2 —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	高台部の幅は浅く畳付は、どっしりと安定した作りである。	—	938E-3 40/50 III
図4	素焼き	— 7.8 —	淡レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	外面胴部から高台脇まで、篋削り、内面は擦痕。立ち上がり部分から丸味を帯びながら胴部へ移行。	—	1027E-4 III
図5	素焼き	— 8.4 —	淡レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	高台脇の両面に石灰質の微砂粒が附着。	—	1064E-3 III
図6	素焼き	— 6.0 —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	高台からの立ち上がりは胴部へ直線的に移行。	—	968E-4 20/30 III
図7	素焼き	— 7.6 —	淡レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	外面胴部から高台脇まで篋削り。面擦痕。	—	702E-3 30/40 II b
図8	素焼き	— — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	鍋の蓋とみられるもので外面擦痕。	—	1004E-4 30/40 III

第17表 陶質土器 観察一覧

第66 図9	素焼き	— — —	レンガ色で 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	鍋の蓋とみられるもので外 面に擦痕。	—	968E-4 20/30 III
図10	素焼き	— — —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	鍋の蓋とみられるもので内 面擦痕、外面は回転篋削り の後に擦痕を施している。	—	957D-7 20/30 N
図11	素焼き	— — —	レンガ色 粗 粒 子	な し	な し	急須の蓋で、内側に身受け の錆がある。外面に削りと 擦痕がある。	—	744E-4 II
図12	素焼き	7.7 — —	レンガ色 粗 粒 子	な し	な し	口縁は短く直口し、その直 下に胴部が丸く張出してい る。	—	900E-3 40/50 II b
図13	素焼き	— — —	レンガ色 粗 粒 子	な し	な し	急須の肩の部分で下の部分 はススが付着。 内面の上の部分擦痕あり。	—	703E-3 10/20 II b
図14	素焼き	— 底 部 —	レンガ色 石灰質の 微砂粒混入	な し	な し	高台脇から胴部へ篋削り。	—	712E-5 30/40 II b

第18表 瓦 器 観察一覧

挿図番号・図版番号	分類	口底器 径高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 その他の特徴	産	年代	出土地点
第67 図1	瓦器	33.3 — —	褐色	なし	なし	口縁部側面に2段の凹凸有り。表面に花文様が施されている。	大和	—	2表
図2	瓦器	24.6 — —	褐色	なし	なし	口縁内側に把手を貼付けられていて蓋が付属していた事が考えられる。口縁上部は平坦。	沖繩	—	900 E-3 40/50 II b
図3	瓦器	24 — —	灰色	なし	なし	口縁部側面に3段の凹凸有り。	大和	—	2表
図4	瓦器	— 底部 —	褐色	なし	なし	底部破片である。器台?だと思われる。厚みがありどっしりと重たい。	沖繩	—	1072 E-3 30/40 III
図5	瓦器	— 底部 —	褐色	なし	なし	器面は、ナテ調整による跡が見られる。色調は茶褐色であるが、断面中央部は灰褐色を呈し、サンドイッチ状となる。	沖繩	—	900 E-3 40/50 II b

第18表 瓦 観察一覧

挿図番号・図版番号	分類	口底器 径高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様 その他の特徴	産	年代	出土地点
第68 図1	瓦	胴部 — —	黒褐色	なし	なし	厚く、内側に凹凸がある。細かい文様が所々に見られる。	沖繩	—	表

第19表 石器 観察一覧

挿図番号・図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ (cm) 幅 (cm) 厚さ (cm) 重さ (g)	器種	石質	観察事項
第70 図1	D-7M層 暗褐色土層		4.4 2.6 0.8 10	Flak? 彫刻刃	チャート岩 (灰色)	
図2	C-6M層		3.7 2.7 1.7 10	剥片 彫刻刃	チャート岩	
図3	C-7M層		2.0 1.8 0.4 3	剥片	チャート岩	使用痕有り
図4	C-6I層		3.8 3.0 2.6 30		チャート岩	使用痕有り
図5	D-7M層		2.0 1.5 1.1 ?	剥片	チャート岩	加工痕有り
第71 図1	E-6IIa層		(23.6) (14.0) (10.3) (1,640)	容器	サンゴ礫	キタ目サンゴ礫による容器、かなり深めの凹面からして、洗面用として用いられたと思われる。約1/4の残欠。側面が、スレている事から転用されている。転用用途は不明。
図2	なし、写真が現場の実測より判断すること		25.6 15.4 5.1 4,500	石皿	硬砂岩 (ニモの芯)	比較的大きな石を用いている。全体の1/3残欠。表面のみ利用され、わりと浅い凹面を有する。
第72 図1	キャンプ ズケラン D地区No2		(12.7) (15.1) (4.0) (1,200)	石皿	硬砂岩	石皿の破片と見られる。これからしてもわかるように、全体はかなり大きかったと思われる。表面のみ使用され浅めの凹有り。
図2	キャンプ ズケラン D地区No2		(13.8) (10.4) (3.1) (1,010)	石皿	硬砂岩	平面形が長方形状を呈した偏平な板状の素材を使用したと見られる。表面のみ使用され、浅めの凹面が、所々に見られる。全体の半数以上が欠けている。
図3	C-7M層		(14.1) (9.5) (5.7) (1,200)	石皿	硬砂岩	中央部に浅めの凹面が有り、所々平滑をなしている。側面に、浅めの凹面、平滑をなしている事から、後に砥石として転用されている事がわかる。
図4	E-5IIb層		(8.6) (12.6) (3.0) (375)	石皿	硬砂岩	長方形状だったと思われる破片である。使いやすい様に端を加工している。表面はやや浅めの凹面を有する。裏面は自然に剥離したと思われる。手頃な大きさに欠けた事から、後にたたき石として転用。左右側面に敲技痕を有する。

第19表 石器 観察一覧

第73 図1	E-6 I 層	10.7 6.9 4.1 (590)	たたき石	斑レイ岩	河原礫をそのまま用いている。表面と裏面に磨り面がみられ、自然面をわずか残し、敲打により剥離が目立つ。上端部も数回に及び敲打した為、大きく潰れている。下端部は打損したと思われる。
図2	E-6 II a 層	11.7 8.5 23. (310)	たたき石	砂 岩	左右側辺部はたたき石として用い表面の中央部に砥ぎ面が見られる。下部は、やや石斧を思わせる様な形成で刃こぼれに類似した欠損部。1つで何役もこなしたと思える。
図3	E-4 II 層	(12.4) (7.3) (6.4) (755)	たたき石	輝 緑 岩	自然礫を用いている。表面の中央部及び、上端部に、軽微な敲打痕を有する。側面及び裏面は、強い敲打により大きく剥離している。全体の1/3残欠。
図4	E-4 II 層	10.1 5.7 4.9 (510)	たたき石	斑レイ岩	河原礫をそのまま用いている。上下端部、及び側面に敲打痕を有する。表面の中央部にも敲打による剥離が見られる。裏面は、特に一定した方向の敲打による剥離の状態が、鮮明に窺える製品である。
図5	E-5 II b 層	9.2 (8.0) 6.4 (650)	たたき石	チャート岩	表面にやや浅めの凹面を有する。強い衝撃により表面の半分、及び側面の一部が欠損している。裏面は敲打により中央部に浅い凹を有する。下端部は表裏面よりも力強く敲打したと思える。
図6	D-4 III 層	5.4 4.5 (4.8) (25)	磨 石	軽 石	外形はやや四角形を思わせるような形整である。六面全てに磨り面が見られる。ほぼ平滑な状態で、小さな凹面が2~3カ所見られる他、一定の位置で、握りしめていたと思われる親指大の凹がある。
図7	キャンプ ズケラン P I T Na.35 No.9の隣り アスフェルト ト包含層	11.3 6.1 2.7 310	たたき石	硬 砂 岩	基地内の試掘調査にて出土。わりと偏平な礫を用いている。上下端部、左右側辺部は、ブルに活用されている。表面は、多少の自然面を残し敲打により潰れている。右側边上端側は数回にわたる敲打により、大きく欠失している。裏面は敲打による剥離と、中央よりやや左側面に浅めの凹面が有る。
第74 図1	E-4 II 層	(16.6) (11.6) (7.1) (1,400)	たたき石	砂 岩	大型の礫を用いている。上端部から下端部に向けてなだらかな傾斜を有する。中央部に、やや浅めの凹面が有る。左側辺部は、縦位の溝状の抉りを有する。右側辺部に砥面が見られる他、角の部分は敲打により潰れている。裏面の1/3近く、磨面を有し、中央部は強い敲打により深く抉れている。
図2	E-7 II b 層	6.9 6.0 3.6 210	磨 石	砂 岩	ほぼ円形を呈する河原礫を用いている。周縁部及び表裏面の中央部に磨り面が認められる。
図3	E-4 II 層	14.9 8.6 4.7 800	たたき石	砂 岩	表面の中央部に敲打による凹面を有する他表裏面共に下端部に痘痕状の自然面を残す以外、敲打による剥離が著しい。側辺部は敲打により、大きく剥落している。
図4	表 採	(7.0) 4.4 3.4 (165)	たたき石	砂 岩	棒状の製品だったと思われる。表面の中央部から左側辺部にかけて斜めに敲打痕を有する。側辺部は、ほぼ、全面に敲打による潰れが見られ、下端部の中央は特に敲打により凹面を有する。
図5	E-4 II 層	10.6 10.0 3.9 670	凹 石	砂 岩	表面の中央部に敲打による浅めの凹面を有する。周縁部は敲打により、大きく欠けている。

第19表 石器 観察一覧

第74 図6	E-4 II層	5.8 5.1 3.4 130	磨石	砂岩	小型の円礫を用いている。 表面の中央部に磨り面が認められる。 周縁部は多少の磨り面があるものの、ほとんど自然面のままである。
第75 図1	E-4 II層	(9.1) (8.8) 4.2 (580)	凹石	砂岩	やや正方形の形態をなす。 表裏面共に中央部に円形状の凹みを有する。凹みの周縁には無数の敲打痕が残っている他、研磨面を有する。裏面の右側縁部になだらかな凹面が有る。
図2	E-5 II b層	9.5 8.0 5.7 750	磨石	角閃石 はん岩	たたき石から、磨石に転用されたと思われる。その根拠は、左側縁部と下端部に敲打による欠損部がみられ、表面と側面の中央部に軽微な敲打痕。裏面は叩打により数カ所抉られている。その後、全ての面を研磨したと思われる。
図3	E-5 II a層	11.2 7.5 6.0 830	たたき石	砂岩	やや円柱に近い形状のもので、上端部は全面、敲打による潰れが著しい。 表裏面、及び左側面に敲打による凹面を有する。本品の約2/3の高さに、くびれを有し、それは本品を一周している
図4	E-4 II層	5.3 5.0 5.1 180	弾球	砂岩	球状の製品である。表裏面の中央よりやや上部に円形の凹面が有る。本品を一周する無数の横線状のものは自然のものを見た。 上下端部に軽微な敲打痕が有る。
図5	E-6 II a層	7.0 6.3 3.9 235	たたき石	砂岩	円形の自然礫を用いている。表面の2/3に及ぶ研ぎ面が見られる。裏面の中央部並びに周縁部に軽微な敲打痕が見られる事から、後にたたき石として転用されたと思われる。
図6		(7.4) 3.8 3.3 (155)	砥石	砂岩	長方形で扁平の小型の製品である。両面と側縁部の4面に研ぎ面を残して、平滑をなす。表面の一面のみ、ゆるやかな凹面が有る。下端部は敲打による潰れがある他、小溝状になっている部分がある。
第76 図1	E-8 I層	10.5 (7.5) 1.1 (120)	砥石	黒色頁岩	表面の左側辺部、右上端部、及び下端部は、板状の製品である。部分的に欠けているが、全面、研ぎ込まれていて、にぶい光沢が出来ている。表面の研ぎ幅は広く、5.5cmを計り、ゆるやかに凹面を有する。裏面は所々に研ぎ面を有するが、特に下端部は左右、斜めから研ぎ込まれている。携常用の仕上げ砥石と考えられる。
図2	E-5 III層	6.5 4.6 3.6 155	磨石	シルト岩	“こけし”を思い浮かべるような面白い製品である。本来の形は円柱状だったと思われる。くびれは一周しており意図的に加工されている。加工面は削りと、磨き面を有する。上下端部に敲打痕があり潰れている。
図3	C-7 N層	7.7 5.4 1.6 85	砥石	片状砂岩	外形が、三角形をつくり、両面及び周縁部に研ぎ面を有する。周縁部や欠損部に至るまで、面取り加工がほどこされている。表面は平滑をなす。手持ち砥石と考えられる。
図4	D-7 III層	4.4 3.1 0.9 20		砂岩	表面はやや曲面をなし、磨面が認められる事から、磨石の破片と思われる。裏面は本品が剥落した時のまま、手を加えられていない。左側辺部のみ刃として加工。研ぎ面は、特に一定の箇所だけ使用され、半月状に凹んでいる。主に細くて小形の道具の研ぎや成形に利用されたと思われる。
図5	C-5 II b層	5.6 4.6 1.8 25		火山性物質 スコリア (軽石)	外面が、方形と円形の両方兼ねる。全体が、まっ黒で痘痕状になっているが、石質上のもので、使用によるものではない。両面及び上端部、左右側縁部は全て平らになっており、裏面の下端部にのみ斜めに磨いた跡がある。用途は、主にナベ磨き用として使用されていたと思われる。

第19表 石器 観察一覧 チャート

挿図 番号 ・ 図版 番号	出土地区 出土層位	法 量	長さ (cm)		器 種	石 質	観 察 事 項
			幅 (cm)	厚さ (cm) 重さ (g)			
	C-6 I層		5.6 3.7 2.0 50.0			チャート片	
	C-8 N層		3.1 1.5 0.5			チャート	
	C-6 N層		3.7 2.1 0.5			チャート	
	C-8 表採		1.9 1.3 0.5			チャート	
	D-7 N層		2.6 1.2 0.9			チャート	
	C-7 N層		1.7 1.1 0.5			チャート	
	C-7 N層		1.6 0.9 0.3			チャート	
	C-7 N層		2.2 4.0 0.5			チャート	
	D-7 N層		2.0 1.0 0.6			チャート	
	E-6 I層		(3.3) (2.5) (1.5) (10.0)	磨石片	砂 岩		
	E-8 I層		(11.9) (6.6) (5.6) (540.0)	たたき石片			

第19表 石器 観察一覧

	(15.2) (13.5) (8.0) (2,140.0)	たたき石	チャート	
E-4 I層	(11.7) (7.8) (6.3) (800.0)	たたき石	砂岩	
T382 表採	(12.7) (7.8) (4.5) (610.0)	たたき石	砂岩	
D-7・8 攪乱層	(14.2) (10.9) (3.0) (785.0)	たたき石	砂岩	石皿からの転用
C-8 表採	(12.0) (6.7) (3.0) (270.0)	たたき石	砂岩	石皿からの転用
キャンプ ズケラン 試掘pit	(16.8) (16.1) (4.4) (1,720.0)	石皿片		
T3 表採	(5.0) (5.0) (4.9) (170.0)	弾球		
E-4 III層	(8.1) (7.4) (3.4) (200.0)	砥石	凝灰岩	
E-6 I層	(9.3) (5.5) (3.8) (220.0)	石皿片		
D-7 N層	(5.2) (2.7) (2.8) (50.0)	磨石片	輝緑岩	
E-6 I層	(5.1) (3.8) (2.0) (50.0)	磨石片	花崗閃緑岩	
C-6 N層	(7.8) (4.8) (3.1) (100.0)	磨石片	砂岩	
T5 表採	(4.8) (4.5) (3.6) (60.0)	磨石片	砂岩	

第19表 石器 観察一覽

D-6Ⅳ層	(4.9) (4.3) (2.1) (40.0)	磨石片	安山岩
C-8Ⅰ層	(8.8) (6.2) (3.1) (160.0)	磨石片	砂岩
D-5Ⅱb層	(8.0) (6.0) (3.1) (175.0)	磨石片	砂岩
C-8Ⅳ層	(12.8) (9.3) (2.7) (330.0)	磨石片	砂岩
C-7Ⅳ層	(7.4) (3.6) (3.0) (55.0)	石皿片	砂岩
E-4Ⅱ層	(8.4) (5.5) (2.9) (170.0)	石皿片	
C-7Ⅳ層	(6.4) (4.7) (2.6) (85.0)	石皿片	砂岩
E-7Ⅱa層	(7.2) (5.9) (1.3) (90.0)		角閃石 はん岩
E-9Ⅲ層	(6.9) (4.8) (3.3) (115.0)	石皿片	砂岩
E-5Ⅲ層	(10.0) (2.7) (2.6) (65.0)	石皿片	安山岩
D-3Ⅱ層	(4.9) (5.0) (1.2) (45.0)	石皿片	黑色頁岩
D-5Ⅲ層	(13.4) (8.6) (5.1) (820.0)	石皿片	
C-5Ⅱb層	(7.0) (4.2) (1.1) (65.0)	砥石	凝庄岩

第19表 石器 観察一覧

	E-3 I層	(9.2) (7.6) (3.3) (250.0)	砥 石		
	D-5 II b層	(14.4) (8.6) (8.7) (1,070.0)	砥 石	凝 圧 岩	ひょうたん型

第20表 古 銭 観察一覧

挿図 番号 ・ 図版 番号	銭 貨 名	初 鑄 造 年	出 土 地 点	書 体	直 径 (mm)	厚 さ (mm)	備 考
第78 図1	□元□圓		D-5 (Ⅲ)		23.0	1.0	$\frac{1}{3}$ 破損品
図2	洪武通宝	明、太祖 1368	盛 土	楷 書	24.0	1.3	完形品
図3	永楽通宝	明、成祖 1408~1608	褐色土層 D-5 (Ⅲ)	楷 書	25.0	1.5	完形品 中世に足利時代以降輸入
図4	寛永通宝	江 戸 1636	茶褐色土層 E-6 10/20 (Ⅱ)	楷 書	25.0	1.3	完形品
図5	鳩 目 銭	—	D-4 (Ⅱ)	—	22.0	1.0	完形品 無 文
図6	鳩 目 銭	—	D-4 (Ⅱ)	—	18.0	0.5	完形品 無 文
図7	鳩 目 銭	—	D-4 (Ⅱ)	—	18.0	0.5	完形品 無 文
図8	鳩 目 銭	—	D-4 (Ⅱ)	—	18.0	0.5	完形品 無 文
図9	一 銭	昭 和 15年代	D-6 (Ⅰ)	楷 書	17.0	2.0	近代の銭貨である。

ま と め

玉代勢原遺跡は、略東西に細長く延びる旧玉代勢集落の中央に位置し、南斜面に当たることが明らかになり、斜面下半分に残っていることが判明した。このことから、遺跡の北側背後には丘陵が存在していたが、すでに削平され、旧地形を止めていないことが確認できた。

大まかに層序をみていくと、第Ⅰ層が戦後の攪乱層、第Ⅱa・b層は旧集落の屋敷地で、1号、2号の家屋の下部層の中で、遺物の中から新しい遺物を確認することで、造成による攪乱の時期を判断することができた。第Ⅲ層は50～80cmとやや厚い層の中で、ほぼ中央部に約10cmの幅で遺物を含むレベルがみられ、青磁・白磁・染付などが出土し、ほぼ安定した層であった。第Ⅳ層はC・D-6・7・8グリットの一部に限定してくびれ平底土器が主体的に出土した。くびれ平底土器の出土状況から、生活の場ではなく、背後の2ヶ所から流れ込んだものと考えられることが、判断された。

出土遺物を時期別に並べてみると、

種類 \ 世紀	世紀									
	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
くびれ平底土器	—	=								
グスク土器	=	—	=							
須 恵 器	=	—	=							
青 磁			-	—	—	—				
白 磁			-	—	—	—	—	—		
染 付					—	—	—	—		
有 田 焼					-	—	—	—	—	
現 代 磁 器										—
砥 部 焼										—
南 蛮 鉢				=	—	—	—			
湧 田 焼							—	—	—	
褐 釉							—	—	—	—
壺 屋 焼							—	—	—	—
陶 質 土 器										—
瓦 質 土 器					—	—				

第 25 表 出土遺物別年代表

出土土器であるくびれ平底は、C・D-6・7・8グリットの第Ⅳ層で主体的にみられ

た。同層で数点のグスク土器がみられることより、このころがグスク土器への移行期であろうか。後述のように第Ⅳ層の木炭のカーボン・デイトーピングでは12世紀初期の結果が出ており、やはりそのころの時期の結果が出ている。

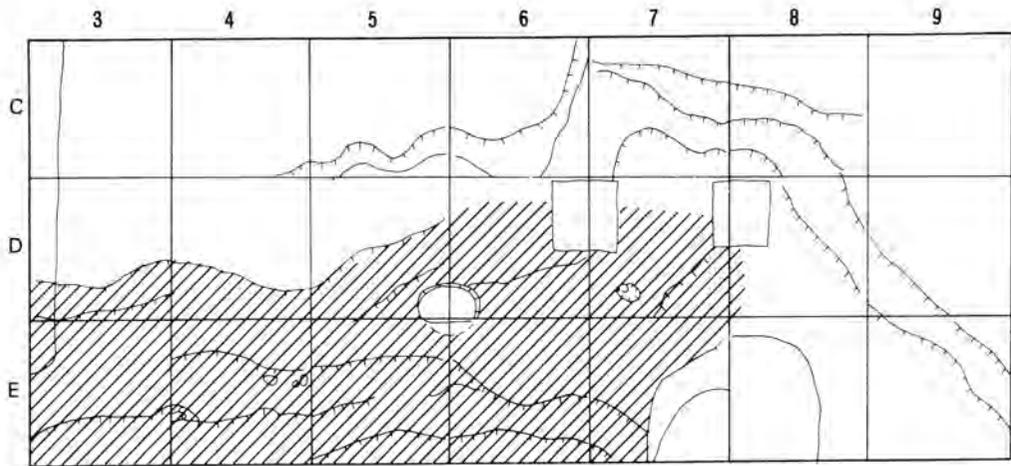
青磁・白磁・染付・南蛮・タイ焼などは、第Ⅲ層を中心にD・Eトレンチ全域で散在して出土しており、時的には14世紀後半～17世紀のものが主体的にみられた。青磁・白磁などは特に、13～14世紀代のものがあるが、数点であることから伝世品と考えられる。それらのことを考慮にいと、当地のグスク時代のスタートは15世紀後半以後ということと思われる。

屋敷址と関わりのある遺物をみると、第Ⅱa層・Ⅱb層を中心にD・E-3・4・5・6グリットで出土するが、特にE-3・4・5・6グリットで主体的にみられた。遺物としては染付・有田焼・播鉢・湧田焼・褐釉陶器・壺屋焼・陶質土器など、沖縄を中心とする在産に、肥前の染付と南中国産の染付が出土するものがある。沖縄産としては喜名焼から始まり、それと付随するかたちで肥前の染付、南中国の染付がみられる。新しくなると磁器や砥部焼など大正～昭和初期のスタンプ技法の磁器がみられるようになる。

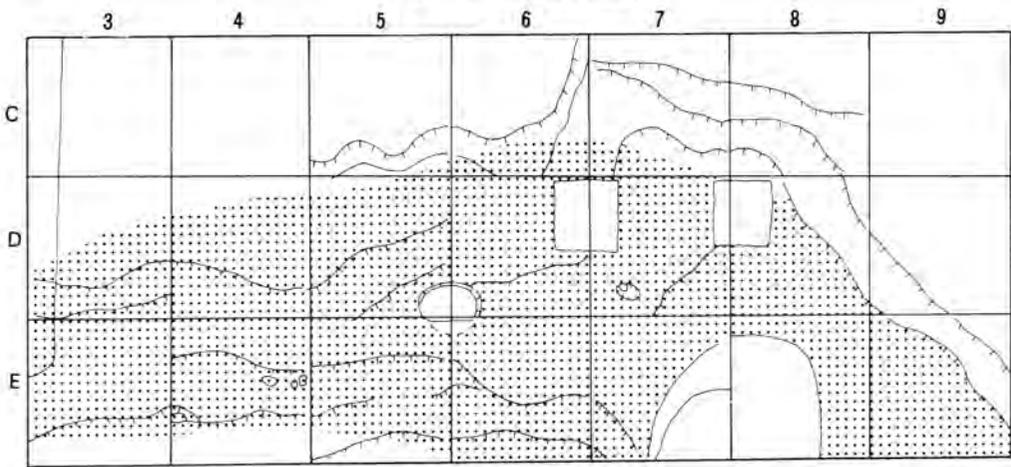
このように出土遺物をみてくると、12世紀を境とするくびれ平底からグスク土器への変換の時期、約150年間のブランクの後、14世紀後半～17世紀ごろの貿易陶磁器を主体とする時期のもの、17世紀後半～1945年の戦前までの時期のもの、と大きく3時期に区分することができる。前二者は本来の生活層ではないことから、明確なことは言えないが、少なくとも第Ⅳ層と第Ⅲ層との間には間層があり、出土遺物もそれを示していることから、時間幅があることが伺われる。両者の生活層は、堆積層の状況から北側背後の丘陵部に位置すると考えられ、何らかの施設があったと思われる。また、これらの出土状況は、染付以前の出土遺物の状況は、これまでの北谷城の調査成果と比べるとほぼ類似しているようにみられる。

家屋の状況は、C・D・E-3グリットの西側壁面や石列遺構の配列からすると、旧集落の屋敷址はこの南南西方向の向きに、斜面を階段状に成形し平坦面をつくり家を構えて居る。背後の高台には竹林を植えた痕跡がみられることから、その背後の高台をうまく利用したことが伺える。

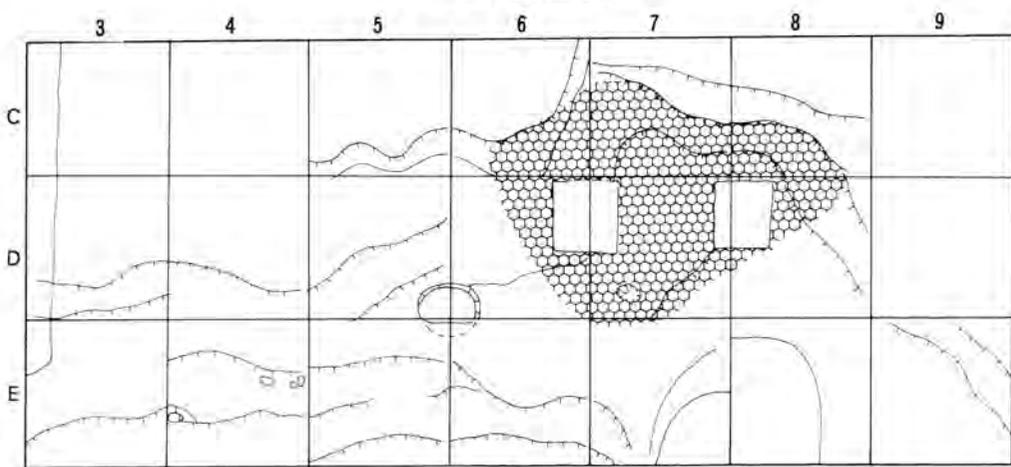
屋敷の状況はE-3・4グリットの中央部に、グリットと平行する形で検出されたもの(1号)と、D-5・6、E-5・6の4つのグリットで、斜めに(南西方向)検出されたもの(2号)とがある。いずれも家屋の一部と考えられる。同時期の家屋で角度を変えて作ることは考えがたく、時期の異なるものとみたほうが理解しやすい。そういう目で出土遺物を検討していくと、1号家屋の方がわりと新しい戦前のコバルト瓶や砥部焼碗、現代磁器などの多い傾向があった。2号家屋や1号家屋の取り除いた下層から壺屋焼や喜名焼などの碗・壺・播鉢などの出土が目につくことから1号家屋が新しく、2号家屋のほう



a. II a・II b 層の遺物出土状況



b. III層の遺物出土状況



c. IV層の遺物出土状況

第79図 各層の遺物出土状況概念図

が古いと考えられた。1号家屋は大正・昭和初期の現代磁器がⅡa層・Ⅱb層から古手の陶磁器などと混在して出土することをみると、このころ屋敷造成の工事が行われたと考えられ、その時代は少なくとも昭和初期～戦前の家屋と言うことになろうか。2号家屋はそれ以前の時期ということになると考えられる。

2号家屋と係わりのある遺物をみてみると、相関関係のみられる喜名焼の播鉢や褐釉陶器である。喜名焼の大型壺には南蛮の影響がみられることから、17世紀中葉以後と思われる。このことから、古い2号家屋の始まりは、17世紀中葉以後と考えられないであらうか。

最後に第Ⅳ層のくびれ平底土器の出土する層中から木炭が多量に検出された。それを、2点、日本アイソトープ協会で炭素年代測定をおこなった結果、下記のように示された。

年代測定結果報告

日本アイソトープ協会コード	北谷町コード	C-14年代
N-6558	C-7グリット第Ⅳ層 No483	1120±140yB.P.(1090±140yB.P.)
N-6559	D-7グリット第Ⅳ層 No957	1110±130yB.P.(1080±130yB.P.)

参考文献

- 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』 今帰仁村文化財調査報告第9集 今帰仁村教育委員会 1983年
『浦添城跡発掘調査報告書』 浦添市文化財調査報告書第9集 浦添市教育委員会 1985年
『松田遺跡』 沖縄県文化財調査報告書第76集 沖縄県教育委員会 1986年
『阿波根古島遺跡』 沖縄県文化財調査報告書第96集 沖縄県教育委員会 1990年
『安仁屋トゥンヤマ遺跡』 沖縄県文化財調査報告書第105集 沖縄県教育委員会 1992年
『喜名焼古窯跡展』 読谷村立歴史民俗資料館 1993年
『肥前の色絵「その始まりと変遷」展』 佐賀県立九州陶磁文化館 1991年
『古伊万里』 別冊太陽 No.63 平凡社 1988年
『やきもの辞典』 平凡社 1987年
『歴代古銭図説』 丁福保編 上海書店 1986年



上 遺跡遠景（南東側より）

下 遺跡近景（南東側より）



上 遺跡遠景（南西側より）

下 遺跡近景（西側より）



上 発掘状況

下 台風による冠水状況



上 3～7区の完掘状況

下 5～9区の完掘状況



上 C・D-4・5区の完掘状況 下 C・D-4・5区の完掘状況



上 E区南側土層の状況

下 3区西側土層の状況



上 3～6区の土層の状況

下 6～7区の土層の状況



上 4～6・C～E区の土層の状況 下 D-6～9区の土層の状況



上 E-4 区の石列状況

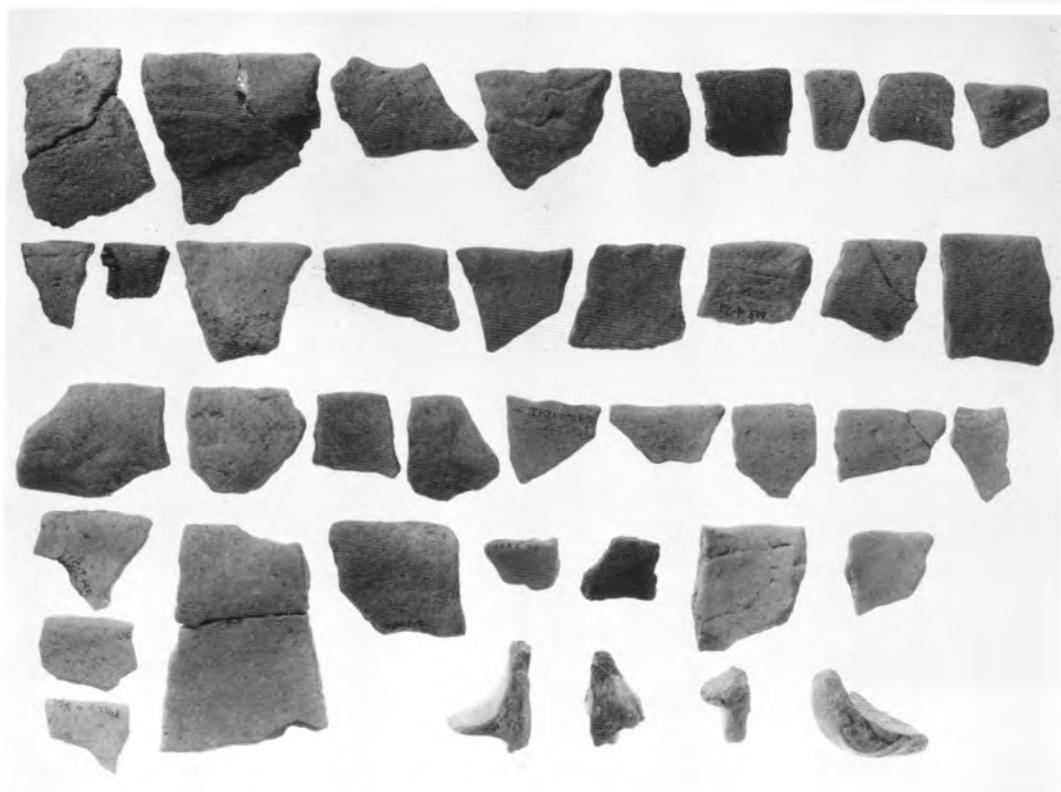
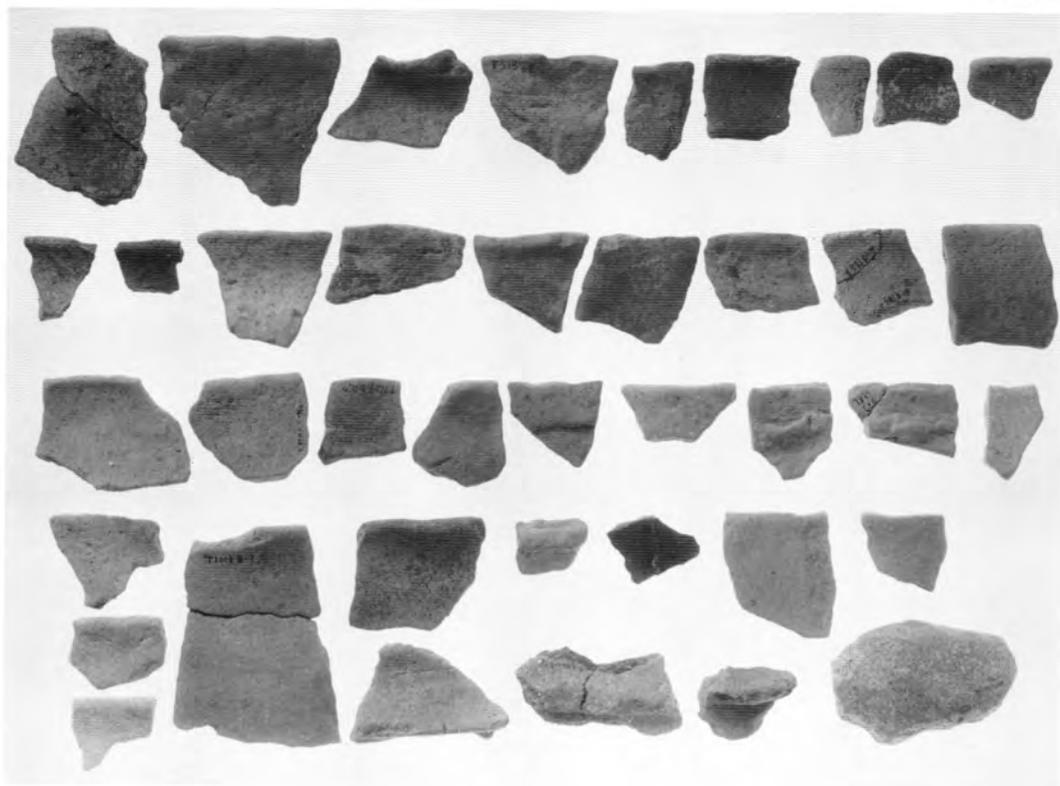
下 E-5 区の石列状況



上 D-7区第N層の不定形遺構 下 C-7区第N層の土器出土状況

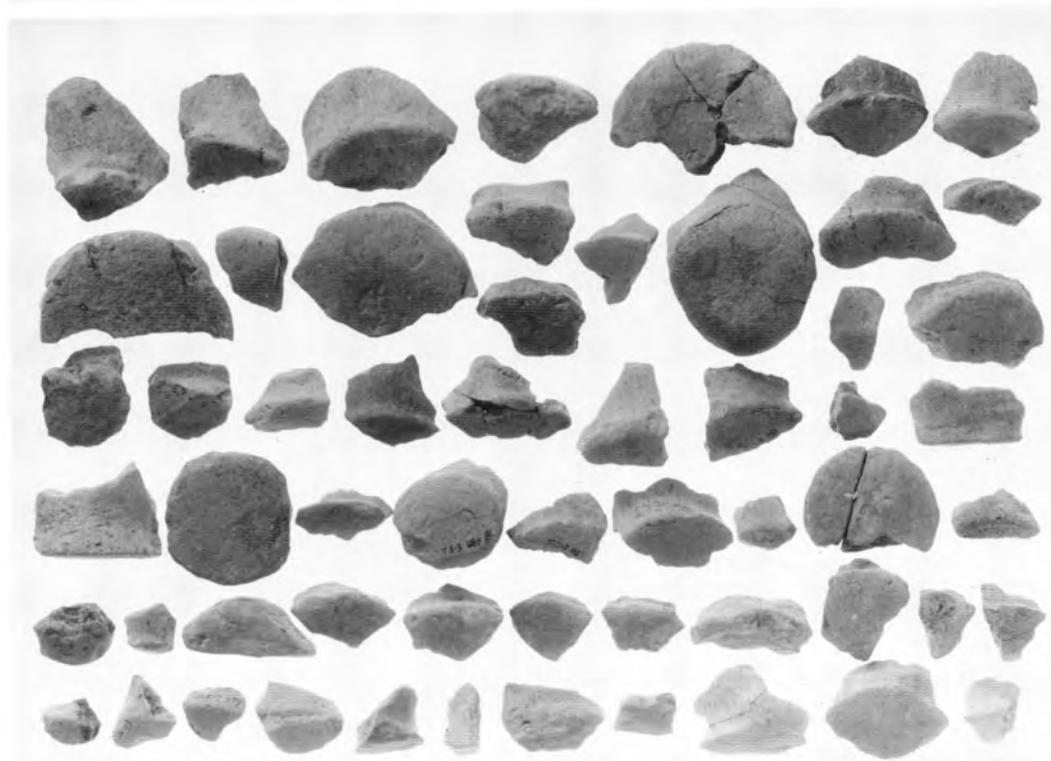
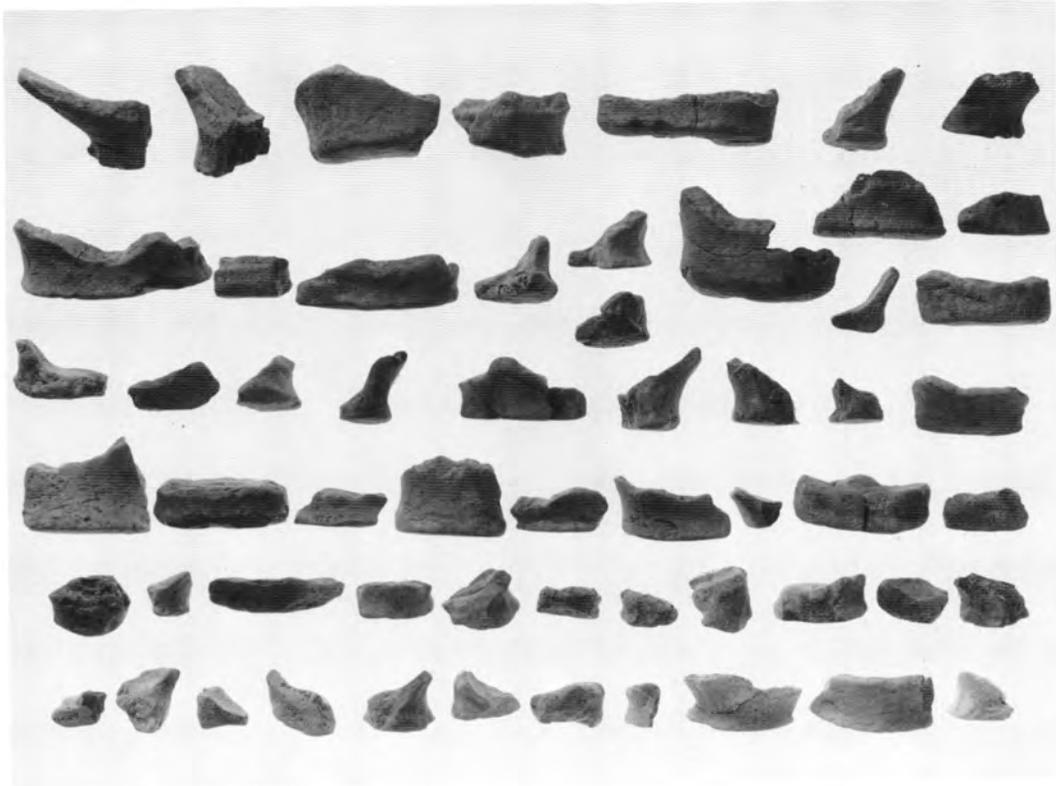


上 C-6区第IV層の土器出土状況 下 C-6区第IV層の土器出土状況



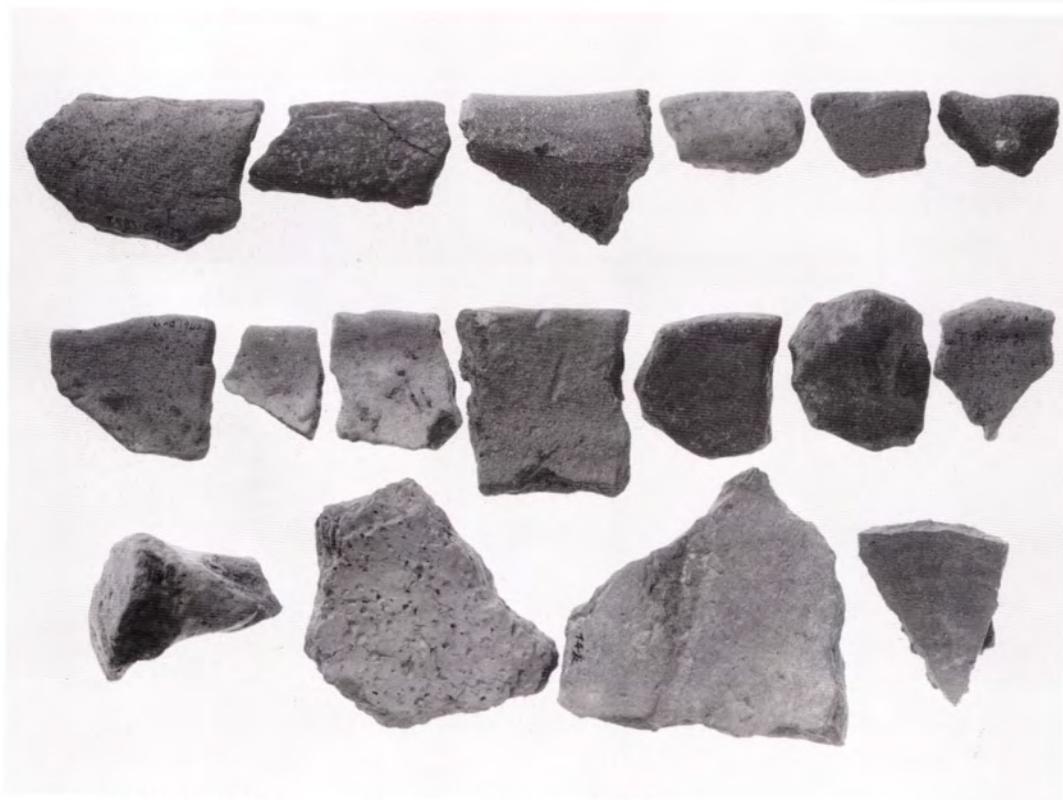
上 土器 I・II類表面

下 土器 I・II類裏面



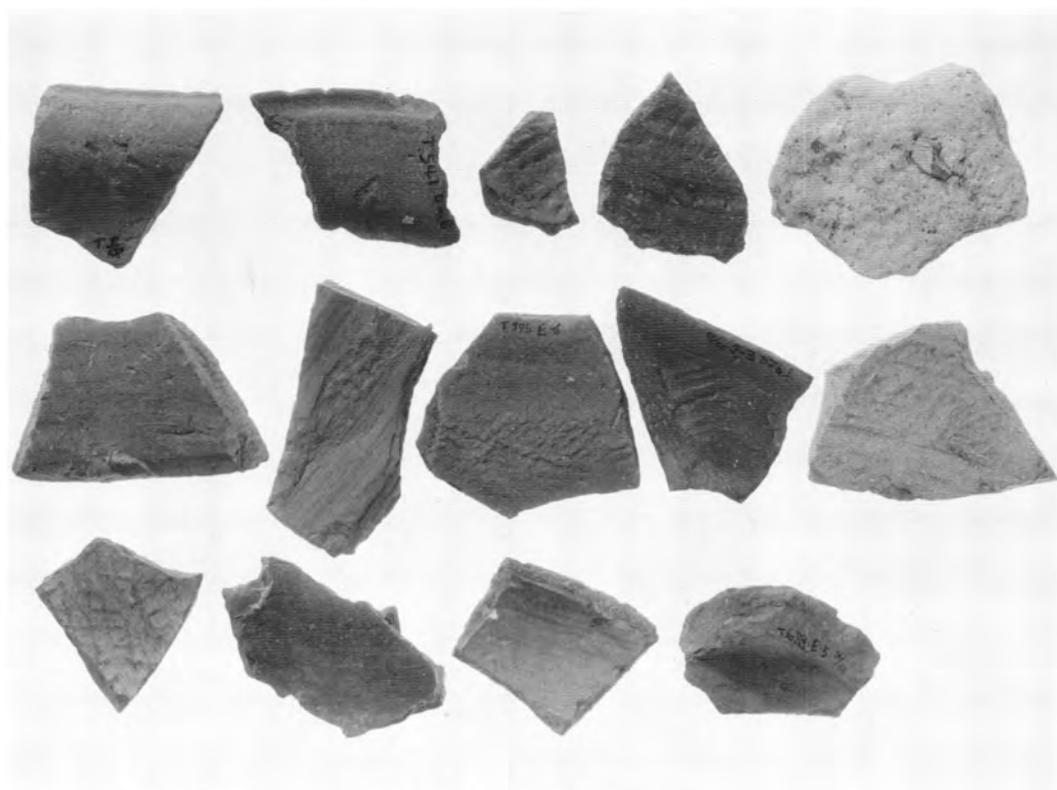
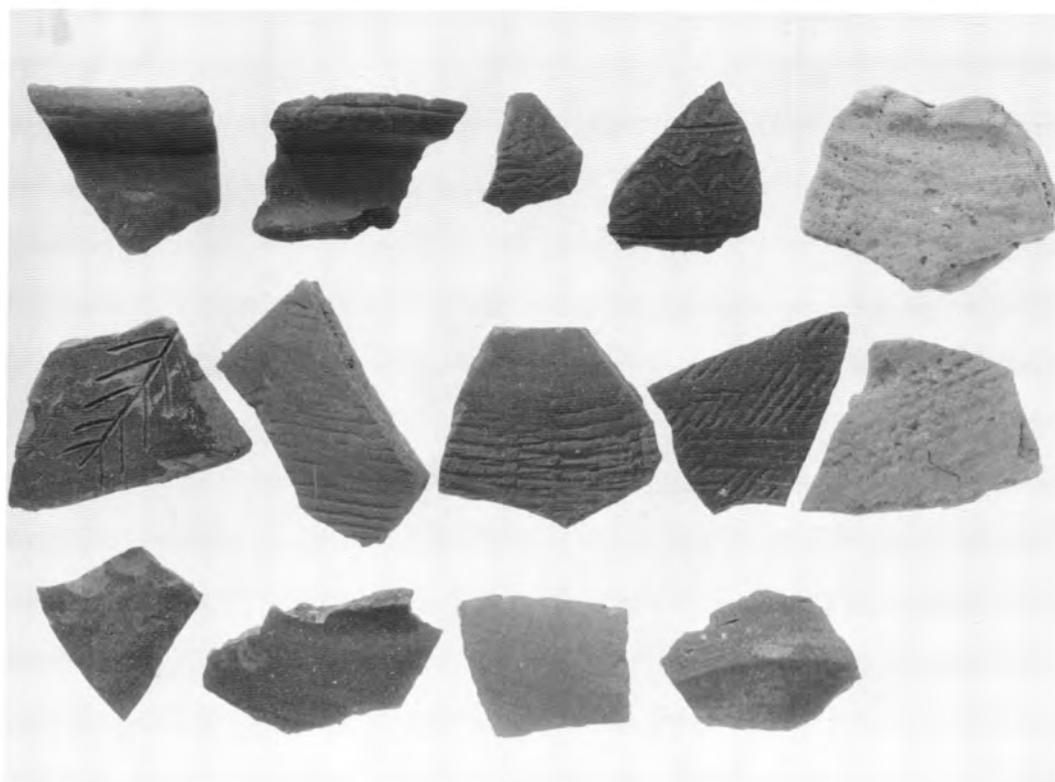
上 土器 I類底部表面

下 土器 I類底部裏面



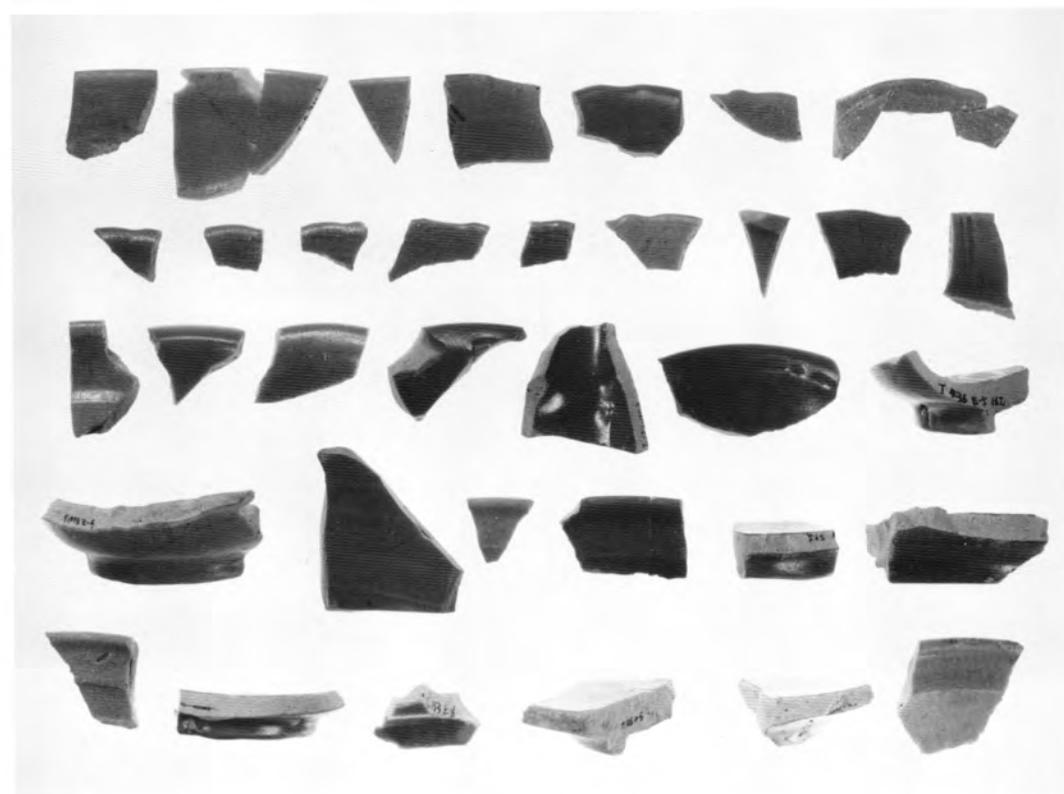
上 土器 III類口縁・底部表面

下 土器 III類口縁・底部裏面



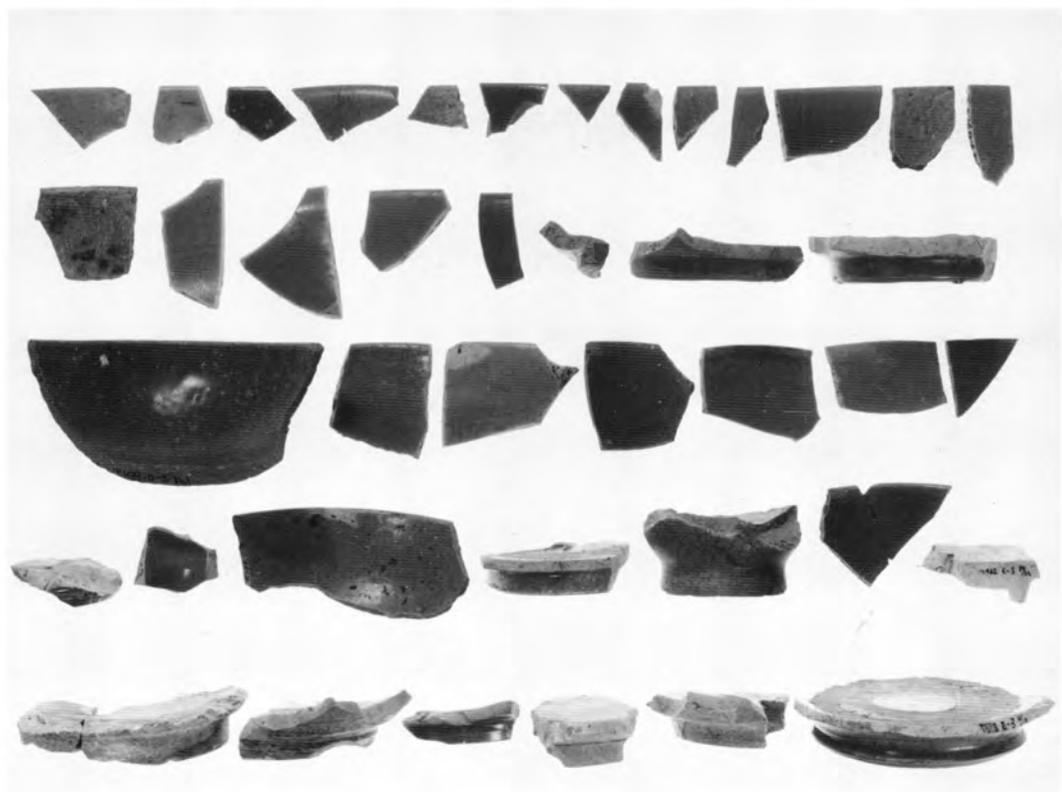
上 須恵器・珠洲焼表面

下 須恵器・珠洲焼裏面



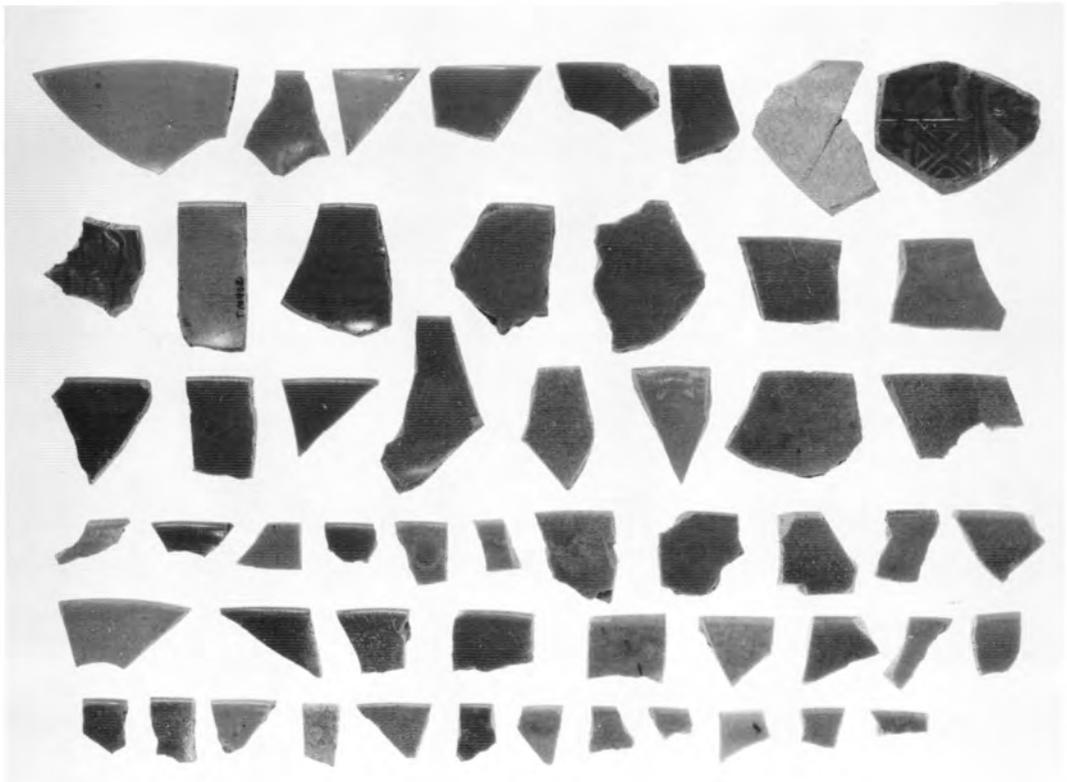
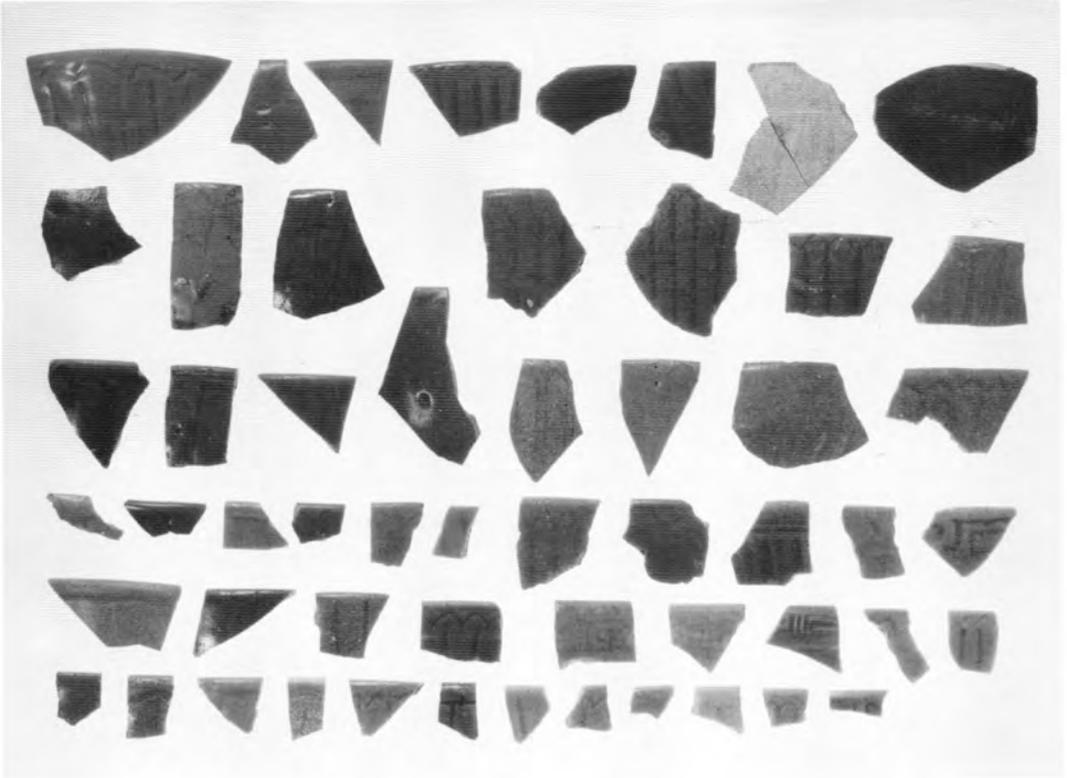
上 青磁

下 青磁



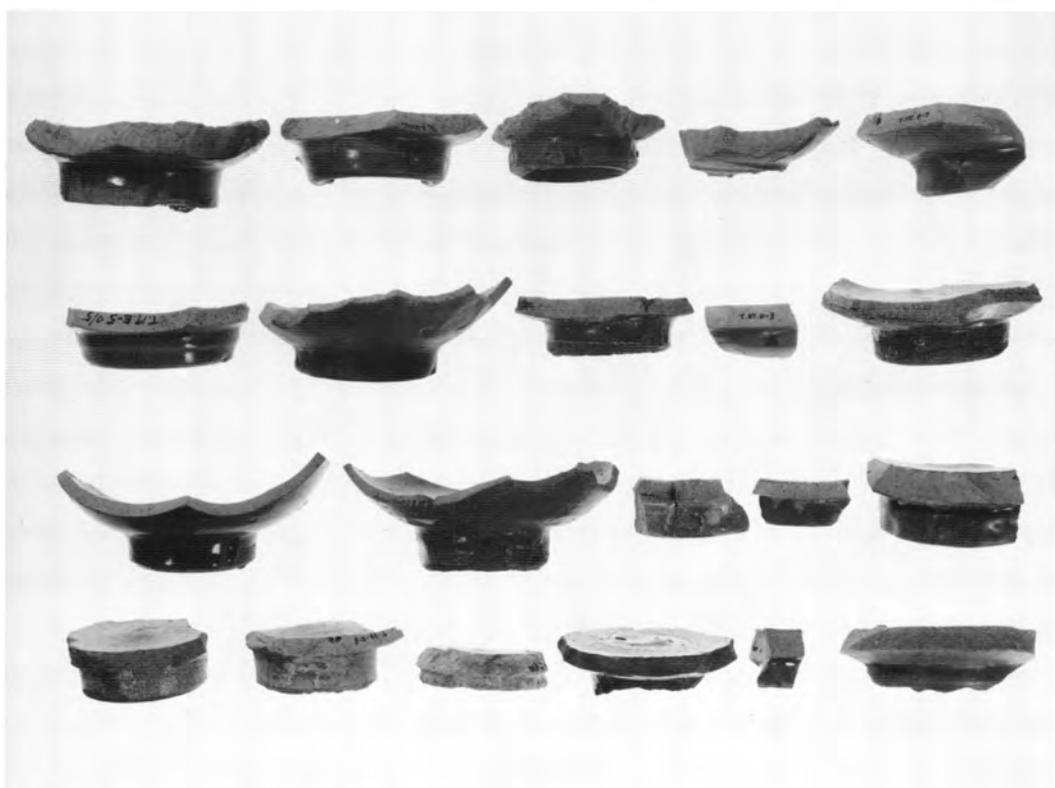
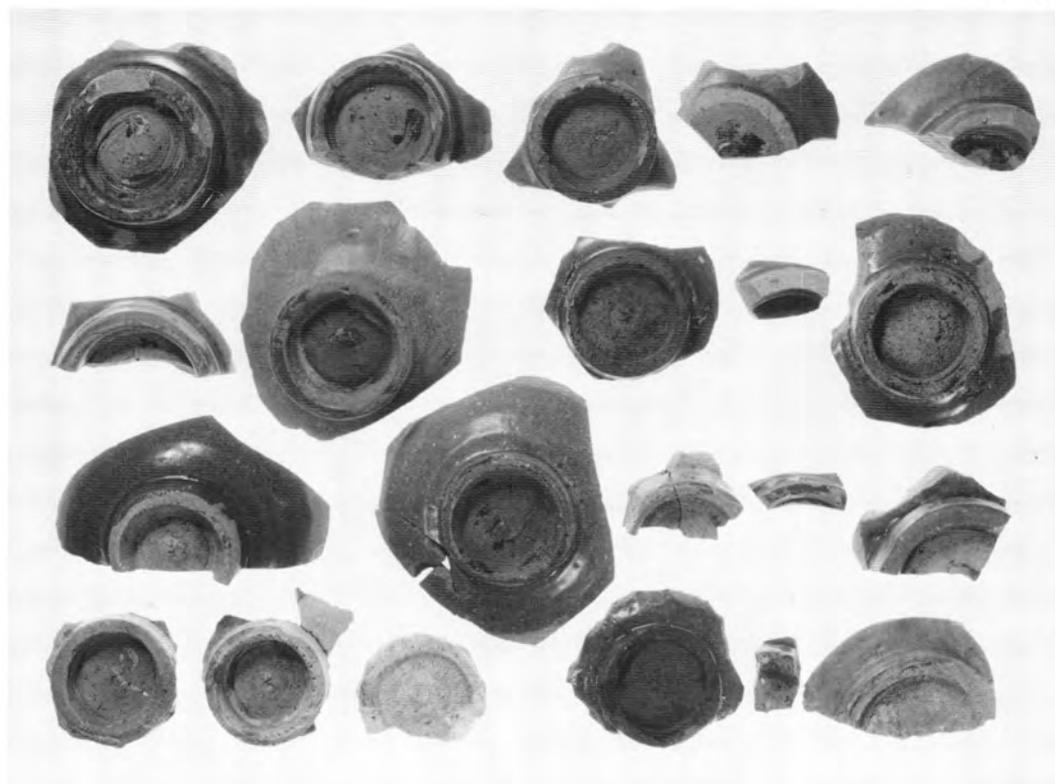
上 青磁

下 青磁



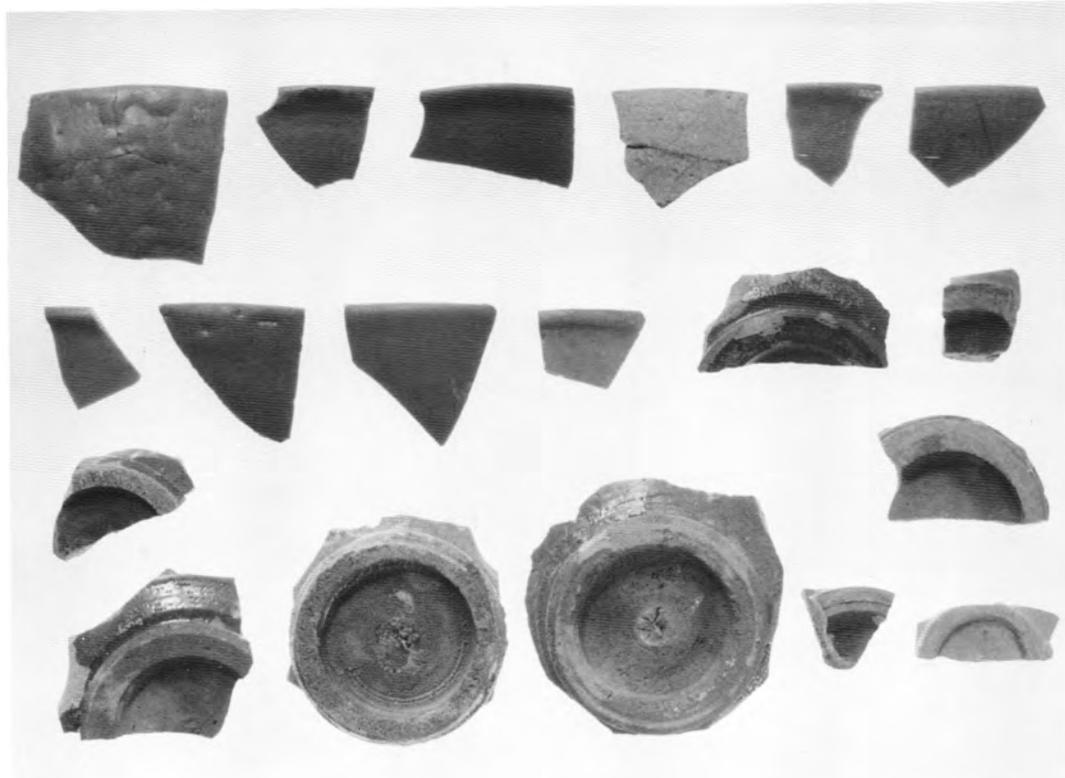
上 青磁

下 青磁



上 青磁

下 青磁

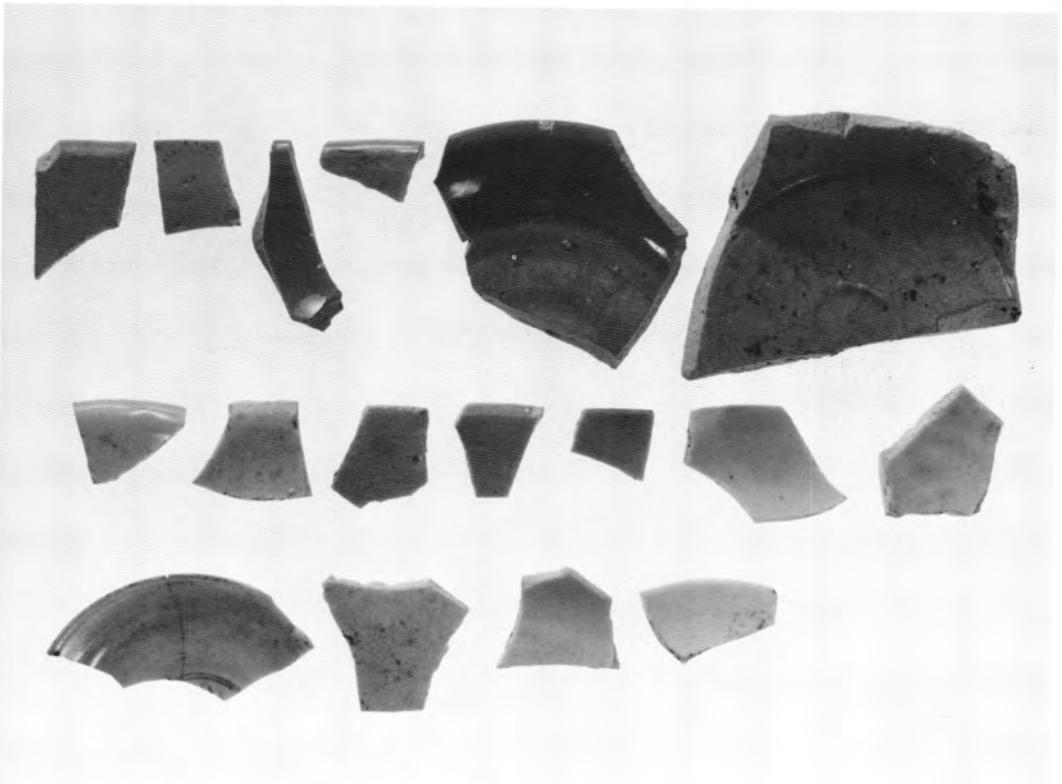


上 青磁

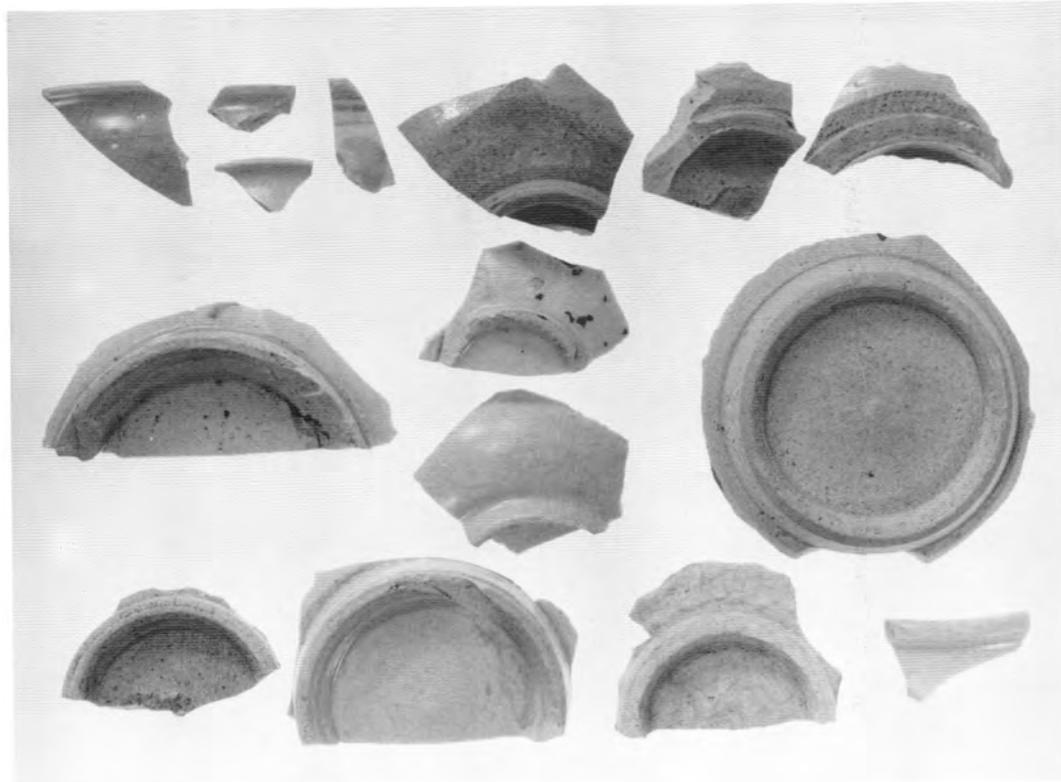
下 青磁



上 白磁表面

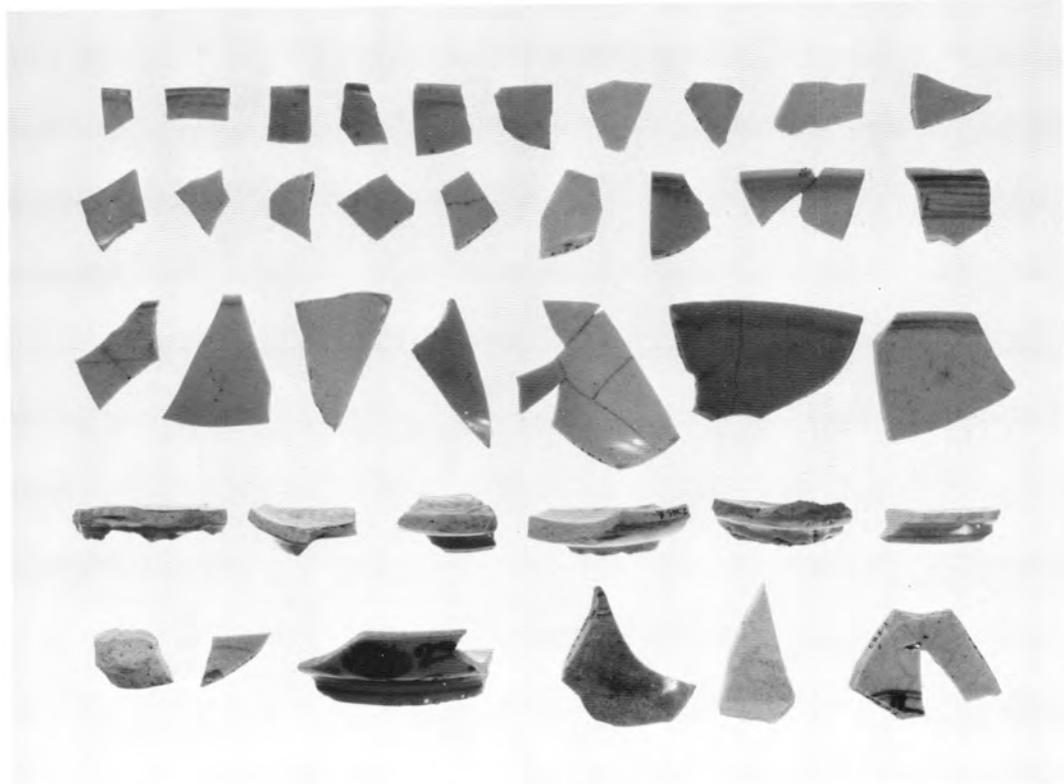
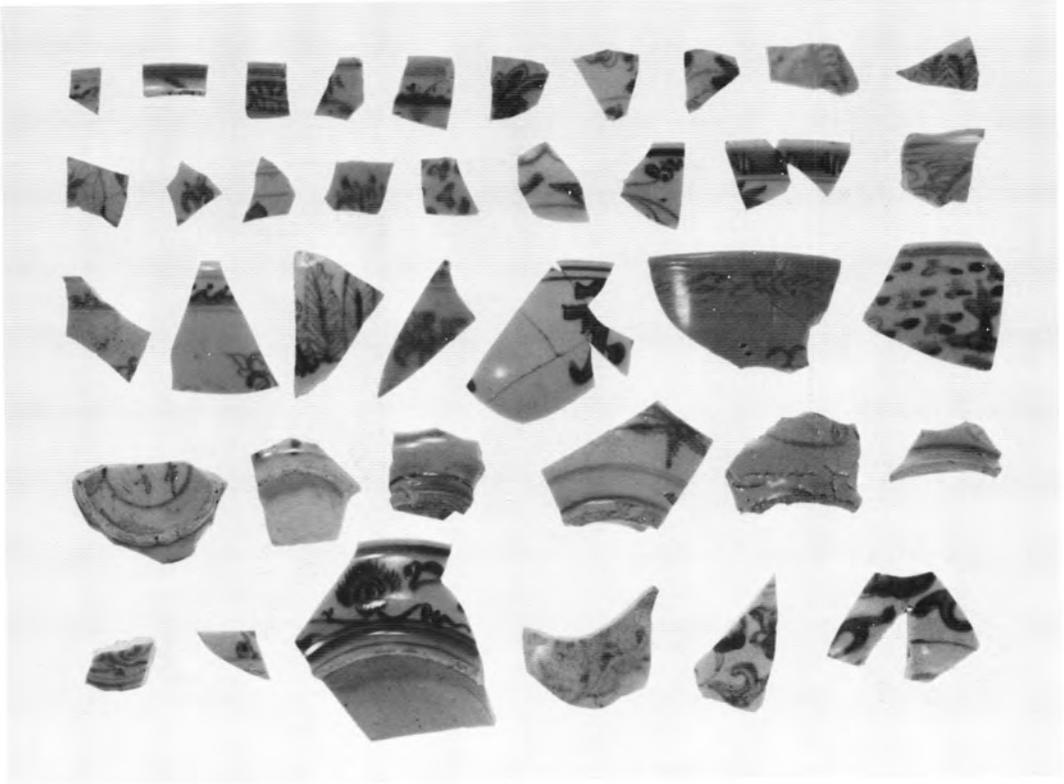


下 白磁裏面



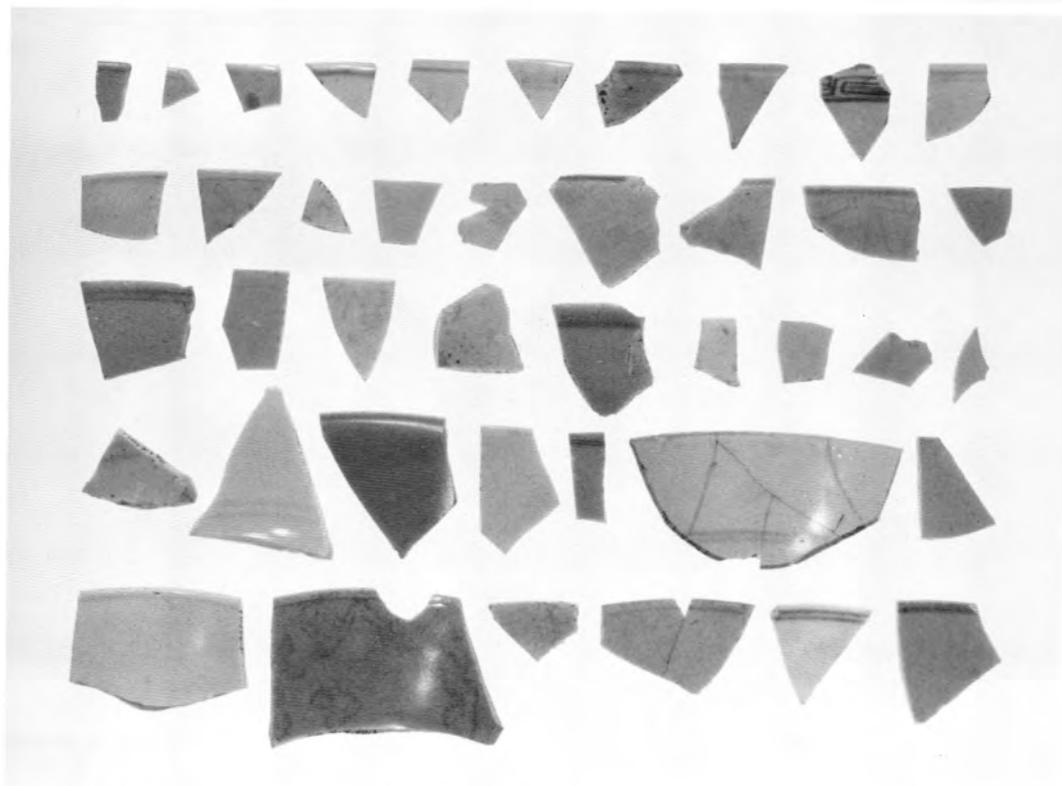
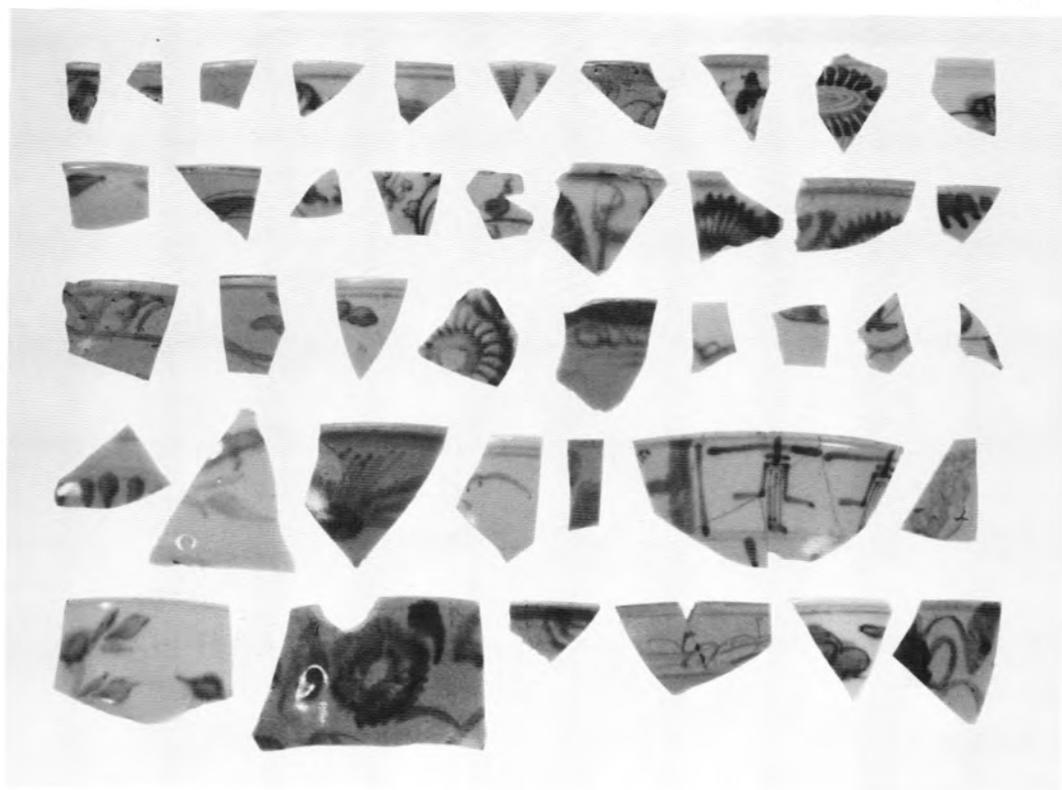
上 白磁表面

下 白磁裏面



上 染付表面

下 染付裏面



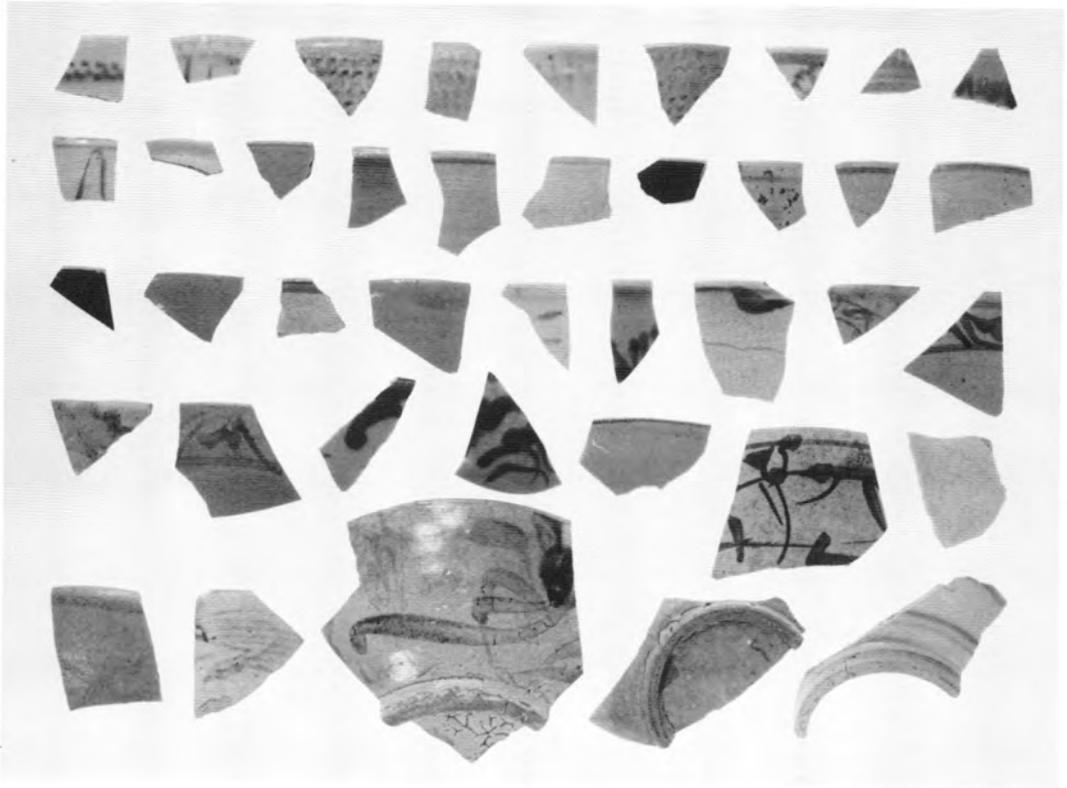
上 染付表面

下 染付裏面

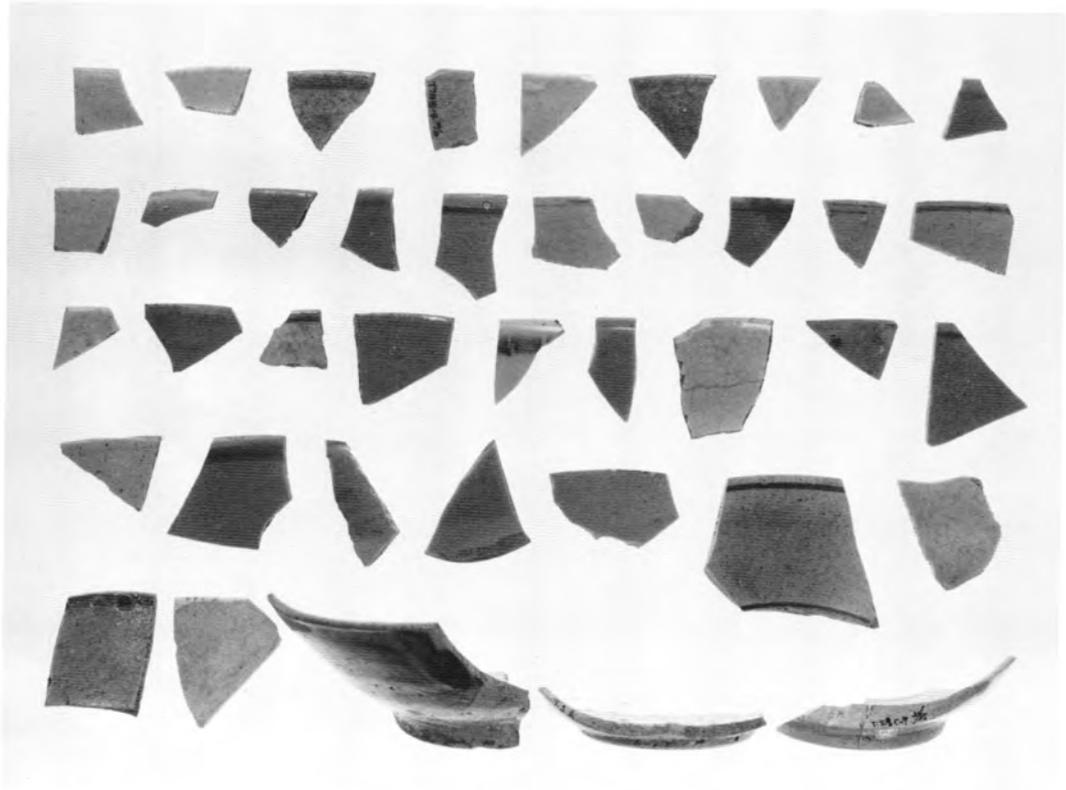


上 染付表面

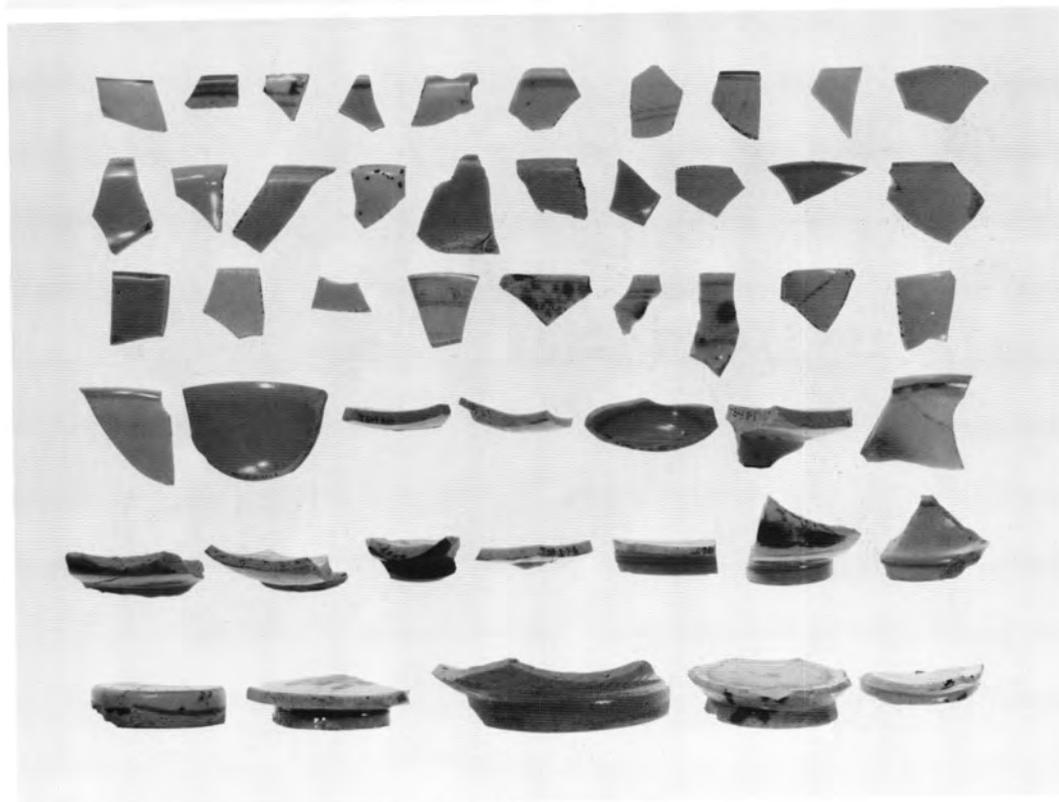
下 染付裏面



上 染付表面

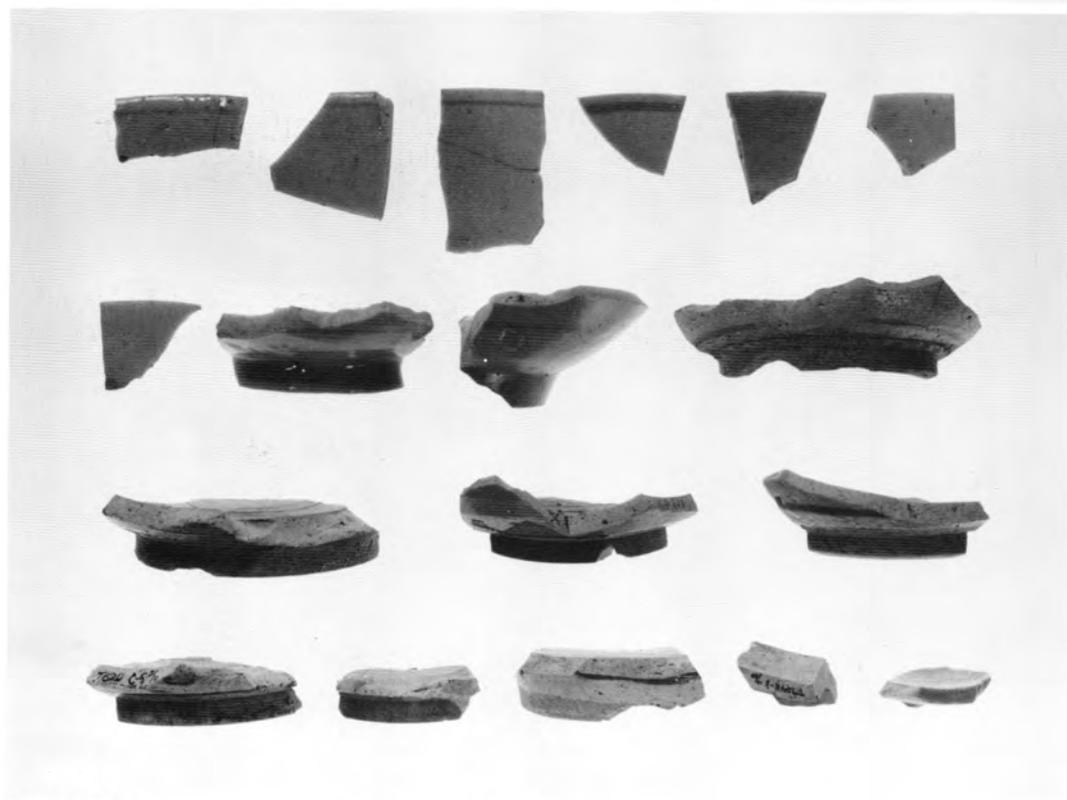
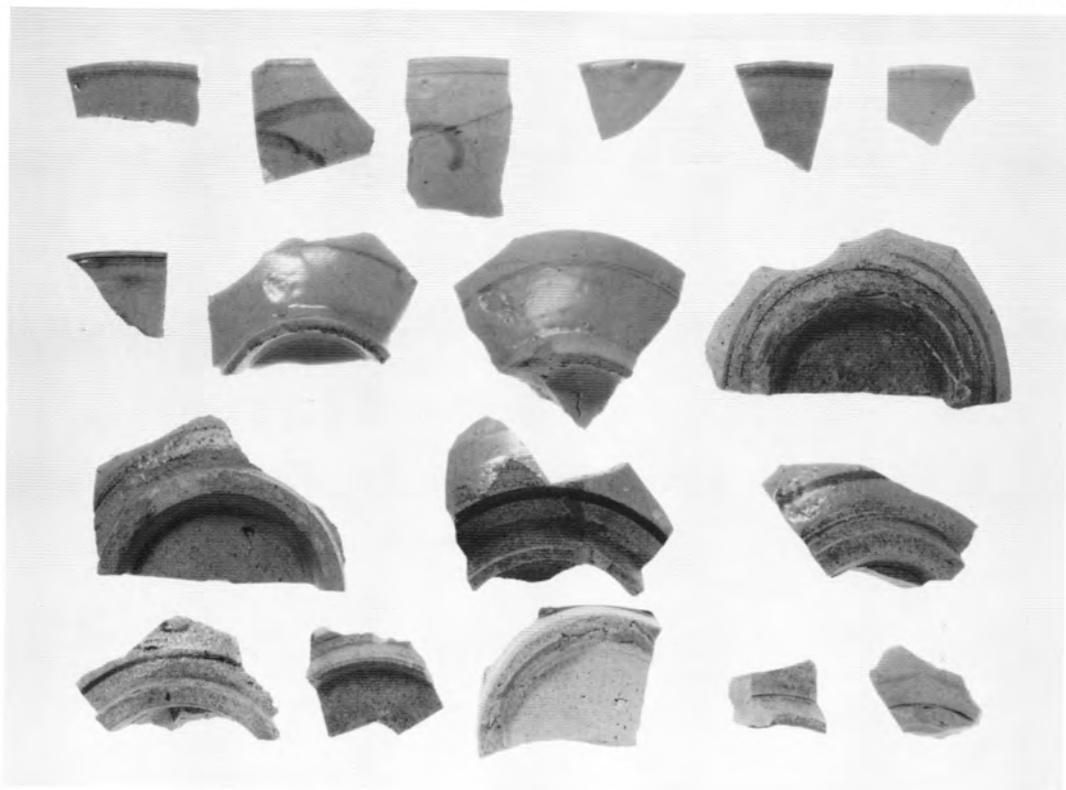


下 染付裏面



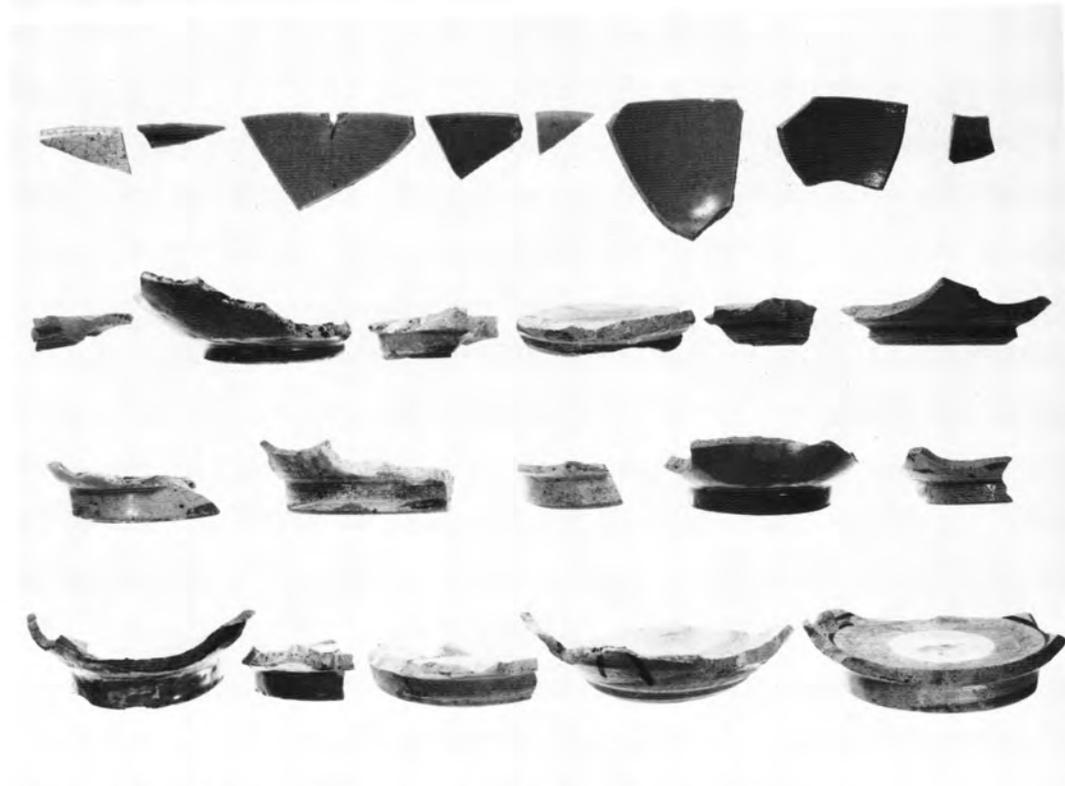
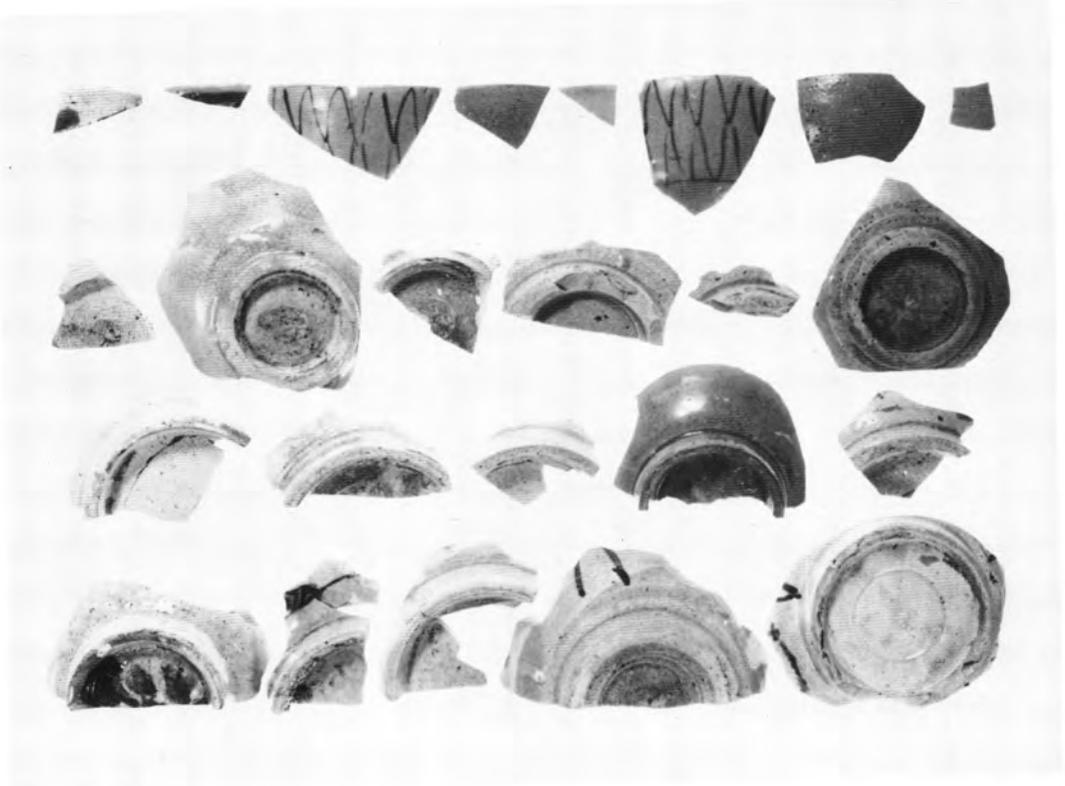
上 染付表面

下 染付裏面



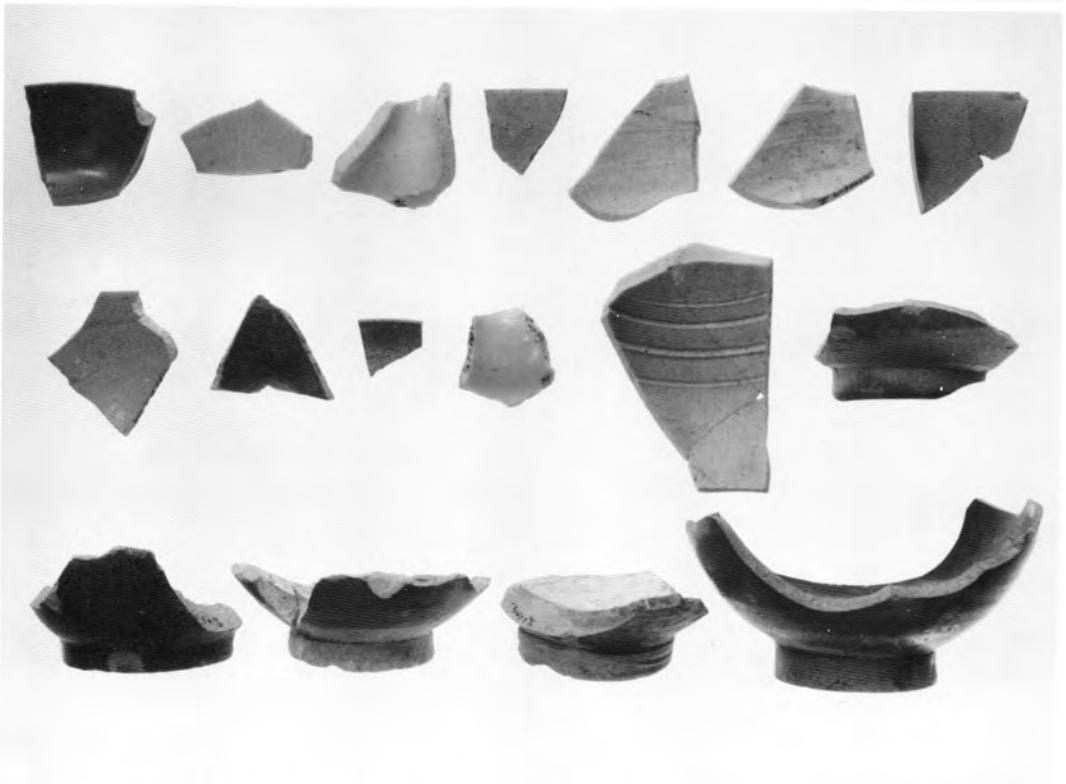
上 染付表面

下 染付裏面



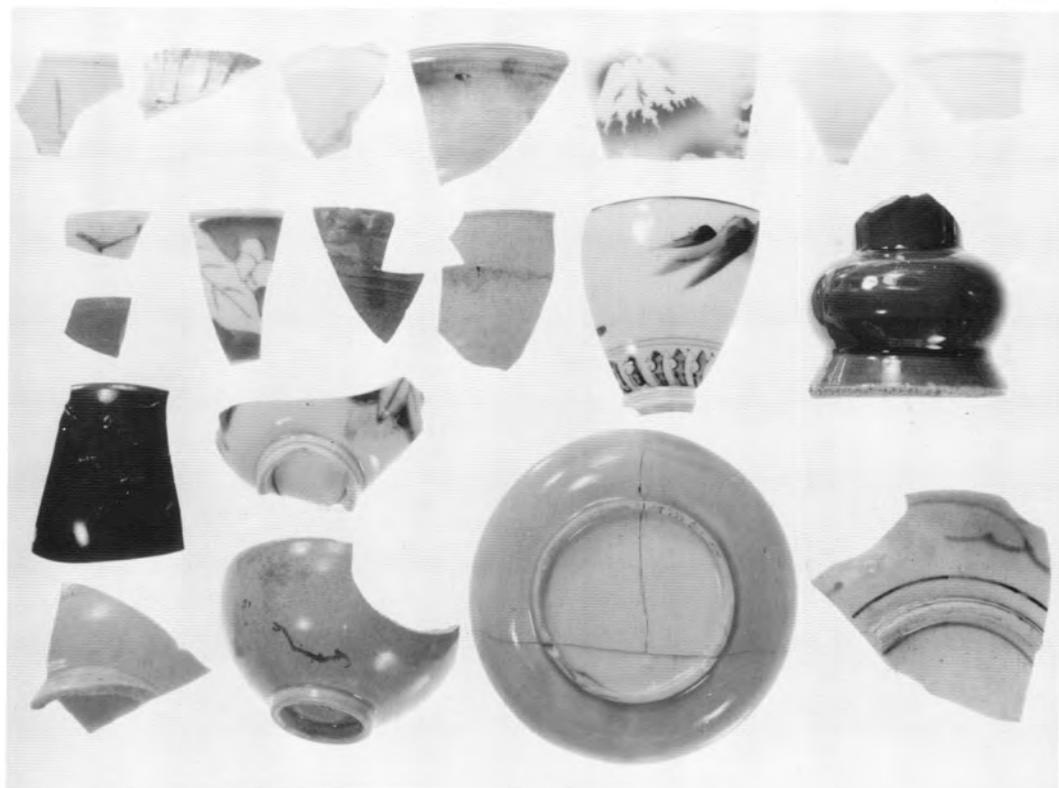
上 有田・伊万里・肥前焼表面

下 有田・伊万里・肥前焼裏面



上 有田・伊万里・肥前焼表面

下 有田・伊万里・肥前焼裏面



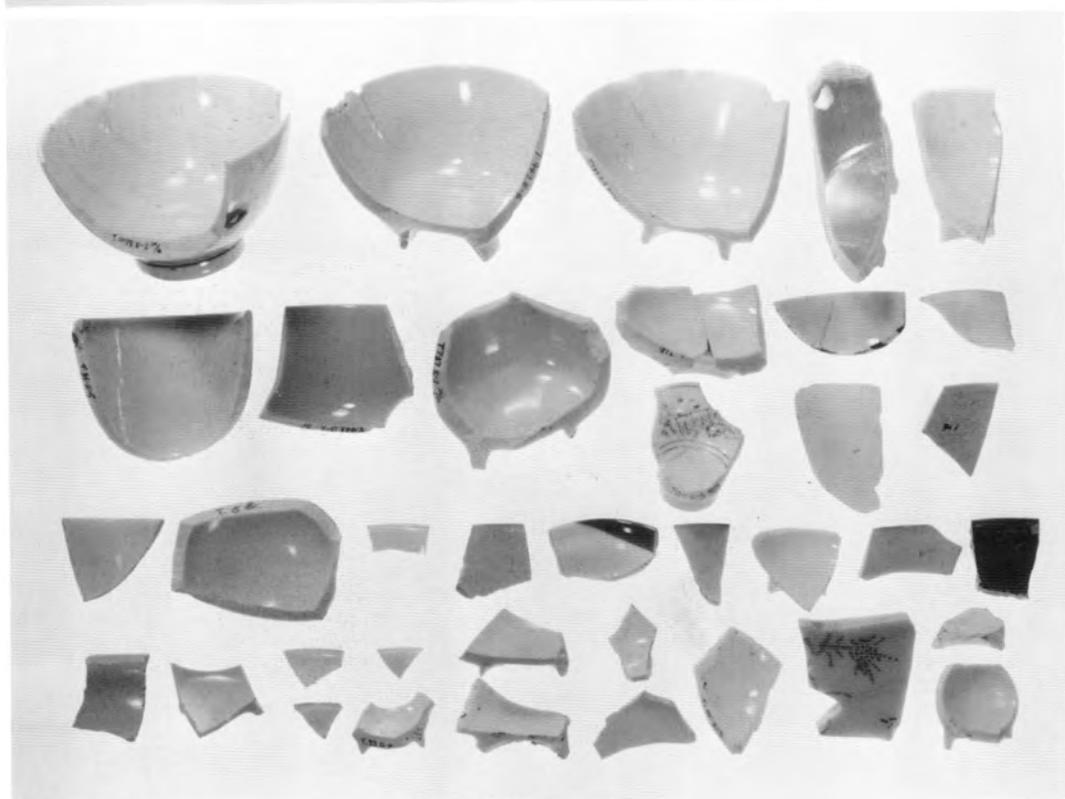
上 現代磁器表面

下 現代磁器裏面



上 現代磁器表面

下 現代磁器裏面





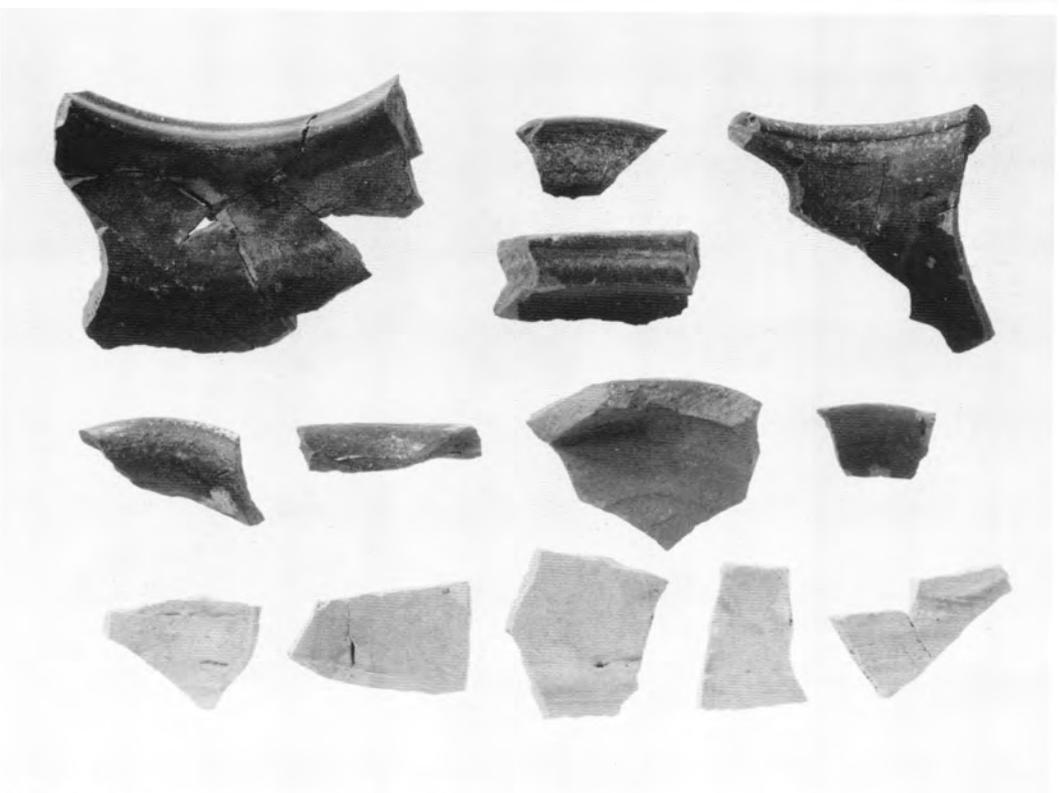
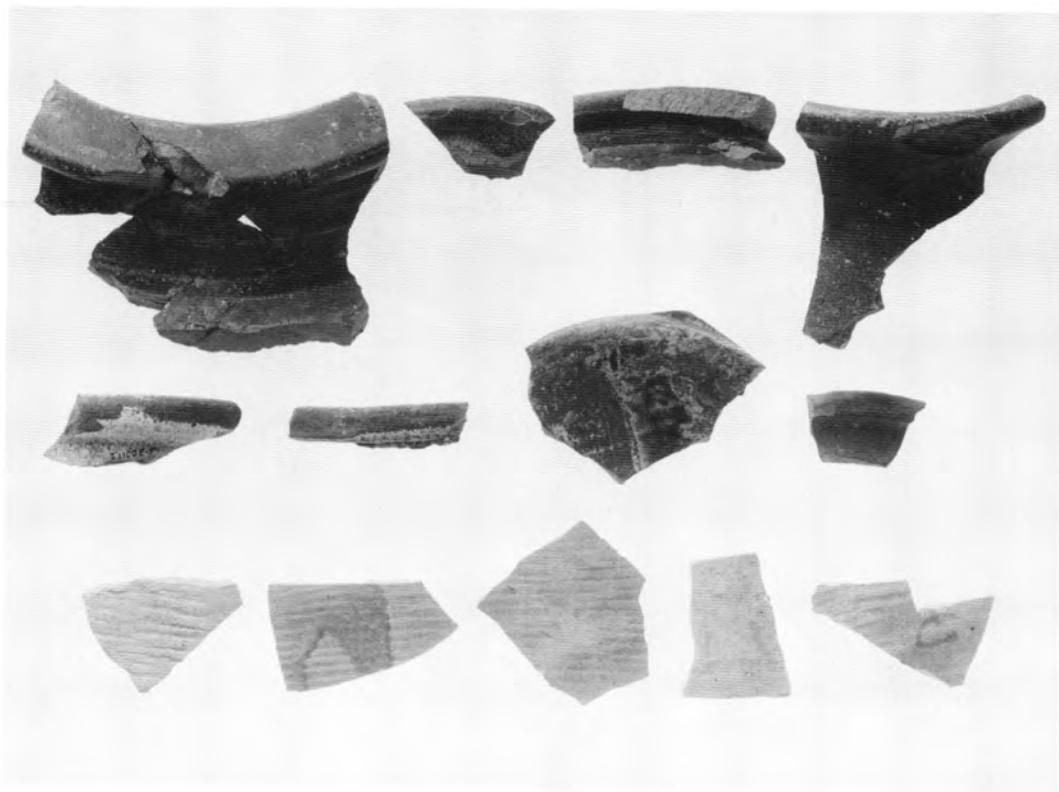
上 砥部烧表面

下 砥部烧裏面



上 南蛮表面

下 南蛮裏面



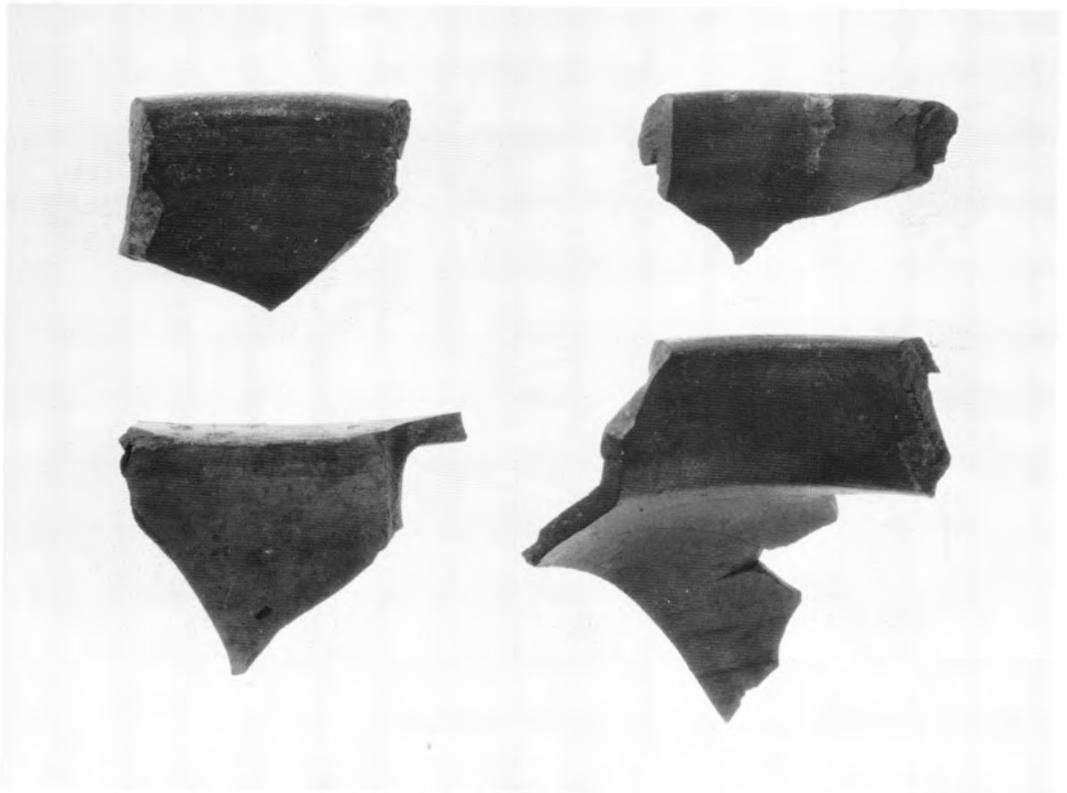
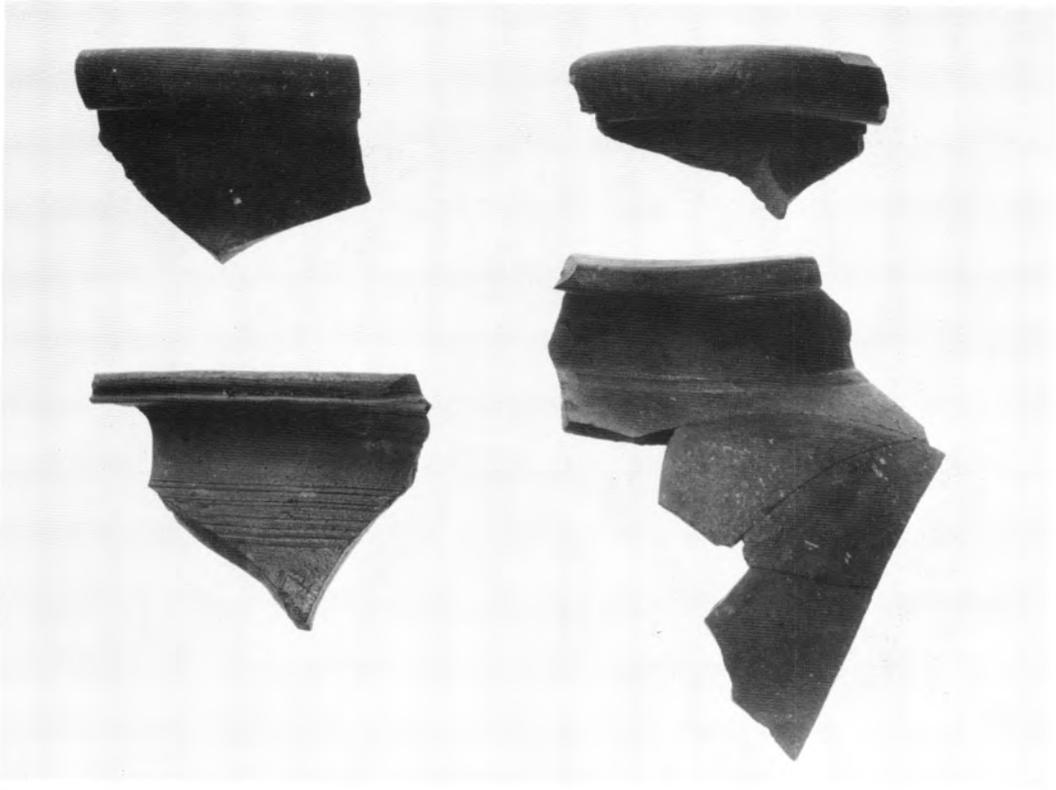
上 南蛮表面

下 南蛮裏面



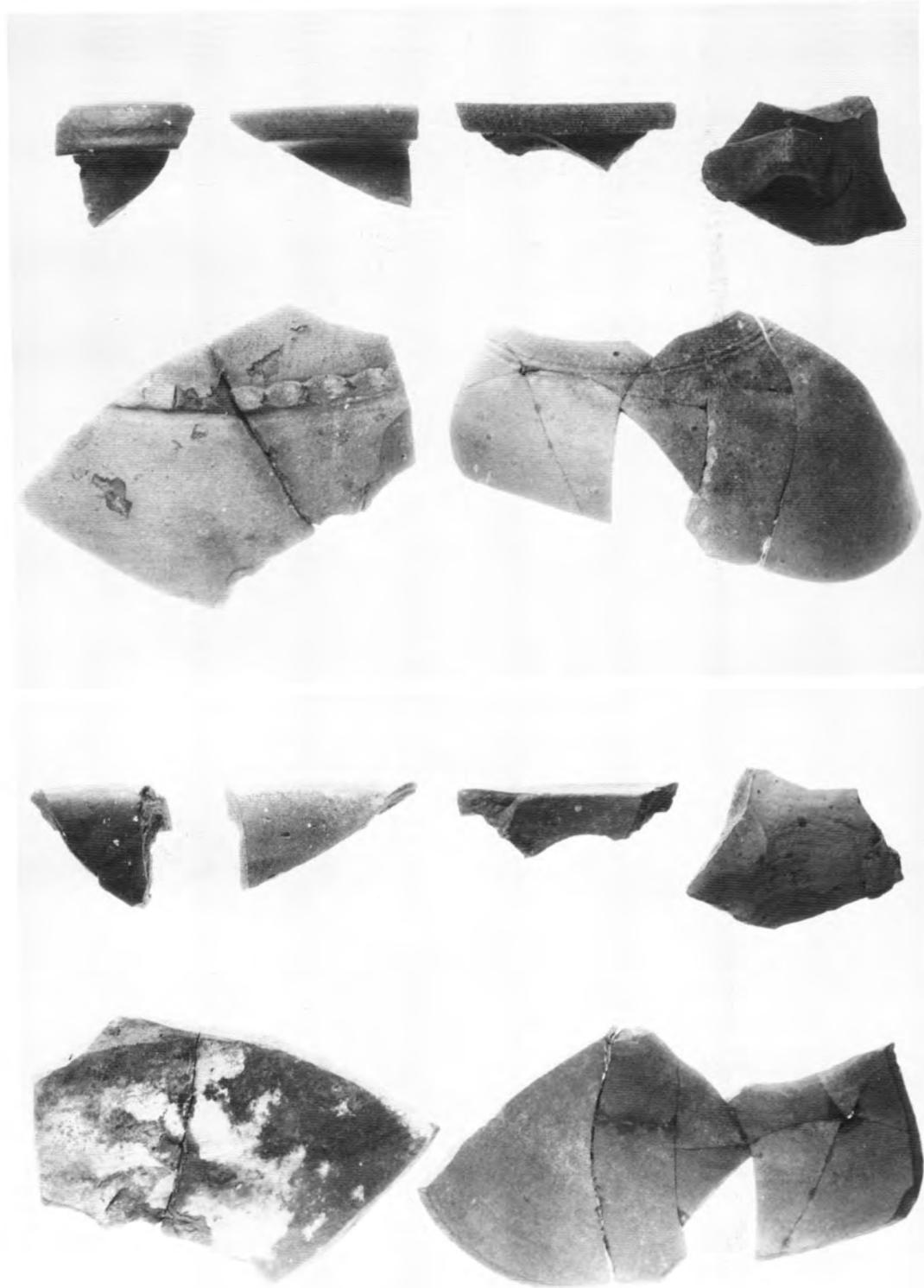
上 タイ焼表面

下 タイ焼裏面



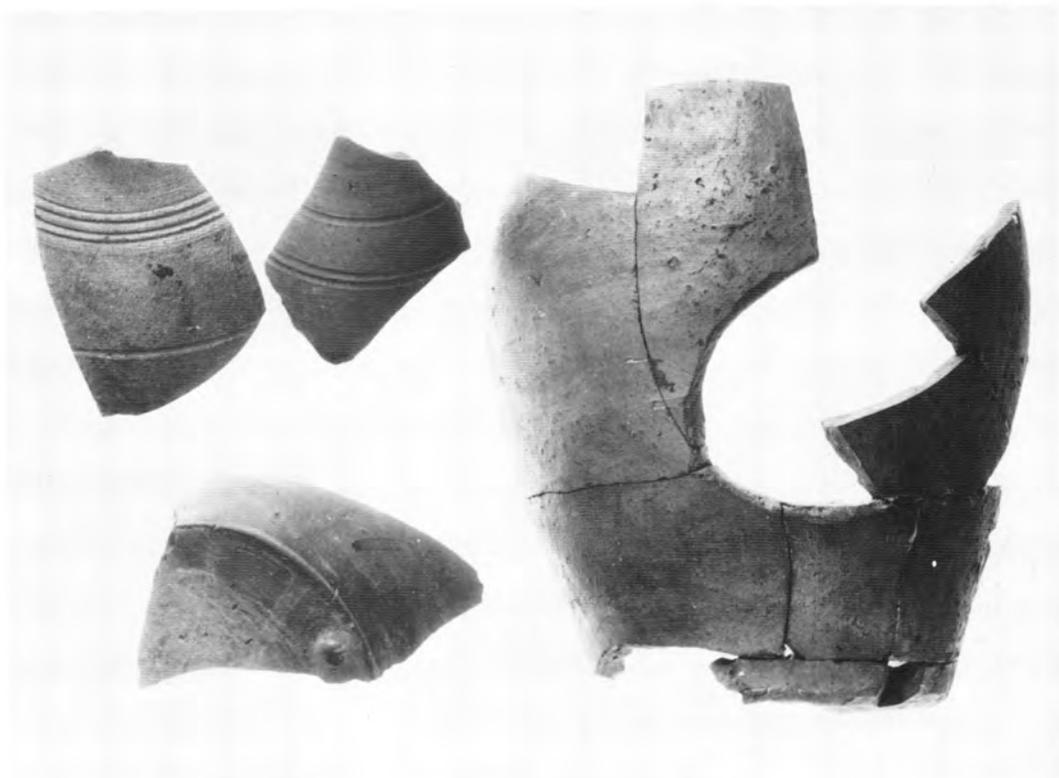
上 陶器 大型壺表面

下 陶器 大型壺裏面



上 陶器 大型・中型壺表面

下 陶器 大型・中型壺裏面



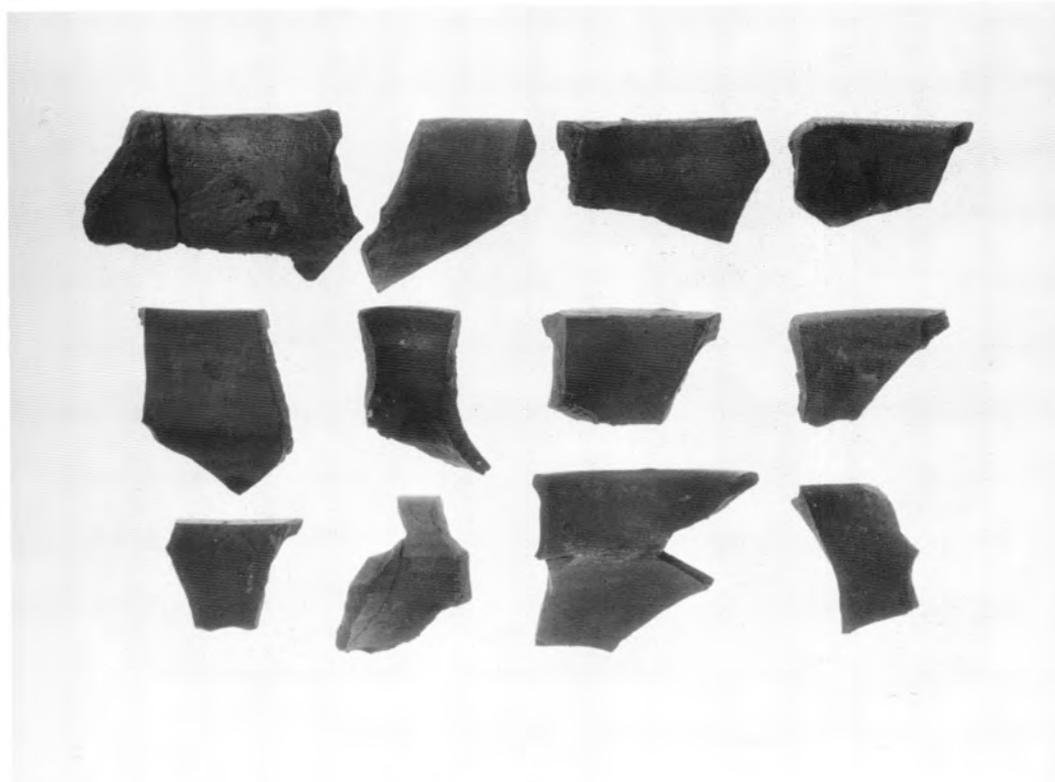
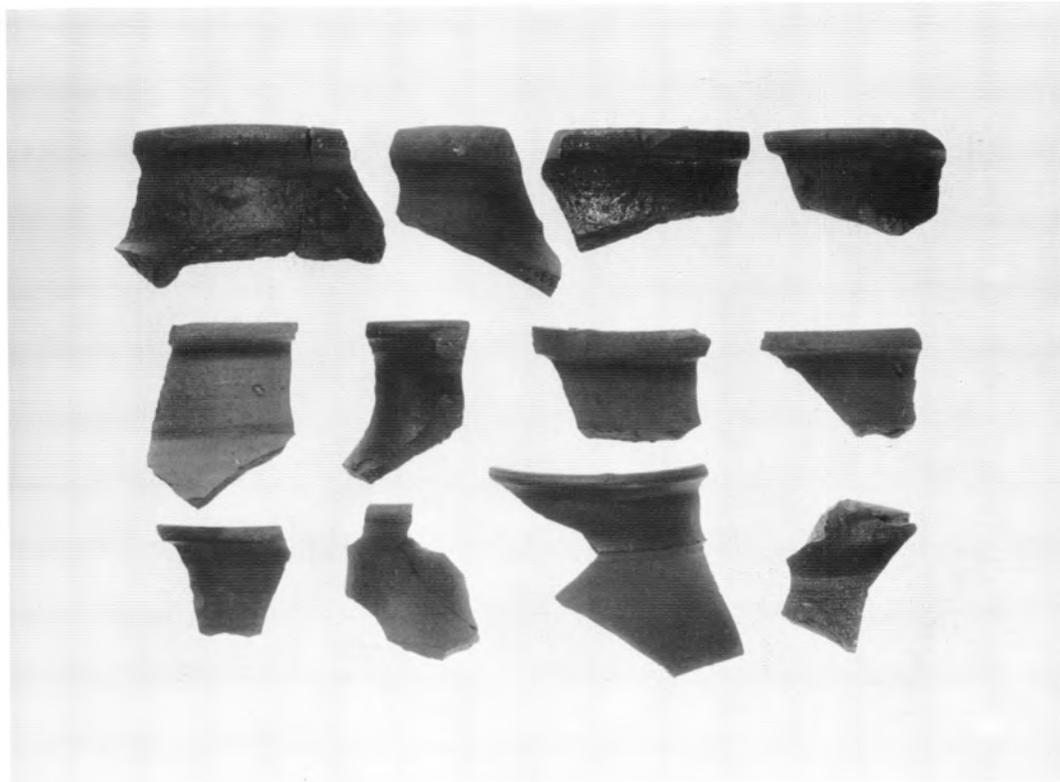
上 陶器 中型壺表面

下 陶器 中型壺裏面



上 陶器 中型壺表面

下 陶器 中型壺裏面



上 陶器 小型壺表面

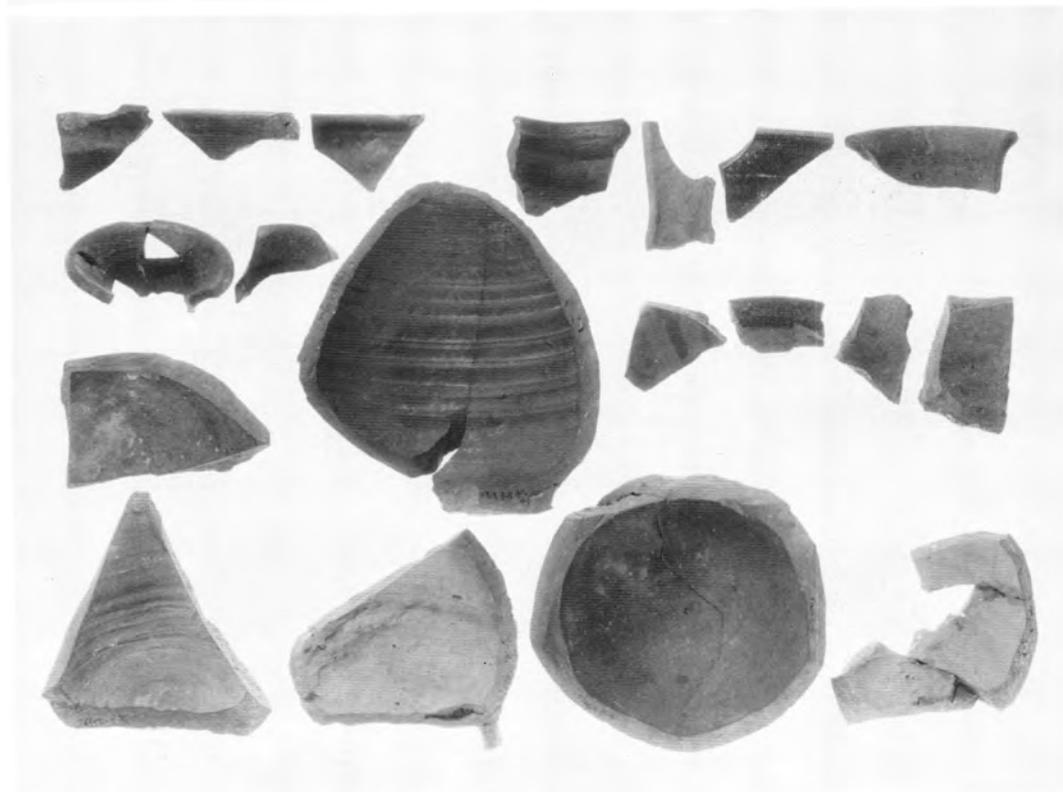
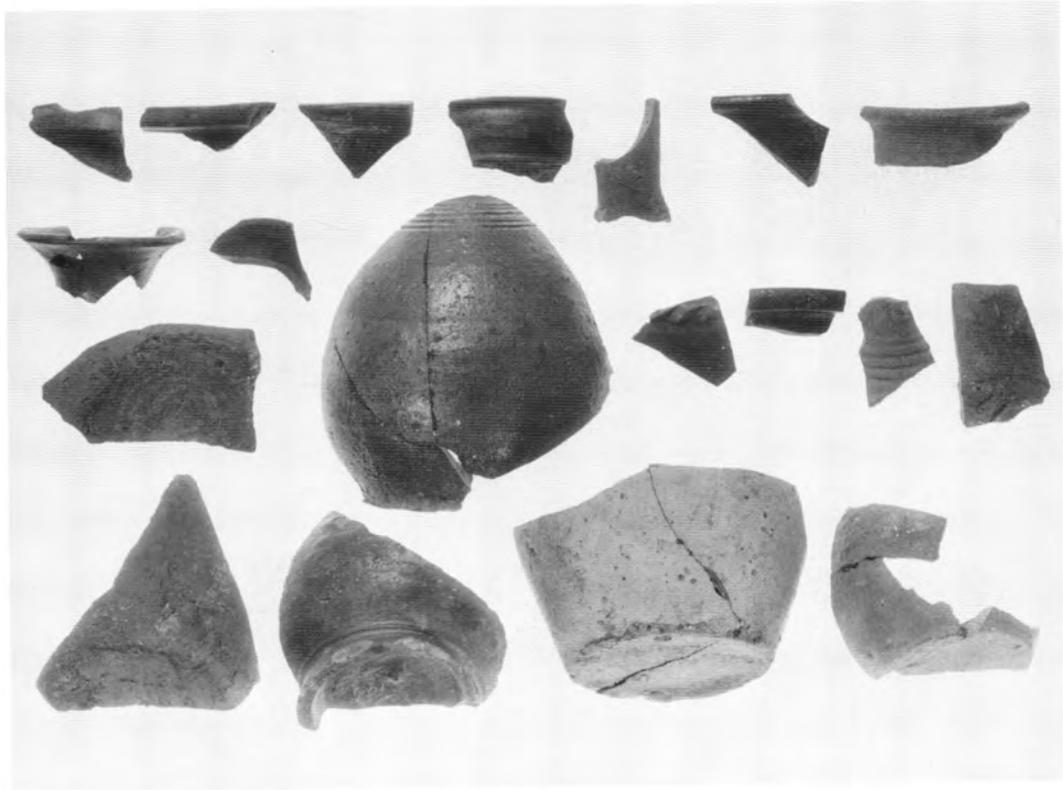
下 小型壺裏面



上 陶器 小型壺表面

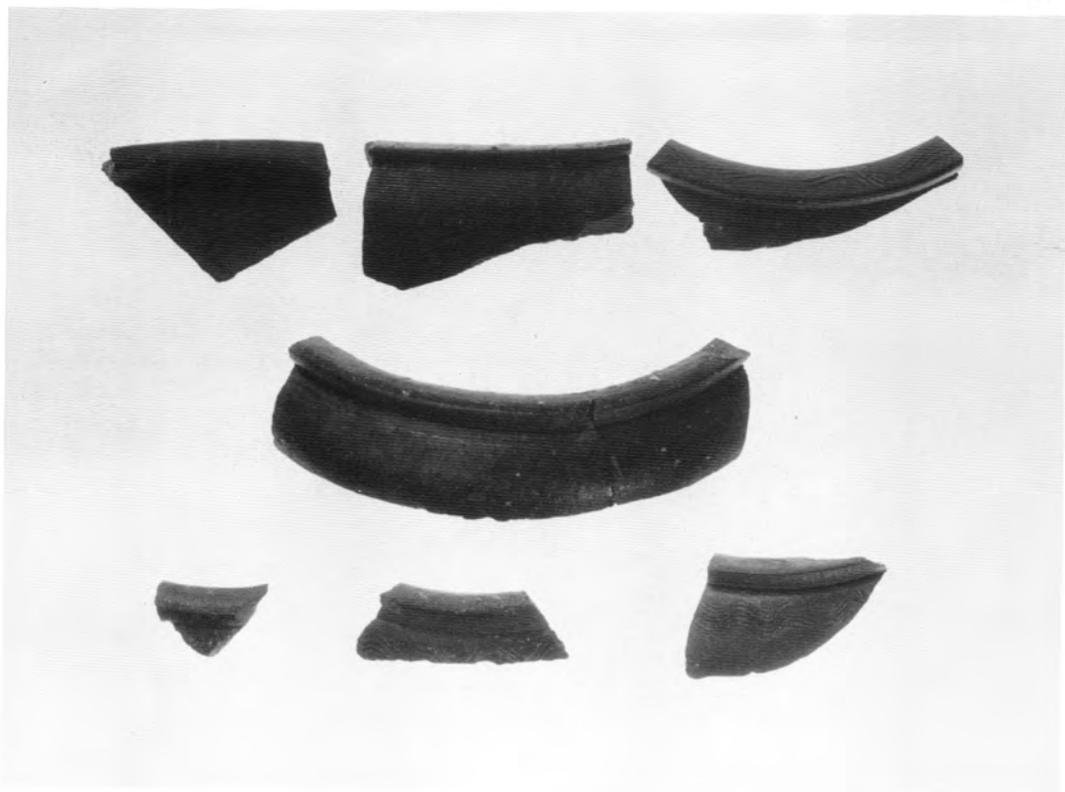


下 小型壺裏面



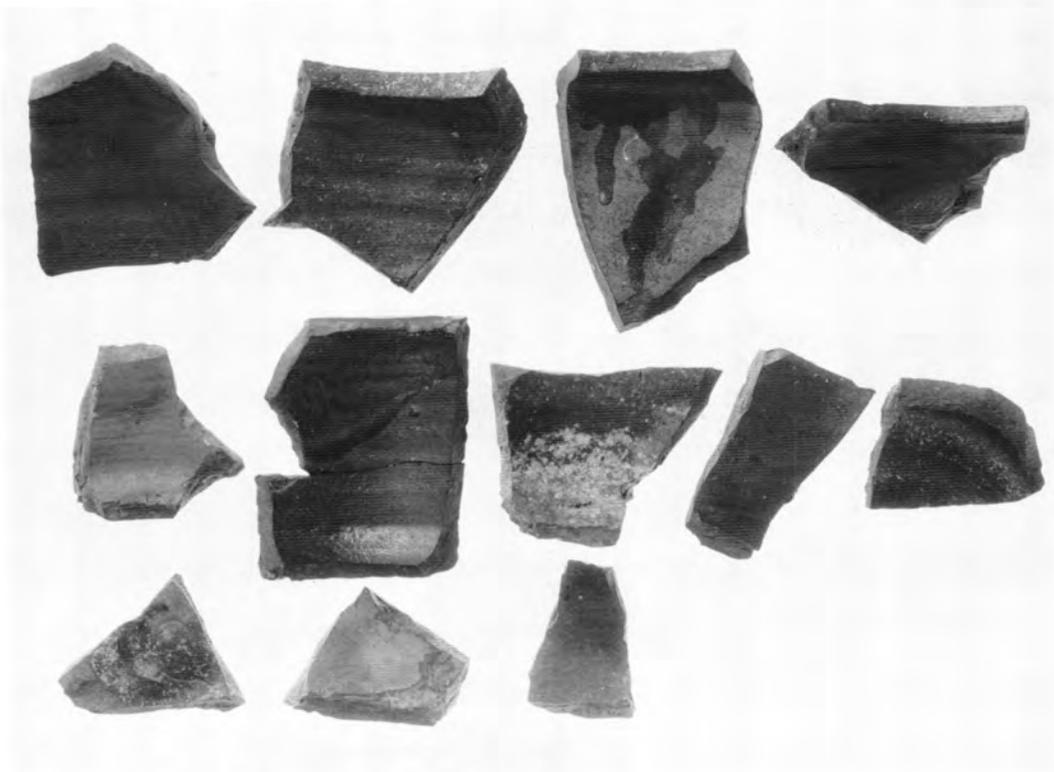
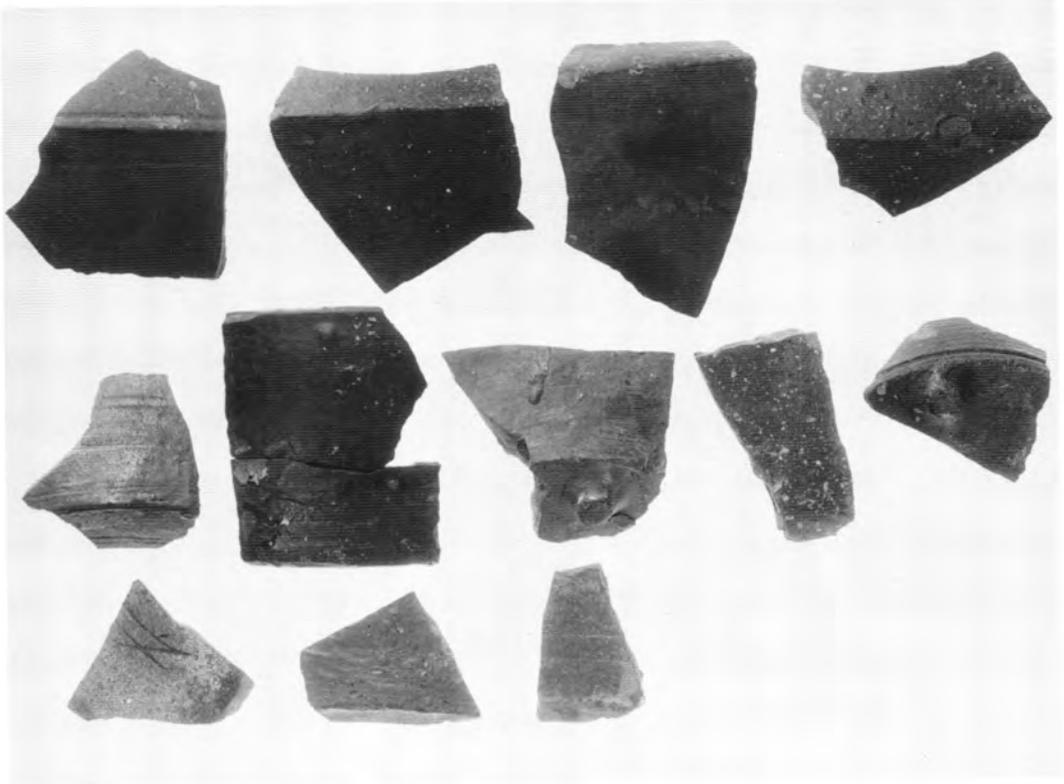
上 陶器 小型瓶表面

下 小型瓶裏面



上 陶器 小型浅钵表面

下 小型浅钵裏面



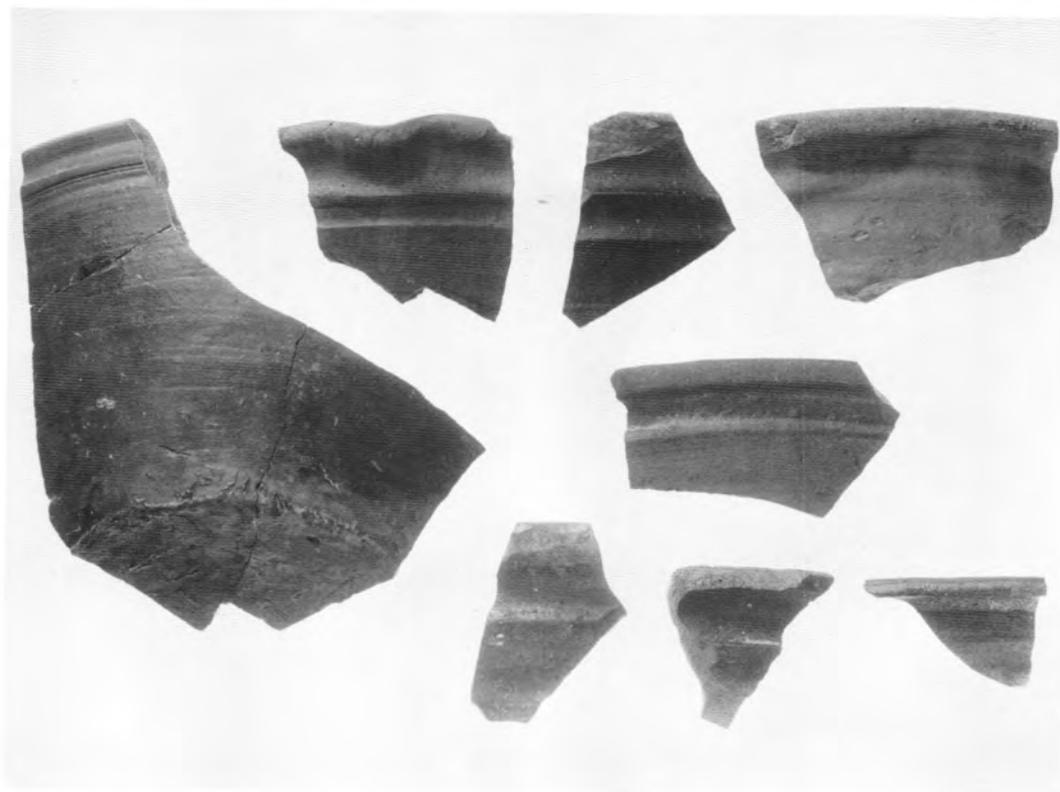
上 陶器 小型手焙り表面

下 小型手焙り裏面



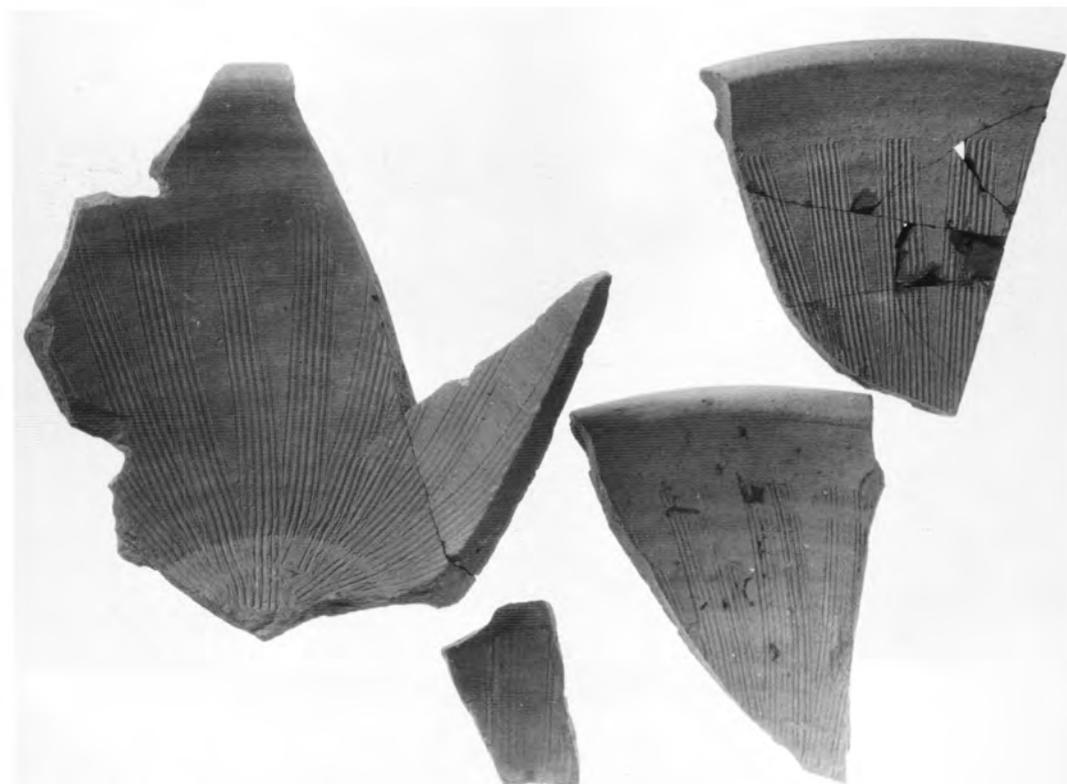
上 陶器 小型手焙り・碗表面

下 小型手焙り・碗裏面



上 陶器 擂鉢

下 陶器 擂鉢



上 陶器 擂鉢

下 陶器 擂鉢



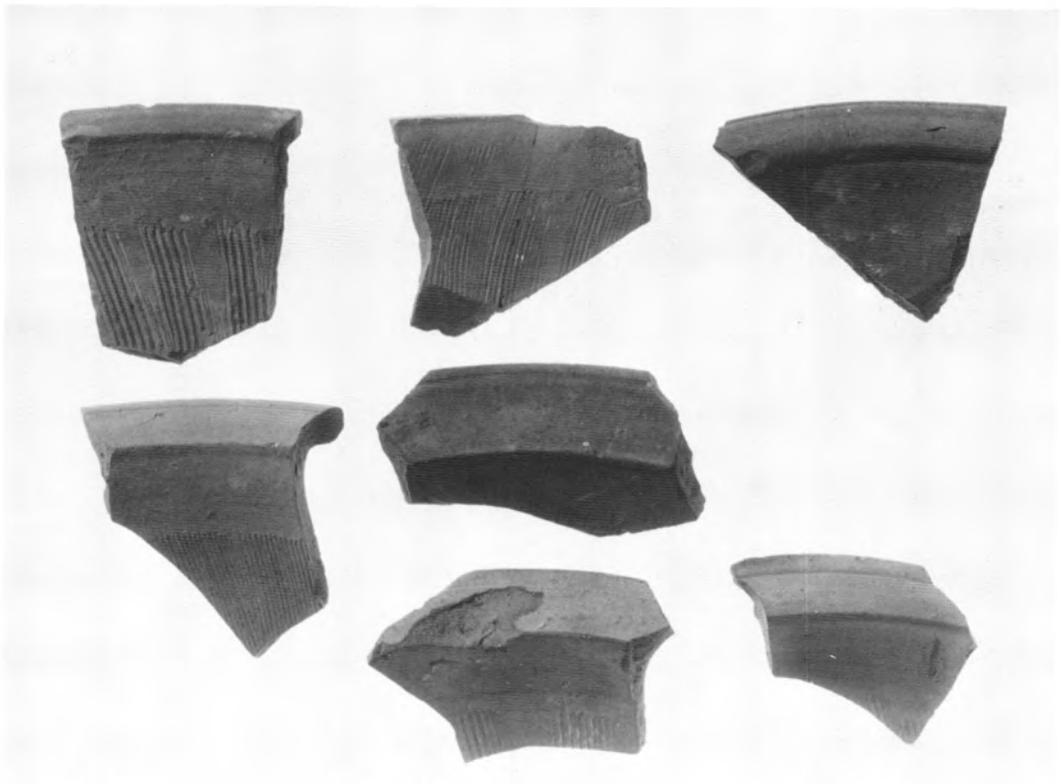
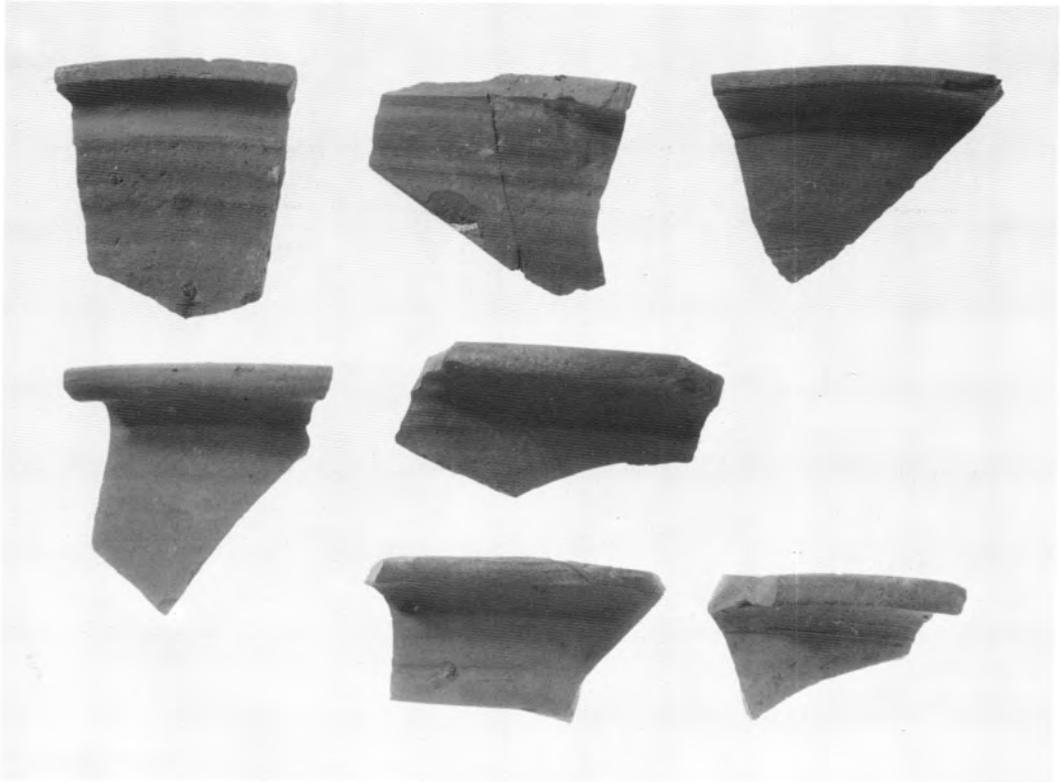
上 陶器 擂鉢

下 陶器 擂鉢



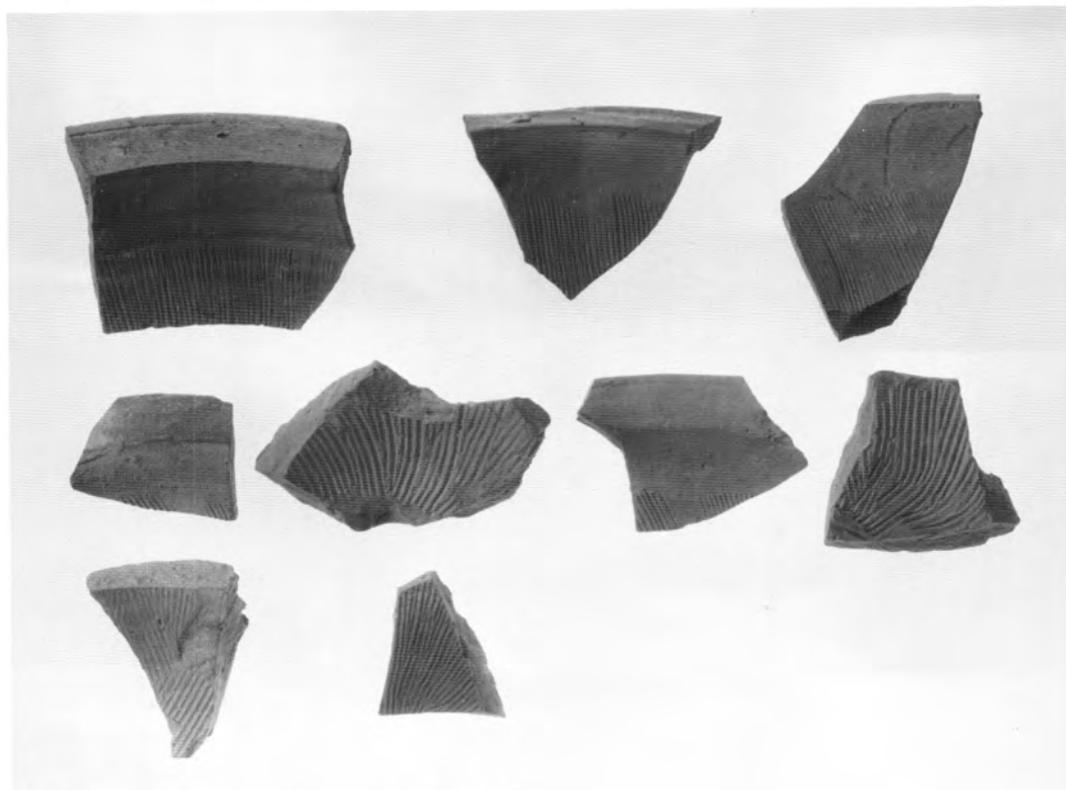
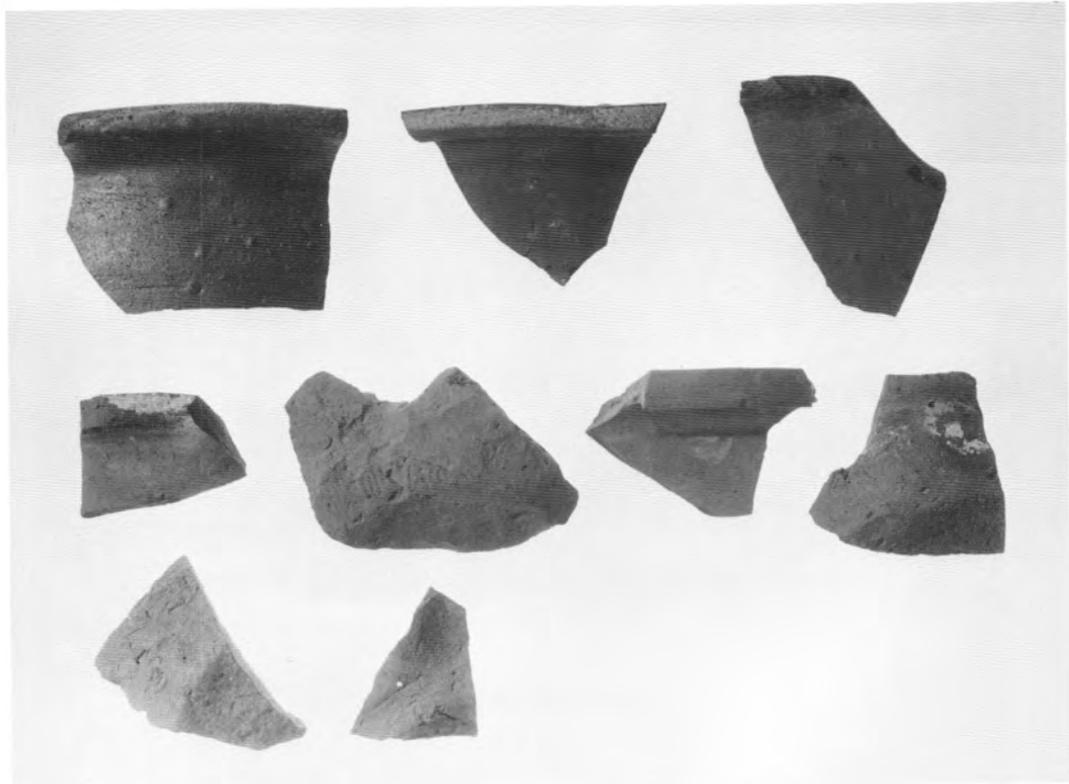
上 陶器 擂鉢

下 陶器 擂鉢



上 陶器 擂鉢

下 陶器 擂鉢



上 陶器 擂鉢

下 陶器 擂鉢



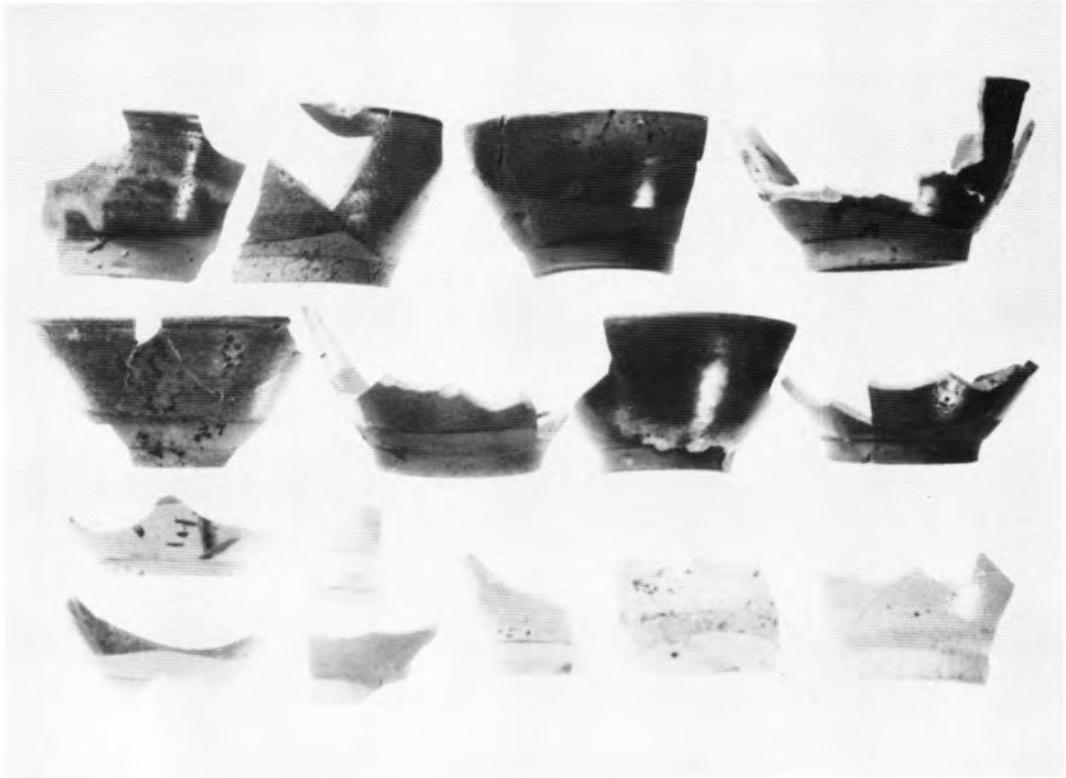
上 陶器 擂鉢

下 陶器 擂鉢



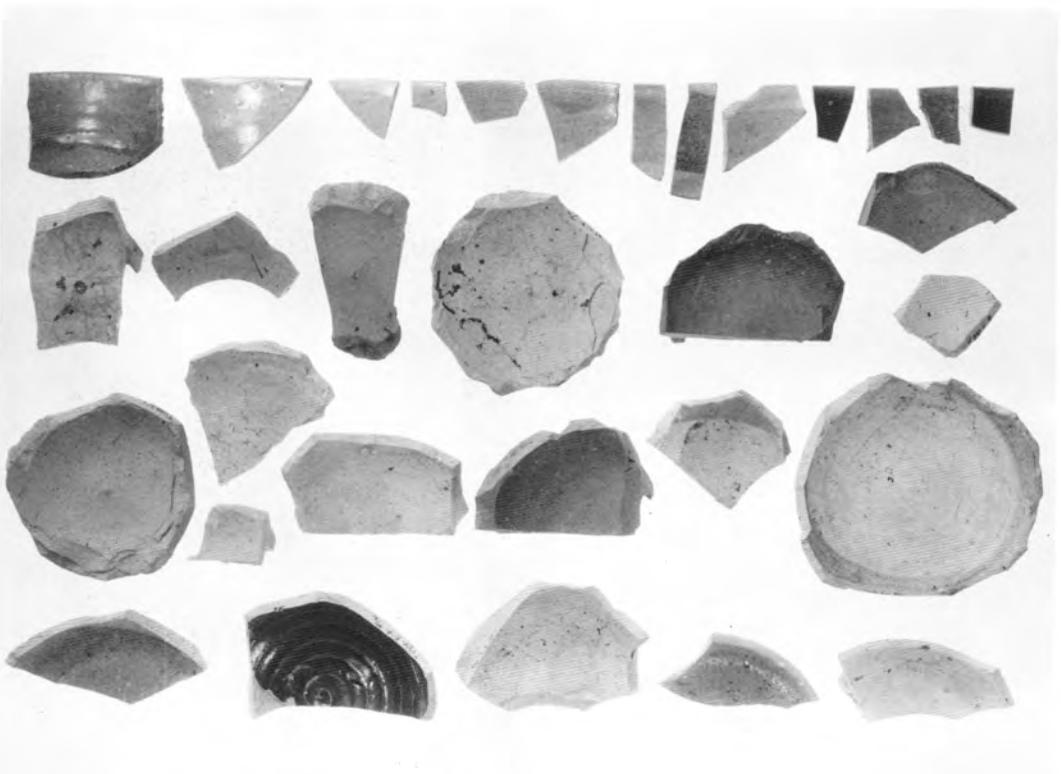
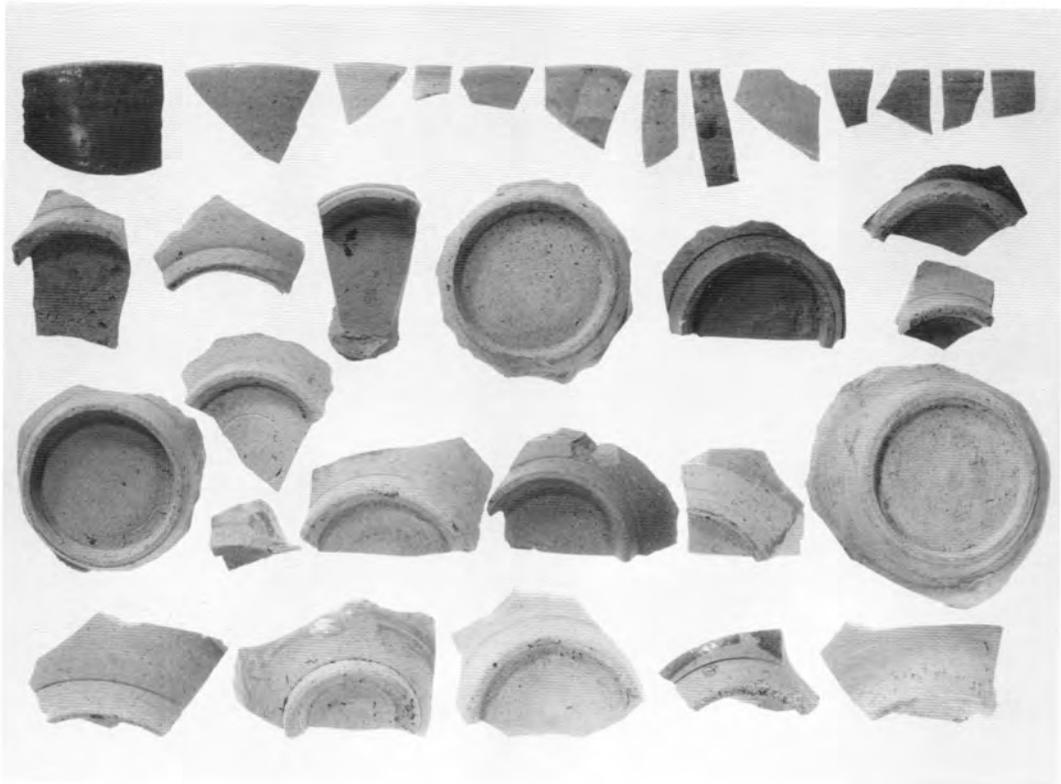
上 陶器 擂鉢

下 陶器 擂鉢



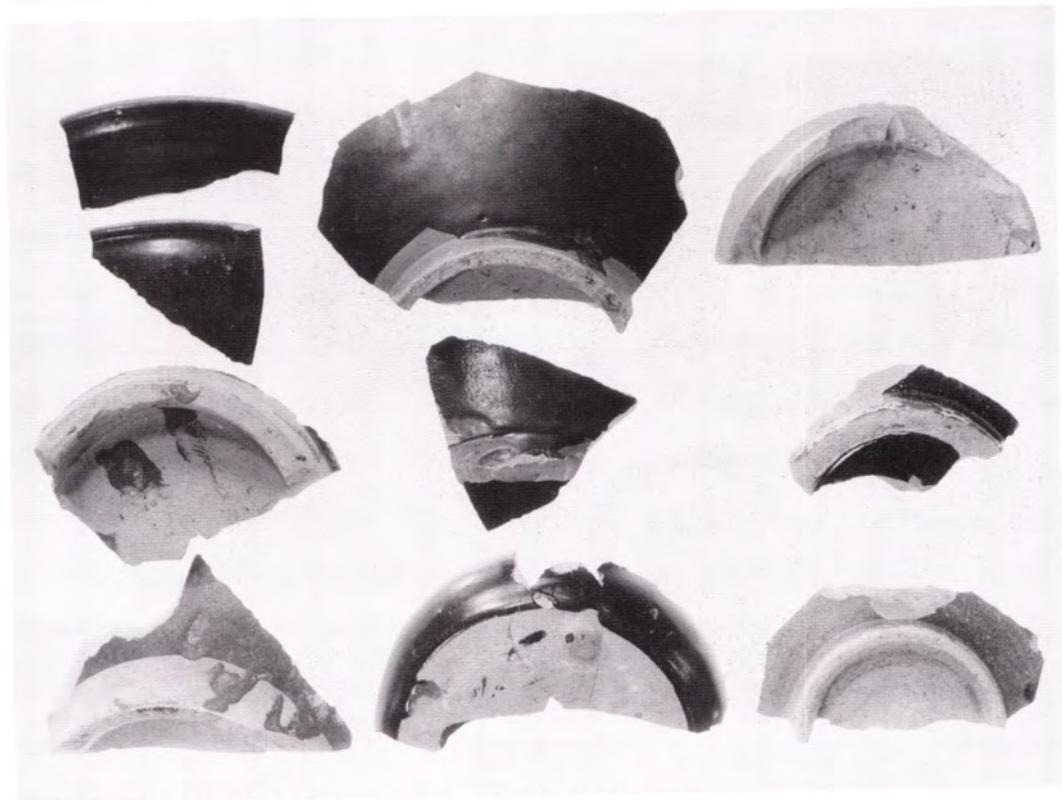
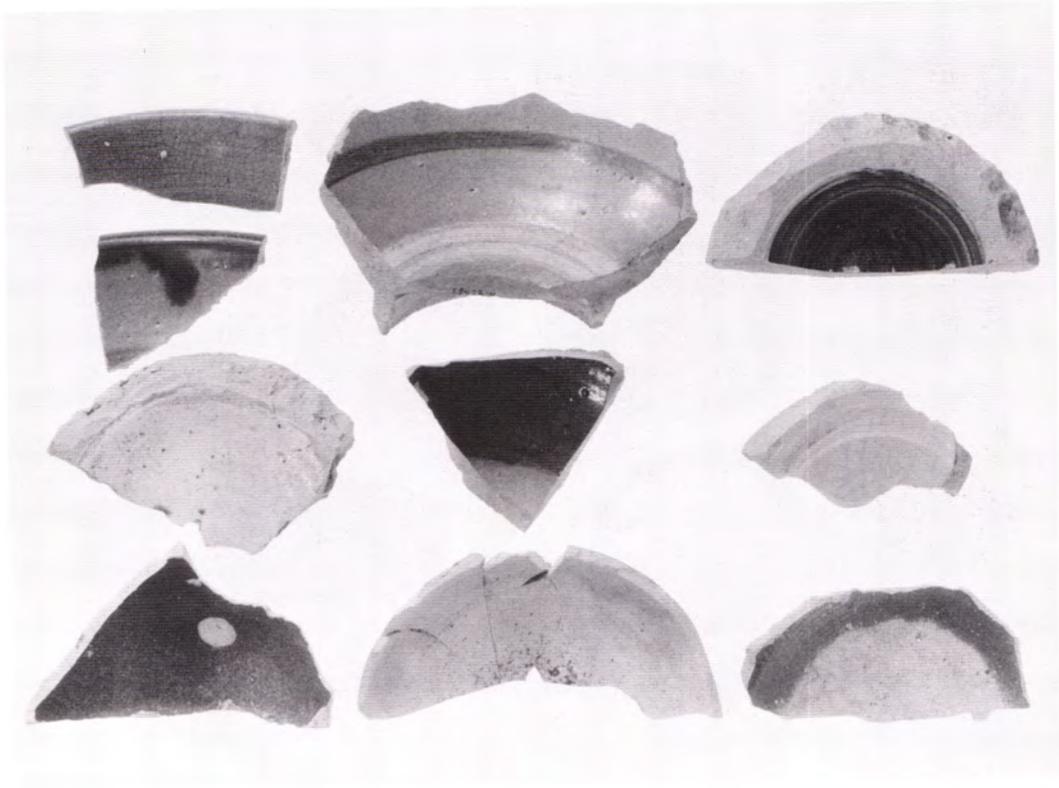
上 陶器 湧田焼碗表面

下 湧田焼碗裏面

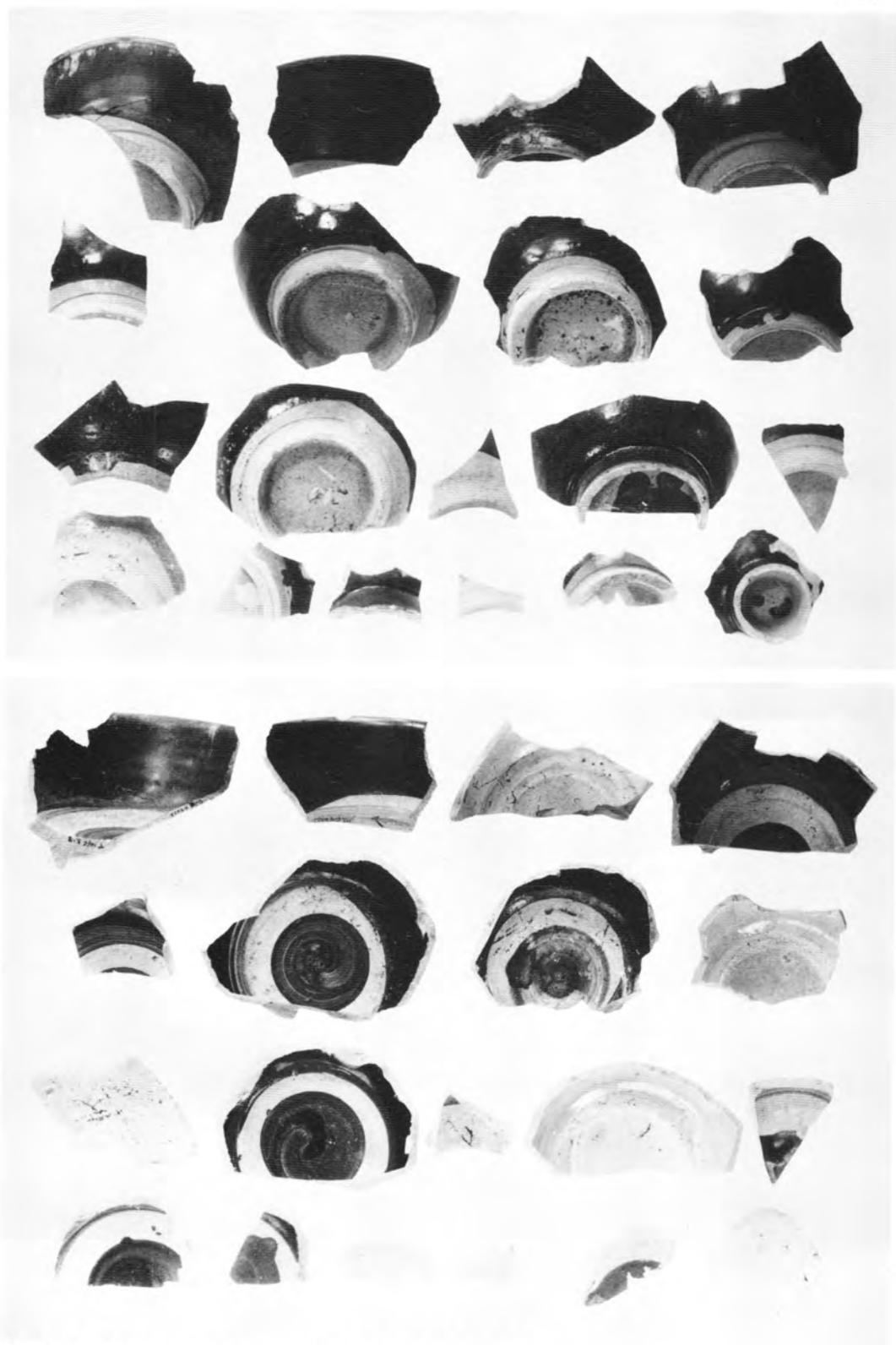


上 陶器 湧田焼碗表面

下 湧田焼碗裏面

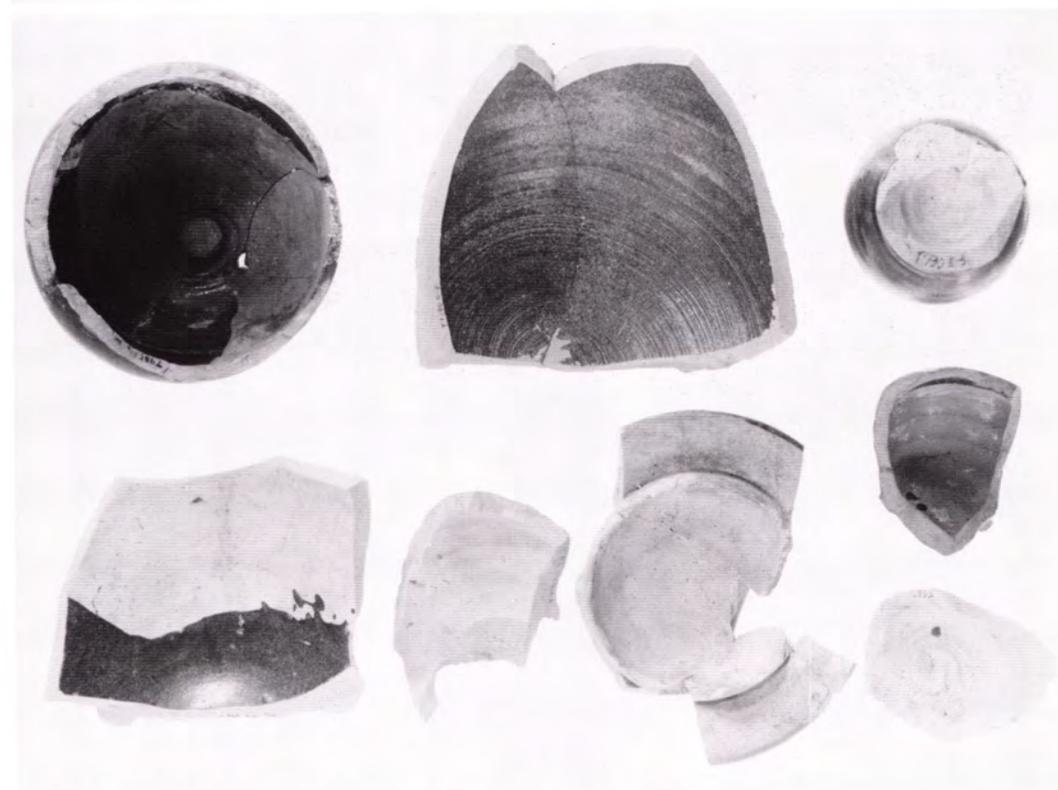


上 陶器 褐釉大型碗・急須表面 下 陶器 褐釉大型碗・急須裏面



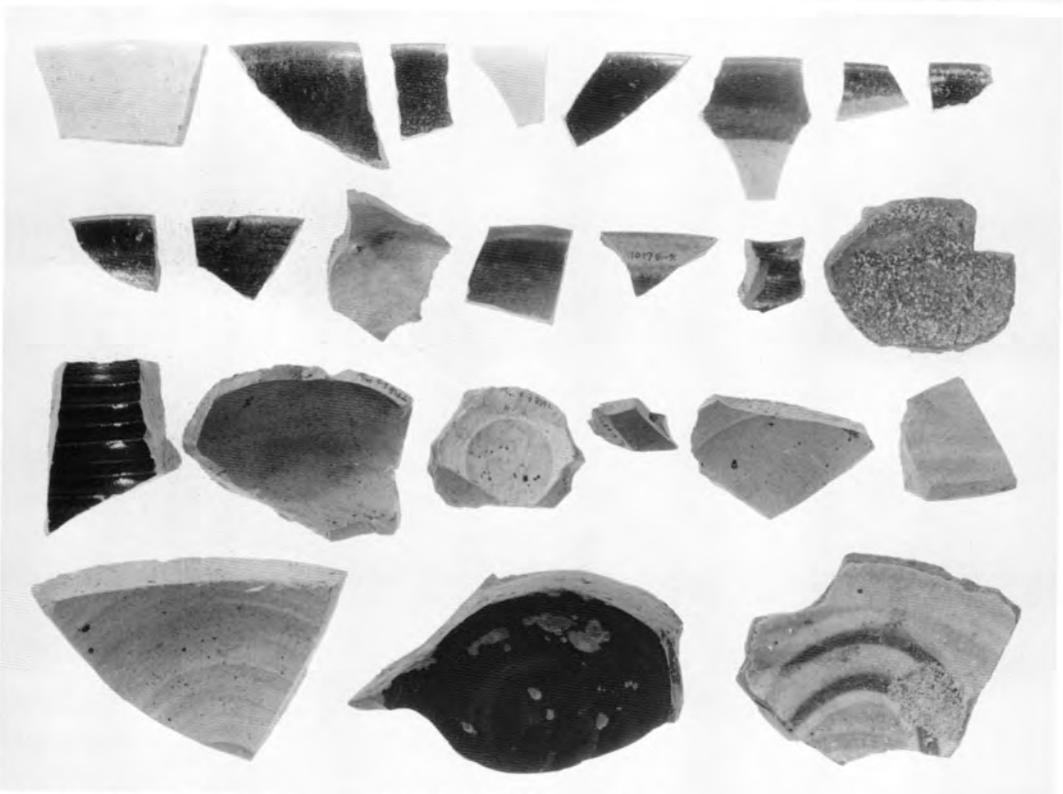
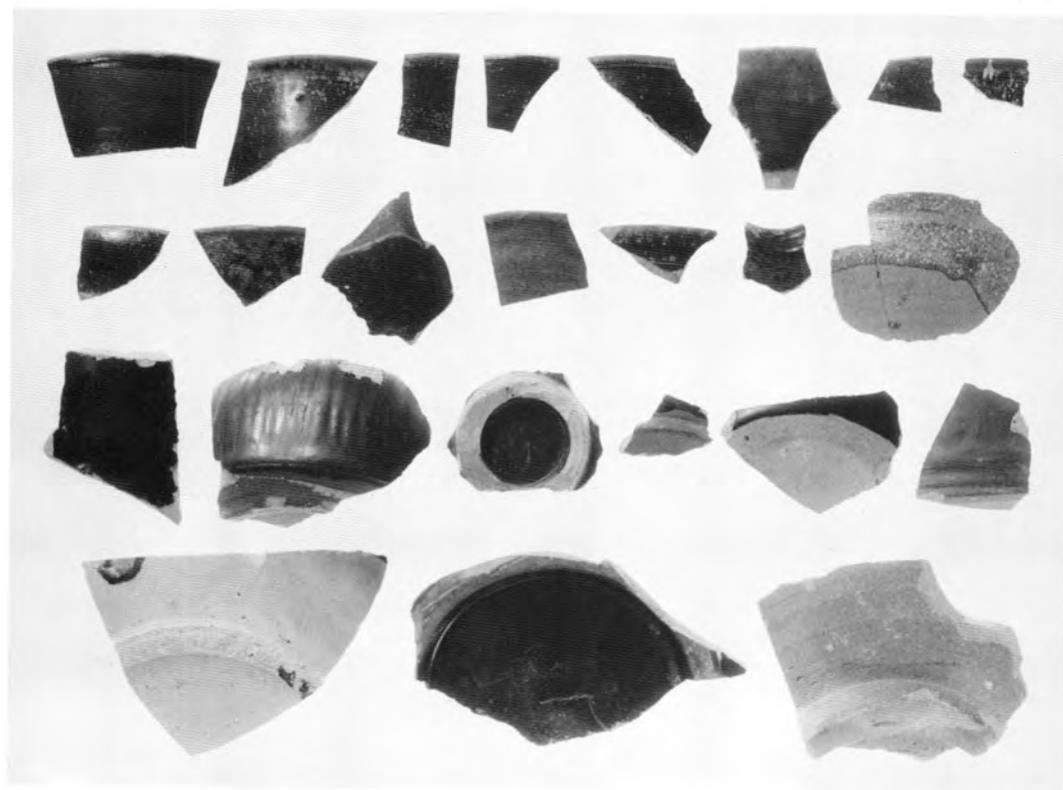
上 陶器 褐釉碗·茶碗表面

下 陶器 褐釉碗·茶碗裏面



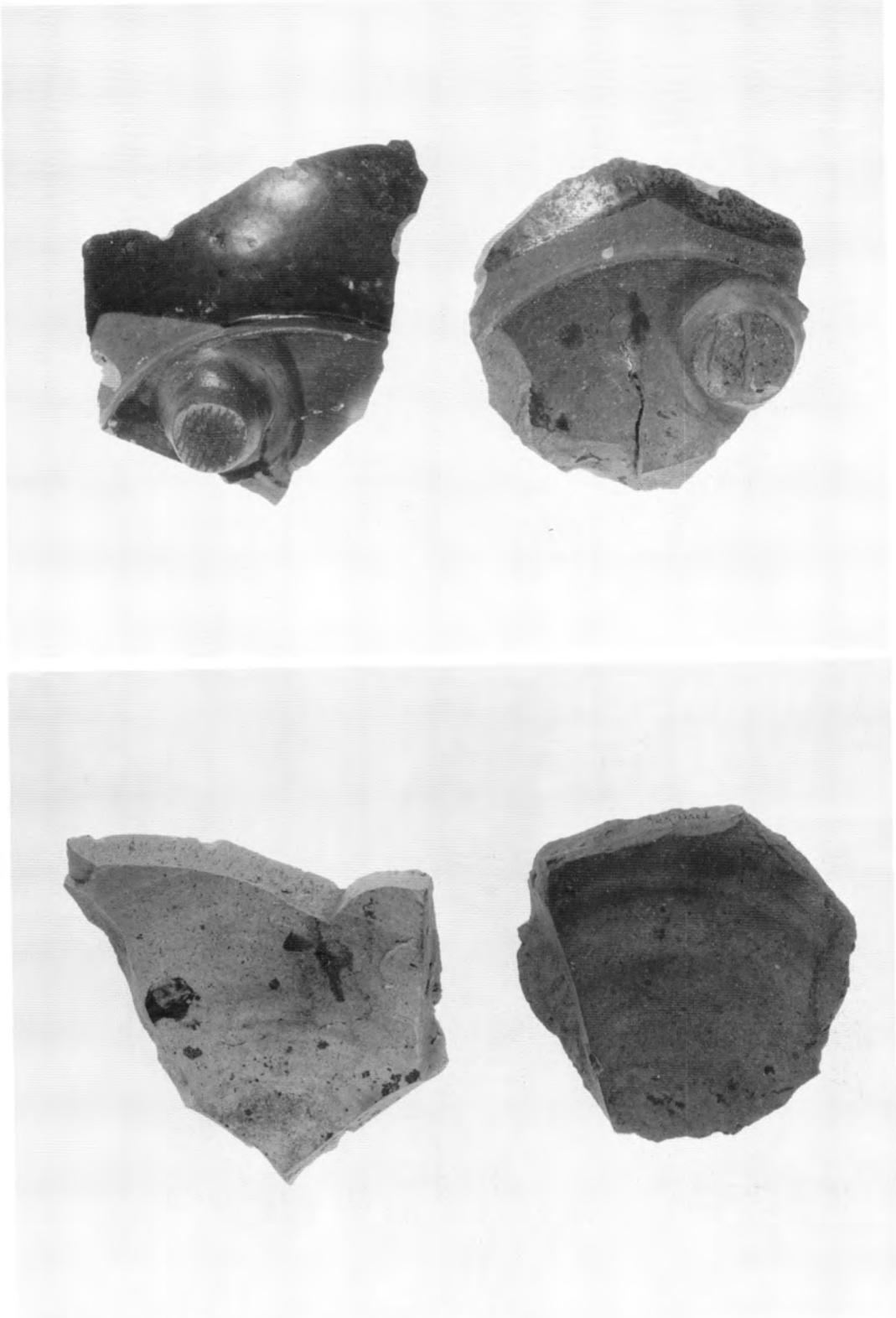
上 陶器 褐釉瓶·壺·蓋表面

下 陶器 褐釉瓶·壺·蓋裏面



上 陶器 褐釉瓶·壺·碗表面

下 陶器 褐釉瓶·壺·碗裏面



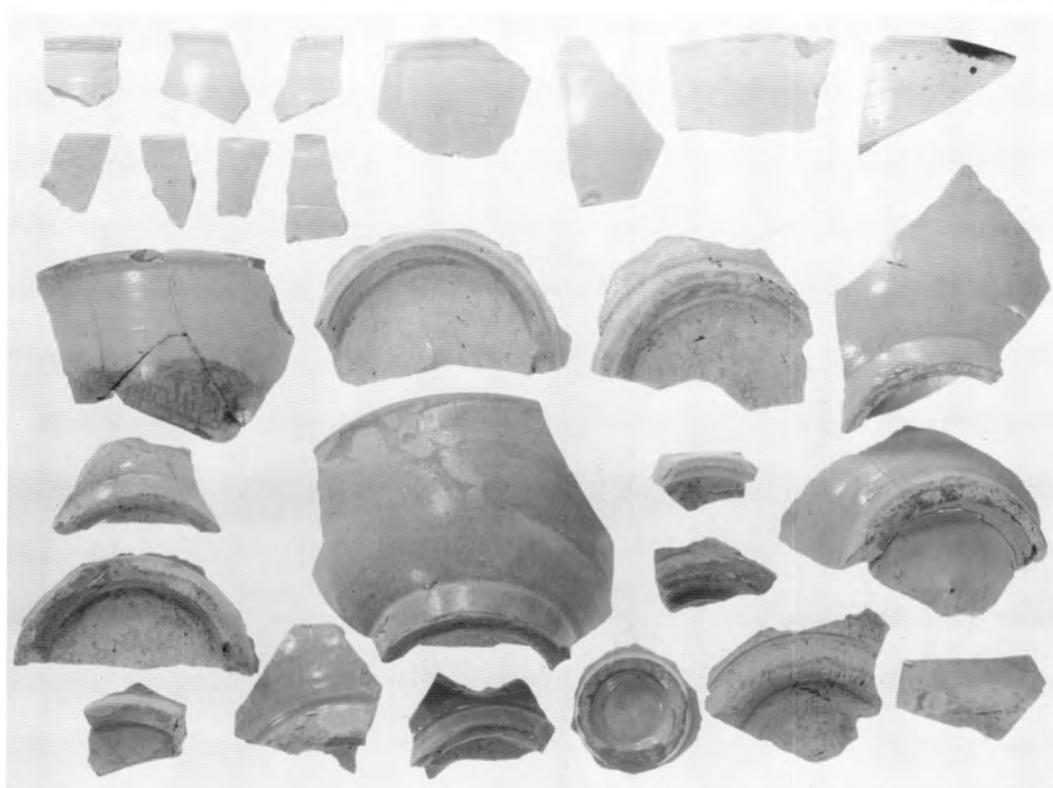
上 陶器 中型脚付き鉢表面

下 中型脚付き鉢裏面



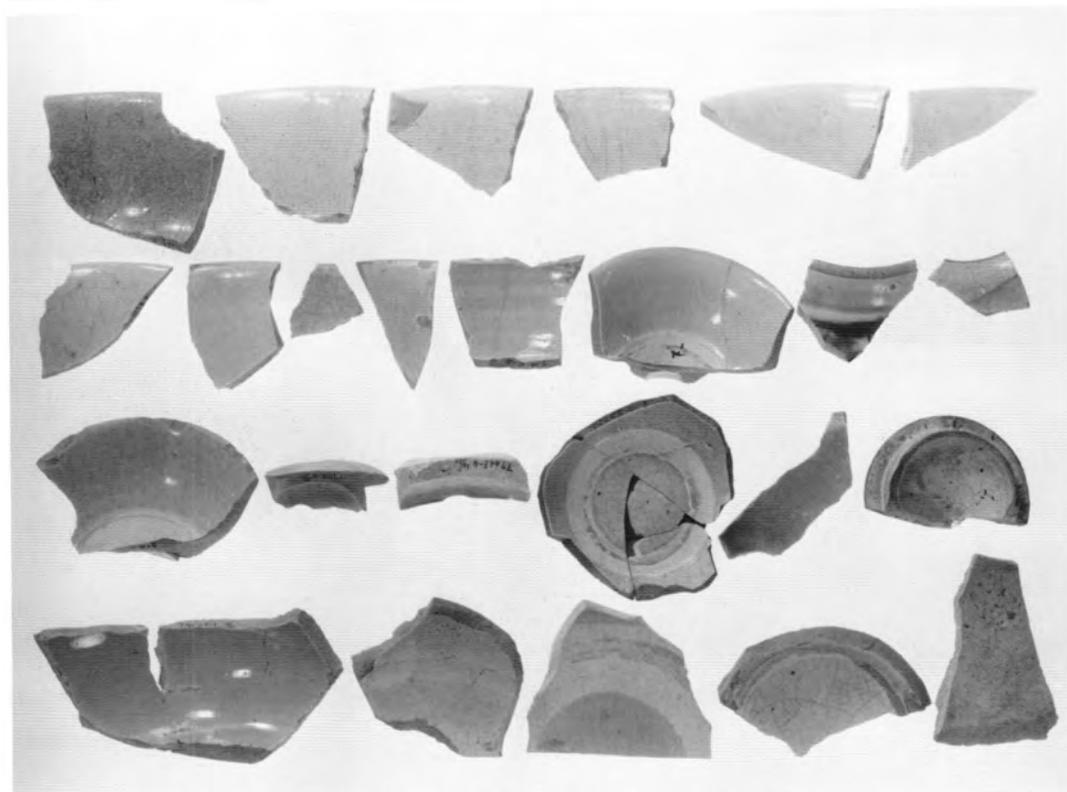
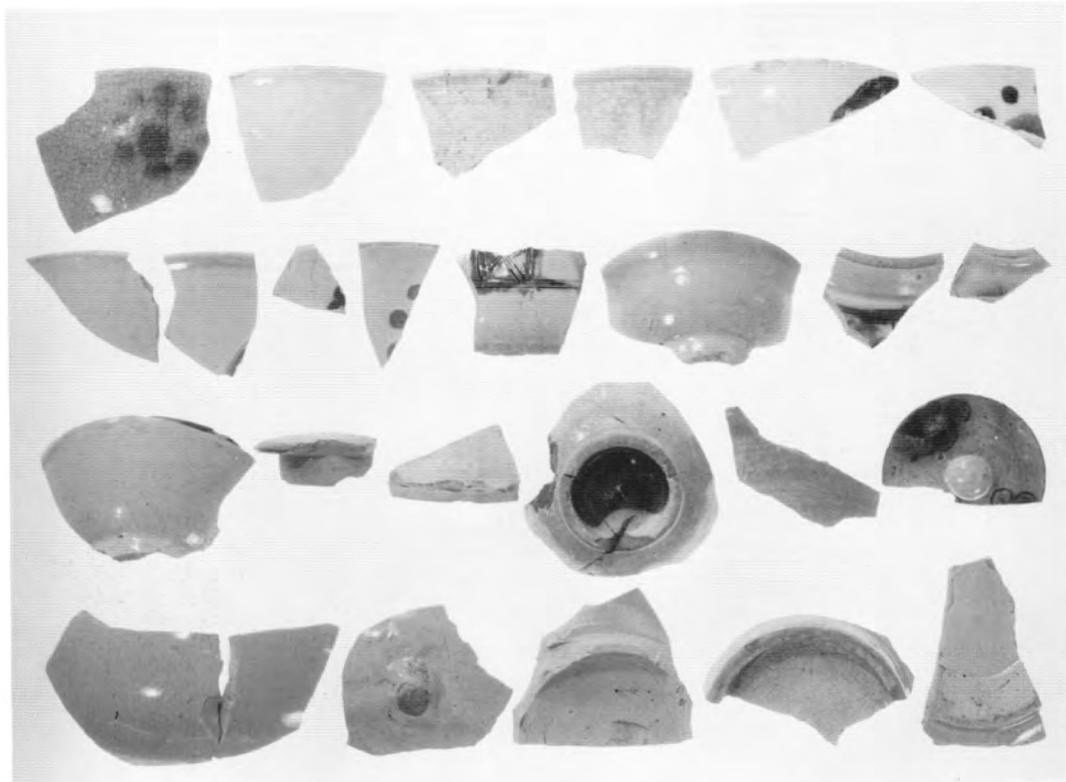
上 陶器 白化粧釉碗表面

下 陶器 白化粧釉碗裏面

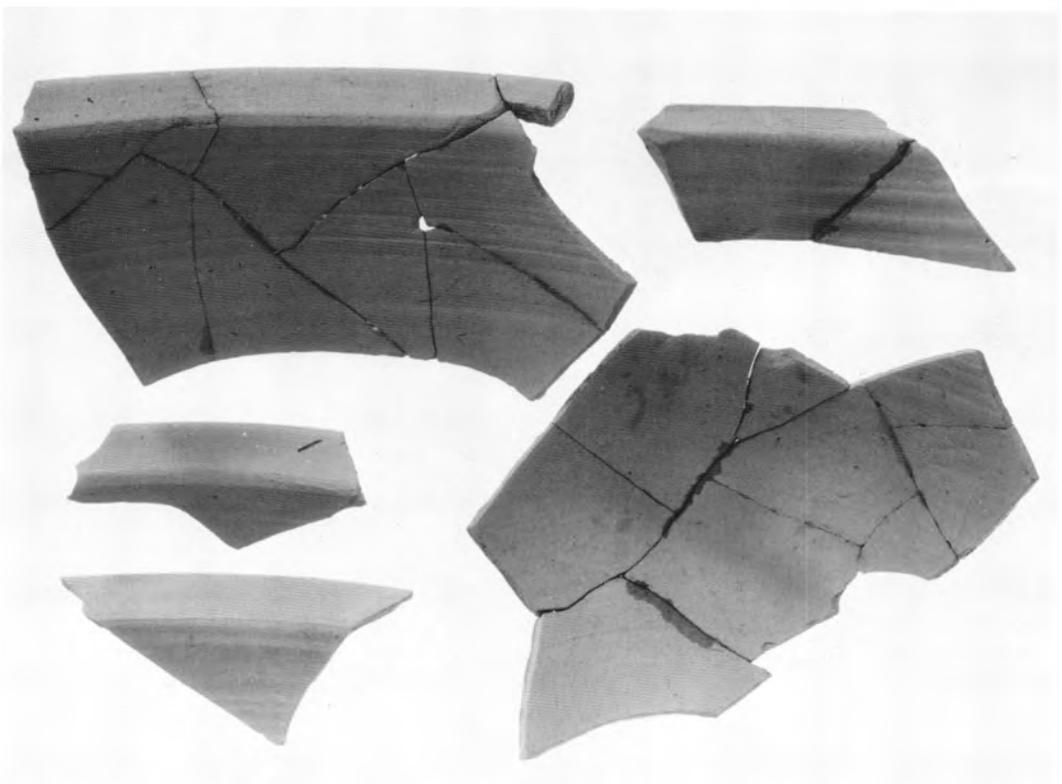
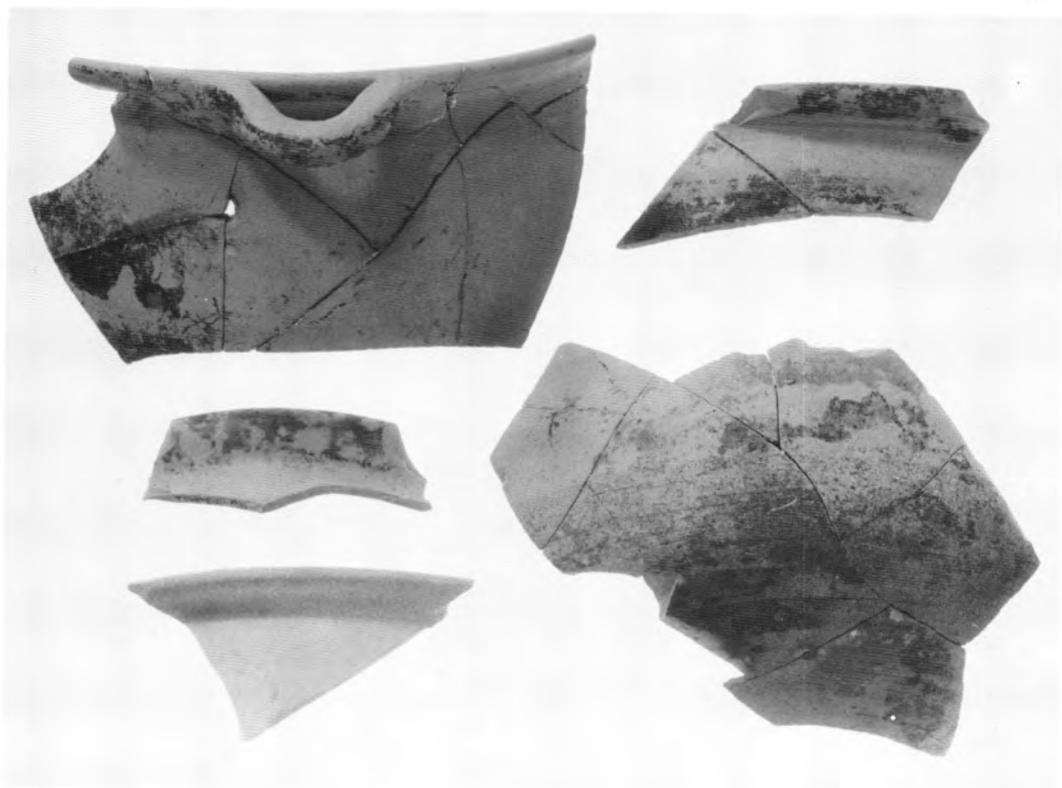


上 陶器 白化粧釉碗表面

下 陶器 白化粧釉碗裏面

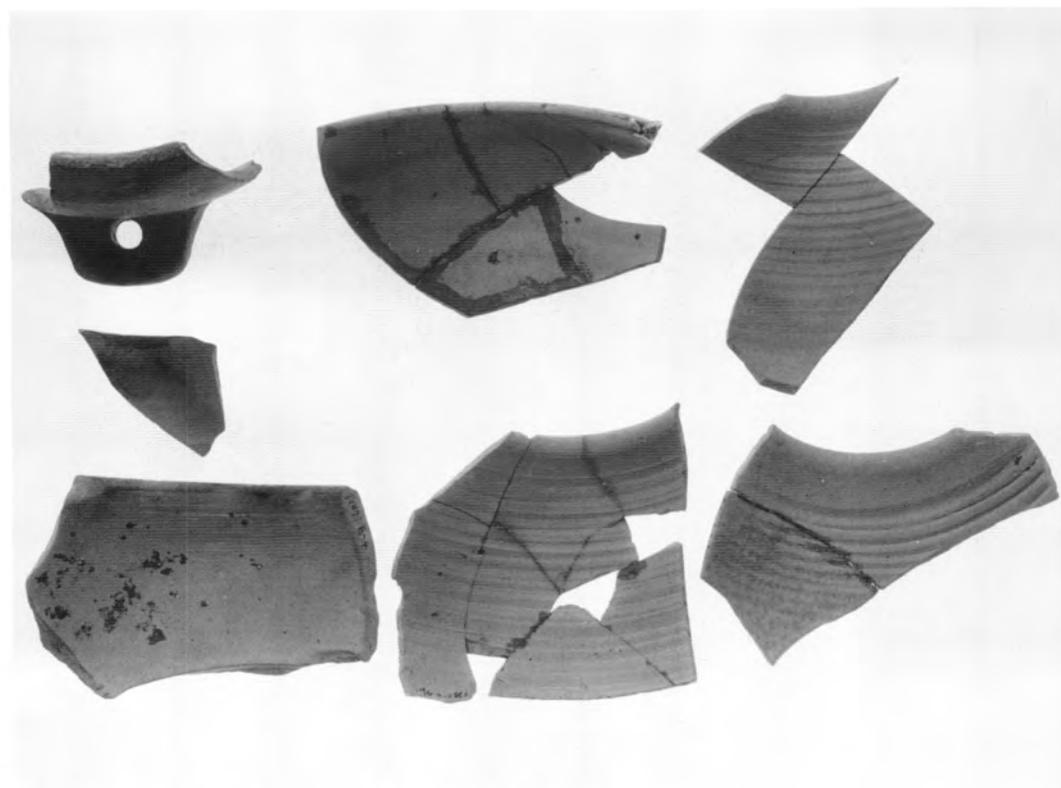
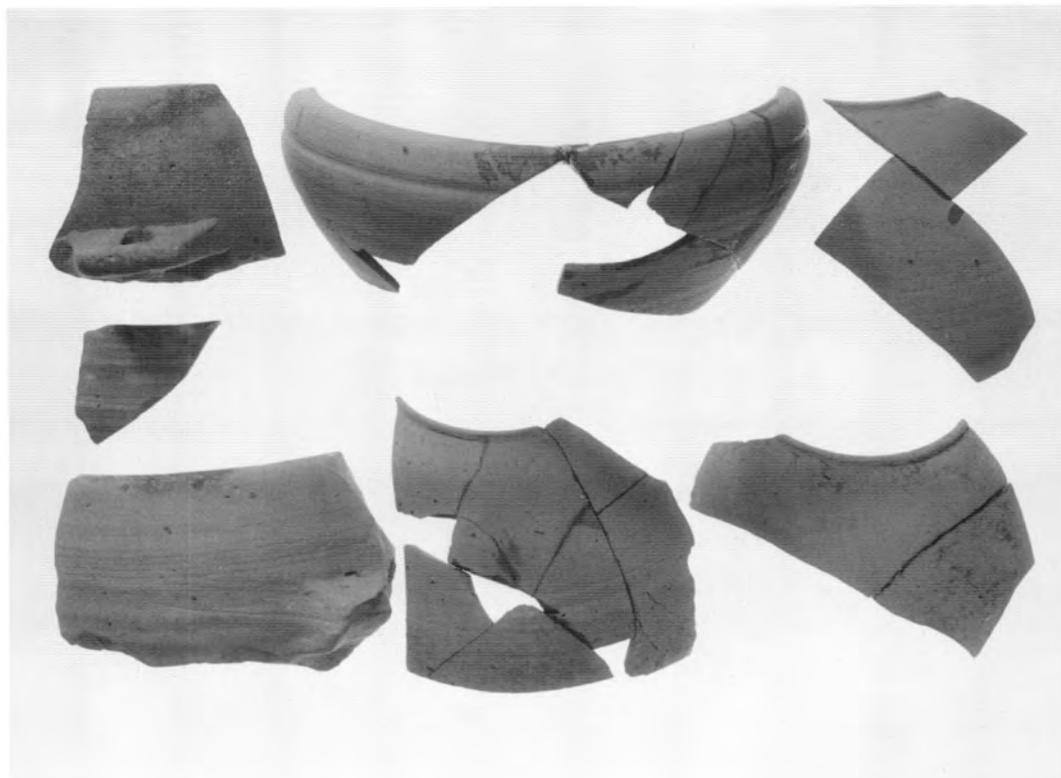


上 陶器 白化粧釉碗・茶碗・急須表面 下 陶器 白化粧釉碗・茶碗・急須裏面



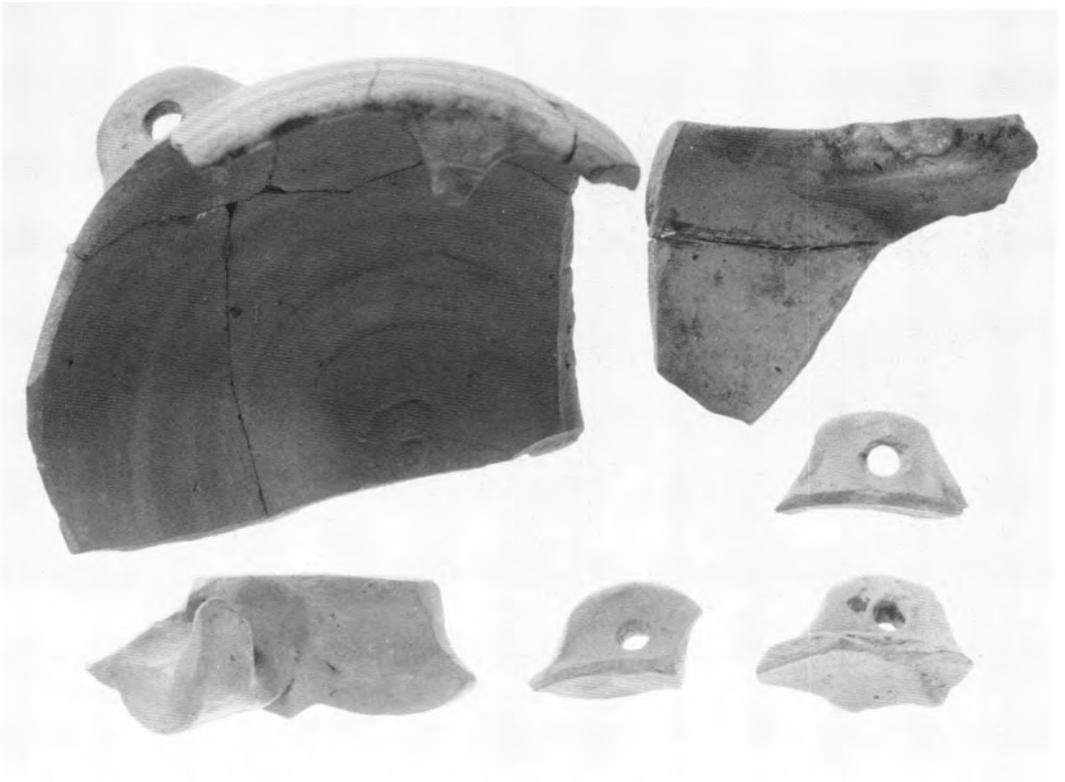
上 陶質土器 土鍋表面

下 陶質土器 土鍋裏面



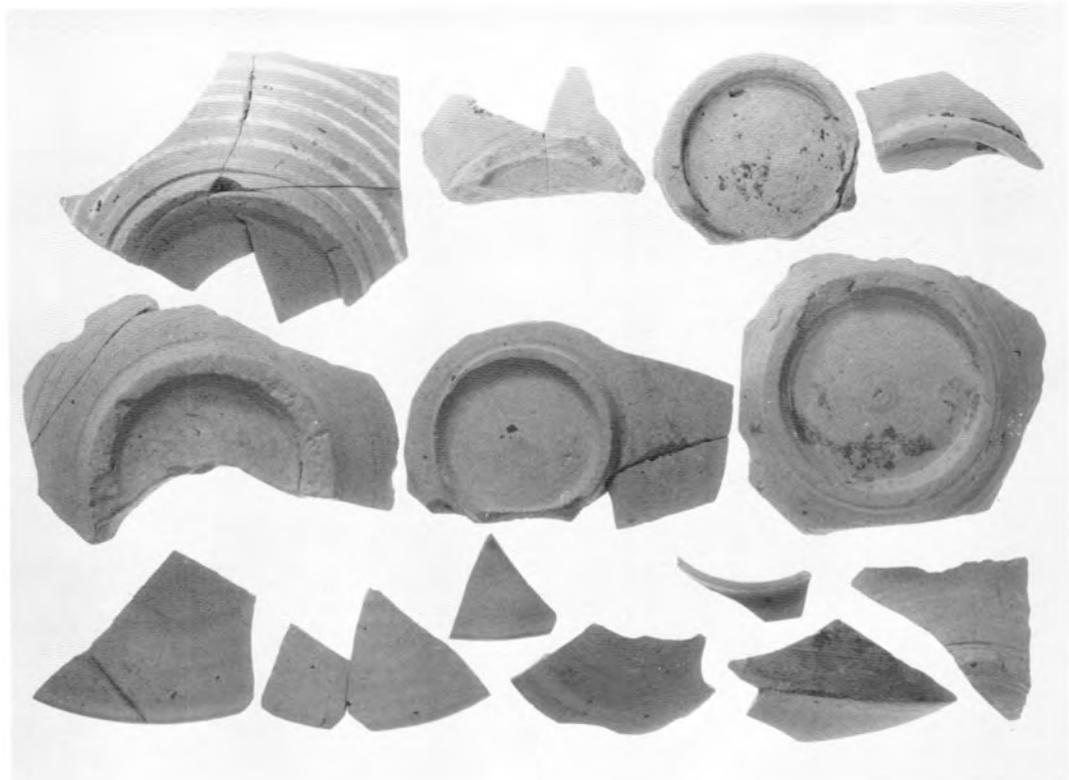
上 陶質土器 土鍋表面

下 陶質土器 土鍋裏面

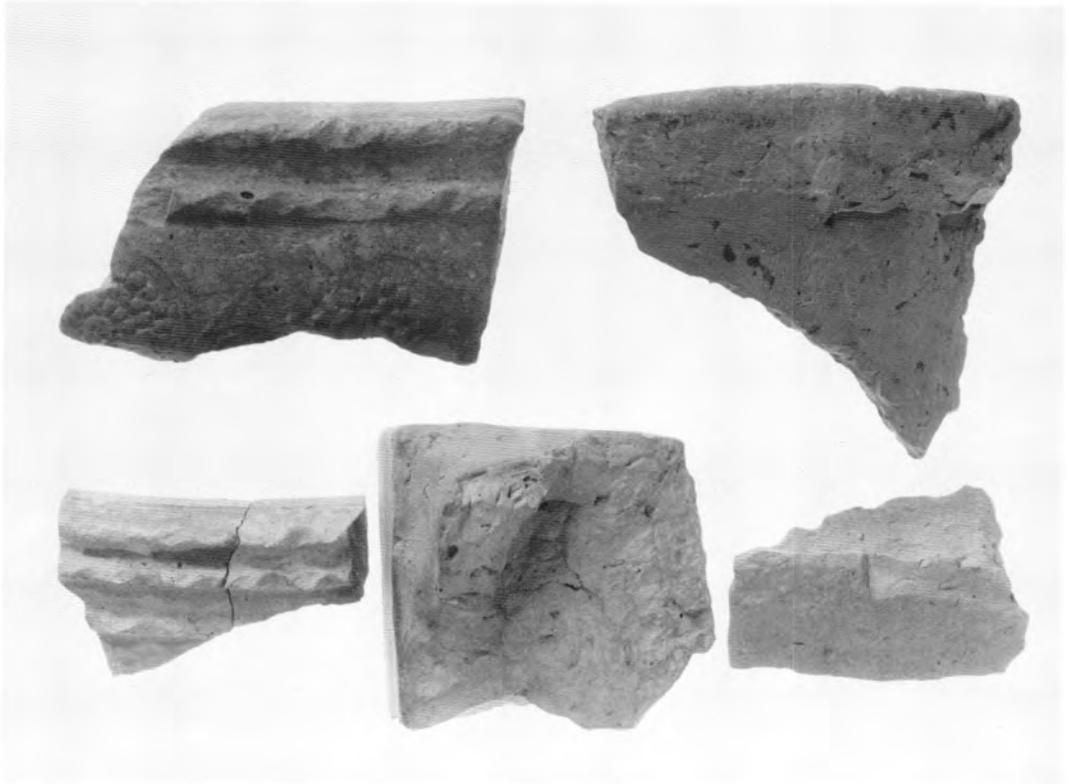


上 陶質土器 手焙り表面

下 陶質土器 手焙り裏面



上 陶質土器 大型碗・急須・蓋表面 下 陶質土器 大型碗・急須・蓋裏面



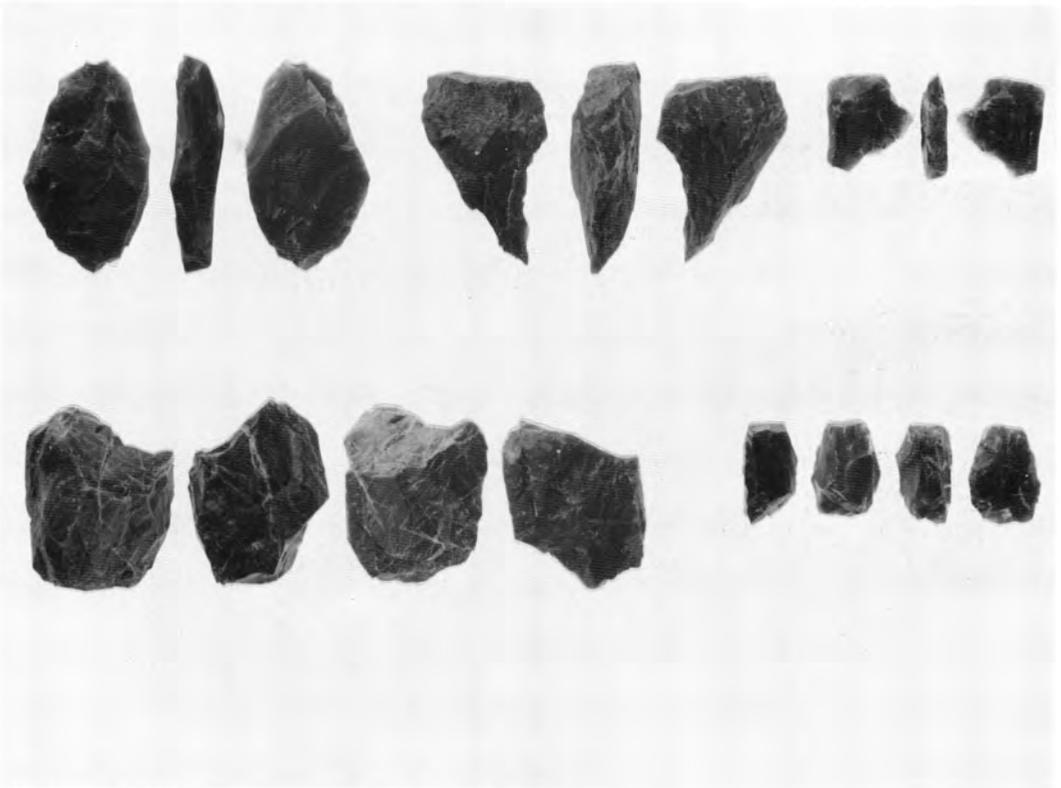
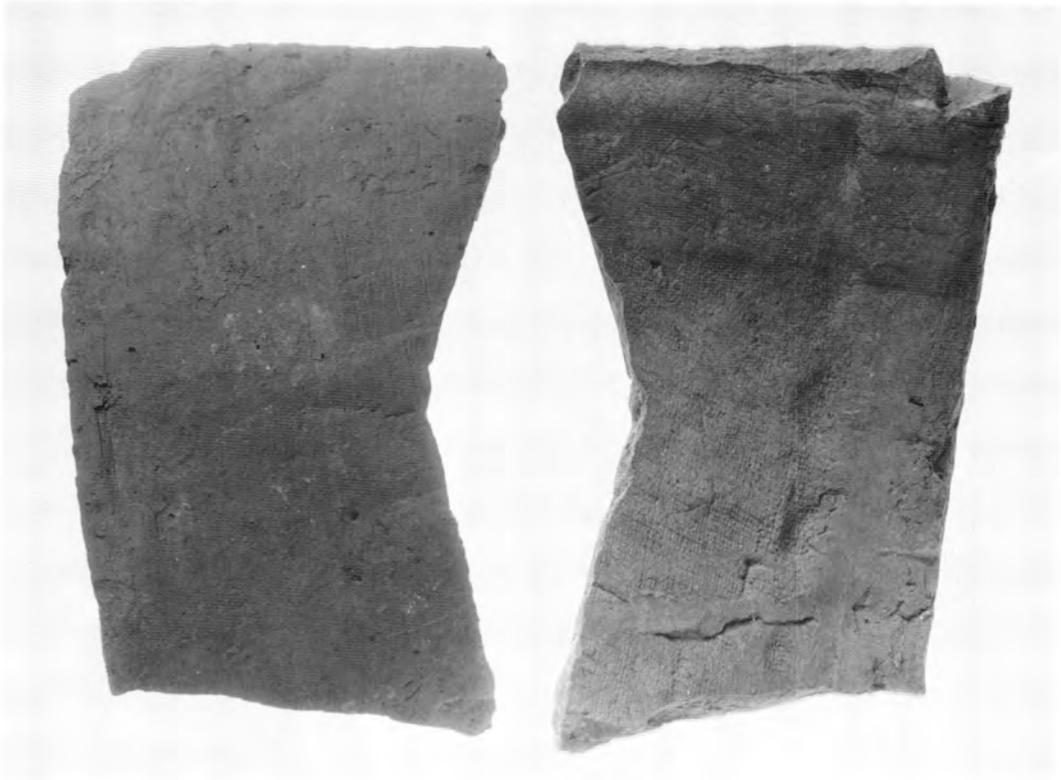
上 瓦質土器 表面

下 瓦質土器 裏面



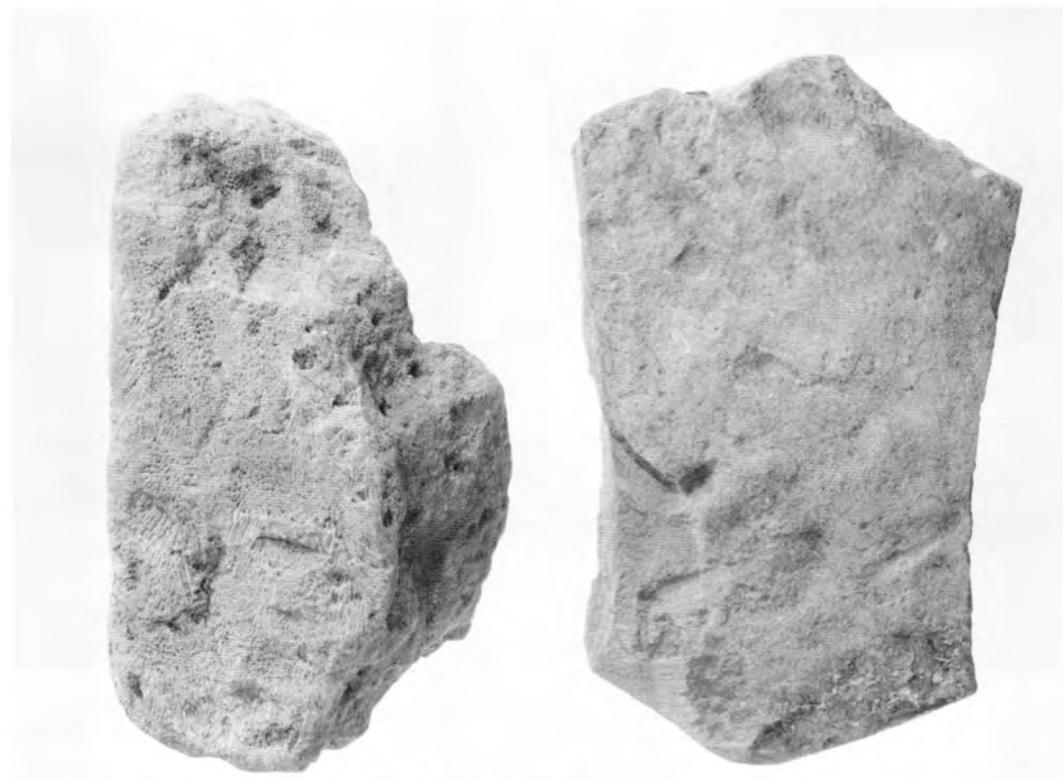
上 游具 表面

下 裏面



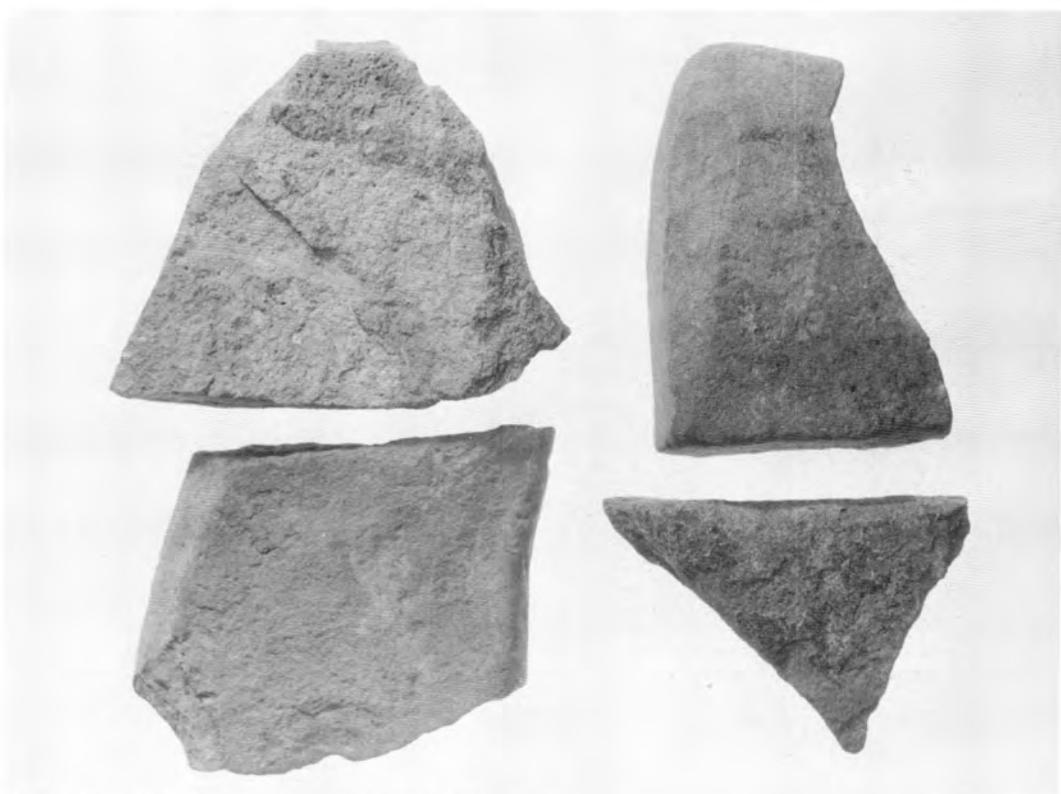
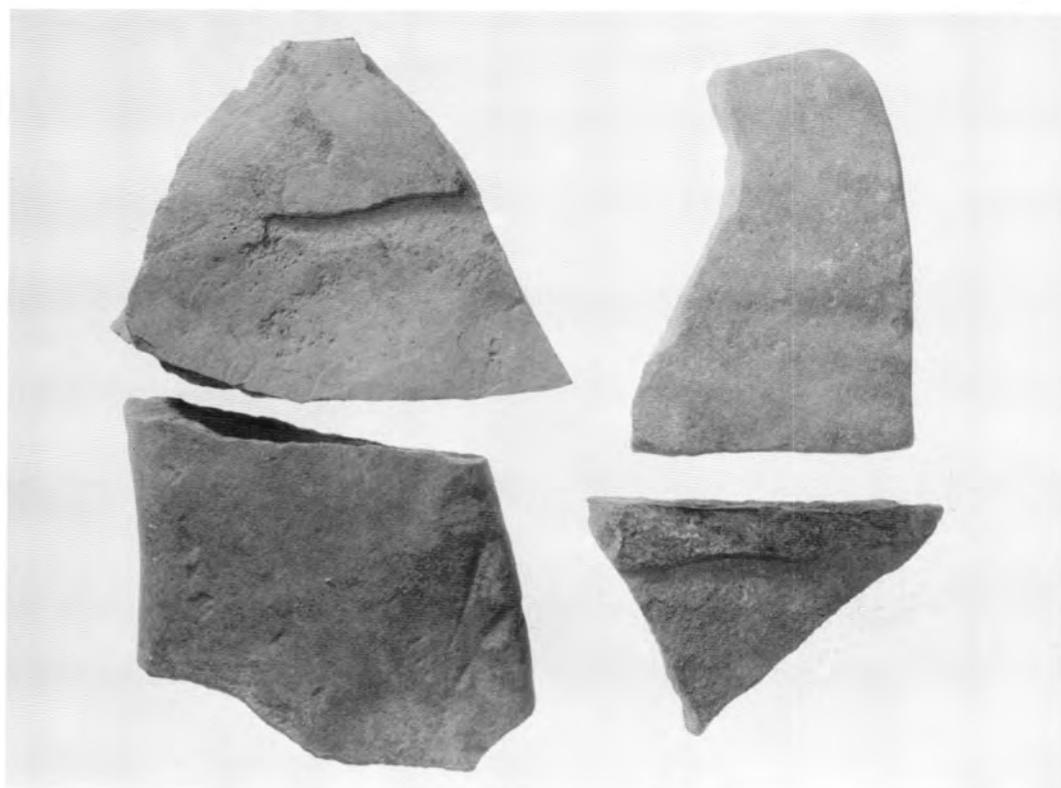
上 瓦 表裏面

下 石器 打製石器



上 石器 石皿表面

下 石器 石皿裏面

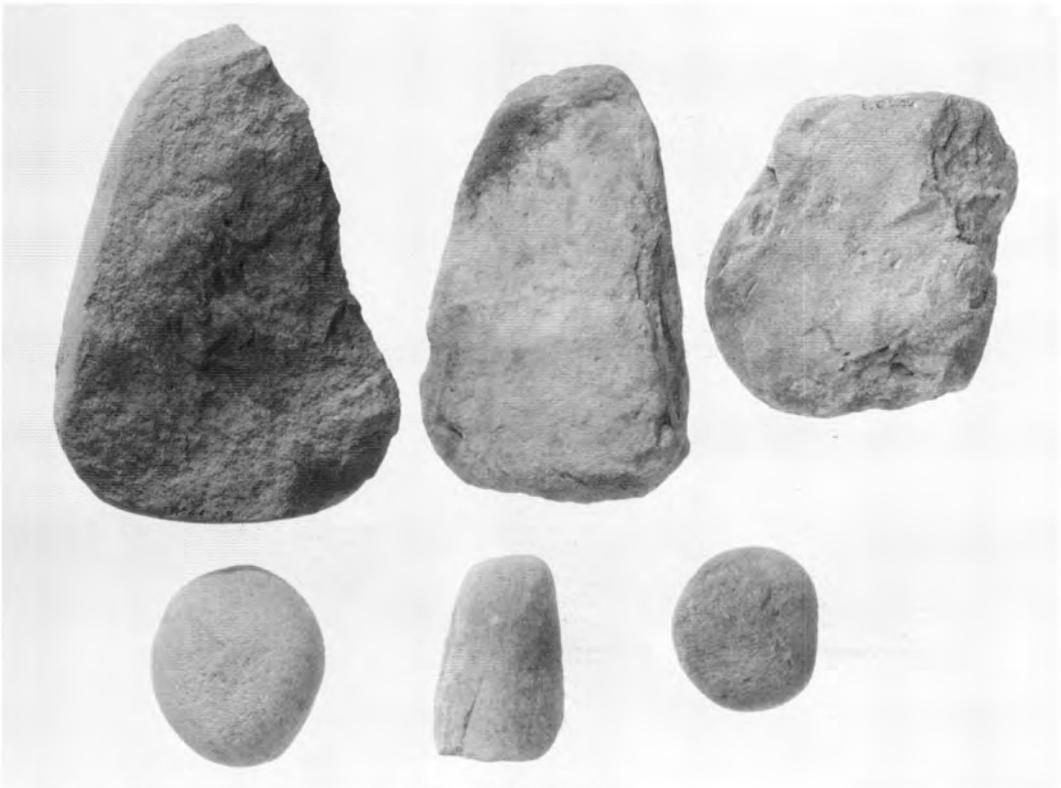


上 石器 石皿表面

下 石器 石皿裏面



上 石器 石斧·叩石·磨石表面 下 石器 石斧·叩石·磨石裏面

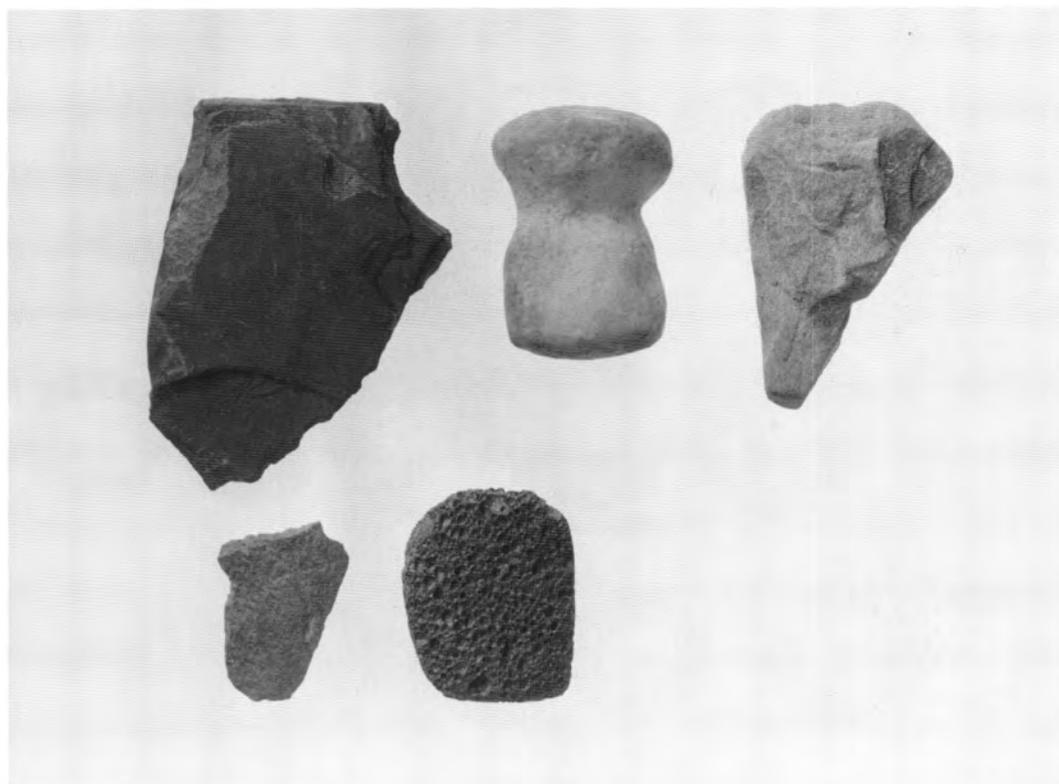


上 石器 叩石・凹石表面

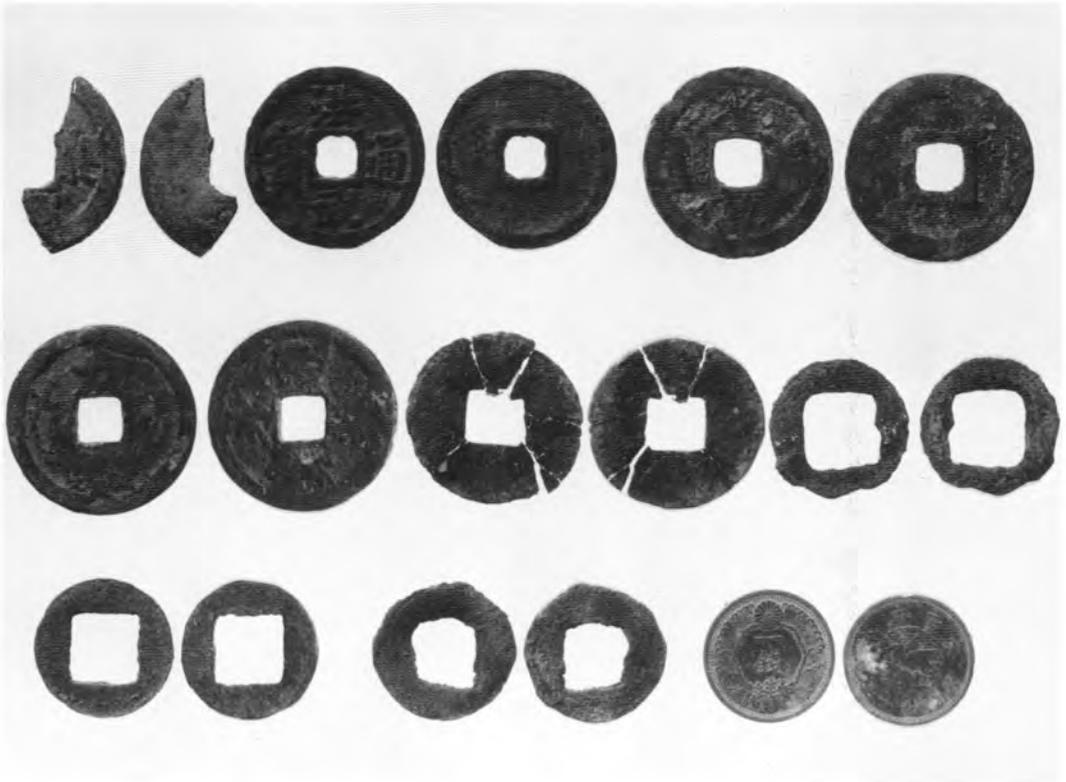
下 石器 叩石・凹石裏面



上 石器 凹石·石球·砥石表面 下 石器 凹石·石球·砥石裏面



上 石器 叩石・石锤・研石表面 下 石器 叩石・石锤・研石裏面



上 古銭 表裏面

下 発掘調査員一同スナップ

付 記

獣骨に関する調査

琉球大学農学部 川 島 由 次

今回の遺跡における獣骨の種類は、ウシ・ウマ・リュウキュウイノシシ（イノシシと略）・イヌ・ヤギ・ブタの6種であり、その他として各種の鳥類（種名は不明）の骨が少量含まれていた。出土した骨は頭蓋・長骨（上腕骨・大腿骨など）から肋骨にいたるまで、かなり細々と碎かれており同定にかなりの時間を要し、また撮影したいと思う形状の整った骨の数は多くなかった。獣類の解体後に骨を碎くという行為は、骨髄中に含まれる脂肪を回収することが目的であった。成獣の長骨における骨髄は脂肪組織に置き変わっており（黄色骨髄）、頭蓋・肋骨・脊柱などの海綿骨（赤色骨髄）も土器中で煮たてれば脂肪の回収は可能なのである。貴重な動物性脂肪は主に調理に用い、他に照明に使用したと思われる。

本遺跡の獣骨類の中には骨・角を加工した物（骨角器）は見当らなかつた。写真は同じ部位の骨を出土骨と現生の家畜・イノシシと対比して撮影した。

写真1～11までウシの骨を示した。ウシにおいてはサイズに関して2種類（大型種と小型種）が認められた。大型種は黒毛和種とほぼ同サイズ（体重約500kg）であり、小型種は大型種の約半分のサイズと思われた。小型種は大型種の幼獣である可能性も考えられたが、骨化の程度より成獣と判断した。写真1～6までが大型種の骨であり、写真7～11までが小型種のものである。出土した獣骨より個体数を推定する方法として、歯の出土数と肩甲関節の出土数を計算する手段がある。歯は生体において最も硬い組織であり、人為的な破碎をのがれるケースが多く保存性が高いので、また肩甲関節と肩甲骨頸部（写真6）は海綿骨が少なく破碎されにくい部位で残存する確率の大きい部位なので信頼性が高い。

表1～2に判別できた出土骨を動物種と部位別に示した。ウシの切歯の数は下顎にのみ8本存在する。切歯の出土数は7本で1個体分にも満たない。一方、ウシの臼歯の数は上顎に12本、下顎に12本で計24本出現するが、臼歯の出土数は79本で4個体分に相当する。肩甲関節は左側4個・右側1個が出土したので4個体分である。すなわちウシの骨は4頭分と推定した。

写真12～18はウマの出土骨をヨナグニウマと対比して示した。ウマにおいても大・小の2種類が含まれ、ヨナグニウマと同サイズの個体とより大型の個体である。写真17の出土骨（右大腿骨近位端）は明らかにヨナグニウマよりも幅が大きかった。ウマの切歯は上・下顎各6本で計12本そなえている。切歯の出土数は18本で2個体分に相当する。臼歯数はウシと同様24本であるが（ただし雄馬には4本の犬歯が出現）、臼歯の出土数は

36本でやはり2個体分しかない。しかし、肩甲関節が左右ともに3個出土したので、ウマの骨は3頭分と判断した。

写真19~21はイノシシ(雌)の骨と対比して示した。出土したイノシシの骨は現生のイノシシと比較してサイズについて変化はないと思われた。出土した犬歯3本のうち1本が大型だったので雄が1個体含まれるようである。歯の出土数が少なかったので、肩甲関節の数より3頭分と判断した。

写真22・23はイヌの出土骨である。いずれも中型の成犬の骨である。イヌの歯数は切歯12本、犬歯4本、前臼歯16本そして後臼歯10本で計42本が基本数である。出土した歯は1個体分であろう。本個体に関しては肩甲関節も見当たらない。また、写真では示せなかったが、幼犬(3カ月齢?)の下顎も確認できたので、イヌは2頭分と推定した。ヤギは1個体分と思われた。なお、頭頂骨と後頭骨を含む一部分の骨でイノシシよりもはるかに厚く頑丈な骨を認めたので「ブタ」と判断した。

まとめとして、本遺跡より出土した獣骨の種と個体数は、ウシ(4頭分)・ウマ(3頭分)・イノシシ(3頭分)・イヌ(2頭分)・ヤギ(1頭分)そしてブタ(1頭分)であり、6種・14頭であった。

表1. 各種動物の骨と歯の出現状況

		ウシ	ウマ	イノシシ	イヌ	ヤギ			
頭蓋	切歯	7	18	12	0		イノシシ: {♂ 1 ♀ 2}		
	犬歯			3	1				
	臼歯	79	36	20	10	3			
	後頭顆 {R L}				1				
	下顎頭 {R L}	1	1	1					
前肢	肩甲関節窩 {R L}	1 4	3 3	3 3			1		
	上腕骨近位端 {R L}	1 2	2		1 1				
	上腕骨遠位端 {R L}	4 4	3 2	6 6	3 1				
	脛骨近位端 {R L}	1 3	2	1	1 1				
	脛骨遠位端 {R L}	1 2	2						
	尺骨切痕 {R L}	3 3	4	1 3					
	中手骨近位端 {R L}	5 3	3						
	中手骨遠位端 {R L}	2	2						
	手根骨	4		1					
	指骨	16	6	4					
	脊柱	頸椎	2	2	2	2			
		胸椎			1				
		腰椎	1	1	1				

表 2. 各種動物の骨の出現状況

		ウ	シ	ウ	マ	イ	ノ	シ	シ	ヤ	キ
後	大腿骨頭 {R L	1		2							
	大腿骨近位端 {R L	5		2		1					
	大腿骨遠位端 {R L	1				1					
	脛骨近位端 {R L	2		1		1			2		
	脛骨遠位端 {R L	1		1		1			1		
	脛骨遠位端 {R L	2		1		3					
	膝蓋骨 {R L	1		2		1			3		
	中足骨近位端 {R L	2		1		2					
	中足骨遠位端 {R L	3		1		2		1	3		
	中足骨遠位端 {R L	1		3		3					
	中足骨遠位端 {R L	2		1		1					
	足根骨	15		2							
肢	踵骨 {R L	2		1						1	
	距骨 {R L	3						1			
	距骨 {R L	1		3							
	趾骨	7		1							



写真1. ウシ右下顎第2前臼歯



写真2. ウシ右上腕骨遠位端 (左側)



写真3. ウシ右中手骨近位端 (右側)

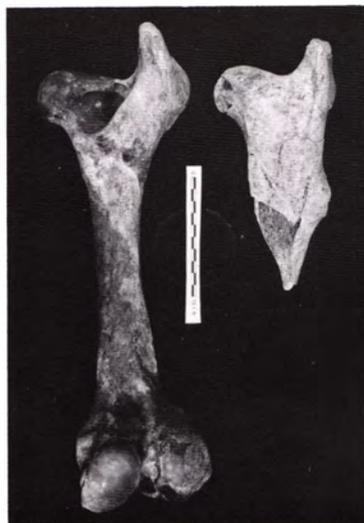


写真4. ウシ右大腿骨近位端 (右側)



写真5. ウシ左脛骨近位端 (左側)



写真6. ウシ左肩甲骨 (関節と頸部) (右側)

注) 例えば、写真2. の「左側」とは、左側が本遺跡の出土骨、右側は比較のために対比させた現生動物の標本である。以下同様である。



写真7. ウシ左中手骨近位端と骨幹 (右)



写真8. ウシ左膝蓋骨 (左)



写真9. ウシ右距骨 (左)



写真10. ウシ趾骨 (基節骨) (上)



写真11. ウシ趾骨 (末節骨) (下)



写真12. ウマ左肩甲骨 (関節と頸部) (右)

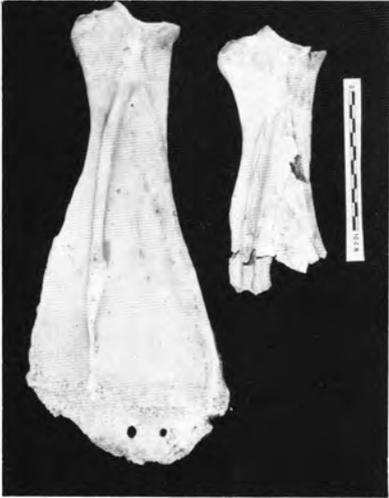


写真13. ウマ右肩甲骨（関節と頸部）（右）



写真14. ウマ左上腕骨遠位端（左）



写真15. ウマ右上腕骨遠位端（右）



写真16. ウマ左前腕骨（橈骨）（左）



写真17. ウマ右大腿骨近位端（右）



写真18. ウマ右脛骨遠位端（左）



写真19. イノシシ環椎 (下)



写真20. イノシシ右大腿骨骨幹 (右)



写真21. イノシシ右大腿骨骨幹 (右)



写真22. イヌ左上腕骨



写真23. イヌ右下顎骨

貝類遺存体

黒住耐二

沖縄島中部の西海岸に位置する北谷町の玉代勢原（たまよせばる）遺跡は、12世紀から20世紀のいわゆる沖縄貝塚時代後期から現代までの遺跡である。遺跡は斜面の下部に位置しており、その前面には東シナ海の砂泥海岸が広がっている。今回、この遺跡から発掘された14世紀から16世紀にかけての層から得られた貝類遺存体について検討することができたので、ここに報告したい。報告に先立ち、貴重な資料の検討の機会を与えて戴き、有益な御教示を戴いた北谷町教育委員会の中村愿氏に御礼申し上げる。

1. 貝類の出土様式

グリッド別の出土パターンでは、Eラインで全体の約94%が得られており、その中でもE-6グリッドから全体の約半数が出土していた。その周辺に投棄の集中部分があったものと考えられる。

層別では、全体の約68%がII層から出土しており、次いでI層から約20%が得られている。また、グリッド別の層位間（例えばE-5グリッドのIIb層等）での、主体貝5種の出土割合を比較した。対象としたのは、200個体以上出土した7つのグリッド別層位である。その結果、アラスジケマンでは24.0%–31.5%、クワノミカニモリでは3.6%–25.1%、スタレハマグリでは7.6%–18.1%、カンギクでは2.6–8.4%、イボウミニナでは0.9–10.7%であった。クワノミカニモリ・イボウミニナの両種では比較的集中する傾向を持っていると考えられるが、他の3種ではこの割合が比較的一定であり、通常的な採集のあったことを想定させる。同様に、5種の主体貝の占める割合は、51.8–75.4%であり、各グリッド別層位間で大きな相違は認められないようであった。

2. 非食料残滓の貝類

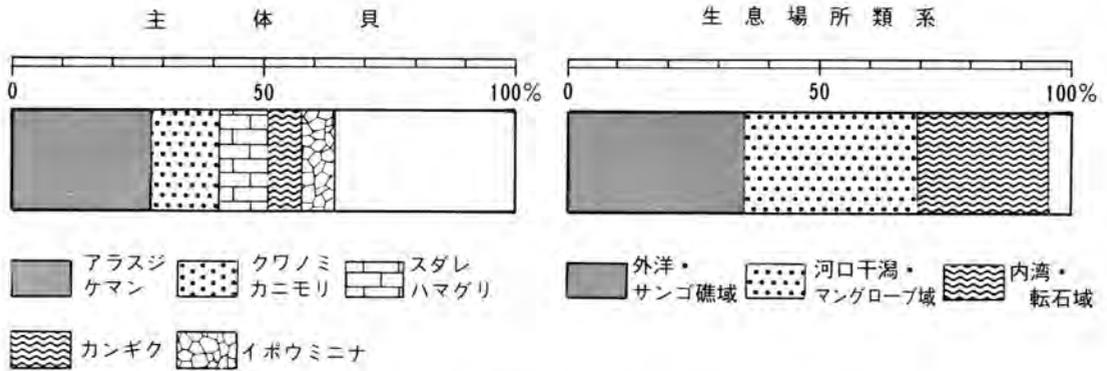
この遺跡から出土した貝類の内、食用とは考えられなかった種には、化石の二枚貝3種と小型のフトコロガイ・カニノテムシロガイ・カワチドリガイがあった。前者は基盤の琉球石灰岩の小塊に埋没した形状で出土し、周辺の地層からの混入と考えられ、そして化石に加工痕を有するものは認められなかった。後者は、その出土量が著しく少なく、ウミニナ等の採集の折に死殻が混入したものと考えられる。その他にも、後述するように食用とは考えにくいタマガイ類やナツメガイが出土しているが、食料でなかったという積極的な根拠がないために、ここではとりあえず他の全ての種を食料として取り扱った。

3. 生息場所と関連させた食料残滓貝類の特徴

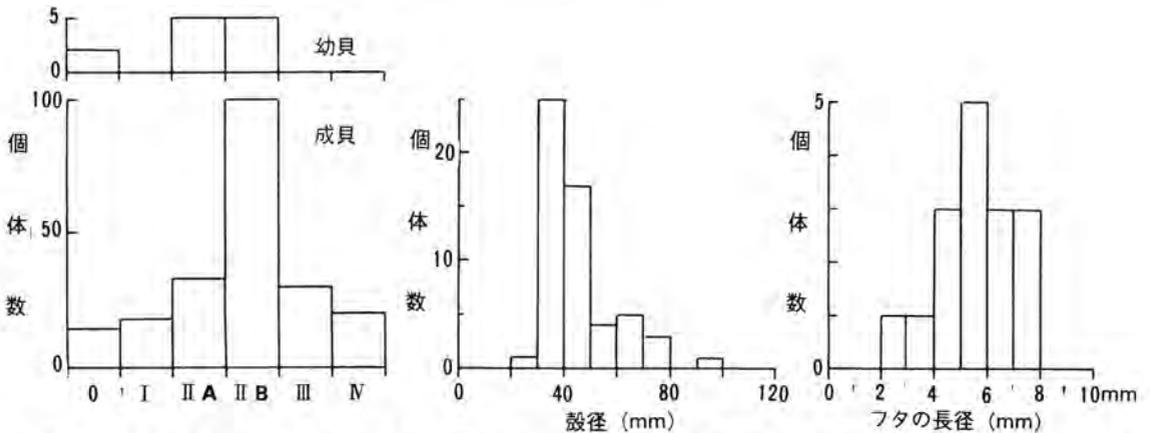
出土した全ての貝類の量的組成から、本遺跡ではアラスジケマンが27.8%、次いでクワノミカニモリが13.3%、スタレハマグリが9.8%、カンギクが6.7%、イボウミニナが

6.5%と高い割合を占めていた（図A）。この5種が主体貝といえる。マガキガイ・リュウキュウシラトリ・オニノツノガイ・スグカワニナも2%以上の割合を占めていた。

貝類の採集場所は、河口干潟-マングローブ域と外洋-サンゴ礁域がそれぞれ約35%であり、内湾-転石域が約25%となっていた。淡水域・陸域とも全体の3%以下と僅かであった（図A）。



図A 玉代勢原遺跡の主体貝および生息場所類系組成



図B マガキガイの破損形態別出土個体数 図C サラサバテイラの殻径分布 図D カンギクのフタ長径の分布

今回の発掘調査では、従来の現場でのピックアップ法の他に、E-5グリッドのII層を3mmメッシュでふるった土壌サンプルも存在した。この土壌サンプルから、2000ccを無作為に抽出し、その中に含まれている貝類も調査した。

その結果が表Aである。イボウミニナが38%と最も多く、次いでウミニナの19%となっている。以下、アラスジケマンが7.4%、カンギクが4.7%、クワノミカニモリが2.9

%、スタレハマグリが2.6%となり、種類からみると、ピックアップ法と大きな相違は認められない。しかしながら、小型のウミナ類が大半を占める傾向は明瞭であった。同様な土壌調査にウミナ類の割合が増加するという結果は、豊見城村の平良グスクの試掘調査でも知られている。^{註1}

ただし、このメッシュ法の結果に基づいて、今回の組成を修正することは、土壌サンプルの数あるいは量が著しく僅少なため、不可能であると考えられた。またこれまでの調査結果と直接に比較するためにも、ピックアップ法の結果によって、以下に各場所の特徴を見てみたい。

外洋一サンゴ礁域では、潮間帯中・下部（I-1）からクワノミカニモリ（この類型の約88%：括弧内の%は以下同様）を中心に採集されており、その種類は13種で、2cm程度の小型の種が多い。イノー（I-2）では、マガキガイ（約26%）、オニノツノガイ（約17%）が多く得られており、中型の種が多い。種数は61種と著しく多いが、出土頻度の高い種は少ない。イノーでの採集目標であるジャコガイ類のサイズを示すと、ヒメジャコでは殻長30-70mmで40mm程度の個体が多く、シラナミでは40-210mmの範囲で各サイズの個体が均等に採集されている傾向にあった。ヒレジャコは130-310mmの範囲にあり、比較的大型の個体も存在した。マガキガイの破損形態をみると^{註2,3}（ただし従来のIIとIIIを細分化し、IIA：外唇の1/2層以下が破損しているもの、IIB：外唇の1/2以上が破損しているもの、III：螺層と殻軸の1/2程度が残存しているものとした）、IIB型が最も多く、他の形態は同程度の割合であった（図B）。干瀬（I-3）の類系には9種が属するが、その割合は1.7%と著しく少ない。他の遺跡で多いチョウセンサザエやハナマルユキがほとんど出土しない。礁斜面（I-4）では、サラサバテイラ（約69%）とギンタカハマが多い。サラサバテイラの殻径では、30-50mmの小型個体も多いが、90mmに達するものも得られている（図C）。

内湾一転石域（II）では、スタレハマグリ（約38%）・カンギク（約25%）・リュウキウシラトリ（約14%）が多く出土している。土壌調査の結果では、殻長2cmにも満たないウミナ類の頻度が高い。また、土壌調査によって得られたカンギクの蓋のサイズ組成を図Dに示したが、かなり小型の個体が多く採集されていることがわかる。河口干潟一マンダラ域（III）では、アラスジケマン（約79%）、イボウミナ（約18%）が多く、この両種でこの類系のほとんど全てを占めていた。

淡水域（IV）は約3%と著しく低い割合であった。その中で、スグカワニナ（約64%）とカワニナが多く出土していた。陸域（V）は出土個体数・種数とも少なく、オキナワヤマタニシが大半を占めていた（約72%）。

4. 他の遺跡との比較

本遺跡はアラスジケマンを主体とし、これまでに報告されてきたような^{註4}グスク時代の貝

類遺存体の特徴を示している。またグスク時代に多いカンギクも5種の主体貝の中に含まれている。しかし、本遺跡ではカンギクがアラスジケマンより低頻度であり、河口干潟の方を良く利用していたことが考えられる。アラスジケマンと形態的に類似したホソスジイナミは、前者の約6%の出土量であり、このことは後者の生息する内湾域の利用頻度が河口干潟より低いことの反映だと思われる。

このアラスジケマンとカンギクの出土量に関して、内湾の底質による主体貝の相違という的確な指摘がなされている。^{#5}同時にグスク時代において浅海化現象に伴い、内湾や河口干潟に生息する貝類の出土量が遺跡から増加することも指摘されている。^{#6}しかし、アラスジケマンやカンギクを主体とする遺跡は、グスク時代以前の暫定編年前Ⅳ期の玉城村・百名第二貝塚^{#7}や読谷村・吹出原遺跡^{#8}、後期の具志川市の宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚等^{#9}においても知られている。これらの種が主体となる現象は、基本的には遺跡の立地条件と人間の漁労活動に起因するものと考えられる。浦添市・真久原遺跡(13-14世紀)では、出土個体数は少ないものの、玉代勢原遺跡と同様な貝類の組成が報告されている。^{#10}このことは、この時期の北谷から浦添に至る海岸の立地的特徴を示しているのであろう。

また、グスク時代に多いカニモリ類・ウミニナ類の出土も本遺跡では顕著であった。その中でもカニモリ類では、クワノミカニモリのみが著しく多く採集されており、豊見城村のグスクで知られているように^{#11}多種類を得るのではなく、本遺跡ではクワノミカニモリのみを強い選択性を持って採集したものと考えられる。

また、グスク時代になると、貝塚時代後期の外洋-サンゴ礁域での大型貝類の採集から、前述のように内湾・河口干潟での中・小型貝類採集へと移行し、サンゴ礁に生息するシャコガイ類やサラサバテイラのサイズが小型化する現象が報告されている。^{#11}本遺跡では、外洋-サンゴ礁域で採集された個体の割合が30%を超えており、サンゴ礁域での採集も比較的多かったものと推測される。シャコガイ・サラサバテイラの小型化は認められるものの、比較的大型個体も出土していることから、サンゴ礁海域での漁労の重要性も示唆される。

土壌調査では、イボウミニナとともに、殻高1.5cm程度の小型のウミニナも多く出土した。本種では、食用時によくみられる螺層部の欠損がほとんどなく、また多少水磨をうけている様々なサイズの個体が得られた。このことから、『食用以外の用途によって、海岸から砂と一緒に、本種の死殻を集落へ大量に持ち込んだと想定される。』しかし、本種を敷きつめたような遺構等は知られておらず、また砂と一緒に採集されたのならば、他のフトコロガイ等の小型貝類や死サンゴ片も多く含まれると考えられるが、死サンゴ片は重量にして全体の1%以下と著しく少なかった(表A)。このようなことから、本種の出土様式の検討も今後の課題と言えよう。

本遺跡からは、殻表に光沢を持ち3cm程度の小型で球形のリスガイ・ヘソアキトミガ

イヤナツメガイが他の遺跡と比較して多く出土していた（全体の1.4%）。この3種はサンゴ礁域や内湾域に打ち上げられた死殻としては多くみられる種であるが、筆者の定性的な観察によると、生きた個体の得られることは少ない。そのため、貝殻の特徴から簡単なおぼしき遊具として遺跡に持ち込まれた可能性も考えられる。同様なことは、マガキガイのⅢ型の破損形態の頻度が比較的高く、これは遊具の独楽として利用された可能性も考えられる。出土様式の検討や類例の発掘を待ちたい。

本遺跡と関連を持つと考えられる北谷城二の郭から出土した貝類と比較すると、後者でもアラスジケマン・スダレハマグリ（ハマグリとして報告された種は本種であると考えられる）・クワノミカニモリ（同様にリュウキュウムシロとして報告）が多いことは類似するが、マガキガイが最も多く全体の1/4を占め、オノツノガイ・イトマキボラ等のイノーの中・大型種も比較的出土頻度が高い点で異なっている。さらにカンギク（ハグルマヒメカタベとして報告）の頻度が低く、イボウミニナはほとんど出土していないことでも相違をみせている。また北谷城からの投棄の場であったと考えられている北谷城第7遺跡でも、マガキガイが主体となる二の郭と同様な組成が報告されている。ただカンギク（ハグルマヒメカタベ）とマイマイの頻度の増加している点が二の郭と異なっている。陸産貝類の増加は、自然に死亡した陸貝の殻が堆積しやすい崖下という立地条件に起因するものと考えられる。このように集落址とグスクの出土貝類の比較を、今後とも詳細に検討できたならば、グスクという場の持つ意味がより明らかになるものと考えられ、今後その成果に注目したい。

5. 遺跡周辺環境の推定

淡水性の貝類では、現在の低地の止水域に多いトウガタカワニナ・スノメカワニナがほとんどみられず、スグカワニナが著しく多かった。この現象が、出土した種への選択的な採集の結果であるのか、本遺跡の湧水域の形状に起因するものなのか、今後の検討が必要であろう。ただし、今回スグカワニナと同定した種は、戦後沖縄島やその他の琉球列島からほとんど報告のない種である。このことから、すくなくとも14-16世紀において玉代勢原遺跡の周辺の小河川にはスグカワニナの生息を保障するような現在ではみられない環境が存在したことが想定される。

陸産貝類では、他の遺跡で確認されているようなイトマンマイマイ等の森林性の種は得られなかった。また遺跡から出土したオキナワヤマタニシのサイズは平均19.05mmで、前V期の知場塚原遺跡や高嶺遺跡の個体よりも小さかった。このことは、周辺の森林環境が悪化するとオキナワヤマタニシのサイズが小型化することを示していると考えられる。遺跡から出土した本種のサイズが現在の北谷城跡の現生個体のサイズ（平均18.60mm）とほとんど変わらないということは、本遺跡は斜面に形成されているものの、遺跡の周辺部は耕作地等の開けた場所であったことを示唆するものと考えられる。

表A E-5グリッド・II層の3mmメッシュより得られた貝類遺存体

	個体数	重量 (g)
腹足綱		
マガキガイ	1	4.6
カンギタ (殻)	15	24.5
" (フタ)	18	1.4
ムラサキウズガイ	•	2.7
マルアマオブネ	4	3.5
カニノテムシロガイ	1	0.7
ナツメガイ	1	0.8
ナハビラダカラ	1	2.1
ツノマタガイモドキ	1	5.4
ミツカドボラ	3	7.9
クワノミカニモリガイ	11	22.9
カヤノミカニモリガイ	1	0.5
コゲツノブエガイ	7	2.6
オニノツノガイ	•	0.7
フトコロガイ	2	0.1
シマベッコウバイ	3	3.8
ウミニナ	73	9.8
イボウミニナ	145	92.9
ウミニナ属不明	•	2.1
カワアイ	3	1.5
イトカケヘナタリ	2	1.2
カワニナ	9	6.3
スグカワニナ	2	5.7
カワチドリガイ	1	0.1
マダライモガイ	•	1.0
コモンイモガイ	1	5.4
中型イモガイ類	2	1.9
オキナワヤマタニシ	4	1.1
ジュリマイマイ	•	—
腹足綱不明	3	0.7
二枚貝綱		
アラスジケマンガイ	21/28	160.3
ホソスジイナミガイ	2/4	8.3
スノメガイ	•	4.6
アラスノメガイ	0/1	5.0
スダレハマグリ	9/10	41.1
イオウハマグリ	0/1	1.4
エガイ	0/2	3.7
フネガイ	1/0	0.2
サメザラ	•	0.8
リュウキュウシラトリガイ	9/7	39.1
リュウキュウヒバリガイ	•	1.5
シレナツジミ	•	6.7
ミドリアオリガイ	1/0	2.3
シラナミ	•	0.6
貝類破片 (主に二枚貝)		13.4
合計	381	502.9
死サンゴ破片		4.1

•は破片のみの存在を示す

- 註1 金城 亀信（編）『豊見城村の遺跡』豊見城村教育委員会 1988年
- 2 渡喜仁浜原貝塚調査団（編）『渡喜仁浜原貝塚調査報告書』今帰仁村教育委員会 1977年
- 3 岸本 義彦（編）『知場塚原遺跡発掘調査報告書』本部町教育委員会 1988年
- 4 安里嗣淳他『勝連城跡』勝連町教育委員会 1984年
- 5 大城 慧（編）『我謝遺跡』西原町教育委員会 1983年
- 6 安里 進「沖縄における原始共同体の解体過程（試論）－沖縄本島南部・久米島を中心として－」『沖縄歴史研究11号』沖縄歴史研究会 1974年
- 7 安里嗣淳他『沖縄県玉城村百名第二貝塚の試掘調査』沖縄県教育委員会 1981年
- 8 仲宗根 求・古堅 勝美（編）『吹出原遺跡』読谷村教育委員会 1990年
- 9 金武 正紀（編）『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告書』具志川市教育委員会 1980年
- 10 大城 慧・金城 亀信（編）『牧港貝塚・真久原遺跡』沖縄県教育委員会 1985年
- 11 大城 慧（編）『伊原遺跡』沖縄県教育委員会 1986年
- 12 西平 守孝『サンゴ礁の渚を遊ぶ－石垣島川平湾－』ひるぎ社 1988年
- 13 中村 愿（編）『北谷城』北谷町教育委員会 1984年
- 14 中村 愿（編）『北谷城第7遺跡』北谷町教育委員会 1985年
- 15 金城 亀信（編）『宮城島遺跡分布調査報告』沖縄県教育委員会 1989年

北谷町文化財調査報告書第13集
玉代勢原遺跡

—キャンプ瑞慶覧建設工事に係る埋蔵文化財調査業務報告書—

発行 北谷町教育委員会
1993年(平成5年)3月31日
北谷町字桑江529
電話(098)936-3490
印刷 (株)南西印刷
製本 那覇市首里石嶺町1の127
電話(098)884-4321
